

平成元年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1994年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



修羅出土状況（特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園 N区）



下西代一号墳及び石室出土土器（南春日町遺跡第17次調査）

序

平成元年に行った調査で特徴とみるべき点は、京都市の地下鉄東西線に伴う調査である。それによって、平安京左京の押小路と三条坊門小路との間で、平安京の断面をとることになった。それは平安京の三条四坊のあたりで、前年度に引き続き平安京調査会の援助を受けて調査したが、このあたり、中世には壊されている所が多く、わずかに平安京創設当初のものは富小路の西側溝とみる痕跡が認められ、その東は路面と推定されるようなものはあったが、反対の西には、築地と認めていいもの、側溝に沿う犬行のようなものもなかった。これは、京の中央に近い所では、側溝・犬行・築地と揃うのに対し、四坊まで外れると、小路に対する施設が、側溝を除けば犬行も築地も、造られたか、壊されたのか判定ができない。そのようなことは、当年度の調査の中に左京九条二坊三町で行われたのがあって、信濃小路が東西にわたる地点の調査が行われたと報告がある。しかし、平安京を廻る小路については、その施設がどのように施工されていたか明確ではない。

ところで、当報告では、右京域の四坊について一条四坊（16）、二条四坊（17）、三条四坊（21）、六条四坊（26）、七条四坊（27）について報告が行われている。

まず一条四坊は四坊十三町で、西京極大路の東側溝にあたる所で、川の流路の一部がみられたのである。次の二条四坊は十三、十四町にわたる箇所、調査にあたり7箇所の部分で調査を行ったが、二条大路北側溝や築地は確認できなかったと報告している。三条四坊の地は二町で、その東に接して無差小路が通るのであるが、調査区でないので調査されていない。六条四坊の調査は二町の所である。この地域は弥生遺跡と重複するので、その遺跡に重点をおいて調査したが、条坊としては樋口小路の側溝をみたのみである。

ところで、条坊の施設について延喜式は特に詳しく、小路についても築地・犬行のあることを示しているが、この序文を書いている平成6年になって七条小学校で埋没している西靱負小路を調査したとき、小路の施設、築地・犬行を全く無視して溝の肩に塀の柱を打ち込んでいるのをみた。いわば、京の中心を遠ざかると、その施設を造らないことになったのかと思われる。それは結局、そこに住む人々に任せ、住む人（戸主にあたる人々）が申し合わせをして、官の指示通りには行わなかったのかも知れない。

平成6年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 杉 山 信 三

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成元年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため前年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表4・5に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系VIによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市の承認を得て京都市計画局発行の都市計画基本図（2,500分の1、10,000分の1、30,000分の1）を修正し使用した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点である。
- 8 図版1・2の調査地点番号の、Iは発掘調査、IIは試掘・立会調査を表す。表4・5の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成元年度発掘調査の内、文化庁国庫補助事業による調査は、平成元年4月から12月実施分は平成元年度の各発掘調査概報に、平成2年1月から3月実施分は平成2年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査並びに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。また本年度の調査のうち、平安京調査会の協力によって実施した調査については表4・5に記した。
- 11 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真は牛嶋茂・村井伸也が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、永田信一、峰 巍の指導のもとに編集と調整は原山充志、角村幹雄が行った。

目 次

第1章 発掘調査

I 平成元年度の発掘調査概要…1

II 平安宮・京跡

- 1 平安宮図書寮跡…………… 6
- 2 平安宮中和院跡…………… 7
- 3 平安宮中務省跡1…………… 8
- 4 平安宮中務省跡2……………11
- 5 平安宮中務省跡3……………12
- 6 平安京左京二条二坊・
高陽院跡1……………13
- 7 平安京左京二条二坊……………14
- 8 平安京左京二条二坊・
高陽院跡2……………17
- 9 平安京左京三条三坊……………20
- 10 平安京左京三条四坊……………23
- 11 平安京左京四条三坊1……………27
- 12 平安京左京四条三坊2……………30
- 13 平安京左京四条四坊……………37
- 14 平安京左京六条四坊……………39
- 15 平安京左京九条二坊……………41
- 16 平安京右京一条四坊……………45
- 17 平安京右京二条四坊……………47
- 18 平安京右京三条一坊……………50
- 19 平安京右京三条二坊1……………53
- 20 平安京右京三条二坊2……………56
- 21 平安京右京三条四坊……………59

- 22 平安京右京四条二坊……………60
- 23 平安京右京六・七条一坊……………62
- 24 平安京右京六条一坊……………63
- 25 平安京右京六条三坊……………65
- 26 平安京右京六条四坊・
西京極遺跡……………68
- 27 平安京右京七条四坊……………71
- 28 平安京右京八条二坊・西市跡…72

III 白河街区跡

- 29 尊勝寺跡・岡崎遺跡1……………75
- 30 尊勝寺跡・岡崎遺跡2……………80
- 31 法勝寺跡・岡崎遺跡……………84

IV 鳥羽離宮跡

- 32 鳥羽離宮跡第134次調査……………87
- 33 鳥羽離宮跡第135-2次調査 88

V 中臣遺跡

- 34 中臣遺跡第70-2次調査……………93

VI 長岡京跡

- 35 長岡京左京一条三坊・
大藪遺跡……………97
- 36 長岡京左京南一条三坊・
東土川遺跡……………101
- 37 長岡京左京五条三坊……………102
- 38 長岡京右京一条四坊……………106
- 39 羽束師志水町遺跡……………108

VII	その他の遺跡	
40	南ノ庄田瓦窯跡……………	113
41	植物園北遺跡1……………	116
42	植物園北遺跡2……………	117
43	特別史跡特別名勝 鹿苑寺庭園……………	119
44	室町殿跡……………	120
45	北野廃寺跡……………	123
46	史跡天皇の杜古墳……………	124
47	南春日町遺跡第17・ 19次調査……………	129
48	中久世遺跡……………	135
49	六波羅政庁跡……………	136
50	伏見城跡……………	138

第2章 試掘・立会調査

I	平成元年度の試掘・ 立会調査概要……………	143
II	平安宮跡	
1	平安宮内裏・縫殿寮・ 長殿・率分蔵跡……………	145
2	平安宮朝堂院・太政官・ 宮内省・主水司跡……………	146

III	その他の遺跡	
3	鳥羽離宮跡……………	147
4	鳥羽離宮跡第132次調査……………	149
5	長岡京左京一条・ 南一条四坊、東土川遺跡……………	151
6	長岡京左京四条二・三坊……………	152
7	上ノ段町遺跡・ 仲野親王陵古墳……………	153
8	南春日町遺跡第18次調査……………	155
9	伏見城跡……………	156

第3章 資料整理

1	遺跡測量……………	158
2	コンピュータ……………	159

第4章 普及啓発事業等報告

1	普及啓発及び 技術者養成事業……………	161
2	京都市考古資料館状況……………	163
3	役職員名簿……………	167

図版目次

図版 1	調査地点位置図 1	北部
図版 2	調査地点位置図 2	南部
図版 3	平安宮中務省跡 1	1 全景 2 南北築地、溝 2・3
図版 4	平安京左京二条二坊	1 第 1 面全景 2 第 2 面全景
図版 5	平安京左京二条二坊・高陽院跡 2	1 地業全景 2 地業の石列 3 池
図版 6	平安京左京三条三坊	1 桃山時代から江戸時代前期全景 2 平安時代から鎌倉時代全景
図版 7	平安京左京三条三坊	S X 66 出土土器
図版 8	平安京左京三条四坊	1 No.13 調査区全景 2 No.15 調査区全景 3 No.17 調査区全景 4 No.18 調査区全景
図版 9	平安京左京四条三坊 1	1 1 区全景 2 2 区全景 3 2 区落込 2
図版 10	平安京左京四条三坊 2	平安時代全景
図版 11	平安京左京四条三坊 2	1 弥生時代全景 2 溝 7・8
図版 12	平安京左京四条三坊 2	1 溝 5 2 井戸 75 3 ピット 310 土器出土状況 4 落込 42 土器出土状況
図版 13	平安京左京四条四坊	1 全景

	2	S E 289
	3	S K 341 土器出土状況
図版 14 平安京左京六条四坊	1	全景
	2	S D 280・290
図版 15 平安京左京九条二坊	1	室町時代上層遺構面全景
	2	室町時代上層遺構面細部 S D 90・80・30
図版 16 平安京左京九条二坊	1	室町時代下層遺構面全景
	2	S D 890
	3	柱穴断面
図版 17 平安京右京二条四坊	1	1区全景
	2	3区全景
	3	6区全景
	4	6区東西溝および柱穴列
図版 18 平安京右京三条一坊	1	全景
	2	三条坊門小路
図版 19 平安京右京三条二坊 1	1	全景
	2	柱列 1
図版 20 平安京右京三条二坊 2	1	全景
	2	南西部建物
図版 21 平安京右京四条二坊	1	全景
	2	S B 65
	3	S E 66
図版 22 平安京右京六・七条一坊	1	7区東半全景
	2	7区六条大路北側溝
図版 23 平安京右京六条一坊	1	14区東半全景
	2	13区井戸
図版 24 平安京右京六条三坊	1	全景
	2	S K 188
図版 25 平安京右京六条四坊・西京極遺跡	1	プラン 1 全景
	2	プラン 2 1号住居

	3 プラン2 2～5号住居
図版 26 平安京右京八条二坊・西市跡	1 室町時代全景
	2 平安時代全景
	3 七条大路（平安時代中期）
図版 27 尊勝寺跡・岡崎遺跡 1	1 全景
	2 S X 60
図版 28 尊勝寺跡・岡崎遺跡 2	1 全景
	2 S B 10 - 44 底面根石
	3 S X 100
図版 29 法勝寺跡・岡崎遺跡	1 全景
	2 断ち割りトレンチ拡張区全景
	3 行跡 2
図版 30 鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査	1 第 1 面全景
	2 溝 1 全景
	3 溝 1 人骨出土状況
図版 31 鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査	1 第 2 面全景
	2 溝 3 土器出土状況
図版 32 鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査	1 柵列
	2 竪穴住居群
図版 33 鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査	溝 3・4 出土須恵器
図版 34 中臣遺跡第 70 - 2 次調査	1 VIII - a 区全景
	2 VIII - a 区竪穴住居
図版 35 中臣遺跡第 70 - 2 次調査	1 VIII - a 区掘立柱建物
	2 VIII - b 区全景
図版 36 中臣遺跡第 70 - 2 次調査	石室出土須恵器
図版 37 中臣遺跡第 70 - 2 次調査	石室出土遺物
図版 38 長岡京左京一条三坊・大藪遺跡	1 6 期 建物全景
	2 2 期 方形周溝墓全景
図版 39 長岡京左京一条三坊・大藪遺跡	1 1 期 全景
	2 1 期 3 号住居

図版 40	長岡京左京南一条三坊・東土川遺跡	1	1 トレンチ全景
		2	2 トレンチ全景
図版 41	長岡京左京五条三坊	1	第1水田全景
		2	第3水田全景
図版 42	長岡京左京五条三坊	1	第5水田全景
		2	弥生時代遺構面
図版 43	長岡京右京一条四坊	1	全景
		2	全景
図版 44	羽東師志水町遺跡	1	土壙墓・方形棺群
		2	墓 S X 59
図版 45	羽東師志水町遺跡	1	建物
		2	平安時代後期遺構面全景
図版 46	南ノ庄田瓦窯跡	1	全景
		2	瓦窯（新）全景
図版 47	南ノ庄田瓦窯跡	1	瓦窯（新）の分焰床
		2	瓦窯（古）全景
		3	出土瓦
図版 48	植物園北遺跡 2	1	全景
		2	掘込 1
図版 49	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	1	O区全景
		2	L区全景
図版 50	室町殿跡	1	近世遺構面全景
		2	中世遺構面全景
図版 51	史跡天皇の杜古墳	1	天皇の杜古墳全景
		2	1 トレンチ下段葺石
図版 52	史跡天皇の杜古墳	1	2 トレンチ上段葺石と埴輪列
		2	3 トレンチ上段葺石と埴輪列
		3	2 トレンチ埴輪据え付け状態
図版 53	南春日町遺跡第 17・19 次調査	1	第 17 次調査下西代 1 号墳全景
		2	石室

	3 石室遺物出土状況
図版 54 南春日町遺跡第 17・19 次調査	石室出土土器
図版 55 南春日町遺跡第 17・19 次調査	1 第 19 次調査全景
	2 井戸 1・溝 2・石組遺構
	3 井戸 2
図版 56 六波羅政庁跡	1 全景
	2 S E 5
	3 S E 5 断ち割り
図版 57 伏見城跡	1 1～3 区 3 層上面全景
	2 2 区柵列 3
図版 58 伏見城跡	1 3 区 4 層上面全景
	2 2 区土壙 70
図版 59 伏見城跡	1 2・3 区南北溝 100・240、東西溝 100
	2 1 区伏見城以前の遺構群
	3 2 区平安時代後期の遺構群
	4 3 区土器溜 280
図版 60 鳥羽離宮跡第 132 次調査	1 1 区全景
	2 1 区景石出土状況
	3 3 区全景
図版 61 上ノ段町遺跡・仲野親王陵古墳	1 仲野親王陵古墳後円部
	2 噴砂痕

表 目 次

表 1 池出土遺物一覧表（平安京右京三条二坊 1）	55
表 2 竪穴住居一覧表（平安京右京六条四坊・西京極遺跡）	70
表 3 平成元年度月別観覧者一覧表	66
表 4 平成元年度発掘調査一覧表	169
表 5 平成元年度試掘・立会調査一覧表	172

目 次

図1	平安宮図書寮跡	調査位置図……………	6
2	平安宮中和院跡	調査位置図……………	7
3	平安宮中務省跡 1	調査位置図……………	8
4	〃	遺構平面図……………	9
5	〃	人面土器……………	10
6	平安宮中務省跡 2	調査位置図……………	11
7	平安宮中務省跡 3	調査位置図……………	12
8	平安京左京二条二坊・高陽院跡 1	調査位置図……………	13
9	平安京左京二条二坊	調査位置図……………	14
10	〃	断面図……………	14
11	〃	遺構平面図……………	15
12	平安京左京二条二坊・高陽院跡 2	調査位置図……………	17
13	〃	S K 46 出土土器実測図 ……	17
14	〃	遺構平面図……………	18
15	〃	地業出土軒瓦拓影……………	19
16	平安京左京三条三坊	調査位置図……………	20
17	〃	遺構平面図……………	21
18	〃	S X 66 出土土器実測図 ……	22
19	平安京左京三条四坊	調査位置図……………	23
20	〃	遺構平面図……………	24
21	平安京左京四条三坊 1	調査位置図……………	27
22	〃	遺構平面図……………	28
23	平安京左京四条三坊 2	調査位置図……………	30
24	〃	遺構平面図……………	32
25	〃	ピット 215・294 出土土器実測図 ……	35
26	〃	落込 29 出土の輸入陶磁器 ……	36
27	平安京左京四条四坊	調査位置図……………	37

図 28	平安京左京四条四坊	遺構実測図	38
29	平安京左京六条四坊	調査位置図	39
30	〃	遺構平面図	40
31	平安京左京九条二坊	調査位置図	41
32	〃	遺構平面図	42
33	平安京右京一条四坊	調査位置図	45
34	〃	遺構実測図	46
35	平安京右京二条四坊	調査位置図	47
36	〃	7区遺構配置図	48
37	〃	1～6区遺構配置図	49
38	平安京右京三条一坊	調査位置図	50
39	〃	遺構配置図	51
40	平安京右京三条二坊 1	調査位置図	53
41	〃	遺構平面図	54
42	〃	八町遺構配置図	55
43	平安京右京三条二坊 2	調査位置図	56
44	〃	遺構実測図	57
45	平安京右京三条四坊	調査位置図	59
46	平安京右京四条二坊	調査位置図	60
47	〃	遺構平面図	61
48	平安京右京六・七条一坊	調査位置図	62
49	平安京右京六条一坊	調査位置図	63
50	〃	遺構配置図	63
51	平安京右京六条三坊	調査位置図	65
52	〃	遺構平面図	66
53	〃	S K 188 実測図	67
54	〃	S K 188 出土遺物実測図	67
55	平安京右京六条四坊・西京極遺跡	調査位置図	68
56	〃	遺構実測図	69
57	平安京右京七条四坊	調査位置図	71

図 58	平安京右京八条二坊・西市跡	調査位置図	72
59	〃	遺構平面図	73
60	尊勝寺跡・岡崎遺跡 1	調査位置図	75
61	〃	遺構実測図	76
62	〃	軒丸瓦実測図	77
63	〃	軒平瓦実測図	78
64	尊勝寺跡・岡崎遺跡 2	調査位置図	80
65	〃	推定阿弥陀堂復原図	80
66	〃	遺構実測図	81
67	〃	軒瓦実測図	82
68	法勝寺跡・岡崎遺跡	調査位置図	84
69	〃	溝 2・46 平面図	85
70	〃	下層層位断面模式図	85
71	〃	足跡分布図	86
72	鳥羽離宮跡第 134 次調査	調査位置図	87
73	鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査	調査位置図	88
74	〃	遺構平面図	89
75	〃	溝 1 出土の木簡	90
76	〃	溝 1 出土土器実測図	90
77	〃	古墳時代の土器実測図	91
78	中臣遺跡第 70 - 2 次調査	調査位置図	93
79	〃	遺構平面図	94
80	〃	石室実測図	95
81	〃	石室出土須恵器実測図	96
82	長岡京左京一条三坊・大藪遺跡	調査位置図	97
83	〃	遺構平面図	98
84	長岡京左京南一条三坊・東土川遺跡	調査位置図	101
85	長岡京左京五条三坊	調査位置図	102
86	〃	遺構平面図	103
87	長岡京右京一条四坊	調査位置図	106

図 88	長岡京右京一条四坊	遺構平面図	107
89	〃	A - A' 断面図	107
90	羽束師志水町遺跡	調査位置図	108
91	〃	Y-2・4区中・近世遺構配置図	108
92	〃	S X 59 実測図	109
93	〃	江戸時代の墓壙群配置図	110
94	〃	S X 59 出土蔵骨器実測図	111
95	〃	Y-2区出土軒瓦実測図	112
96	南ノ庄田瓦窯跡	調査位置図	113
97	〃	遺構平面図	113
98	〃	軒瓦拓影	114
99	〃	出土土器実測図	115
100	植物園北遺跡 1	調査位置図	116
101	植物園北遺跡 2	調査位置図	117
102	〃	遺構平面図	118
103	特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園	調査位置図	119
104	室町殿跡	調査位置図	120
105	〃	室町殿跡遺構配置図	121
106	〃	近世遺構配置図	122
107	北野廃寺跡	調査位置図	123
108	史跡天皇の杜古墳	調査位置図	124
109	〃	天皇の杜古墳墳丘測量図	125
110	〃	4トレンチ実測図	126
111	〃	出土埴輪実測図	128
112	南春日町遺跡第 17・19 次調査	調査位置図	129
113	〃	墳丘測量図	129
114	〃	石室実測図	130
115	〃	石室出土土器実測図	131
116	〃	遺構平面図	134
117	中久世遺跡	調査位置図	135

図 118	六波羅政庁跡	調査位置図	136
119	〃	遺構平面図	136
120	〃	S E 5 実測図	137
121	伏見城跡	調査位置図	138
122	〃	断面模式図	139
123	〃	伏見城関係遺構平面図	140
124	〃	伏見城以前の濠平面図	141
125	平安宮内裏・縫殿寮・長殿・率分蔵跡	調査位置図	145
126	〃	断面図	145
127	平安宮朝堂院・太政官・宮内省・主水司跡	調査位置図	146
128	〃	断面図	146
129	鳥羽離宮跡	調査位置図	147
130	〃	遺構配置図	148
131	鳥羽離宮跡第 132 次調査	調査位置図	149
132	〃	出土瓦実測図	150
133	長岡京左京一条・南一条四坊、東土川遺跡	調査位置図	151
134	長岡京左京四条二・三坊	調査位置図	152
135	上ノ段町遺跡・仲野親王陵古墳	調査位置図	153
136	〃	仲野親王陵古墳濠調査地点	154
137	南春日町遺跡第 18 次調査	調査位置図	155
138	伏見城跡	調査位置図	156

第1章 発掘調査

I 平成元年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査は、50件と、昨年度をやや下回るが、市街域ではまれな5000㎡を越える大規模な再開発に伴う調査を始め、1000㎡以上の調査も5件を数える。昨年来の長期にわたる継続調査に加え、旧大阪ガス跡地の西地区の調査も始まっている。ただ、1980年以来継続した外環状線建設関係の調査は、都合10年間を要した調査となったが、今年度の調査で全てを終了した。

本年度の主要な調査は、平安宮・京跡28件、白河街区跡3件、鳥羽離宮跡2件、中臣遺跡1件、長岡京関係5件、その他の遺跡として洛北地区6件、南桂地区3件、洛東地区及び伏見醍醐地区が各1件である。

平安宮・京跡 平安宮は、主に国庫補助による発掘調査として5件実施している。平安宮図書寮跡（1）は、近世の土取穴により攪乱されていたが、中和院跡（2）では大規模な掘込地業を検出し、中心建物に関連するものと推定された。中務省跡（3～5）では、北限及び省内の区画と考えられる側溝を伴う築地や区画溝、建物等を明らかにし、省のみならず平安宮を復原する上で貴重な資料を加えることになった。

平安京跡では、左京域で10件、右京域で13件の調査を行っている。平安京左京二条二坊・高陽院跡では本年も2件の調査を行い、十町（6）では園池西端部及び築山、池への導排水溝などを、十五町（8）では当初の池の中島や景石と共に、この池を石を用いた強固な地業によって埋立て、版築を施した上に土器埋納壙や建物の痕跡を検出しており、高陽院の中心的な殿舎が建設されていたことがうかがわれる。左京二条二坊十二町（7）では、平安時代前期以降の二条大路北側溝を調査し、その変遷を明らかにしている。左京三条三坊九町（9）、左京三条四坊（10）、左京四条三坊十町（11）、左京四条三坊十三町（12）、左京四条四坊五町（13）、左京六条四坊一町（14）などでは、平安時代以降の、各時期の町遺構の検出状況から遺跡の様相と変遷を明らかにしている。中でも左京域では数少ない平安時代前期の街路（富小路）を検出した（10）、整地層や唐代の陶枕の出土した（12・13）は、平安時代以前の遺構も含めて注目される調査となっている。平安京左京九条二坊三町（15）では、信濃小路該当域における街路と宅地の侵食の状況を基に室町時代を中心

とする散所の様相と盛衰を示している。

右京域の調査では、昨年と同様に条坊関係の成果を多く得ている。右京一条四坊十三町(16)では、西京極大路東側溝に推定される溝状の遺構を確認している。時代的には平安時代後期の遺構と判断されるが、平安京の西限に関係するものとして興味深い。右京二条四坊十三・十四町(17)では、平安時代から鎌倉時代の冷泉小路北側溝及び築地に関連する遺構を確認している。右京三条一坊二町(18)では、平安時代前期から後期の、三条坊門小路に関連する遺構群を検出しているが、三条坊門小路の南北両側の築地・側溝の在り方が異なるなど、新たな課題も浮かび上がった。右京三条二坊八町(19)では、北接する昭和61年度調査の池状遺構に続く池の調査を行い、10世紀前半には池の拡張が行われて2時期に分かれ、10世紀中頃を前後して池が廃絶していることを明らかにしている。右京三条二坊十一・十四町(20)では、平安時代中期の三条坊門小路の南側溝と野寺小路を検出しているが、平安時代中期までは、条坊に伴う道路と側溝は機能していたが、平安時代後期になると野寺小路は側溝を含めた道路部分が全て河川となる。右京三条四坊二町(21)、右京四条二坊二町(22)では、街路関係の遺構は検出していないが、平安時代前期の掘立柱建物などの遺構が良好に遺存していることが明らかとなった。右京六・七条一坊(23)では平安時代前期から後期の六条大路北側溝を、右京六条一坊十二・十三町(24)では、平安時代前期の西櫛司小路東側溝、平安時代末期から鎌倉時代の西櫛司小路西側溝や溝に区画された邸宅跡を検出し、大阪ガス京都工場跡地西地区の遺構の遺存状況を知ることができた。右京六条三坊四町(25)は、既往の調査と同様に平安時代前期から中期の掘立柱建物を検出しているが、軸線の方が既往の調査と異なり、宅地割りを考える上で貴重な成果を得た。また、完形の須恵器瓶子と多量の土師器皿を埋納した土器埋納遺構は、地鎮に関する新資料となった。右京六条四坊二町(26)では、樋口小路南側溝を、右京七条四坊九町(27)では当地域では初めて、平安時代前期の掘立柱建物を検出することができた。右京八条二坊一町(28)では、平安時代から連綿と機能してきた各時期の七条大路を検出し、平安時代前期の七条大路南半には東西方向の大規模な流路のあったことや、平安時代中期以降の路面の一部が溝状に窪む特異な形状を持つことが明らかとなり、低湿で出水の多い地域での道路の構造に再検討を促す調査となった。また、この一町では、右京が衰退する平安時代中期以降も活発に土地利用が行われ、特に鎌倉・室町時代以降、頻繁に建物が建て替えられている。

平安時代以前の遺構としては、古墳時代後期の竪穴住居を中務省跡(3)で検出した他

に、左京二条二坊十町・高陽院跡（6）で弥生時代前期から中期の流路、左京三条四坊（10）で弥生時代末期の竪穴住居、左京四条三坊十三町（12）で弥生時代中期頃の溝や土壙、左京四条四坊五町（13）で古墳時代の流路、右京二条四坊十三・十四町（17）で古墳時代の土壙状遺構、右京三条四坊二町（21）で古墳時代の土壙、右京六・七条一坊（23）で縄文時代から古墳時代前期にかけての湿地や流路、右京六条四坊二町・西京極遺跡（26）で弥生時代後期の竪穴住居などを検出している。特に（10）、（26）は、周知の遺跡内での初めての竪穴住居の発見であり、今後集落跡としての解明に期待が持たれる。

白河街区跡 岡崎遺跡を含む白河街区跡では、尊勝寺跡2件、法勝寺跡1件の調査を行い、尊勝寺跡・岡崎遺跡1（29）では、推定阿弥陀堂に関する遺構はなく、寺域としては伽藍内の空地と推定できることや、尊勝寺跡・岡崎遺跡2（30）で、推定阿弥陀堂（梁行2間、南北棟、二重庇）の東北隅部に相当する礎石据え付け跡や雨落ちの石敷きを検出していることから、阿弥陀堂の規模を十五間四面の堂宇と推定するに至った。法勝寺跡・岡崎遺跡（31）では、法勝寺の推定地の西限部分に溝を検出し、法勝寺の範囲と白河街区の条坊を復原する手がかりとなっている。また、平安神宮火山灰層（A.T.）上に堆積した薄い泥炭層上面から、最終氷期の動物の足跡を検出している。歩行の様子がわかるものとしては我が国でも初めての例で、旧石器時代の生活支持面が左京区岡崎一帯に良好な状態で残存していることが明らかになった。

鳥羽離宮跡 本年度は鳥羽離宮跡第134・135 - 2次調査の2件の調査を行っている。第134次調査（32）では、鳥羽離宮東殿の園池の全容がほぼ明らかとなり、出土した建築部材は当時の建築様式を知る上での好資料である。第135 - 2次調査（33）は、鳥羽離宮の南限付近にあたり、当地域での鳥羽離宮関連遺構の発見は初例である。建仁三年銘の供養札と共に出土した土器類は、実年代が推定できる貴重な資料となった。また、下層で検出した古墳時代後期の溝、竪穴住居、柵列などは、鳥羽遺跡の広がりや下鳥羽遺跡との関係を考える上で貴重な資料となる。

中臣遺跡 本年度も、昨年度からの継続調査として行った、第70 - 2次調査（34）1件である。縄文時代中期の遺構には土壙群があり、弥生時代後期の焼失住居と考えられる竪穴住居1棟を検出した。古墳時代後期の遺構は中臣十三塚古墳群の一つとみられる6世紀末から7世紀前半の古墳で石室や副葬品の一部を明らかにした。平安時代前期の掘立柱建物1棟と土壙などを検出している。これまで中臣遺跡北西部となる本調査地周辺の調査例は少なく、縄文時代中期から古墳時代初頭の遺構は初めての発見となった。

長岡京跡 長岡京関係の調査は、京域外も含めて5件の調査を行っている。長岡京左京一条三坊十六町・大藪遺跡(35)では、弥生時代後期から古墳時代にかけて、居住域と墓域とが入れ替わり形成される状態を明らかにし、長岡京期では、大型の総柱建物や建物群を検出している。長岡京左京南一条三坊九町・東土川遺跡(36)では、弥生時代中期の溝や、古墳時代後期の河川の一部を検出している。河川は、灌漑用の堰と推定されるしがらみ状の遺構を伴う。長岡京左京五条三坊七町(37)では、弥生時代の竪穴住居の可能性のある円形遺構を始め、古墳時代後期から平安時代中期にかけて継続的に積み上がった水田を調査し、その変遷の過程を明らかにしている。長岡京右京一条四坊一・二町(38)は、全体が旧小畑川の流路内に位置しているが、出土した遺物から西側の丘陵上に古墳時代から平安時代の遺跡の存在が推定される。羽束師志水町遺跡(39)は、外環状線建設に伴う最後の調査である。平安時代末期から鎌倉時代の環濠集落の一部と、室町時代から江戸時代の墓の調査を行っている。

その他の遺跡 その他の遺跡の調査は11件を数える。洛北地区の、南ノ庄田瓦窯跡(40)は周知の瓦窯跡であるが今回の調査によって構造や付属する建物の状態を明らかにしている。植物園北遺跡では2件の調査を行っている。植物園北遺跡1(41)では、古墳時代前期・後期の竪穴住居を検出し、周辺での立会調査の成果を裏付けると共に、中世上賀茂神社社家町に対する初めての調査を行い、関連遺構が良好に遺存していることを明らかにした。植物園北遺跡2(42)では、遺構の検出数は少ないが、弥生時代から鎌倉時代までの各時期の遺構・遺物包含層を検出し、植物園北遺跡の長期にわたる時代的変遷が理解された。昨年度に引き続いて実施した特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園(43)は、修羅の発見や鹿苑寺関係の遺構の検出のみならず、これらをさかのぼる西園寺北山第や平安時代後期の遺跡の一端が明らかになるなど多くの成果が得られた。室町殿跡(44)では、室町殿の南限に関わる東西濠を検出し、規模を想定する上で貴重な手がかりとなった。園池に伴う築山や景石からは庭園の景観の一端がうかがえる。北野廢寺跡(45)では、断面観察によって講堂に取付く東回廊と推定できる版築の土層を確認し、既往の調査成果を補足することとなった。

史跡天皇の杜古墳(46)は昨年度より引き続き調査であるが、今年度は、主に外表施設の調査を行い、葺石・埴輪列・テラスなどの状態を明らかにしている。これによって、古墳の正確な規模や形状、築造年代に関する資料を得ることができた。南春日町遺跡第17・

19次調査(47)は、昨年度の第16次調査で発見した下西代1号墳に対し実施した第17次調査で、6世紀末に築造された古墳時代後期の円墳であることが明らかになり、第19次調査では大溝の区画内に居住地が存在する鎌倉時代から室町時代の社家遺構を検出している。中久世遺跡(48)では、初めて弥生時代から古墳時代の竪穴住居群を検出し、集落の一端を知り得た。また、奈良時代の建物群などの発見は、当遺跡南部で検出している建物との関連が注目される。

六波羅政庁跡(49)で検出した平安時代末期から鎌倉時代前期の井戸は六波羅政庁に関連する可能性が高く、これまで明確な遺構の検出されていない六波羅政庁の解明の端緒と言えよう。

伏見城跡(50)では、伏見城築造と修築に伴う大規模な整地層が、大きく2時期に分かれることを明らかにし、各時期の遺構との関連も含めて伏見城の歴史に新たな知見を加えた。また伏見城築城以前の中世城郭に伴う濠の発見や、御香宮廃寺関係の瓦類の出土など多くの成果を得ている。

(原山充志)

II 平安宮・京跡

1 平安宮図書寮跡（図版1）

経過 調査地点は、平安宮の北西部に比定される図書寮の中央南寄りに位置する。周辺の現況は、西方の下ノ森通及び東方の七本松通に面して江戸時代以降に建立された小規模な寺院が多数軒を並べ、寺町的な様相を呈する。

調査区は東西約27m、南北約9mの範囲に設定した。当初、平安時代前期の遺物を包含する縞状の整地土層を検出し、平安宮造営に

関わる整地土層の可能性が高いと考えた。しかし調査の結果、ほぼ全域が江戸時代の土取穴であることが判明した。

遺構 基本層序は、現地表面から50cmまでは近代積土層が、積土層下は江戸時代以降の耕作土層が厚さ8～45cm堆積し、以下は土取り後の埋土ないし整地土層となる。この埋土からは、平安時代前期の土器と共に室町時代から江戸時代の青磁・染付が出土している。

東端部は、現地表下約3mで湧水が激しく、調査を断念した。ボーリング棒による調査で、現地表下約3.6mまで聚楽土が堆積し、土取穴も同じ深さまで達していることを確認した。中央部でも、現地表下約3mで湧水により調査を断念している。西端部では聚楽土の堆積が薄く、聚楽土下は砂礫層となるため土取穴はない。

遺物 遺物整理箱で2箱の遺物が出土した。遺物の大半は平安時代前期に属する土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・輸入陶磁器などで、他に染付・瓦などがある。

小結 土取穴は、前述した寺院の建立に際し、土堀・壁土などに使用するため採取された結果と考えている。土取穴の埋土には、旧表土と考えられる黒色の土層がみられ、細片ながら平安時代前期に属する遺物を包含することから、平安時代の遺構が存在したことは明らかである。したがって当該地周辺においても、聚楽土の堆積しない箇所や、土取りの及ばなかった地域の調査には十分期待できよう。 (辻 裕司)

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

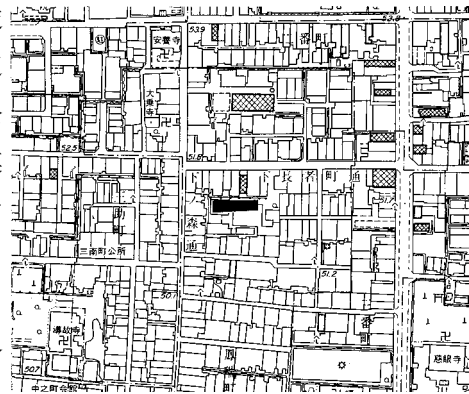


図1 調査位置図 (1:5,000)

2 平安宮中和院跡（図版1）

経過 調査地は平安宮中和院推定地の中央やや西寄りにあたる。昭和60年（1985）に東隣地で行った試掘・立会調査では版築状の遺構を検出しており、今回も試掘調査で同様の遺構を確認したので、発掘調査を実施する運びとなった。

遺構 調査地は、度重なる削平・整地を受けており、ほとんどの範囲で江戸時代の整地が地山のすぐ上まで及んでいた。



図2 調査位置図（1：5,000）

検出した遺構には、掘込地業・建物・溝・井戸・土壇・柱穴などがある。その内平安時代の遺構は掘込地業と土壇1基のみで、その他の遺構は全て江戸時代に属する。掘込地業は調査区北部で検出した。西・北・東へは調査区外に広がるが、南限は調査区内にある。この遺構は地山を1m以上掘り下げた所に小礫を含む黒褐色・暗褐色・褐色砂土を1～10cmの厚さではほぼ平行に20数層にわたって積み上げている。厚さ1～5cmほどの薄い層が重なっている部分は比較的固く、薄く剥離することもあったが、全体としては締まりは良くない。基壇建物には不可欠の凝灰岩は出土していない。以上の点から、この遺構は瓦葺建物の基壇ではなく、地山を掘り込んで造作した地業の一部と考えた。

遺物 出土した遺物は、土器類・瓦類・金属製品などがある。その内のほとんどを江戸時代の土器類・瓦類が占め、わずかながら出土した鎌倉時代から桃山時代の遺物も、江戸時代の整地層や遺構中から出土した。平安時代の遺物は須恵器と瓦がある。須恵器はいずれも甕の体部破片で掘込地業中から出土した。瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、中には緑釉を施したものもある。

小結 今回の調査により、平安宮中和院内に大規模な掘込みを伴う地業が実施されていたことが判明し、その南限を押さえることができた。調査位置や大規模な地業の仕方から考えて、この地業は中和院の中心建物である神嘉殿に関係する可能性が高い。

（山本雅和）

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

3 平安宮中務省跡 1 (図版1・3)

経過 本調査はマンション建設に先立って実施した発掘調査である。

調査地は推定平安宮中務省に該当しており、平成元年(1989)8月7日に試掘調査を実施した所、平安時代の遺物を多量に含む整地層及び溝、土壌などを検出したため、発掘調査を実施することになった。

検出した主な遺構は、平安時代のものでは東西方向の築地とその南側溝、南北方向の築

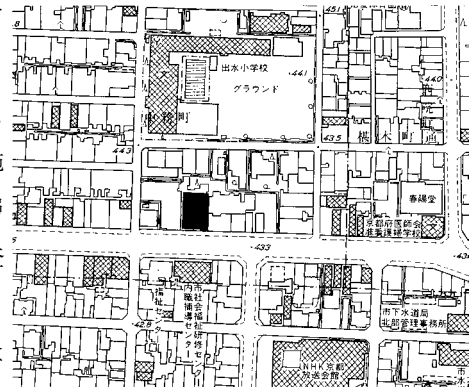


図3 調査位置図(1:5,000)

地とその両側溝、建物、土壌などがあり、平安時代以前のものでは古墳時代後期の竪穴住居を1棟検出している。また、平安時代以降のものでは中世の柱穴群、近世の土壌(土取穴)などがある。

南北及び東西の築地は、調査区北端で交差しているが、東西築地は中務省の北限にあたり、東西築地は省内を区切るものと推定される。

遺構 調査区内で検出した中務省に関する遺構は、東西及び南北築地と掘立柱建物、土壌、溝、ピットなどがある。

築地は調査区のほぼ全域にわたって検出しており、その残存状態は比較的良好であったが、凝灰岩などによる外装はみられなかった。

南北及び東西の築地が交差する地点での遺構のあり方は、南北築地の西側溝が東西築地を切り込んで北側へ続くのに対し、東側溝は東西築地部分で途切れている。また、東西築地の場合は、南北築地と交差する所で南側溝が途切れた状態を呈する。

掘立柱建物は南北築地東側溝の東肩口から約1mのところ検出している。南面に庇の付く東西棟の建物で、梁行2間、桁行1間分を検出した。検出した柱穴5基の内、3基までが柱の根腐れなどにより、礎石、根石を入れて補強している。土壌は大小3基を検出した。全て調査区北端で検出した東西築地の南側溝内に形成されたものである。

この東西築地は、平安京の中御門大路の延長線にあたっており、平安京造営時の区画のために掘られた側溝であろう。

遺物 平安時代以前の遺物は全て調査区南東隅で検出した竪穴住居から出土している。

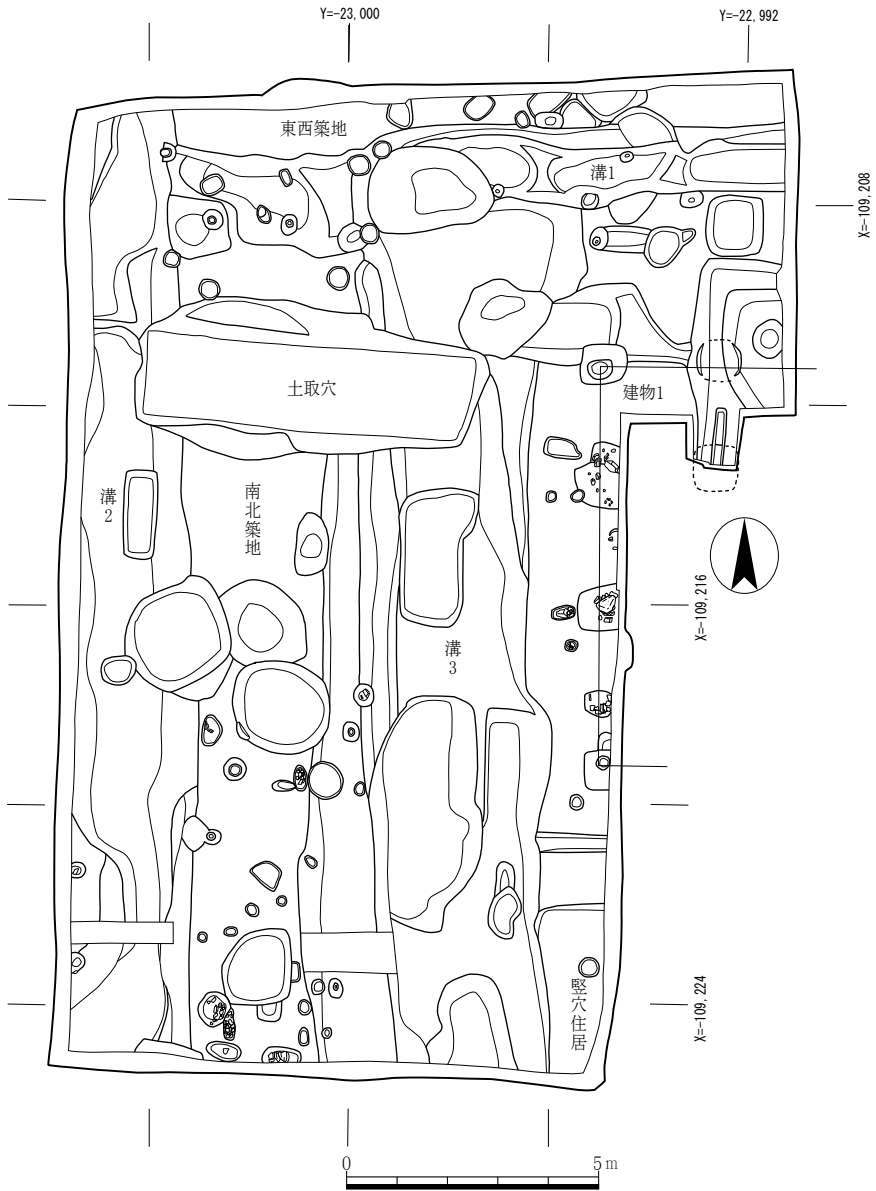


図4 遺構平面図(1:150)

須恵器と土師器があり、古墳時代後期のものである。

平安時代の遺物は、東西築地の南側溝内で検出した土壌から出土したものが最も多く、瓦類・土器類など種類も豊富である。同じ側溝内で検出した土壌には、丸・平瓦が出土遺

物の大半を占めるものもあった。築地塀に使用されていた瓦を投棄したものであろう。南北築地の両側溝からも平安時代の土器類、瓦類が出土している。築地寄りの肩口付近において瓦類の出土量が多く、やはり築地塀に使用された瓦と考えられる。

平安時代前期の遺物で特徴的なことは、硯に転用された須恵器の蓋が多く出土していることである。中務省跡という遺跡の性格を反映しており興味深い。

小結 発掘調査の結果、平安宮中務省関係の建物及び築地が良好な遺存状態で検出された。建物

は東西方向のものであり、その西側は調査区外になる。建物規模としては、調査地西側一帯の発掘調査で検出した建物及び区画割りなどからみて、それらと同規模の梁行2間、桁行5間で南側に庇が付く東西棟の建物と考えられる。

この建物は検出した柱穴の痕跡からみて、当初は掘立柱建物であったものを、柱の根腐れなどにより、根本を切断して礎石を入れて補強しているものとみられる。

出土した遺物からみた主な遺構の時期は、建物が平安時代前期、築地は側溝でみた場合、調査区北端で検出した東西築地の南側溝が平安時代初期に開削されて、直後には埋められたらしく、出土遺物はこの時期のものに限定される。また、南北方向の両側溝や、東西築地の南側溝内で検出した土壇3基は平安時代前期から後期のものである。

中務省については、これまでも良好な発掘成果が得られており、今回の調査で得られた資料も、中務省及び平安宮を復原する上で貴重な資料となろう。

(京都市埋蔵文化財調査センター 北田栄造)



図5 人面土器

4 平安宮中務省跡 2 (図版1)

経過 当該地に共同住宅が建設されることになり、事前に発掘調査を実施した。調査地点は中務省の中央北寄りに位置し、これまでの調査成果から、同省内の正庁域と被官域を区画する施設が想定できる地点である。調査区は東西6m、南北14mの範囲に設定し、更に遺構確認の目的から調査区北端に東西1m、南北3mの拡張区を設けた。

遺構 調査区北端の基本層序は、現地表下74cmで室町時代後期の耕作土層が厚さ6cm、耕作土層下は平安時代中期の整地層が厚さ約10cm堆積し、整地土層下は無遺物層となるが、一部で平安時代前期の整地層を検出している。無遺物層はいわゆる聚楽土と呼ばれる土層で、上面はゆるやかに南へ下がり、調査区南北端では50cmの高低差がある。

整地層及び耕作土層上面で、平安時代前期から江戸時代に至る溝・瓦溜・土壇・柱穴・井戸などを検出した。平安時代前期の遺構は東西方向の溝、土師器・須恵器を埋納した小土壇、底面に小礫を敷き詰めた不定形な土壇などがある。平安時代中期の遺構は東西方向の溝及び溝状遺構、南北方向の溝、瓦溜などがある。瓦溜からは多量の瓦類が出土した。なお、溝間では平面形が円形ないし楕円形の柱穴を検出している。室町時代後期の遺構は耕作に伴う南北方向の溝がある。江戸時代の遺構は土壇、井戸がある。

遺物 遺物は遺物整理箱で127箱出土した。遺物内容は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・陶磁器・瓦類があり、瓦類が大半を占める。

小結 今回の調査では、溝ないし溝状を呈する遺構を検出した。これらの遺構は省内を区画する施設の一部と考えられる。調査区中央で検出した溝状遺構の北肩口は、中務省北面築地心から南へ約17丈、拡張区北部で検出した溝は、同築地心から南へ約15丈の位置に該当する。したがって、中務省内の南北を区画する施設は、これらの数値に近似する位置にあると言えよう。なお、瓦溜の瓦類は、上記区画施設の築地か、調査区の南に推定する中務省正庁域の主要建物の所用瓦と考えられる。

(辻 裕司)

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告



図6 調査位置図 (1:5,000)

5 平安宮中務省跡3 (図版1)

経過 本調査区は、平安宮内に所在した中務省の西端部に位置すると考えられる。このため、店舗の建築工事に先立って発掘調査を実施することになった。中務省の遺構は、過去の調査によると良好に遺存していることが判明しており、今回の調査でも中務省関係の遺構の検出が期待できた。

遺構 現地表面から0.6mで平安時代中期に形成された整地層を確認し、その下層で中務省に関係すると考えられる建物や土壌の一部を検出した。SK1は調査区北西部で検出した土壌である。東端部分を検出したただが、最下層で炭と土器を多量に包含していた。SB2は、東西1間以上、南北3間と復元できる掘立柱建物である。柱間は東西2.85m、南北は2.4m等間であったと考えられる。ここでは調査区の西に展開する掘立柱建物として復元したが、中務省の西限築地との関係から3間×3間の倉庫のような建物が想定可能である。SB3はSB2と同規模の掘立柱建物で、SB2の建て替えと推定できる。

遺物 今回の調査で出土した遺物で注目できるのは、SK1から出土した土器類である。ほとんどが土師器で、黒色土器・須恵器・緑釉火舎も少量出土している。平安時代前期の良好な一括資料である。平安時代の瓦類は、搬入瓦を含めて各遺構から出土している。

小結 今回の調査の大きな成果は、掘立柱建物(SB2・3)とそれに先行する土壌(SK1)を検出したことである。本調査区は、中務省内の西寄りの部分にあたり、西限築地推定ラインから20mも離れていない。SB2とSB3は倉庫のような建物が想定できる。土器を多量に包含したSK1は、SB3との切合い関係からみてSB3に先行する。祭祀的な性格を持つ土壌であり、平安京遷都間もない時期に、この地で何らかの祭祀儀礼が行われたことを示している。(網 伸也)

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

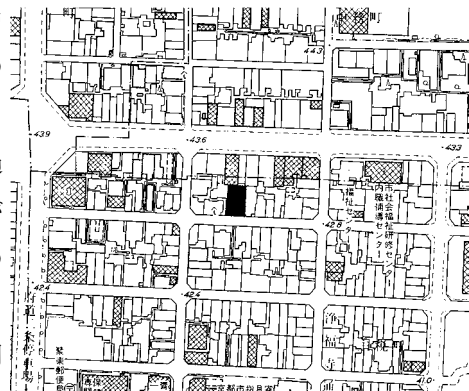


図7 調査位置図(1:5,000)

6 平安京左京二条二坊・高陽院跡 1 (図版1)

経過 本調査地は、平安京左京二条二坊十町に相当し、4町を占めた高陽院の敷地内の南西部と推定される。高陽院の推定地では、これまで園池の洲浜や景石などが検出されている。今回の発掘調査でも、重要な遺構の存在が推定できた。

遺構 本調査区の基本層序は、地表下0.8～1mで中世の遺構面となり、その下層が高陽院の遺構面となる。SX1は調査区の中央

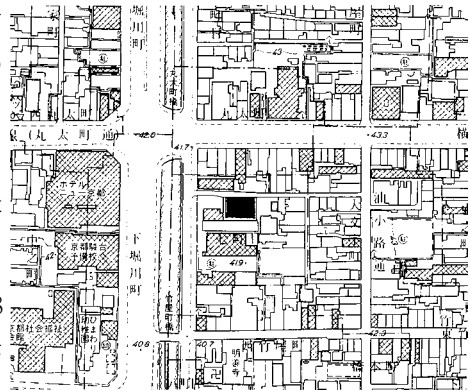


図8 調査位置図 (1:5,000)

南部分で検出した標高40.9mの築山で、この北から東にかけて2時期の池SG2を検出した。築山からなだらかに下って標高40.5mで平らな池底になる。池底の標高は過去の発掘調査で検出した園池と同じであるが、汀には洲浜などの造作は認められない。池の水深は、築山から池底への傾斜の変換点から推測して、0.2～0.3m程度と考えられる。築山のすぐ北側では、堀川と園池を繋ぐ導排水溝と考えられる東西溝SD3を検出した。この他、下層では弥生時代前期から中期の流路を検出した。

遺物 高陽院に関係する遺構から出土した遺物は、ほとんどが平安時代後期の瓦類であるが、土器類も若干出土している。特に、SX1の盛土の中から10世紀にさかのぼる土器片が多く出土しており、SG2下層からは11世紀の土師器皿が多く出土している。園池の造営年代の一端が知れる。調査区東端で検出した整地層下層出土の土器は、SG2が埋没した時期のものと考えられ、高陽院の終焉の年代を知る上で重要な土器群である。

小結 今回の調査の大きな成果は、高陽院の広大な園池の西端部を確認したことである。検出した池では、汀の造作が何も認められない。恐らく、西岸では樹木や苔が茂る程度で、自然の池のようになっていたと考えられる。池の深さは0.2～0.3mと浅く、高陽院の池の構造を考える上で示唆的である。また、築山も高さ0.2mほどで非常に低いことが明らかになった。

(網 伸也)

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

7 平安京左京二条二坊 (図版1・4)

経過 調査地は、平安京左京二条二坊十二町の南西隅やや東側にあたる。周辺には冷泉院・高陽院・堀河院などの邸宅が造営されたことが記録に残っており、調査地も平安時代中期の邸宅「二条院」の推定地にあっている。また、調査地は、二条城東大手門の北東に位置し、江戸時代には幕府の重臣であった酒井家の京屋敷が置かれていた。

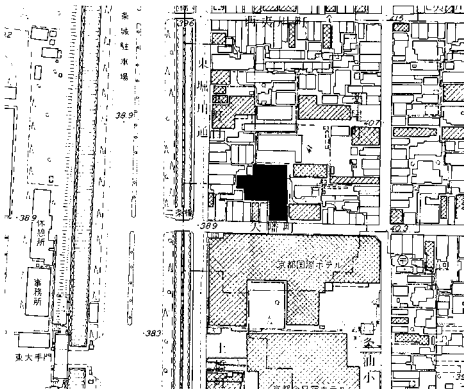


図9 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査区は全域にわたって江戸時代末

以降の攪乱を受けていた。盛土及び焼土層下には江戸時代前期の整地層(1層)が残っていた。その下層はすぐに平安時代後期の整地層となり、地表面から深さ約2.5mより下は砂礫層となる。周辺の調査では、この砂礫層から縄文・弥生時代の土器が出土しているが、今回の調査では採集していない。なお4層は、平安時代前期の整地層の可能性はある。

検出した遺構は、ほとんどが江戸時代と平安時代のもので、鎌倉時代から桃山時代にかけての遺構は、後述する二条大路(二条通)北側溝(溝1・溝268)を認める程度である。江戸時代の遺構には、溝・井戸・土塋・柱穴などがある。大型のものは平安時代の遺構を破壊していることも多い。土塋や柱穴にはまとまりをみつけることができず、建物などの復原はできない。

平安時代後期は、最も遺構が充実する時期である。厚い整地層(2・3層)は調査区全面に広がり、検出した遺構は溝・土塋・柱穴などがある。溝1は二条大路の北側溝にあたり、鎌倉時代まで残る。しかし、土塋や柱穴から建物を復原することはできなかった。

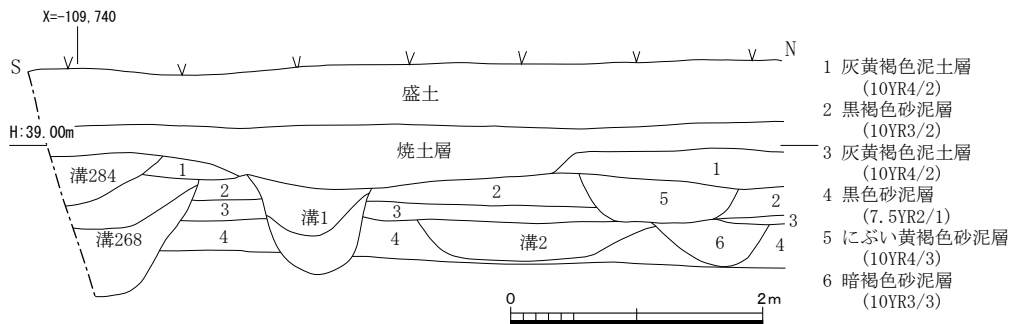


図10 断面図 (1:60)

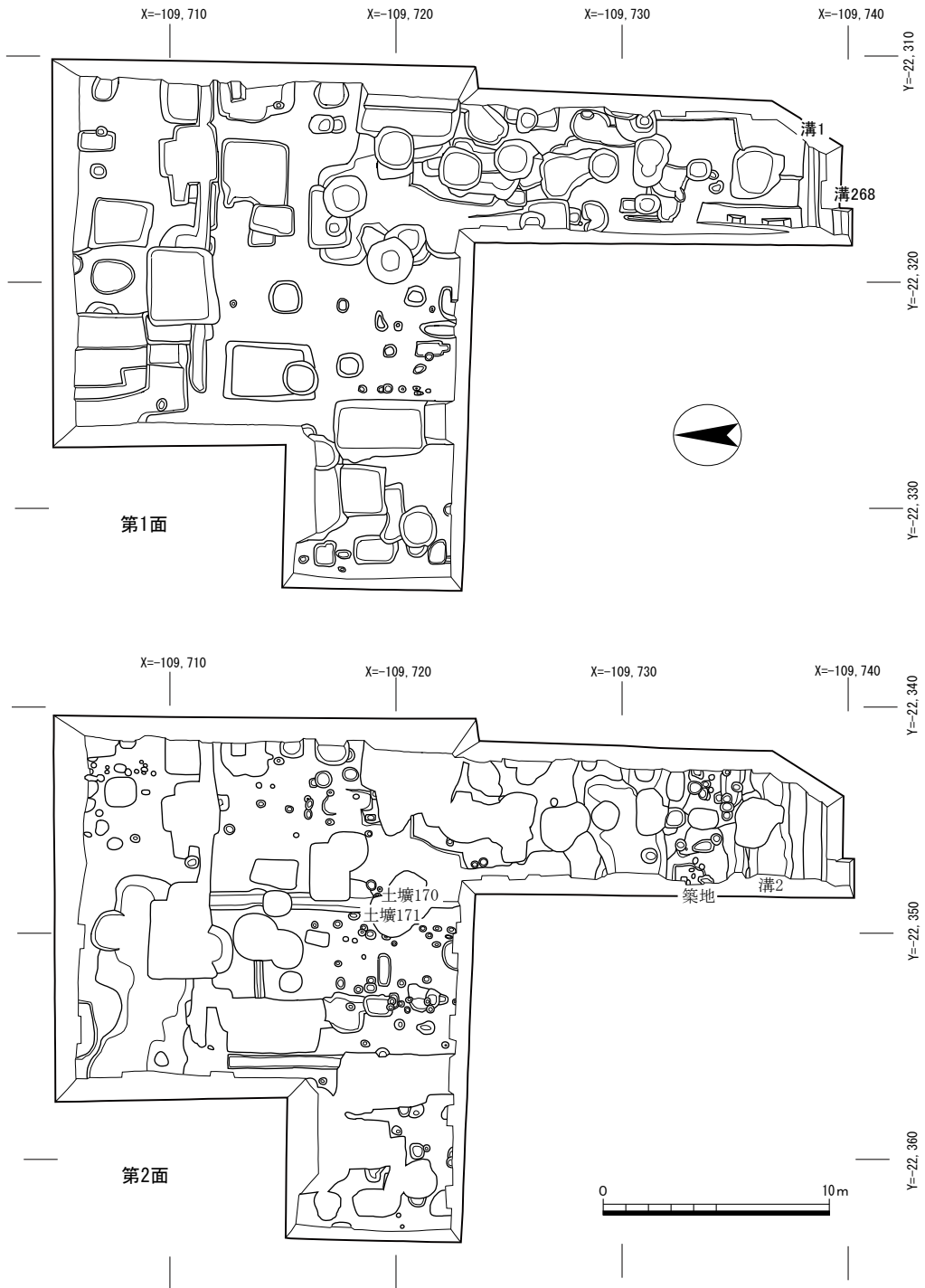


図11 遺構平面図(1:300)

平安時代中期の遺構は少ない。整地層は調査区中央部に島状に残っているだけである。検出した遺構は築地・溝・土壙・土器埋納壙・柱穴などがある。調査区南部で検出した東西方向の築地は、基底部付近が残っていた。幅約2.6mで、平安時代前期から残る溝2と対になって二条大路の北側を画していたと考えている。土器埋納壙（土壙170・土壙171）は約1.4mの間隔で、直径はそれぞれ35cm以上と約50cmで、深さは共に12cmである。土師器の小皿を十数枚重ねて埋納していた。恐らく地鎮などの祭祀の跡であろう。

平安時代前期の遺構は、溝2と柱穴が数基のみである。この時期の整地層も中期と同様調査区中央部東寄りに島状に広がるに過ぎない。

さて、ここで二条大路北側溝について触れておく。北側溝は平安時代前期から江戸時代にかけて、溝2→溝1→溝268→溝284の順に南へ移動している。このことは、時代が下るにしたがって、二条大路（二条通）の北側の敷地が、南へせり出したことを示している。江戸時代の溝284は現在の二条通北側溝と1mも変わらない。

遺物 江戸時代の出土遺物には土器類・瓦類・木製品・金属製品などがあり、その多くを土器類と瓦類が占める。土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などがある。これらの中には中国製品や瀬戸・美濃・唐津・大和など日本各地で生産された品物が含まれている。また、瓦の中には酒井家の家紋を瓦当文様にした軒丸瓦がある。その他、武家屋敷らしく、金象嵌を施した鎧の小札の破片も出土している。

平安時代の出土遺物には土器類・瓦類がある。土器類には土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁がある。その内で平安時代前期の遺物は、整地層から出土した土師器高杯の脚部と、溝2から出土した土師器杯のみである。平安時代中期・後期の遺物は調査区の各遺構や整地層から出土した。出土量は、後期の方が中期よりも多い。中期の遺物には後期の整地層から出土したものも多く、これらは整地にあたって他地区から持ち込まれた土に包含されていたと考える。瓦類は、平安時代を通じて多くは出土していない。

小結 調査地は二条院の推定地にあたる。二条院は、平安時代中期に朱雀上皇と生母の藤原穩子の御所として営まれた。その後、平安時代後期に手を加え、皇族の女性が住んでいたことが『殿暦』『本朝世紀』などの文献に記録されている。

今回の調査では前者に対応する時期の遺構や造作を確認できなかった。また、平安時代後期の大規模な整地は後者に対応するものと考えられるが、まとまった建物などの遺構を復原することはできなかった。今回の調査地が、屋敷地内の縁辺にあたることが原因とするのも一つの考えであるが、平安時代中期の遺構は後期の造営による破壊を受けたためともみられよう。

（山本雅和）

8 平安京左京二条二坊・高陽院跡2 (図版1・5)

経過 調査地は、平安京左京二条二坊十五町にあたり、高陽院敷地の中央やや南寄りに相当する。この地にマンション建設が計画されたため、試掘調査を行った所、高陽院に関係する遺構が良好に遺存することが判明し、発掘調査を実施することになった。

遺構 今回の調査で検出された遺構の中で特に重要なものは、高陽院に関係すると考えられる池(プラン3)と地業遺構(プラン2)である。

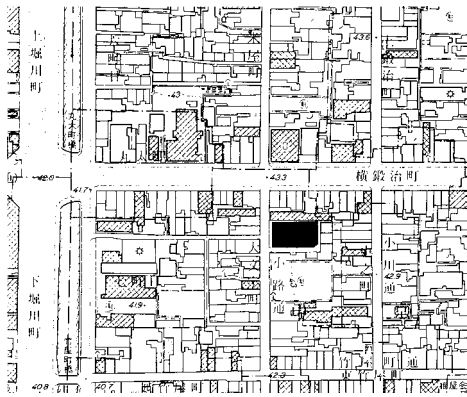


図12 調査位置図(1:5,000)

池は、11世紀に造られた高陽院当初のものと考えられ、調査区の全体に及んでいる。池底には一面に砂礫を敷き詰めており、北から南に延びる中島を浮かべている。中島は東西3m、南北6m以上の比較的小さなもので、礫を多く含む黒褐色砂泥を版築状に固め、低く構築している。島の上には60cmほどの景石を3基配し、東方の浅い池中にも同規模の景石を4基配している。池底の標高は40.5mで、一連の調査で検出した園池と共通しており、中島と池底の比高差は30cmほどで非常に浅い池であったことが知れる。なお、調査区南西隅で検出した柱穴(SK47)は、立派な礎板を持っており注目される。地業遺構は、この池を埋め立てて1mほど盛り上げたものである。調査区全域にわたっているため、広がり是不明である。構築の順序は、下層が池であったためにまずグリ石を全面に敷きつめて地盤を固め、その上から版築を施し、地業の上面には砂を撒いて綺麗に化粧

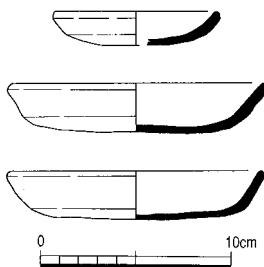


図13 SK 46出土土器
実測図(1:4)

をしていた。グリ石の敷き方は、8m間隔で南北方向の石列を設けて地業の単位とし、池の深い部分ほど密に石を敷きつめている。なお、地業の版築層において建物の柱位置を示す根固めの集石を4箇所確認した(SB1)。柱間は南北4.8m、東西3.6mを測る。部分的な検出で、更に調査区外に広がるものと考えられる。また、この建物の東で検出した不整形なピット(SK46)から、土師器皿が4枚重なって出土した。地鎮に関係するものであろう。地業上面では、土師器皿を多量に

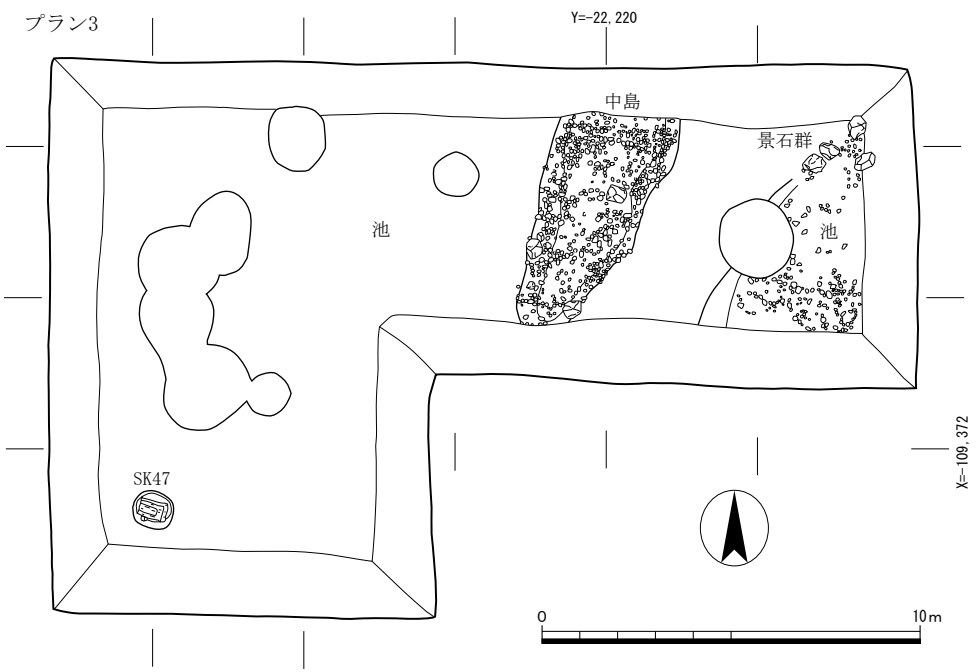
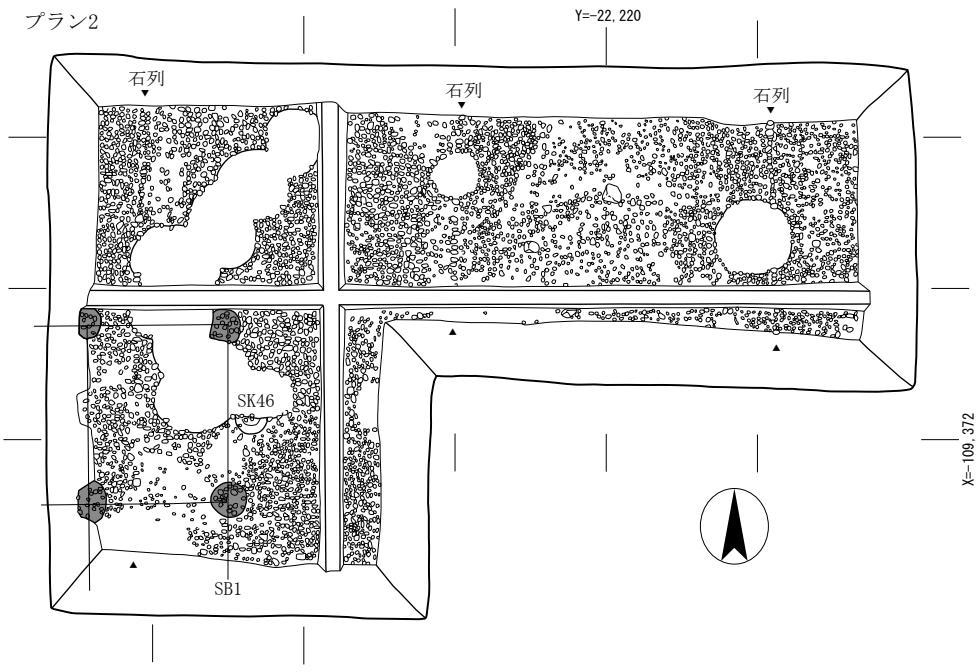


図14 遺構平面図(1:200)

包含した土器溜や建物2棟分が復原できる中世のピット群を検出したが、高陽院に関わる明確な遺構は検出できなかった。

遺物 平安時代の遺物は、ほとんど池の堆積土と地業の版築土から出土している。土器類は細片ばかりで際立ったものはみられないが、前者からは10～11世紀のもの、後者からは12世紀のものが出土している。特に、S K 46から出土した地鎮のための土師器皿は、地業の構築年代を示す貴重なものである。また、地業の版築土からは、平安時代の軒瓦が少量出土している。

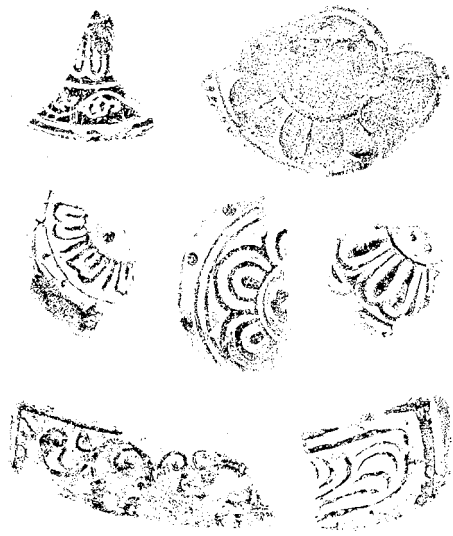


図15 地業出土軒瓦拓影(1:4)

小結 今回の調査成果は、藤原頼通が造営した高陽院の当初のものと考えられる池を検出し、後に施された地業の状態を明らかにできたことである。

池には、比較的小さな中島を構築し、池底には一面に砂礫を敷き詰めて丁寧に仕上げている。また、中島上と東方の浅い池中に小さな景石を据えていた。池の深さは30cmほどで非常に浅い。これは昭和56年度に調査した園池の洲浜と池底との比高差にほぼ等しく、高陽院の池は全体にかなり浅かったことが推定できる。

後に園池を埋め立てて強固な地業が施されている。まず、南北方向の石列によって単位を造る。そして、池の部分は密に、島の部分は粗く石を敷きつめて地盤を固め、その上に版築を施す。このような構築方法は、同時期に造営された鳥羽離宮でみられ、特に金剛心院釈迦堂の基壇は単位を持った石敷きによって1m近くも突き固められている。大規模な造営が施工された平安時代後期の特徴的な地業だと言える。今回の地業も、柱の根固め痕跡(S B 1)を検出していることや、地鎮のための土師器埋納(S K 46)が行われていることから、大規模な建物を建てるための地業であった可能性が高い。

地業の上面では明確な建物の遺構は検出できなかったが、調査区が高陽院の敷地のほぼ中央にあたることから、中心的な殿舎(寝殿など)がここに建立されていたと考えられる。

(網 伸也)

9 平安京左京三条三坊 (図版1・6・7)

経過 本調査はオフィスビル建設に伴うもので、調査地は平安京左京三条三坊九町の北東隅に該当する。当地周辺ではこれまでに多くの調査が行われており、平安時代から近世の遺構、遺物が多数検出されている。敷地内の3箇所で行った試掘によって周辺の調査結果と同様の遺構、遺物が確認されたため、建設予定地を対象として433.5㎡(東西32m、南北11～16m)の調査区を設定し、

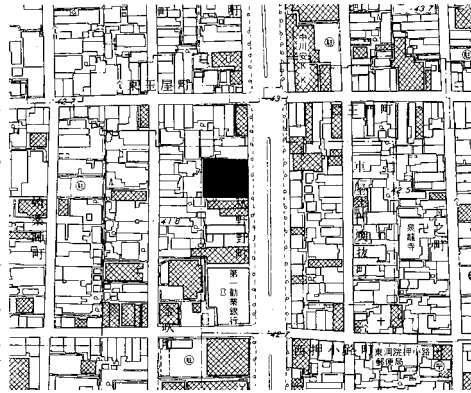


図16 調査位置図(1:5,000)

調査を実施した。その結果、江戸時代前半の町屋の一部とみられる柱穴群や井戸、溝、土壇、石室、整地層、桃山時代の濠状の遺構、井戸、室町時代の井戸、土壇、鎌倉時代の土壇、平安時代の井戸など多くの遺構、遺物を検出した。

遺構 平安時代の遺構には2基の井戸の他、土壇及びピットがある。平安時代前期の井戸(S E 300)は掘形の一部を検出したにとどまり、詳細は不明である。平安時代後期の井戸(S E 270)は一辺1.1mの方形縦板組みで、掘形の長辺が約4mの比較的規模の大きなものである。底部から約1.2mほどの木杵が良好な状態で残存していた。鎌倉時代から室町時代前半の遺構の密度は低く、室町時代初頭の井戸(S E 290)と少数の土壇及びピットを検出したにとどまった。室町時代後半から桃山時代の遺構密度はかなり高く、ピット、井戸(S E 6)、土壇、溝、濠状の遺構(S X 66)など種類も多い。江戸時代前期以降の密度は更に高く、多数のピットや土壇、井戸、溝(S D 18など)、石敷、石室などの他、地割りの柵の一部とみられるピット列や溝、複数期の整地層なども確認している。

遺物 出土した遺物の内、室町時代以前のものは比較的少なく、桃山時代以降(特に江戸時代初頭)のものがかなりの比率を占める。前者については、井戸から出土した遺物群がある。鎌倉時代の遺物は非常に少ない。各時代を通じて、土器、陶磁器類が圧倒的多数を占めているが、桃山から江戸時代前期のS D 18、S X 66など、溝や濠状の遺構からは漆器、曲物などの木製品や木筒、金属製品、獣骨(小動物、鼠か)の一部などが出土している。

小結 本調査地は平安時代においては二条大路、烏丸小路に接し、周辺には押小路殿、

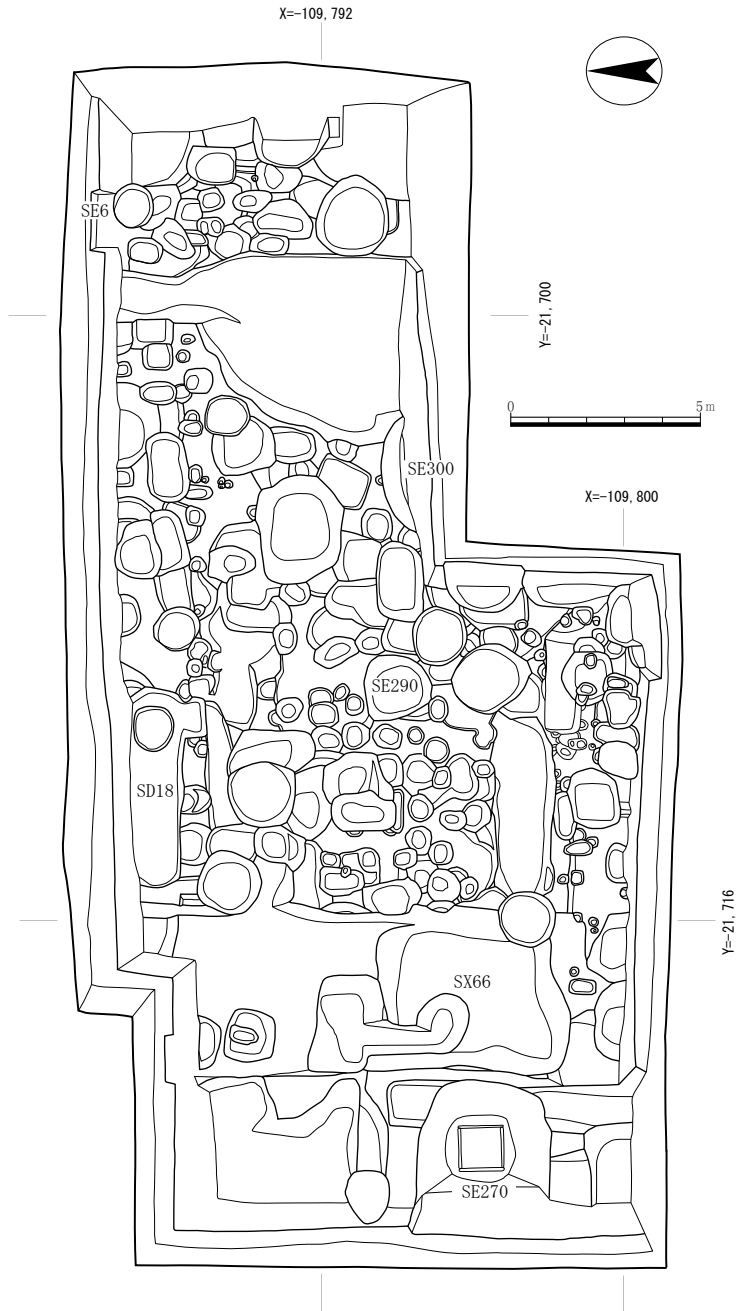


図17 遺構平面図 (1:200)

鴨院、東三条殿など多くの邸宅の推定地が存在する。しかし、鎌倉時代から室町時代にかけて新たに編成され、繁栄した上の町、下の町の間位置しており、地域的にはやや衰退し、その後近世初頭以降に急速に開発された地域の一つとして捉えることができる。

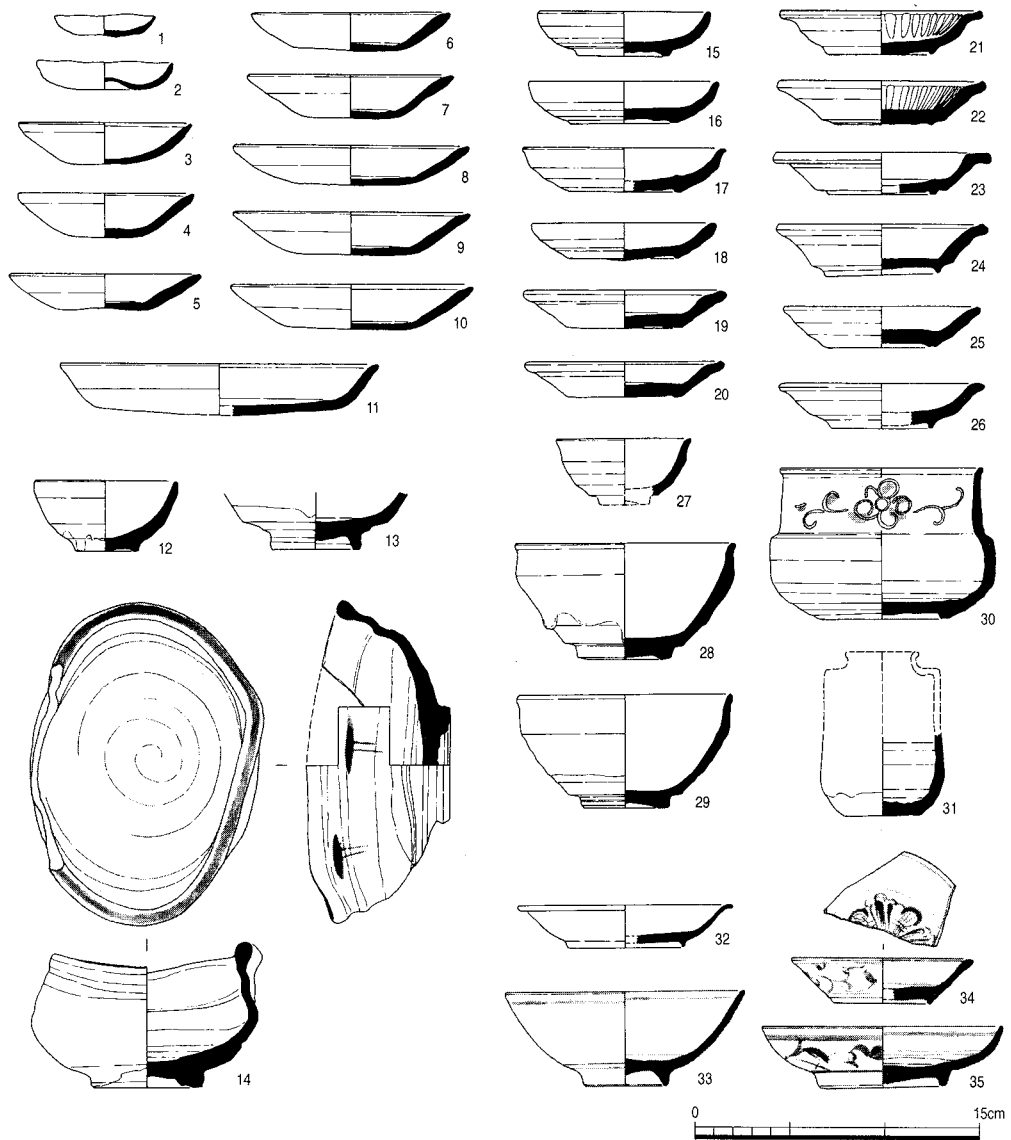


図18 S X 66 出土土器実測図 1～11：土師器 12～14：唐津系陶器 15～31：美濃系陶器
 32：白磁 33～35：染付磁器 (1：4)

う。周辺や今回の調査結果はそのことをよく反映しているものと理解でき、特に近年、海北友松の襖絵下張りに転用されていた、天正期の秋野乃町の地割りや住人を記載した古文書が滋賀県で発見されている。このことから、その分析結果を待って、調査成果と照合することにより、京都の近世都市としての展開の具体像がより明らかになるものと思われる。

(平尾政幸)

10 平安京左京三条四坊 (図版1・8)

経過 本調査は、地下鉄東西線の「調査その2」として、今年度4月から実施した。調査区は、御池通路上の東洞院通から御幸町通の間に、4箇所(西側からNo.13、15、17、18調査区)を設定している。「調査その1」^註は、昨年度末にNo.12、14、16調査区の3箇所^註で実施し、調査を完了している。

今回の「調査その2」では、弥生時代の竪穴住居や平安時代前半の街路関係の遺構などを始めとして、各時代の遺構・遺物を多数検出することができた。

遺構 1棟だけではあるが、弥生時代末期の竪穴住居をNo.13調査区の東端部で検出した。側壁2辺と床面、炉などを検出し、隅丸方形の竪穴住居と判断できるが、柱穴は確認できなかった。検出部分で、一辺が3.9mの比較的小さな竪穴住居である。住居内の堆積土からは、壺、甕などの土器片が出土している。

No.13調査区は、No.14調査区以東の各調査地点より地上上面の標高が高く、明瞭な微高地に位置する。この微高地は、周辺の調査資料を加味すると、西・南方向に緩やかに傾斜し、北方向は徐々に高くなる。地山を形成する地層も、No.15調査区以東が、砂礫層を主とする河川氾濫原の様相を呈するが、No.14調査区以西は黄褐色シルトあるいは泥砂土である。このような地形は、竪穴住居の立地として適しており、調査地北方を主とする周辺部に集落の存在が想定できる。

古墳時代の遺構は検出できなかったが、「調査その1」の遺物出土状況や周辺部で得られた調査資料から、弥生時代の遺跡と重複するか、近隣に存在するものとみられる。

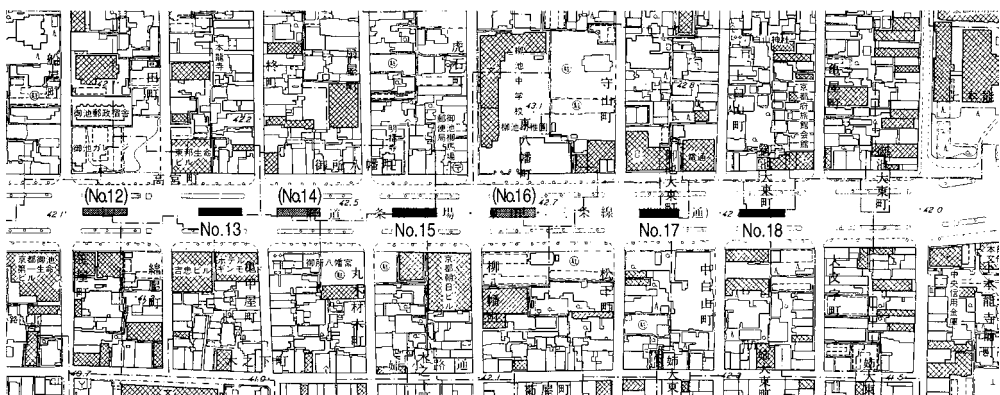


図19 調査位置図 (1:5,000)

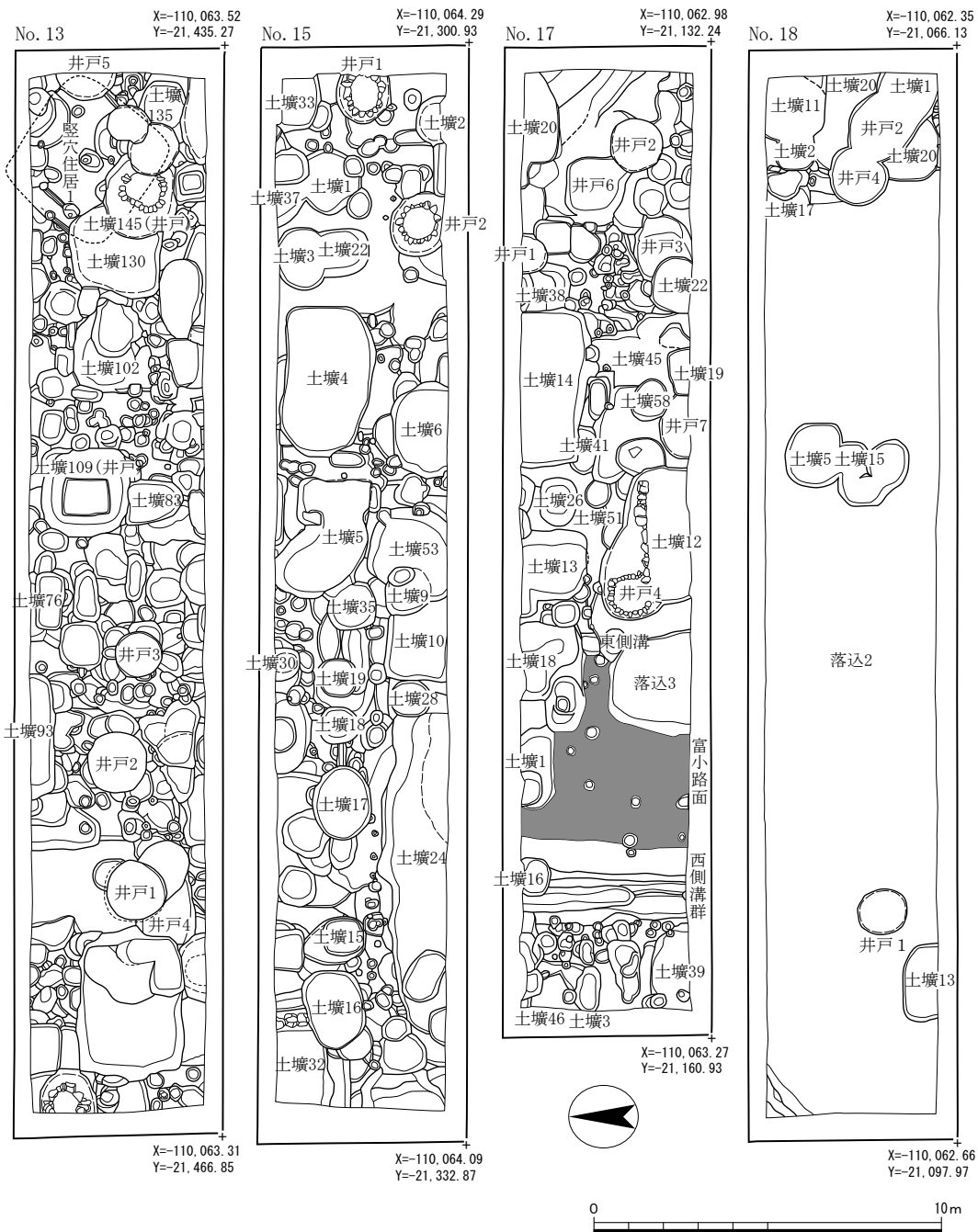


図20 遺構平面図 (1:200)

平安時代の遺構は、富小路をNo.17調査区の西半部で検出した。築地は確認できなかったが、平安時代の重複する路面と側溝群を検出している。路面は、中期に地山上面を再整地し、その上を砂、粘質土、小礫で覆い固めて成形する。路面幅は、約6.2mを測る。その上層に、後期までの各時期の路面が、4面ほど積み上がっている。側溝は各時期の路面に対応する東西の側溝群を検出した。西側では、中期の側溝に上部を削平された状態で、前期の側溝を確認している。対応する路面は残存していないが、この側溝の存在から、富小路は前期にも機能しており、中期に同位置で造り直されたものであろう。以後、ほぼ同位置で修築、再築が加えられて後期まで機能を維持したとみられる。

今回のNo.17調査区では、中・近世の路面などは確認できなかった。変遷過程は不明であるが、中世には西方へ移設されたものであろう。なお文献資料によれば、現在の富小路通は天正18年に通された新しい道路の位置を踏襲しており、平安時代の富小路に比べて約20m西方に位置している。

平安時代前期から中期前半の遺構は検出していないが、中期後半の井戸などの遺構を検出しており、後期の井戸、土壙などの遺構検出数は増加する。この様相は、当地域も他の左京域同様に平安時代後半には稠密な市街化が進行したことを物語っている。

中世に入ると「調査その1」と同様の状況を呈している。室町時代前半代の遺構数は減少するが、後半代以降は遺構検出数が増加し、石組井戸、土壙、落込など各種の遺構を検出している。井戸、土壙などは町屋あるいは屋敷に伴う遺構群であるが、No.18調査区で検出した落込2は、調査区内では全形を確認できない大規模な遺構である。現時点では堆積状況や底部形状などから南北方向に延びる河川か濠の一部とみているが、今後の周辺調査による解明が期待される。埋没年代は室町時代末葉とみられる。

近世以降は、更に遺構の種類、量が増加する。これらの遺構群の増加は町屋が建ち並んで、商工業の中心地となった様相を反映したものとと言える。

遺物 弥生時代の遺物は、土器類が各調査地点から出土しているが少量である。No.13調査区の竪穴住居から出土したもの以外は、全て流れ堆積の遺物である。

平安時代前期から中期前半の遺物は、出土量が少ない。No.17調査区で検出した富小路側溝群から、9世紀後半と10世紀代に比定できる土器群がまとまって出土しているが、他調査区では新しい時期の遺構への混入として出土している例が多い。

平安時代中期後半から後期の遺物は、富小路の側溝群から多く出土するだけでなく、各調査地区でも増加する。土壙や井戸などの遺構から、種類も豊富で形式的にまとまりのあ

る土器群の出土する例も多く、中でも平安時代後期の遺物群の出土量が多い。土師器皿類を主力とするそれらの土器群の様相は、他の京域内の出土資料と共通する内容を示している。

鎌倉時代前半は、平安時代後期に近い様子を示しているが、後半に入ると各調査地点とも一括して出土する遺物が徐々に少なくなる。室町時代前期に比定できる遺物は、No.13 調査区の土壙13からまとまったものが出土しているが、鎌倉時代後半同様に一括出土例の少ない傾向が続く。ただ、新しい時期の遺構に混入して出土する例もあり、調査地の様相を理解する上で注意する必要がある。

室町時代後期から近世の遺物の出土状況は、「調査その1」の調査成果と変わらない。後期の遺物は出土量が徐々に増加、桃山時代以降は更にその傾向が加速し、種類、数量共に急増する。土器・陶磁器類では、京都、瀬戸・美濃、唐津、備前、丹波、信楽などの各産地の日常雑器類を主力に、茶陶などの高級飲食器類も数多く出土する。しかし、「調査その1」のNo.16 調査区で多量に出土した埴塙など铸造関係の遺物は、No.15 調査区などでは少量にとどまる。他には、瓦類が多く、金属製品、石製品など各種の生活用具や銭貨なども、各調査区から少量出土している。

小結 今回実施した「調査その2」の発掘調査では、No.13 調査区において弥生時代末葉の竪穴住居を、No.17 調査区西半では平安時代各時期の富小路を検出するなど、数多くの成果が得られた。

既調査でこの地区に弥生時代から古墳時代の遺跡が存在することは明らかとなっていたが、その詳細は不明確であった。1棟ではあるが竪穴住居が検出され、遺跡解明への一端が得られた意義は大きい。

また、平安京の左京域において、街路関係遺構の検出例は多いが、そのほとんどは平安時代後半のものであり、前半に比定できる側溝や路面を含む街路の検出例はごく少ない。今回検出した富小路は、検出状況も良好であり、街路の変遷や平安京条坊復原の重要な資料となろう。(小森俊寛・上村憲章・原山充志・長戸満男)

註 小森俊寛他「平安京左京三条四坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

11 平安京左京四条三坊1 (図版1・9)

経過 調査地は、平安京左京四条三坊十町に位置し、東端に烏丸小路西側築地推定ライン、西部に十町地のセンターが比定される。

対象地は、烏丸通に面する東半部が狭く奥の西半部が広い。東西に長い鍵形の敷地のため、東半部に1区として東西方向の調査区を、西半部に2区として南北に幅のある方形の調査区を設定し、2回に分けて調査を実施した。

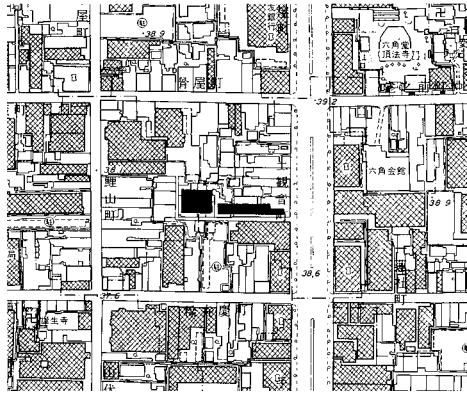


図21 調査位置図 (1:5,000)

遺構 平安時代前期末葉から中期前半の遺

構は、柱穴、土壇を合わせて8基の遺構を検出した。新しい時期の遺構、土層に混入して出土する遺物も多く、後代の遺構の削平を受けた結果と理解している。

平安時代中期後半では、2区で整地層の一部とみられる土層を確認し、井戸・土壇・ピットなどの遺構を検出した。2区の落込1・2とした遺構は、連続する溝状遺構の可能性が高く、特に、落込2とした部分の側壁には貼り付けた状態の小礫が残存していた。後代の遺構によって削平された部分が多く、本来の形状や性格を解明することは難しいが、調査区東壁北部から西方に向かい、折れ曲がって南方に延び、落込1から南壁外へ向かうもので、南流する遺水遺構の可能性はある。遺水であれば、1町の中心部に近い検出位置からみて、1町規模の邸宅に伴う庭園の一部と考えられる。

平安時代後期に入ると、2区では全域に広がっている整地層が確認でき、1・2区共にピットが急増し、土壇、溝、落込など各種の遺構も加わって稠密な分布状況を呈する。ピットは、掘立柱建物の柱穴がほとんどで、掘形の直径が30cm前後のものが多い。2区の西半部では中世遺構に削平されて不明瞭なものが多いが、2区東半部から1区の比較的良好な地区では、切合いを含めて多数が検出され、小規模な建物の頻繁な建て替えの様相がうかがえる。

鎌倉時代の遺構は、前代の様相を継続するが、末葉にはピットの密度がやや低くなる。井戸2基(井戸15、土壇8)や、方形の室とみられる掘込5など平安時代後期にはみられなかった遺構も検出している。また2区では、十町のほぼセンターの位置に、同町を南北に区画する東西方向の溝3を検出しており、町割りの変化が確認できる。

室町時代前半代には、様相が大きく変化する。2区では、ピットを始め各種の遺構が激減する。1区では、種類・数量共に鎌倉時代に比べて大型の土壇、溝、井戸などが増加し、烏丸通に沿った外周部の土地利用密度が、町の中央部よりも高い状態を示している。

室町時代後半には、2区においてもピットが増加し、それまでみられなかった井戸も複数造られている。また、調査区中央では、町を東西に区画するように、南北方向の溝2・4が設置される。1区ではピット、土壇などは減少するが、井戸、落込などの遺構が増加している。また調査区東端の烏丸通沿いで南北方向の溝状遺構3・4、西部で溝1が設置されている。溝1は、幅3m強、深さ1m以上の規模の大きな溝である。再び町の中央部、外周部を通じて、密度高く利用されるようになり、新たな地割りも設定されて、人々の集中が前代よりも進んだ様相がうかがえる。

桃山時代から江戸時代の近世遺跡については、成立面での調査は実施できなかったが、井戸や深く掘り込んだ遺構及び断面調査などからみて、更に活発な土地利用が行われたことは明らかである。

遺物 出土遺物は、整理箱に280箱である。奈良時代以前の遺物は、全て後代の層・遺構に混入して出土しており、小片で摩滅した弥生・古墳時代の土器がごく少量認められる。

平安時代以降の遺物は、混入して出土した平安時代前期の土器・陶磁器を含めると、平安時代から近代の各時代の遺物が多量に出土している。各時代を通じて、当時的高级品から日常雑器までを含む土器・

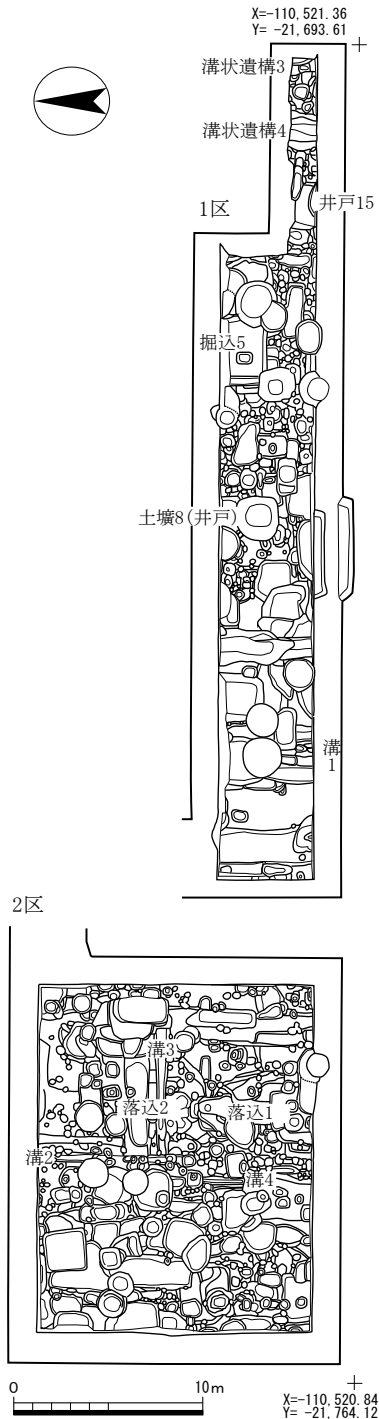


図22 遺構平面図(1:400)

陶磁器類が中心であるが、瓦類、銭貨、生活用具、生産用具などの各種の遺物もみられる。特に遺構からの出土遺物には、各時期の型的にまとまった良好な資料が多く、鎌倉時代後半から室町時代前半の遺物は、質・量共に豊富であり、京都の土器編年を進める上で重要な資料となろう。

小結 平安時代から近代にわたる各時代の層・遺構・遺物を多数検出した。遺物は、少量の弥生時代から古墳時代の土器を伴い、平安時代から近代までの各時代の多量な遺物が出土している。層・遺構については、後世遺構の重複、削平によって消滅したと考えられる時期もあるが、基本的には積み上がりながら、長期にわたり連続と形成され続けている。

各時期における遺跡の様相と変遷をみると、平安時代前半は遺構密度は低いが宅地として利用されており、後半には遺構が急増し、それに伴い出土遺物も飛躍的に増え、人々が稠密に居住する都市へと変化したといえる。鎌倉時代は、平安時代後期の様相が変化しつつも、基調は継続されたとみられる。室町時代に入ると町の様相は大きく変わる。室町時代前半には、通りに沿った町の外周部に遺構が密集しており、町は中世都市へと姿を変えている。後半には、中央部も密度高く利用されるようになり、中世都市として新たな発展を遂げたと理解される。近世には、この中世都市を継承し、更に発展させて、近・現代への橋渡しが行われたものとみられる。

平安京左京四条三坊十町は、平安京建都以来、古代都市である平安京の「左京」、中・近世の「下の町」、近・現代には「中京」と、都市の中心地域に位置し続けた町である。今回の調査で検出した遺跡の様相と変遷は、そのような当町の歴史を明確に示している。

(小森俊寛・原山充志)

12 平安京左京四条三坊2 (図版1・10～12)

経過 調査地は、中京区元法然寺町に所在する。元法然寺町は、烏丸通の東側沿いで錦小路通の南北にまたがる。調査地は、元法然寺町のほぼ南半を占める。この地に民営のテナントビルが建設されることになり、工事に先立ち発掘調査を実施した。敷地面積は3000㎡を越えるが、建物建設予定範囲を中心に、約2000㎡の調査区を設定した。京都市域の中心部における発掘調査としては、大規模な面積の調査といえる。

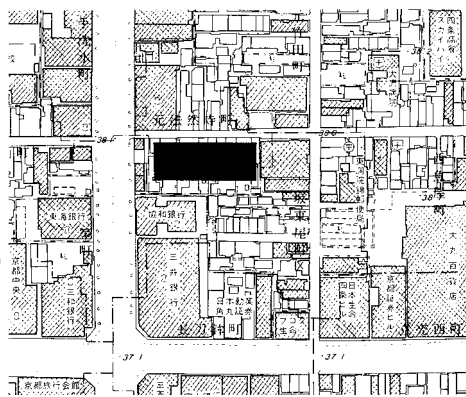


図22 調査位置図 (1:5,000)

調査地は、平安京左京四条三坊十三町の北半部にあたり、敷地北縁部に錦小路南築地推定ラインを含む。同町には、平安時代後期に民部卿藤原忠教邸があったと推定されている。左京の四条大路以北は、宅地としての立地条件が良好な地域であり、文献資料では知られていない平安時代前半の邸宅の存在も十分に予想される。中世には下の町の一角を占め、以降も各時代を通じて都市域の中心地となっている。当町を含むこの地域は、平安京を始めとする各時代の都市遺跡が重複して遺存する地域として知られる。また、弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡の北辺部にも位置している。

遺構 弥生時代を初め、平安時代前期から近代までの各時代の、井戸、柱穴、溝、ピット、土塋、落込、溝状遺構など各種の遺構を検出している。平面で調査した遺構は1700基に達する。

自然堆積層の地山は、黄褐色系の泥砂土であり、弥生時代遺構のベースになっている。各時代の遺物を包含する土層は、この地山上面から堆積している。現表土から地山上面までは1.2～1.5mを測る。西半部において、窪地を埋めるように堆積する平安時代前期の遺物包含層を数箇所を確認した。この土層上面から東半部の地山面上には、オリーブ黄色から黄褐色の泥砂土を主とした平安時代後半の整地層が、全域で確認できる。厚さは0.2m前後で、中期後半(11世紀代)と後期(12世紀代)の土層に分層できる地区もあり、整地は2回以上行われたとみられよう。中世土層の堆積は、比較的薄く、室町後半代に位置付けられるものが確認された。これより上層は、近世から近代の整地層であり、数層に

分層され、合わせて1 mほどの厚さである。

弥生時代の遺構は、溝6～8や落込とした不定形な土壙（落込40～44）などがある。出土土器は、畿内第Ⅲ様式新相から第Ⅳ様式とみられるものが中心であり、中期後葉頃の遺構と理解している。溝7は、北で東に振れるが、ほぼ南北方向に延びる。残存状態の良い部分で幅2.4 m、深さ1 mを測り、比較的規模の大きな溝である。調査区南側に想定できる集落中心部への導水路的性格を持つ溝であろう。溝7に切られる溝8は、東西方向に弧状を呈しており、幅約1.5 m、深さ0.9 mを測り、断面は逆台形状を呈する。出土遺物中に底部を穿孔した土器を含むことや平面形状などから周溝墓の可能性がある。

平安時代の遺構は、新しい時代の遺構による削平が激しく、遺存状況は良好とはいえない。調査地東辺部のやや南に位置する井戸83は、掘形の径が3.5 mを測る大型の井戸である。井筒などの施設は遺存状態が悪く不明瞭だが、縦板組みで方形（一辺1 m）の井筒を持つ井戸とみられる。後に手が加わり、円形状の井筒になっている。前期の内でも早い段階に造られ、9世紀代で埋没したと理解される。井戸81は、調査区北東部辺に位置し一辺1.5 mの方形掘形を持つ。最終の埋没は中期後半に入るが、中期前半に造られて使用されていた可能性が高い。前期の整地層は、西半部に点々と残存しており、前期から中期前半の土壙なども同様の傾向を示す。平安時代前半を通じて、遺構密度は高くはないが全体が宅地として利用されていたと理解してよいだろう。

平安時代後半の遺構も遺存状況は良好とはいえないが、調査区のほぼ全域で整地層とその上面に展開するピット群などを検出している。1町の南北センターラインの東側に沿うように、土器埋納ピットが検出された。ピット310（11世紀代）・295（12世紀代）は、地鎮などの祭祀に関わる遺構とみられる。今回の調査におけるピットの総検出数は約800基であるが、その内の7割前後はこの時期に比定できる。前半代に比べると、井戸、土壙などの検出数も増加し、全域に分布している。井戸は、方形縦板組みの井筒を持つものが主で、井戸75・81・92・96などがある。この他調査区東半の北縁部では、上部を削平された東西方向の溝1や、1町の南北センターラインより約6 m西側で南北方向の溝4なども検出している。溝1はその方向と位置から、錦小路南側溝か南築地の内側溝の可能性もある。溝4は、幅1.5 m前後、深さ0.5 mを測り、中期後半には埋没している。四行八門の宅地割り推定ラインには重ならないが、宅地割りに関係するとみられる。遺構数や密度は、中期後半に入ると増加する傾向がみられ、後期にはより増加する。宅地が小規模化し、小型の建物が密集する町へ変化する様相を示したものとみてとれる。

鎌倉時代から室町時代前半には、ピット数が減少し、井戸などもやや少なくなるが、土壌は方形を呈した大型のものが多く、遺構密度が低いという印象はない。当町に居住した人々の階層や性格の変化を反映した遺構の変化と理解される。

室町時代後半になると、井戸、土壌の検出数は前代に比べると急激に増加する。井戸は、川原石を積んだ石組み円形井筒を持つものが多くなり、ほぼ全域に分布している。方形の大型土壌にも側壁に川原石を積んだものがみられるようになる。また、礎石とみられる設置された石や礎石を伴う柱穴も点々と残存している。人々が更に稠密に居住するようになり、経済力の向上を示す遺構の様相と理解される。末葉には、錦小路通南辺沿いの東西方向の溝（落込6）と、調査区西辺に南北方向に走る溝5が築造される。両溝とも濠といえる規模を持つ。調査区中央部にも規模は小さいが、南北方向に走る溝2が成立している。

落込6とした東西方向の濠は、2時期の同方向の濠が切り

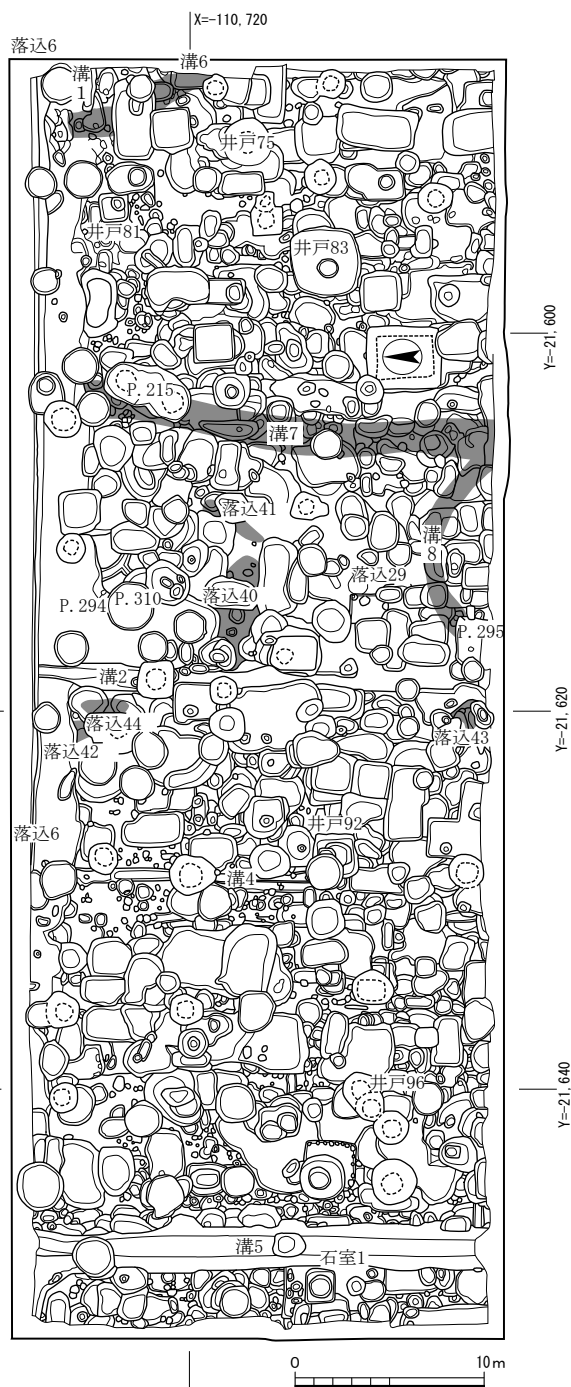


図24 遺構平面図 (1:400)

合っており、6-1と6-2として分離した。6-1とした濠は少し北側にずらして新しく修築されている。両者とも北側肩部が調査区外であるため、検出部分での規模は、落込6-2が幅3m以上、深さ2.5mであり、6-1も近似した規模とみられる。両濠は錦小路南半部から宅地北端辺を利用して設置されている。溝5は、検出部分で幅3.5m、深さ2.2m、底部幅1mを測り、断面が逆台形状を呈する濠である。溝2は検出部分で東西幅1.3～1.5m、深さ0.8m、底部幅0.7mを測り、断面は同じく逆台形状を呈する。溝2は1町の南北センターラインから溝心で東へ約4mに位置しており、溝5は溝2から心々で西へ約30mを測る。

落込6-2とした濠は、室町時代後期の15世紀末葉から16世紀前葉には機能していたとみられ、落込6-1とした濠は、桃山時代初頭には完全に埋められている。出土遺物から16世紀前半に落込6-2は埋没しており、間を置かないで落込6-1が修築されたと考えられる。落込6-1の埋土最上層上面には、側壁に石材を用いた錦小路通南側溝とみられる東西方向の小溝が造られている。溝内出土の遺物からみて、桃山時代前半には機能している。溝5と落込6の接点部分は攪乱が激しく不明瞭な点が多いが、両濠は並存していたとみている。溝5は落込6-2と同時期に機能していた可能性が大きい。落込6-1の築造時には埋没していたが、その修造に伴い修復されて機能が回復されたものとみている。2時期にわたる両濠とも、下京の防御施設の一端を担ったものと考えている。溝2は両濠の古い段階で並存しており、16世紀前半に機能を失っている。

両濠が埋められ、錦小路側溝が再び造られるのは、秀吉が実施したいわゆる「天正地割」と称される一連の都市改造によるとみられる。桃山時代以降の近世遺構群の様相も大きく変化し、室町時代後半にも増して稠密なものとなる。

井戸は、花崗岩の切石を円形に組んだ石組み井筒を持つものが増加し、町屋ごとに普及が進む。江戸時代中期から後期には瓦甃の井筒、漆喰固めの円形石組み井筒、漆喰の円形井筒なども多くなる。江戸時代後半には、町屋ごとに最低1基あるいは複数基の井戸を伴うようになる。側壁に花崗岩の切石を組んだ石室を始め、室跡とみられる素掘りの方形土壇も数多く検出している。石室1は、調査区西辺部で検出しているが、南北辺4.5m×東西辺2.5mを測る長方形の平面形を持つ。深さは検出面から0.8mであり、四方の側壁には切石の花崗岩を組んでいた。使用花崗岩には「上」、「乙」などを墨書したものが多くあり注目される。底部は平坦で中央部には鉄釉陶器の甕が口縁部まで埋められていた。また旧床面より10cmほど上で造り直された床面では、備前四耳壺、鉄釉陶器の四耳壺、唾壺、

またフジツボの付着した蛸壺などが据わった状態で検出され、その上に焼土が被っていた。江戸時代後半代には、瓦溜とした遺構や大型の土壙の中に主として焼け瓦と焼土で埋設されたものが数多くみられるようになる。火災による瓦礫の処理と土取りを兼ねた遺構とみられる。この種のもは、江戸時代前半にもみられるが数は少なく、後半に増加している。密集化した町屋地において火災の頻度が高かったことを物語るものである。

他に、形状の異なる大小の土壙、溝、倉の基礎とみられる方形の平面形を持つ溝状の遺構、小型の石組遺構、厠の埋甕、水琴窟とみられる底部中央に小穴を開け、逆位に埋設した陶器甕など、各種各様の遺構を検出している。

遺物 平安時代から近世、近代までの都市遺跡を形成した各時代の土層、遺構から、土器、陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、土製品他の各種の遺物が多量に出土した。また縄文時代や弥生時代の遺構からは土器、石器が出土している。遺物は、土器陶磁器類、瓦類などがコンテナで1850箱程出土しており、他に石材、木製材などの遺物も多い。

縄文土器は、黄褐色系泥砂質地山の下層に堆積する砂礫層から小片が出土した。文様などから形式的には北白川C式に属するとみられ、縄文時代中期末葉に比定される。遺構に伴う遺物ではないが、地山の堆積時期を考える重要な手がかりである。

弥生土器は、溝6～8、落込40～44など弥生時代に比定できる遺構や、新しい時期の遺構へ混入した形で出土している。凹線文を持つ各種の広口壺、長頸壺、高杯、器台、台付鉢、甕などの器形がみられ、壺、甕類が多数を占める。溝8から出土している甕は、畿内第V様式とみられるものも含まれているが、他は弥生時代中期後葉とされる第Ⅲ様式新相から第Ⅳ様式に属するものが主流である。石器類には、溝8から柳葉形の石鏃、他に石斧片などがあるが、出土数はごく少ない。

平安時代前半の遺物は、前期整地層下の窪地や井戸83から前期、井戸81下層、ピットからは中期前半の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器などがまとまって出土している。この時期の遺物は、新しい時期の遺構へ混入して出土する例も多い。

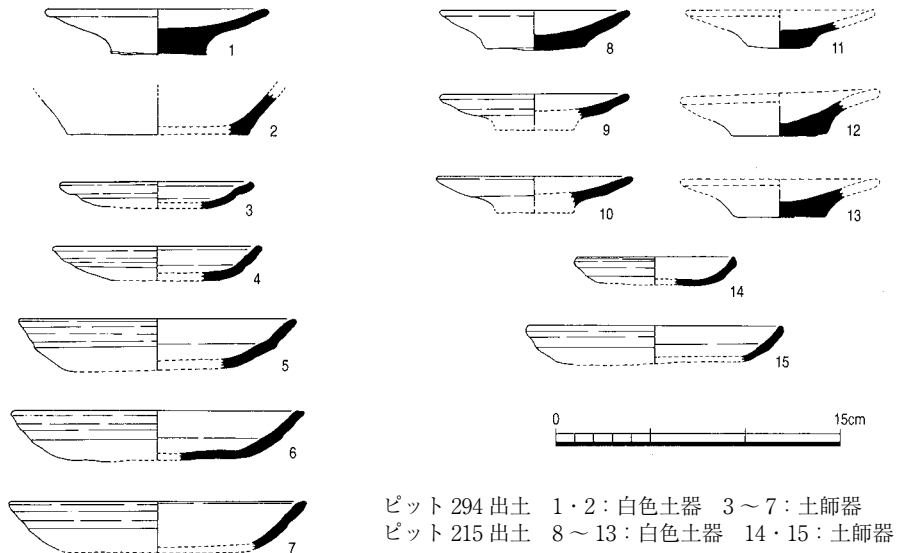
平安時代後半以降は、遺構数の増加に比例するように遺物の出土量は大きく増加する。出土量増大は、都市域の経済的発展を示していると思われる。土器、陶磁器類は、各時代を通じて、井戸、土壙、他の遺構から一括出土した形式的にまとまりのある良好な資料が多い。個体として希少なものや、セットに特徴があるものも多く含まれている。

図25にピット215・294から出土した土師器、白色土器を掲載した。ピット215出土の土師器皿は、型式はV期中に属し、鎌倉時代前半の13世紀前半に比定できる。ピット

294出土の土師器皿はⅣ期新の型式に属し、平安時代中期末葉の11世紀後半に比定できる。両遺構から出土した白色土器皿は、全てろくろ成形で糸切り底である。ピット215出土の白色土器皿は、本概要に掲載している洛北の南庄田瓦窯周辺から出土している白色土器に類品がみられる。また掲載したものに前後する時期の白色土器は、他の遺構からも出土している。

図26に掲載した輸入施釉陶器片は、調査区中央やや東寄りに位置する落込29下層とした平安時代中期後半の整地層から出土している。また同一個体片が調査区西辺の平安時代後期整地層からも出土している。この陶片は、隅丸の箱形（如意頭形の可能性もあり）を呈した陶枕の上面の破片とみられ、文様は細かい縞文様の練込手の粘土に象嵌した巧緻なものであり、その上に緑釉を施している。晩唐期のものとみられ、国内では類例を知らないが、上海博物館の藏品に類品がみられる。これは釉薬が異なり黄釉であるが、練込手の象嵌で類似した文様を施している。

小結 縄文土器片や弥生時代の遺構、遺物、平安京成立以後では平安時代から近代にわたる各時代の層、遺構、遺物などを数多く検出した。弥生時代の遺構、遺物の検出によって、烏丸綾小路遺跡北辺の様相の一端を明らかにすることができた。1982年に古代学協会が当調査地の南側隣接地で発掘調査を実施している。この調査の遺構・遺物の出土状況をもみても遺跡の中心地は南側隣接地にあるとみられる。当調査地の様相は、集落遺跡の周



ピット294出土 1・2：白色土器 3～7：土師器
 ピット215出土 8～13：白色土器 14・15：土師器

図25 ピット215・294出土土器実測図(1:4)

辺地として理解される。

今回の調査地では、左京域では遺存例の少ない平安時代前期の整地層や井戸、また中期前半の遺構などを確認することができた。平安時代後半以降も、遺構数が増加し、稠密となって行く様相が明らかとなった。遺物も、遺構数の変化に伴うように増大している。この遺構群と出土遺物の様相は、この地が平安京成立以降、現代まで常に都市域の中心地区に位置し、継続的に経済的文化的な発展を遂げたことを明確に示している。これらの発掘成果を整理できれば、京都の都市域の発展とその画期や各時代の様相がより詳細に明らかにできるものと考ええる。

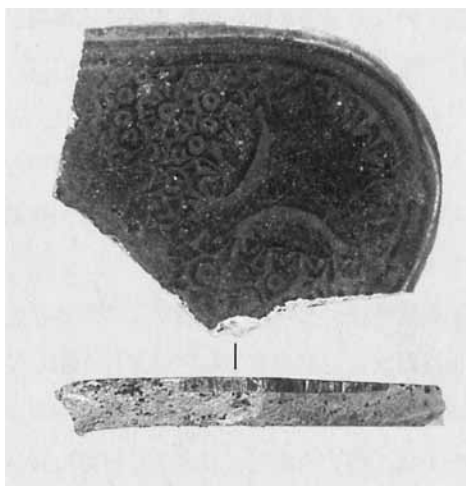


図 26 落込 26 出土の輸入陶磁器

(小森俊寛・上村憲章)

13 平安京左京四條四坊 (図版1・13)

経過 当地は平安京左京四條四坊五町にあたっており、昭和61年(1986)に同町で実施された発掘調査では平安時代前期の遺構や整地層が良好な状態で検出され、同様な成果が期待された。また、事前に行った試掘調査でも遺構の残存状況が良好であったため、発掘調査を実施することとなった。調査は敷地の北辺に南北11.5m×東西20.5mの調査区を設けて実施した。

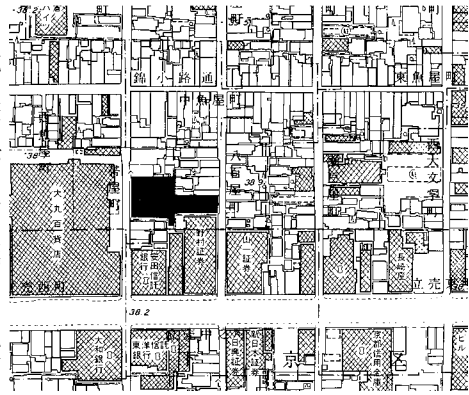


図27 調査位置図(1:5,000)

遺構 検出した遺構には古墳時代の自然流路、平安時代中期の土壌・整地層、平安時代後期から鎌倉時代の井戸(S E 121・289)・土壙・柱穴、桃山時代から江戸時代の井戸・土壙・柱穴・溝・石室・木棺墓などがある。遺構の大半は桃山時代から江戸時代の土取穴を含む土壙である。平安時代後期から鎌倉時代の柱穴を多く検出したが、建物としてまとめることはできなかった。調査区の西辺に高倉小路の東築地心が通ることが想定されたが、側溝などの施設は検出できなかった。ただ、高倉小路の路面にあたる部分から、須恵器の壺を正置して埋納した土壙(S K 341)を検出している。

遺物 遺物整理箱にして113箱分の遺物が出土している。古墳時代から江戸時代までの遺物が出土しているが、大半の遺物は桃山時代から江戸時代の国産陶磁器類で、織部・唐津・黄瀬戸などの茶陶類が比較的豊富に出土している。特筆すべき遺物としては唐三彩の陶枕、長沙銅官窯系の褐釉水注の破片があり、平安時代後期の整地層と土壙から出土している。

小結 調査地は古墳時代には自然流路の上に立地しており、古墳時代前期と後期の遺物が出土している。この流路を埋めるような形で平安時代前期から中期に整地がなされているが、遺構の密度はそれほどでもない。平安時代後期から鎌倉時代になると土壙・井戸・柱穴などが多数検出され、宅地として利用されたと思われる。室町時代の遺物が若干出土するが、明確な遺構はない。桃山時代から江戸時代にかけて、土取穴と思われる土壙があり、一時期は空地であったが、再び井戸・土壙・柱穴などが多数検出されるようになる。

(木下保明)

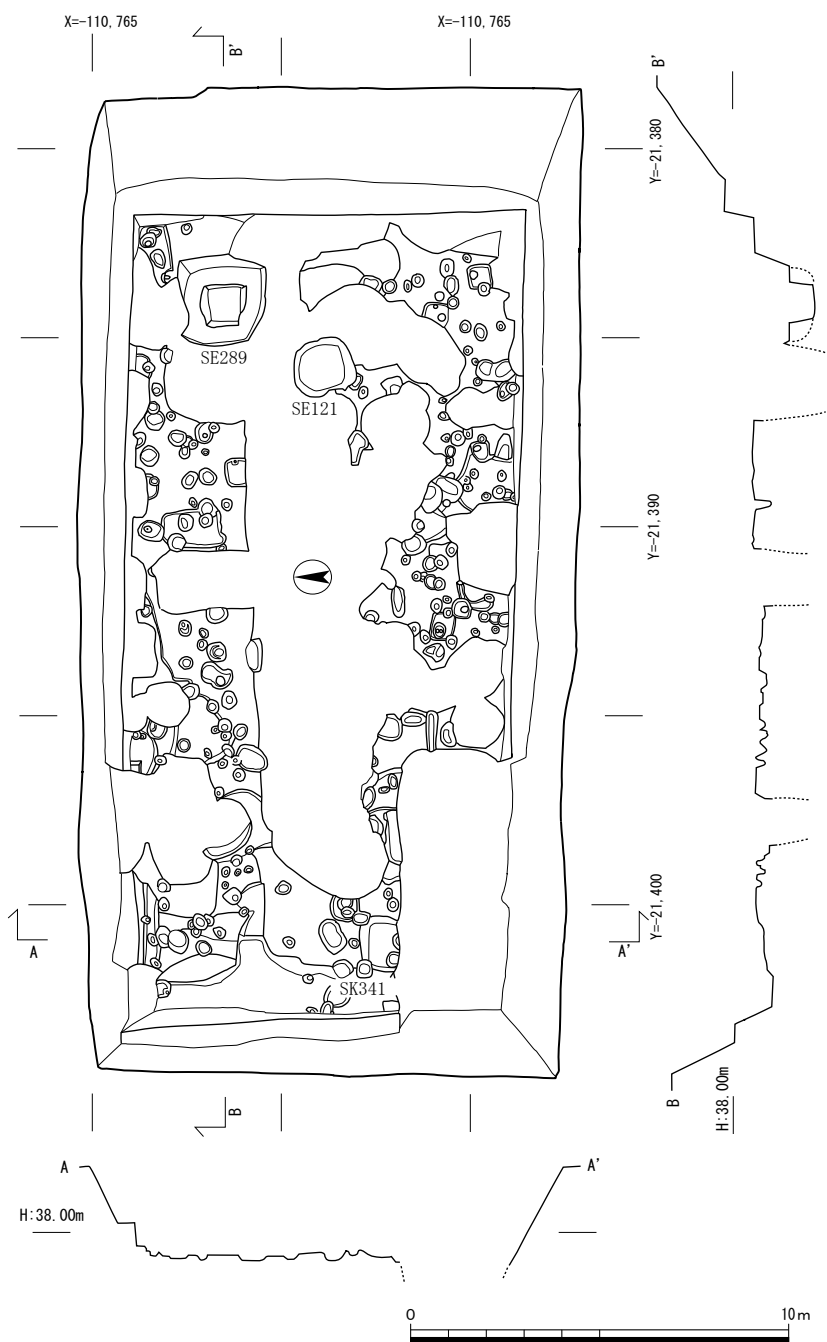


図28 遺構実測図 (1:200)

14 平安京左京六条四坊 (図版1・14)

経過 当調査地は左京六条四坊一町の中央、北辺に位置し、敷地北端部は五条大路南側溝の比定地を含んでいる。当地にマンション建設の計画が上がり、試掘調査が予定されていた。ところが、その日時に担当者が現地に向いたところ、すでに工事が開始されており、敷地全域にH鋼が打たれ、南半部は地山面まで完全に削平されていた。急遽、建設業者に対して工事の中断を申し入れると共に、京都市埋蔵文化財調査センターに連絡、協議を経て、緊急発掘調査を行うことになった。

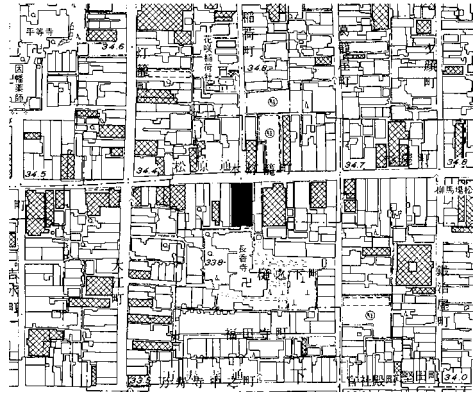


図29 調査位置図 (1:5,000)

すでに掘削されていた南半部の状況を観察したところ、井戸など深く掘り込まれた遺構の痕跡が一部に確認できたものの、地山面より上部の遺構及び土層は完全に破壊された状態であった。そのため、散乱していた遺物を採集した後、残存している北半部に東西約18 m、南北14 mの調査区を設定し、発掘調査を行った。

その結果、平安時代から江戸時代にわたる多数の遺構、遺物を検出したが、推定されていた五条大路南側溝は調査区内では検出できなかった。

遺構・遺物 検出した遺構は総数361基で、各時代を通じて密度は高いが、中でも桃山時代以降のものが非常に多く、全体の半数以上を占める。平安時代の主要な遺構としては、溝S D 280、S D 290、井戸S E 106などがある。S D 280、S D 290は共に南北方向の溝で、一町地東西のほぼ中央に位置している。溝内の堆積土中には土師器など多量の土器類が含まれていた。S E 106の掘形は方形で、方形縦板組みの井戸と思われるが、部材の残存状態が悪く、詳細は明らかではない。その他小規模な柱穴などを多数検出したが、相互の関連は不明である。出土遺物の大半は土器類で、各時代とも土師器が多数を占める。平安時代のものは溝S D 280、S D 290から多量に出土している。鎌倉、室町時代の遺物の総量は比較的少なく、主に井戸などから出土している。量的には桃山時代以降の遺物が最も多く、全体の半数以上を占める。

小結 調査地は平安時代後期以降、主要街路として機能した烏丸小路に近く、周辺には五条院などの邸宅推定地が点在する。また中近世を通じて京の中心として繁栄した地域に

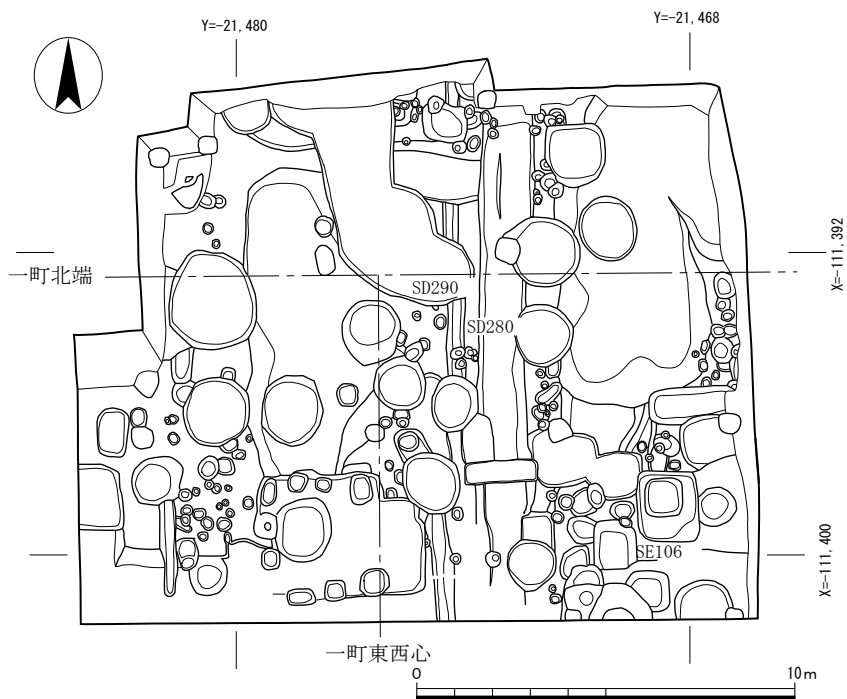


図30 遺構平面図 (1:200)

含まれている。これまでの近隣の調査でも各時期の豊富な遺構、遺物が検出されていることは、この地域の歴史的状況を反映したものと見えよう。こうした地域において、発掘調査を経ずに工事が開始されるといった事態が生じたのは非常に残念なことである。調査対象地の約50%がすでに機械掘削によって破壊されていた。残存部の調査結果からみて、多くの遺構、遺物が失われてしまったことは明らかである。

この原因について京都市埋蔵文化財調査センターの経過点検によれば、建設業者は試掘の指導を受け、それを確認していたが、実際に掘削を担当した下請け業者への連絡に不備があったとのことであった。今回の事故は非常に特殊な事例であり、頻繁に起き得ることではなからうが、試掘の日程が更に数日後に設定されていたならば、調査対象地全体が完全に破壊されていたことは間違いない。今後このような事故が再び生じることのないよう、確認体制を強化する必要があるものとする。

(平尾政幸)

15 平安京左京九条二坊 (図版1・15・16)

経過 調査地は、京都市南区西九条南小路町1で、京都市立九条中学校の構内にあたり、東寺の東に位置する。当地は、平安京左京九条二坊三町に推定され、信濃小路の北築地・側溝の検出が予想された。6月に実施した校舎の改築予定地の試掘調査で遺構を多数検出したため、校舎の解体を待ち、9月から発掘調査を行った。

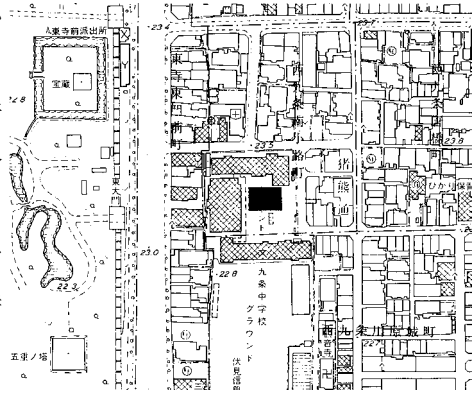


図31 調査位置図 (1:5,000)

調査で路面・溝・土壇・井戸・柱穴など、鎌倉時代後半から室町時代を中心に各種の遺構が検出された。中世の遺構は良好に残っていたが、信濃小路など平安時代の遺構は検出できなかった。

層・遺構 調査地点の基本的な層序は、第1層が学校建設に伴う整地層で約0.6m前後堆積する。第2層は褐灰色泥砂層(7.5YR4/1)でトレンチ全面に堆積していたが、南東部の一部ではこの土層の上に、にぶい赤褐色泥砂層(5YR5/3)が堆積していた。第2層は旧耕作土層である。第3層は灰色泥砂層(5Y4/1)で約0.2m堆積していた。遺構検出はこの面で行い、第3層の上面で検出した遺構を上層遺構とし、この層を掘り下げた段階で検出した遺構を下層遺構とした。第4層は黄灰色泥土層(2.5Y4/1)と灰オリーブ色泥砂層(7.5Y5/2)が混ざった土層で、トレンチの北部に堆積していた。地山はトレンチの東部では標高が高く、第5層の礫・泥砂・粘土の互層が露出していた。トレンチの南部は、暗オリーブ色泥土層(7.5Y4/3)と暗灰黄色泥砂層(2.5Y4/2)の混在した土層である。

遺構は、総数1000基前後検出した。平安時代から近世までの各時代の遺構を検出したが、中心は室町時代で、その他の時代の遺構は少ない。以下、主要なものを時代別に述べるが、各遺構の出土遺物の検討が不十分なため、遺構の説明は一括して行う。

近世の遺構には、土壇・井戸がある。土壇はトレンチの南東部でSK8・9・220・250を、北東部でSK12を検出した。SK8・9・220・250は、径が1.6～1.8mの円形で、深さは0.3m前後、掘形は垂直で底は平坦である。SK8には側板の木質が残り、桶の痕跡と推定できる。SK9・220・250も形態・規模から、桶を設置した土壇と推定でき、肥料用の肥溜めの用途が考えられ、同一場所に継起的に作られている。SE3は径1.2m、

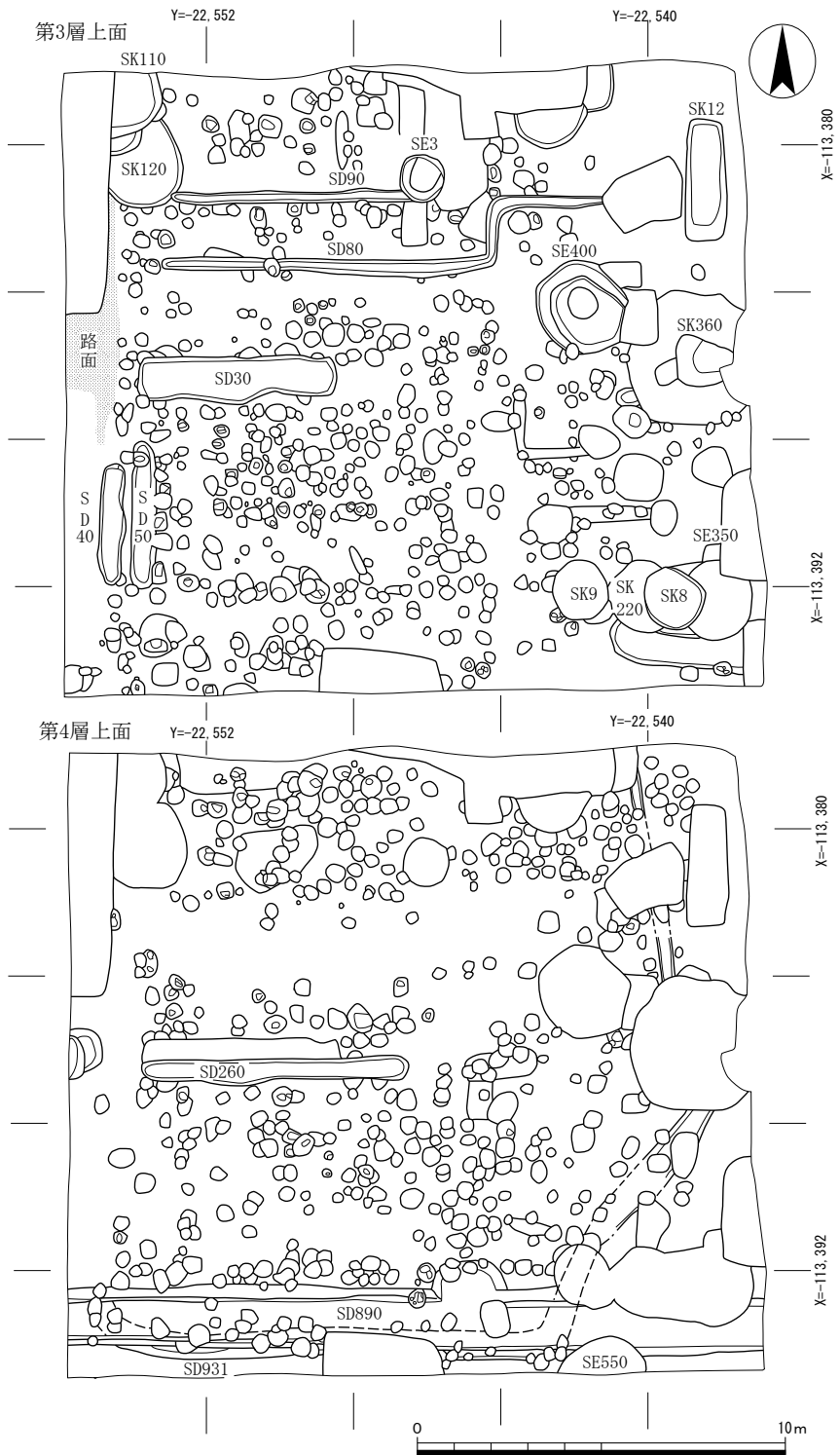


図32 遺構平面図 (1:200)

深さ1.3 mの井戸で、底に瓦製の井戸枠が一段分残る。

中世の遺構は、トレンチの全域で検出した。路面・溝・土壙・井戸・柱穴などがある。路面はトレンチの西端で検出した。東西幅は約1.2 mで、南北方向に8 m程度残る。構造は1～5 cmの小石を薄く敷きつめていた。路面の東には平行する南北溝S D 40・50がある。北部には路面の東から始まる東西溝S D 80・90がある。S D 80はクランク状に曲がり、延長12 mを検出した。S D 90はS D 80と平行し、その間隔は1.8 mある。S D 80・90の南には平行する溝S D 30・260がある。この溝は切合いがあり、S D 260を切ってS D 30が作られる。S D 30内には石・瓦などがつまる。トレンチの南端で検出した東西溝S D 890は、幅1.7 m前後、深さ0.3 m、埋土は黒褐色砂泥層で、室町時代の遺物が出土した。位置的に信濃小路の北側溝にあたるが、平安時代まではさかのぼらない。

土壙にはS K 100・360・420・500などがある。S K 100からは土師器「へそ皿」などが多く出土した。S K 360は径3.5 m前後の大規模な土壙で、1.5 mと深く、池状の埋土が堆積していたが、特徴的な遺物は出土しなかった。井戸は3基検出した。S E 350は掘形の径1.3 m、中に径0.5 mの曲物を据える。S E 400は掘形の径2.5 mと大きく、中心に径0.8 m、高さ0.6 mの桶を2段据え井戸枠としていた。S E 550はトレンチ南東部で検出したが、大半がトレンチ外で規模、構造などは不明である。

約850基検出した柱穴は、Y=-22,544～-22,553 mの9 m間に集中し、東西方向に8列ないし9列の並びがあるが、切合いが激しく、建物の復原はできていない。柱穴は瓦・石などの礎石を持つものが比較的多く、深さも0.4 m前後の深いものがある。

平安時代の遺構は北東から南西方向に湾曲する溝S D 931で前期末の須恵器が出土した。

遺物 土器類85箱、瓦類が10箱出土した。年代は平安時代前期から近世までの各時期の遺物を含むが、大半は室町時代の遺物である。S K 100・420・500などの土壙からは土師器を中心にややまとまった遺物が出土したが、大規模な土器溜はなく、溝・柱穴・包含層から出土しており、細片のものが多い。

土器類には、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・国産陶器・輸入陶磁器・近世陶磁器などがある。その他の遺物には土錘、北宋銭、瓦当、甗などがある。瓦当は、巴文・蓮華文軒丸瓦、唐草文・剣頭文軒平瓦など合計8点^{註1}が出土した。

小結 中世の遺構を中心にまとめとしたい。周辺地域では東寺境内、左京九条二坊四町^{註1}で調査が行われている。東寺境内では、中世の良好な遺構は検出されていない。南に隣接

する四町の調査では近世の遺構が中心で、敷地全体が低湿地の状況を呈している。

調査地点の室町時代の遺構配置は、西部に南北方向の路面と区画溝があり、その東には建物がある。更に東には井戸・土壙があり、路面、建物、井戸・土壙がセットの遺構配置となる。南北方向の路面は平安京の四行八門制の西二行と三行を区画する道路にあたり、区画に接して宅地があり、その奥は井戸・土壙などの空間、更に東には宅地空間が予想される。このように南北方向の区画は四行八門制と合うが、東西方向の区画は、一時期SD890を信濃小路の延長線上に掘削するが短期間で埋め、宅地空間に戻しているなど、道路部分を侵食して宅地化されている。

当該地は東寺に近接することから、東寺百合文書・教王護国寺文書に関係文書を散見することができる。それらによると、東寺周辺の八条大路以南から九条大路以北、東は堀川小路、西は朱雀大路までの領域内の道路は大巷所などと呼ばれ、水田・畠・宅地などに利用され、巷所として東寺の領地となった。応永十一年（1404）の「巷所坪付并地子銭注進^{註3}状」には、信乃（濃）小路与九条間猪熊面など隣接する道路の大半が巷所として書き上げられているが、「猪熊与大宮間信濃小路面^{註2}」との記載はない。応永十八年（1411）の「南小路散所法師所役条々請文案^{註4}」には南小路（信濃小路）の散所法師に東寺の掃除などの所役が課せられており、信濃小路が巷所になり、宅地化されていることが確認できる。更に、永享七年（1435）の「妙見寺指図^{註5}」には三町の西三条六～八戸主、西四条六～八戸主部分に東寺領号中在家散所法師住宅と書き込まれている。更に、文明十五年（1483）の「巷所指図^{註6}」には南小路散所村と信濃小路に書かれており、調査地の信濃小路部分と宅地の西三条八戸主が共に散所の宅地であったことがわかる。

先に述べたように平安時代の信濃小路に関係した遺構は未検出であり、当該地の開発が室町時代を中心とするのは明らかである。土地条件の悪かった当地を鎌倉時代末から室町時代にかけて開発し、散所の宅地としたことが推定される。その後、遺構は15世紀末までは継続するが16世紀には衰退したことが遺物から判断できる。

最後に、東寺領巷所に関連した文書については、京都府総合資料館の黒川直則・池田好信の両氏から御教示を受けた。（百瀬正恒）

註1 吉村正親「平安京・左京九条二坊跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978 - I
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978

註2 中村 研「東寺領巷所の存在形態」『社会科学』10 同志社大学人文科学研究会 1968

註3 「教王護国寺文書」3巻823

註4 「東寺百合文書」の函33

註5 「教王護国寺文書」絵図11

註6 「教王護国寺文書」絵図18

16 平安京右京一条四坊（図版1）

経過 右京区花園寺ノ内町、J R花園駅構内の敷地 170㎡で、道路建設に伴う発掘調査を実施した。調査地は平安京右京一条四坊十三町、西京極大路東側溝跡に比定されている。調査は 8×8 m、約 64㎡の調査区を設定して実施し、期間は、平成 2 年（1990）3 月 13 日から 4 月 2 日にかけて延べ 12 日間を要した。

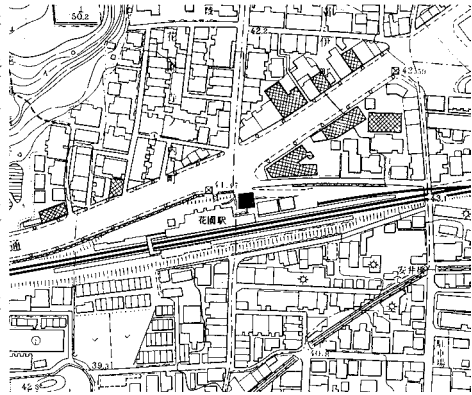


図 33 調査位置図（1：5,000）

遺構 調査区は花園駅建設時の盛土が地表下 2.7 m まで続き、以下 1.5 m まで泥土・砂の堆積土層によって覆われる。この堆積土層は、上層が近世に属し、下層は 11 世紀半ばの土器、瓦を含んでおり、平安時代後期に属していることを確認した。ベースは固く締まった灰白色砂礫層である。調査区中央で南北方向の溝（SD1）を検出した。幅 50cm、深さ 30cm を測り、杭による護岸施設を伴う。成立面は最下層よりやや上層である。

遺物 出土遺物は平安時代後期に属する土師器皿、須恵器鉢・甕、輸入白磁椀、瓦などがある。他に溝を護岸した杭があるが、時期は平安時代後期以降と考えられる。出土土器類は、黒褐色粘土層を中心にした土層から出土したものが多数を占め、上・下層ともにほとんど時期差がなく 11 世紀半ばの時期に収まる。

小結 J R花園駅周辺では、過去の調査事例^{註1}からも広範囲な広がりを持つ湿地か池の存在が確認されている。本調査区でも、鉄道建設時の盛土層以下にみられる濃灰色腐植土層からベースまで層厚 1.5 m に達する湿地状堆積土層を検出している。ただこの堆積は一様ではなく、薄い砂礫層や泥土層が互層となって堆積する。各土層から出土する土器類の年代は 11 世紀半ばを示しており、大きな時期幅を認めることはできない。11 世紀前半から半ばにかけて、比較的短期間に泥土層→砂礫層→腐植土層と変化した堆積状況が観察される。

J R花園駅一帯は、現妙心寺の位置する微高地の地区を挟み、東側を宇多川、西側を西ノ川がやや西方に振れながら南流する。しかし現在の宇多川は、J R花園駅東部で極めて不自然に河道が屈曲しており、流路の変動したことを示唆している。西ノ川も遷都以前

は一条大路末から現妙心寺の西側を南下、J R花園駅東端付近に至っていたことが判明している。^{註2}このことから、8世紀末の平安京造営時に、上記2河川の河道の付け替えが行われたことが考えられよう。西ノ川を一条大路末からやや西遷させ、西京極大路沿いを南下し、双ヶ岡二ノ丘と五位山の間を南流させる。宇多川は一条大路から木辻大路を南下し、やや西南流して中御門大路に至り、更に西流して西

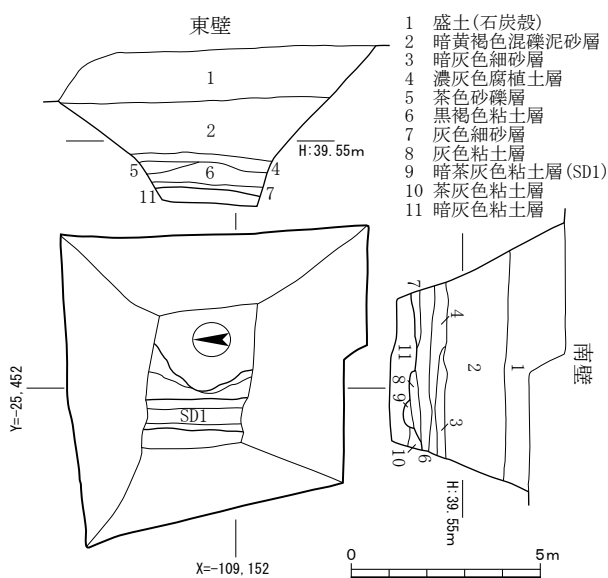


図34 遺構実測図 (1:200)

京極大路から御室川に合流する。^{註3}しかし、11世紀代に水量の増加もしくは氾濫（西ノ川を中心に）を繰り返したため、一時的に旧河道が復活し、増加した水流がJ R花園駅東端付近に流れ込んだことが考えられる。この後、11世紀後半以降に河道が安定し、水量の減少と共に泥土の埋積に移ったとみられよう。このことが、中世から近世、近代に至っても周辺一帯が池や湿地の景観を残した淵源とできる。(平田 泰)

註1 杉山信三「法金剛院発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会 1969
杉山信三「法金剛院の地下遺構の調査」『史迹と美術』第478・479号 史迹と美術同致会 1977
平田 泰「右京北辺四坊・一条四坊・妙心寺境内」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985

註2 平田 泰「平安京右京北辺四坊・一条四坊・法金剛院・四円寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987

註3 研究所は平成4年度「花園小学校屋内体操場改築に伴う発掘調査」を実施し、西流した痕跡を示す中御門大路の大規模な北側溝を検出した。同じく平成2・3年度「山陰線高架に伴う発掘調査」では木辻大路、菖蒲小路、山小路、無差小路の各調査を実施したが、木辻大路を除く菖蒲小路以西では道路と側溝の区分が不明瞭で、道路全体が流路に転化した痕跡を認めた。

17 平安京右京二条四坊 (図版1・17)

経過 この調査は、右京区太秦安井西沢町他での道路改築工事に伴い実施した。調査地は、平安京二条四坊十三・十四町に属し、東は無差小路、西は西京極大路、北は大炊御門大路、南は二条大路に囲まれた宅地の東端部に位置する。当該地は、『拾芥抄』西京図では右兵衛領にあたり、対象範囲内には二条大路や冷泉小路も推定される。また二条大路以南の調査では、古墳時代の遺跡が確認されており、関連する遺構の存在が予想された。それらの実体と状況を明らかにすることを主目的として、幅35mの規模の調査区を7箇所設定し、調査を実施した。

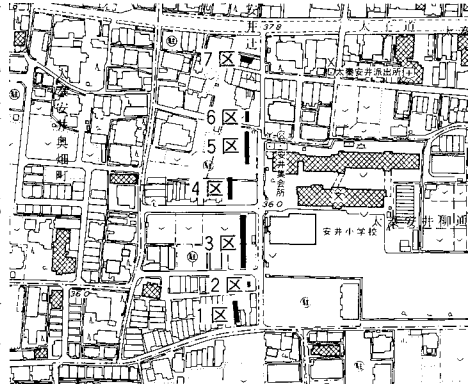


図35 調査位置図 (1:5,000)

り、関連する遺構の存在が予想された。それらの実体と状況を明らかにすることを主目的として、幅35mの規模の調査区を7箇所設定し、調査を実施した。

層位・遺構 調査区内の基本層序は、現地表下に厚さ20cmの現代整地土、厚さ15～20cmの耕作土、厚さ10cmの床土がいずれの調査区でも確認できた。それ以下は各々異なる。1・2区及び3区の南半では、黒色泥土層が堆積し、南方向で徐々に厚くなる。層中に木の葉や枝などの自然遺物が確認されることから、窪みに自然堆積したものと考えられる。また6・7区では厚さ10～15cmの遺物包含層がみられ、室町時代以降の遺構はこれらの上面から検出され、平安時代以前及び平安時代から鎌倉時代の遺構は、それより下の灰白色砂泥層上面で確認された。3区北半及び4・5区では、この黒色泥土層や遺物包含層はなく、すぐに灰白色砂泥となる。

検出した遺構は、総数44基を数える。時期別では平安時代以前、平安時代から鎌倉時代、室町時代以降のものに分けられるが、室町時代以降のものは、耕作に伴う南北・東西方向の小溝群がほとんどを占める。以下主要なものについて概略を記す。

平安時代以前のは、3～5・7区で認められた。その主要なものは動物の足跡と考えられる小さな窪み群である。それらは牛のような大型のものから人間と考えられるやや小型のものまで数種類あるが、いずれも重複が著しく、残存状態が悪いため判別しにくい。窪み群は3区では3条、4区では2条の帯条を呈し、5区では南端部に密集している。移動の方向は、4区がほぼ東西方向であるのに対し、それ以外は北東から南西方向に横切る。窪み内には黒色泥土が堆積しているが、遺物は出土していない。そのため年代は限定でき

ないが、平安時代の遺構に切られていることから、同時期もしくはそれ以前の遺構と理解している。なお7区の西北隅で古墳時代の土壇状遺構を1基確認したが、一部分であるため性格は不明である。

平安時代の主要な遺構群には、6区で確認した東西溝2条と東西方向の柱

穴列がある。溝は、いずれも幅70～80cm、深さ20～30cmの浅いもので、重複している。柱穴列は、東西溝から心々で2.4m離れた位置にあり、径は60～65cm、深さは50～80cmを測る。調査区内では1間分を確認しただけであるが、東側の柱穴は、2基が重複していることから、造り替えの可能性がある。これらは冷泉小路北側溝及び築地に関連するものと考えられる。なお、5区の北端に推定される南側溝と築地は検出されなかった。これは5区の遺構検出面が、北側溝の底部より低い位置にあることから、包含層や遺構面が鎌倉時代以降に大きく削平されたためと考えられる。なお十三・十四町の宅地部では、平安時代に属する明瞭な遺構は検出されなかった。

平安時代末から鎌倉時代の遺構は、6・7区で認められた。6区では平安時代の冷泉小路北側溝から南に70cmの所に幅40cm以上、深さ20cm以上を測る溝状遺構が1条認められた。位置関係からみて、この時期の北側溝の可能性もある。この遺構に合流すると考えられる南北溝が、調査区東端に1条あり、幅80cm、深さ10～20cmを測る。7区では東半部で規模の大きな土壇の肩の一部が確認された。

遺物 遺物は整理箱に6箱出土した。調査面積に比べて、出土量は少ない。時期は古墳時代から江戸時代と多岐にわたる。遺物の内訳は、平安時代末から鎌倉時代のものが多数を占め、これらは3・6・7区からまとまって出土するが、いずれも小破片である。平安時代、室町時代、江戸時代と次いで、古墳時代のものが最も少ない。

平安時代の遺物は、1区の二条大路北側溝推定地や6区の冷泉小路北側溝で顕著に認められる。ただ両者の遺物構成は異なり、前者が平安時代前期の瓦が目立つのに対し、後者は土師器や黒色土器の食膳具が主要なものとなる。

平安時代末から鎌倉時代のもは、土器・陶磁器で占められ13世紀後半から14世紀前半にかけての土師器皿を中心とする食膳具が圧倒的多数を占める。次いで輸入陶磁器が一

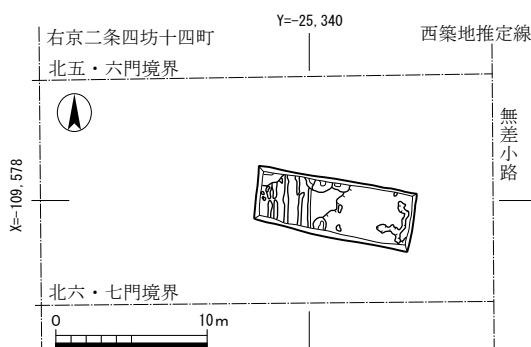


図36 7区遺構配置図 (1:500)

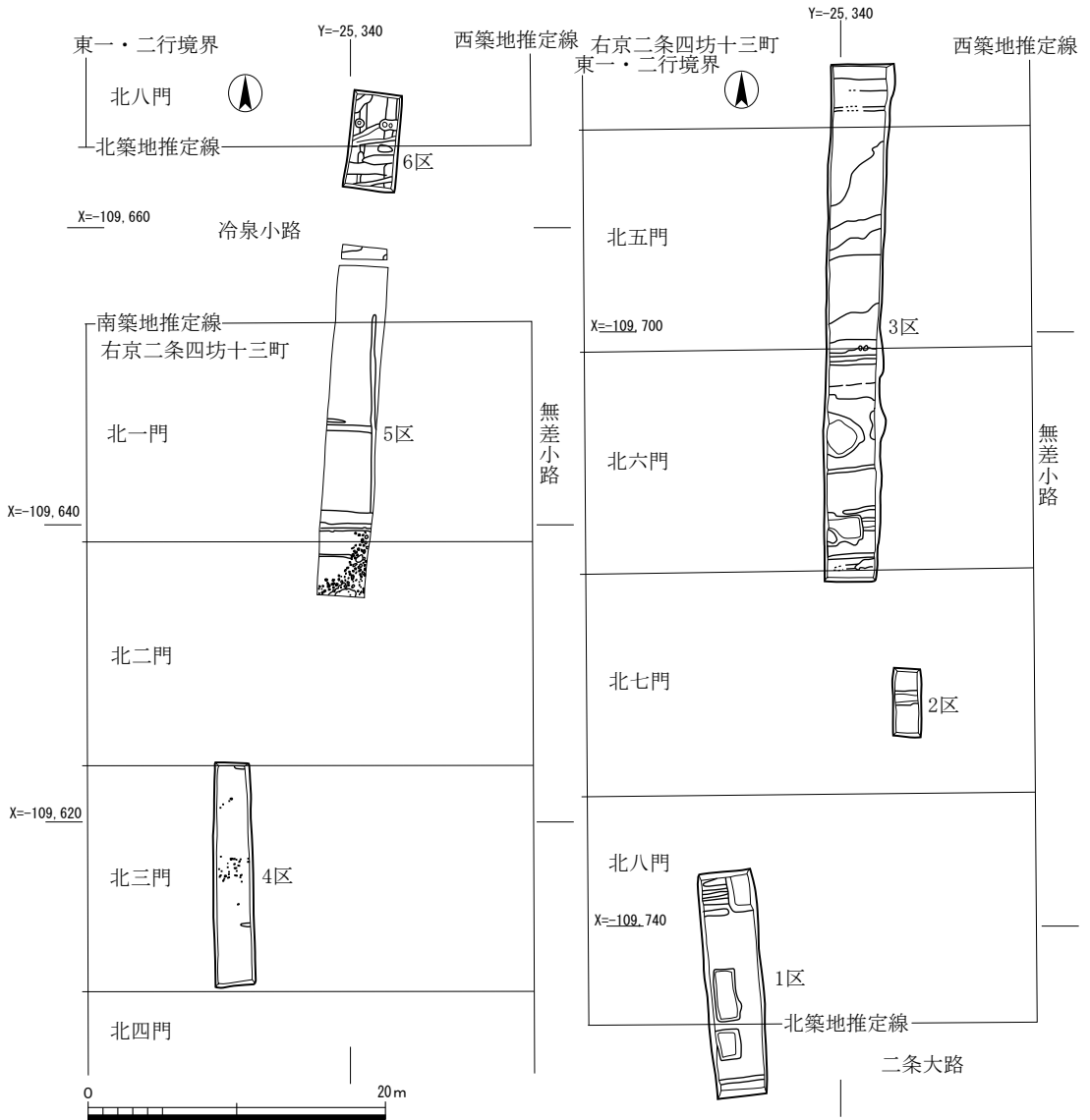


図37 1～6区遺構配置図 (1:500)

定の割合であり、内訳は白磁、青磁、褐釉などがある。

室町時代以降のものは、土師器皿が圧倒的多数を占めるが、その他には明末期の染付や唐津、美濃、伊万里染付などの国産陶磁器類がある。

小結 二条大路北側溝や築地、宅地内の関連遺構については確認できなかったが、冷泉小路や十四町内で平安時代から鎌倉時代の遺構群を確認した。これは文献にみられる右兵衛領と関連するものと言えよう。また足跡状の遺構を発見したことから、当該地周辺に平安時代以前の遺跡の存在が期待される。

(堀内明博)

18 平安京右京三条一坊 (図版1・18)

経過 この調査は、中京区西ノ京梅尾町他で二条駅地区土地区画整理事業に伴い実施した。調査地は右京三条一坊二町の東南部に位置し、対象地の南端部には三条坊門小路の推定範囲を含む。また北端では北五・六門の境が、西端では東三・四行の境が推定されることから、これらの推定位置も含んで調査区を設置した。

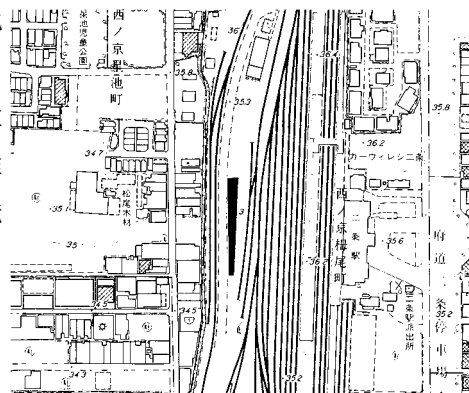


図 38 調査位置図 (1:5,000)

当該地は平安時代に畿内諸庄の産物を納め

ていた穀倉院が存在した所であり、しかもこの周辺は弥生時代から古墳時代の遺物散布地である壬生遺跡にもあたることから、これらに関連する遺構・遺物の存在が予想された。

調査対象地内は、現在も貨物の引込み線として使用されていることなども考慮し、調査区は南北に細長く設定した。まず機械力により江戸時代以降の整地土及び旧耕作土を除去した後、調査を開始した。

層位・遺構 調査区内の基本層序は、現地表下に厚さ70～90cmの二条駅建設時の整地土、厚さ20～40cmの旧耕作土、厚さ10cmの床土があり、それ以下は、にぶい黄褐色砂泥層と砂礫層になる。この層の上面で、平安時代以前、平安時代、室町時代から江戸時代の3期に大別できる遺構群を検出した。確認した遺構総数は102基である。そのうち平安時代以前のものは、北東から南西方向に流れる流路だけであり、室町時代以降のものは南北・東西方向の小溝群と東西柵列1条があるに過ぎない。以下平安時代の主要なものについて概述する。

平安時代前期のものは、調査区全域で認められた。三条坊門小路推定位置では、道路に関連した遺構群を確認した。小路の北側溝に相当する東西溝は、幅1.2m、深さ0.15mを測り、断面凹状を呈する浅いものである。この規模は『延喜式』記載の小路側溝に比べやや幅が広い。溝の北肩から北に2.5m離れて東西溝が1条あり、幅3.0m、深さ0.25mを測り、断面逆台形を呈している。溝の堆積層からは、まとめて遺物が出土している。この溝間には築地の痕跡や柱穴列は認められなかったが、両溝間は2.5mと『延喜式』所載の築地規模と犬走を合わせた数値に一致することや、平安京条坊復原による築地推定位置とほぼ

合致することから、これらの遺構は三条坊門小路北側溝と築地内溝と考えられる。路面部には礫敷きなどの整地層はみられず、平坦でその標高が宅地内より20cm前後下がっていることから、北側宅地部に比べて路面部が低く造られていることが明らかになった。一方小路南側溝想定位置には東西溝は見当たらず、北西から南東に向かう幅1.2m、深さ0.1mの浅い溝状遺構があるに過ぎない。そのすぐ南には幅3m以上を測る大規模な土壙状遺構があり、築地や柱列などの施設は認められなかった。また宅地部は東三・四行境界を中心に北六門から八門に及ぶ範囲を占めるが、北六門内にやや規模の大きな落込と、北東から南西に向かう幅2.0m、深さ0.2mの浅い流路を1条確認しただけで、宅地内を更に細かく区画するような施設は認められなかった。

平安時代後期のものは、三条坊門小路に関するものだけである。北側溝は前期の溝より南に位置する。幅1.2m、深さ0.2mを測り、断面逆台形を呈する。築地内溝は平安時代前期のものと同位置にあり、幅0.7m、深さ0.1mを測る。両溝間は幅5mと前期に比べて倍に拡大されているが、築地や柱穴列は認められなかった。路面部には、瓦と礫を含む

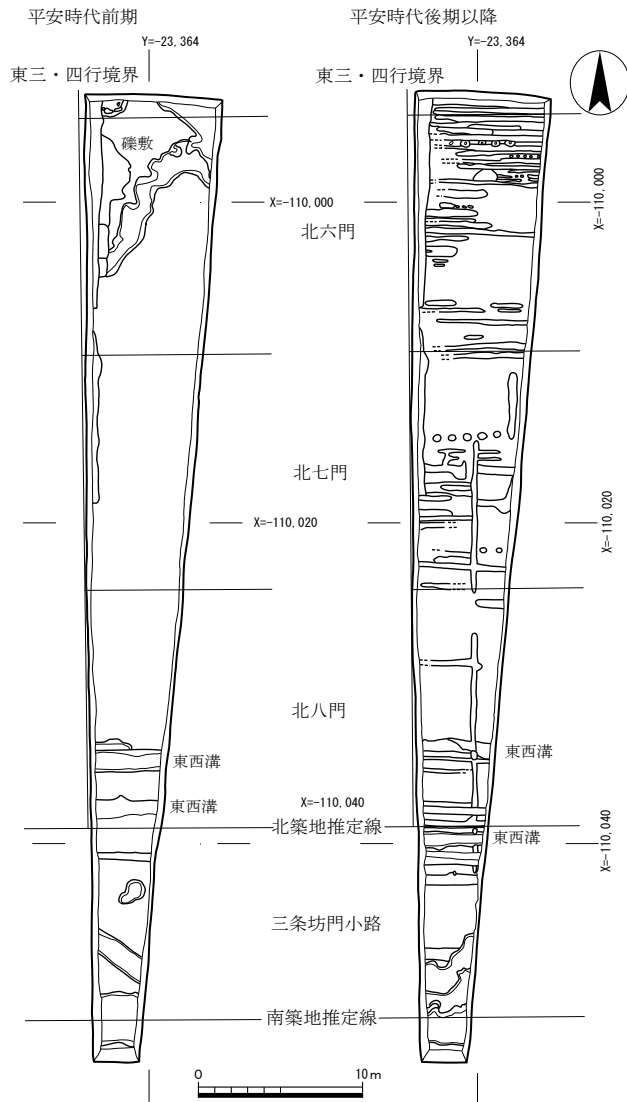


図39 遺構配置図 (1:400)

整地層がみられ、路面の標高は北側宅地内とほぼ同じになっている。南側溝推定位置には、この時期も東西溝は認められず、北東から南西に向かう大規模な流路と考えられる遺構の肩部を一部確認した。遺構の埋土中からは、平安時代前期から後期の瓦が多量に出土した。

遺物 遺物は整理箱で92箱出土した。その時期は、古墳時代から江戸時代まで広範囲に及ぶが、平安時代前期のものが圧倒的多数を占め、次いで江戸時代のものとなる。平安時代前期の遺物の内訳では、瓦類が半数以上を占め、その比率の高さが注目される。

平安時代前期のものは、三条坊門小路及び、それに接した宅地部分で顕著に認められる。瓦類には豊楽院出土と同範の緑釉軒丸瓦や「右坊」銘のある平瓦、藤原宮式の軒丸瓦などが含まれる。また土器類は、小路築地内溝から集中して出土し、9世紀前半の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、円面硯などが認められる。これ以外にも平安時代前期の遺物は出土するが、いずれも小片、少量である。なお小路北側溝の北肩付近から馬の下顎の一部が出土した。

平安時代後期のものは、前期と同様に小路を含んだ周辺で主に出土し、その大部分が瓦類で占められ、それ以外は土師器の小片が認められるだけである。

室町時代以降の遺物は小溝から出土し、土師器、伊万里磁器、京焼風陶器、焼締陶器の鉢・徳利などの小破片である。

小結 平安時代前期と後期の三条坊門小路に関連する遺構群を確認したことから、その変遷の一端をうかがうことができた。従来、周辺で良好な平安時代の遺構群が認められなかったことから、当該地における遺構の存在について疑問視する向きもあった。しかしながら今回の調査により、小路が平安時代後期まで存続したことが判明し、しかも搬入瓦及び「右坊」銘などの文字瓦を含む多量の瓦や円面硯の出土は、官衙などの公的施設をうかがわせ、文献所載の「穀倉院」に関連する遺構が近辺に存在することが予想される。ただ今回の調査範囲の宅地内では建物などの施設は確認されていないことや、三条坊門小路の南北両側の築地・側溝のあり方が何故異なるかなど、新たな課題も見いだされ、今後の調査での更なる検討が必要となった。 (堀内明博)

19 平安京右京三条二坊1 (図版1・19)

経過 社屋新築工事に伴い事前に試掘調査が行われ、池を示す土層が検出された。この池は、道を挟んで北接する昭和61年度の調査で検出した、園池の一部と考えられる池状遺構に続くものと想定できたため発掘調査を実施する運びとなった。調査地点は、平安京右京三条二坊八町の南東部に該当する。当該地は、弥生時代から古墳時代の遺跡として周知される西ノ京遺跡にも含まれている。

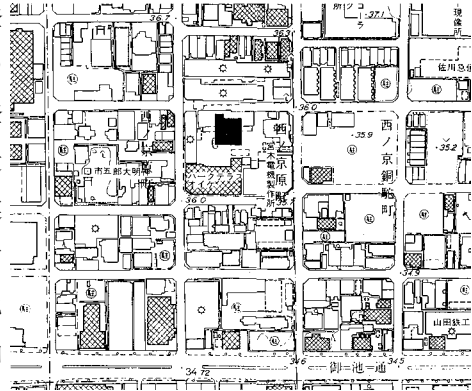


図40 調査位置図(1:5,000)

調査区は社屋建設予定地区内ほぼ全域に東西20m、南北18mの区画を設定したが、更に遺跡範囲を確認する目的から、調査区北西部に東西7m、南北3mの拡張区を設けた。

遺構 調査区内の基本層序は現地地表下約0.6mまでは近代以降の耕作土層が堆積する。この土層を除去すると北東部に無遺物層(明オリープ灰色粘土・にぶい黄色粘土層)が露出するが、他は鎌倉時代以降の耕作土層となり、その下層に池の土層が堆積する。

陸部である北東部については近代以降に上記無遺物層に対し土取りが行われたため、壊滅的な削平を受け遺存状態はきわめて悪く、池の肩口は一部を検出したにとどまる。平安時代の遺構には池・柱穴列・溝などがある。鎌倉時代・室町時代には耕作地として利用されており耕作に伴う溝を複数検出した。

池の堆積土層は、調査区の北東部を除く全域で検出している。当初、肩口の形状や堆積土層から平面形が鉤形を呈する一つの池を想定して調査を進めたが、調査の進行に従って池が2時期に分かれることが明らかになった。調査区西寄りでは南北方向の肩口が遺存しており、この肩口を境に西側に最下層の土層が堆積すること、貼石の大きさや設置方法及び池底面の形状が異なることなどの差異が認められる。また調査区南端の池底面で検出した柱穴列2の深さが数センチしかないことなどから、南北肩口以西が当初の池(古)であり、肩口以東は本来陸部であった可能性がある。後に、陸部を大規模に削平して池(新)に拡張したと考えている。いずれも池の肩口はおおよそ直線的に造作されていると考えられ、池(古)は南北方向に長い長方形に、池(新)は一部池(古)の肩部を踏襲しつつ東方へ大規模に拡張し鉤形に造作しているようである。池からは10世紀前後のものを中心と

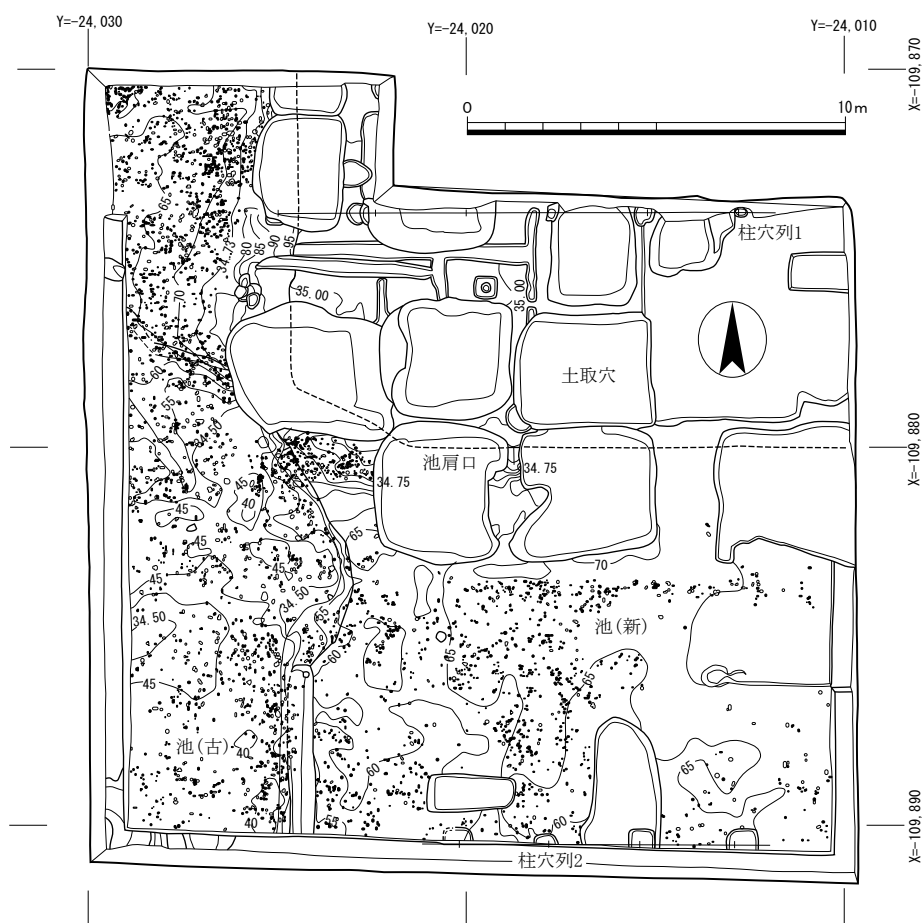


図41 遺構平面図 (1:200)

して9世紀前半から10世紀中頃に属する遺物が出土した。

調査区南端の池底面で柱間が1間2.4m・2.4m・2.7mの柱穴列を、調査区北端では池(新)の北肩口に沿って1間2.4mの柱穴列を5間分検出した。それぞれ建物に想定できる。

遺物 遺物は、整理箱で35箱出土した。平安時代の遺物は大半が池から出土しているが、鎌倉時代以降の耕作土層中にも平安時代の遺物が比較的多数混入している。土器・瓦類とも小破片で復原できるものは少ない。池出土遺物は表にまとめたが、その比率を示すと、総破片数7329片のうち土師器は76.90%、黒色土器は3.19%、須恵器12.04%、緑釉陶器3.99%、白色・無釉陶器1.33%、灰釉陶器2.22%、輸入陶磁器0.33%となる。なお、土師器では高杯脚部の一端が高火度によって灰色に焼締まったものが数点ある。この他、古墳時代のものと考えられる土師器1点、平城宮式6663系の軒平瓦が1点ある。また、鎌倉

表1 池出土遺物一覧表

土師器	皿、杯、高杯、甕、羽釜、盤
須恵器	杯 A・B、蓋、壺、甕、鉢、平瓶、円面硯
黒色土器	椀 A・B、甕、風字硯、水滴など
緑釉陶器	皿、段皿、耳皿、三足盤、椀、稜椀、輪花椀、陰刻花文椀、唾壺、香炉身・蓋
灰釉陶器	皿、椀、壺、平瓶
白色土器	皿、椀、高杯
輸入陶磁器	青磁、白磁、椀、壺、水注
土製品	土錘
転用硯	須恵器甕転用・壺転用・蓋転用、灰釉椀転用・壺転用、緑釉椀転用
墨書土器	須恵器鉢体部外面・底部「中」、他判読不明
ヘラ記号	土器須恵器瓶子底部外面「×」、同甕口縁部「/」
銭貨	長年大寶、貞観永寶
瓦類	丸・平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、不明軒瓦小片、緑釉丸瓦、ヘラ記号瓦など
木製品	下駄など
その他	獣骨、馬歯、種実(桃)など

時代から室町時代の遺物には土師器・瓦器・輸入陶磁器・鉄製品などがある。

小結 今回の調査で検出した池が、北接する昭和61年度調査の池状遺構に続くことを確認できた。これら遺跡を総合すると、1町を東西に分ける南北方向の川、池や建物の広がりなどから宅地規模は最大で八町東半の2分の1町を占めることが想定でき、主要建物とこれに伴う池などはこの宅地の南半にあることが判明した。池は古・新の2時期に分かれるが、池(古)は宅地境界に接して南西部に形成され、池(新)の段階で池(古)を踏襲しつつ東方へ拡張し、宅地内の景観を再度整えたようである。

柱穴列1・2は、池(古)段階の建物の一部で、柱穴列1が東西棟、同2が庇を伴う南北棟であろう。両者はほぼ柱筋が通り、位置関係からもこの宅地の中心的な建物の一つとみられる。柱穴列2は池(新)拡張時に破却されるが、同1は存続した可能性がある。池の下層では9世紀前半から10世紀前半までの遺物が出土し、池の上層は10世紀中頃の遺物が出土する。このため、10世紀前半に池が拡張された後、ほどなくして池は埋没したとみられよう。

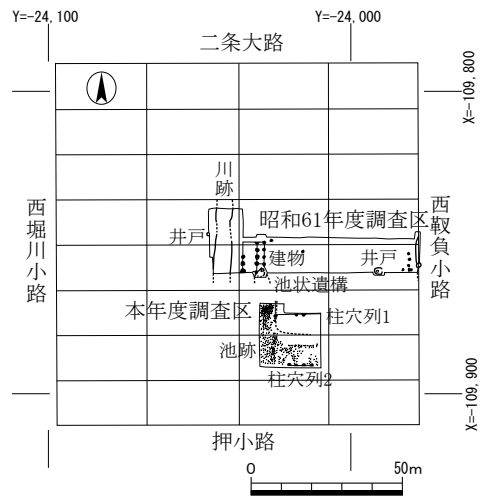


図42 八町遺構配置図 (1:2,500)

(辻 裕司)

註 堀内博明・木下保明「右京三条二坊」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989

20 平安京右京三条二坊 2 (図版1・20)

経過 調査地は平安京右京三条二坊の野寺小路を挟んだ十四町の北東部4分の1町と十一町の西辺にあたっている。調査は建設予定地約1600㎡を対象として開始したが、三条坊門小路と野寺小路の交差点の状況を確認するために2箇所の拡張区を設けて補足調査した。なお、本調査は島津製作所内の第8次調査となる。

遺構 基本層序は、近・現代の盛土が0.7 m、旧耕土0.2 m堆積し、その下が遺構面の黄褐色泥土層（地山）となる。

検出した遺構は、平安時代中期の三条坊門小路の南側溝と野寺小路の東西両側溝、十四町の宅地内溝、平安時代後期から鎌倉時代の河川・柱穴・柵列、室町時代の整地層・耕作溝、江戸時代の土取穴などである。

条坊に関する側溝を検出したのは調査区の北部のみである。野寺小路の西側溝（SD1）は、南北に直線的に延びて三条坊門小路を横断しており、三条坊門小路の南側溝（SD2）は野寺小路の西側溝にT字型に取付いている。野寺小路の東側溝（SD3）は、河川の肩部で検出している。西側溝に比べて幅広で深く、底部に凹凸があり、埋土は砂礫である。側溝沿いに流れた洪水による侵食を受けた結果と思われる。宅地内の側溝（SD4）は、調査区の北端と南端部で検出している。造り替えがあり、東側の溝の方が新しい。

河川（SD5）は、野寺小路の路面にあたる位置を南北に流れており、幅約9 m、深さ約2 mを測る。この川の底部は、南に向かって階段状に深くなり、調査区では3段が確認できる。また三条坊門小路に近い北部では、船底状の比較的浅い底の中央部に幅約0.3 m・深さ0.4 mの掘形がほぼ垂直な溝を作って南の段に流している。この河川の西岸では、杭と板による護岸や礫をつめて岸辺を補強した箇所を検出している。

十一町の宅地内では、南北方向の柵列を2条検出した。東の柵列（SA6）は4間で柱間の心々距離は1.2 m、西の柵列（SA7）は5間で柱間の心々距離は2.3 mを測る。十四町の宅地内では柱穴群を検出した。いずれも径0.3～0.4 mの円形あるいは隅丸方形の小型の柱穴で、2間×3間（東西3.6 m、南北2.3 m）の小型東西棟建物（SB8）に復原できる。

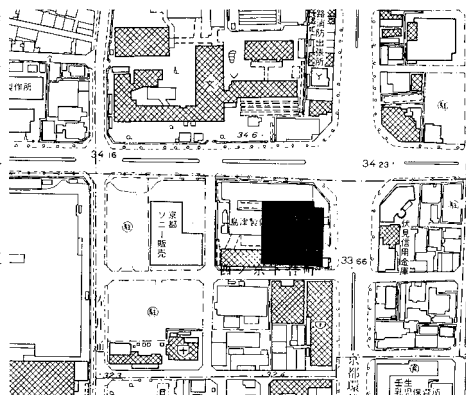


図43 調査位置図(1:5,000)

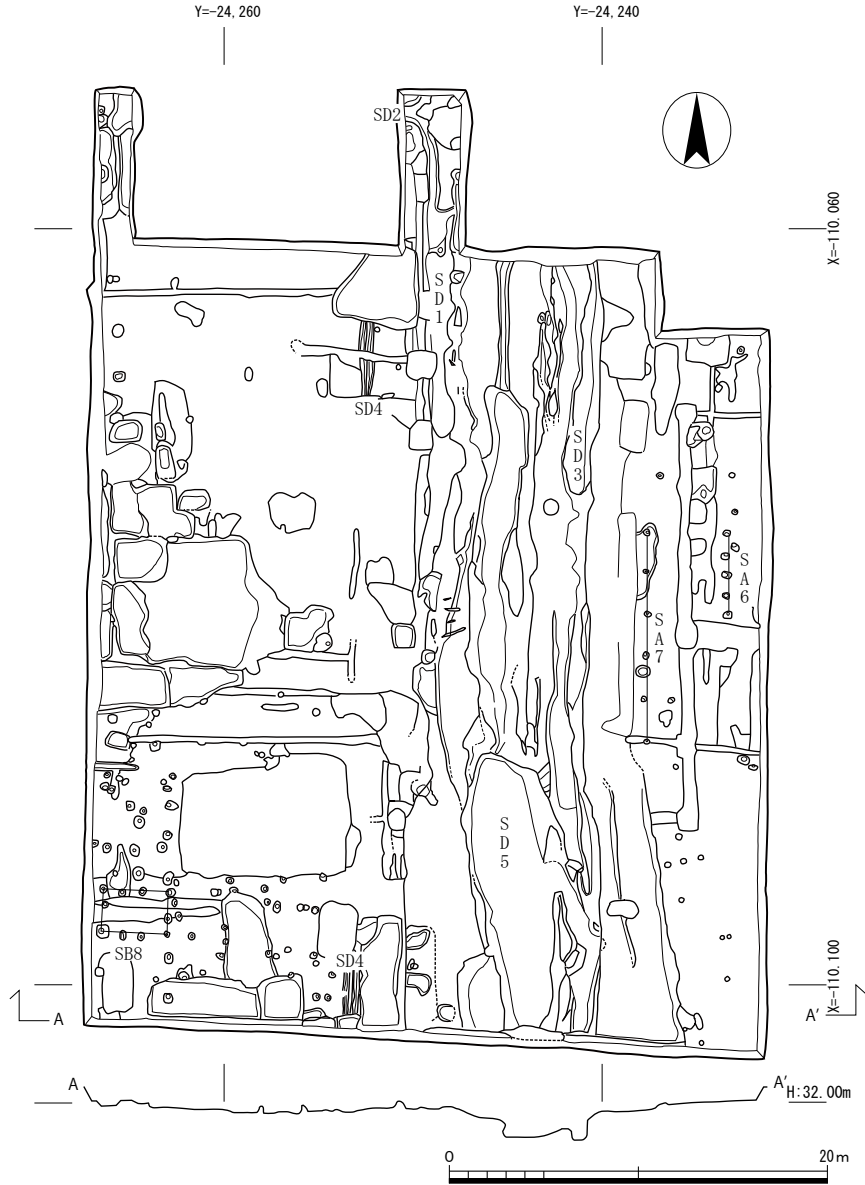


図44 遺構実測図 (1:400)

整地層は暗褐色の砂泥層で、河川が埋没した後に、耕地を作るため客土されたものと思われ、同時期の耕作溝の存在もこのことを裏付ける。土取穴は、聚楽土と呼ばれる黄褐色泥土の土取穴である。

遺物 遺物は、遺物整理箱にして77箱分出土している。平安時代前期から中期の遺物

は、道路側溝や河川から出土しており、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器（白磁・越州窯系青磁）・軒瓦・土馬・円面硯・風字硯・石帯などがある。灰釉陶器には、底部に墨書されたものが数点ある。

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、河川や柱穴から出土しており、土師器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器（龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・褐釉）・軒瓦・土錘・錢貨・小刀・木製品（下駄・折敷・卒塔婆）などがある。

室町時代の遺物は整地層と耕作溝から、江戸時代の遺物は土取穴から出土しており、土師器・国産陶磁器などがある。

特筆すべき遺物には、河川から出土した緑釉の丸瓦片、人間の頭部の骨2体分がある。また、二次堆積ではあるが古墳時代の須恵器も出土している。

小結 調査により平安時代中期までは、条坊に伴う道路と側溝は機能していたが、平安時代後期になると側溝を含めた道路部分が全て河川となることがわかった。また、同じ右京三条二坊地内では、今回検出した河川とほぼ同時期のものが3条知られている。東から八町の中央を南北に流れる河川、西堀川、道祖大路の東側溝と重なって検出された河川である。調査地付近は立地条件から、大雨になればしばしば洪水となり、その水が直接条坊の溝に流れ込んで河川を形成したものであろう。右京域は慶滋保胤の『池亭記』や『今昔物語』などの文献によって、平安時代の中期以降には荒廃したことはよく知られているが、今回の調査でもそのことを裏付けるような成果をうることができた。しかし、今回の調査で小規模ながら建物と柵列を検出したことから、完全に人が住まなくなってしまうのではないこともわかった。

この河川も鎌倉時代から室町時代までには埋没してしまい、以後は耕作地として現在に至っている。

（木下保明）

21 平安京右京三条四坊（図版1）

経過 調査地は右京三条四坊二町の南北中央北寄りの東端付近に位置し、東一行北三・四・五門の東半部に該当する。発掘調査に先立って、敷地内3箇所を試掘調査を行い、平安時代の掘立柱建物の一部とみられる柱穴を検出した。その後、敷地西辺で行った立会調査によっても同様の柱穴を確認している。

遺構 土層の堆積は単純で、遺構面も非常に浅い。厚さ約10cmの整地層下部に約30～40cmの旧耕作土層がある。一部に暗褐色の遺物包含層が認められた他は、旧耕作土層直下で平安時代の建物（S B 01～05・07）、柵列（S A 06・08）、土塋（S K 09～12）、古墳時代の土塋（S K 13）などを検出した。

調査面積が狭く、平面形の全体が判明した建物はS B 02・04の2棟で、他はその一部を検出しただけである。これらの建物は部分的に重複しており、数期にわたって建て替えられている。しかし直接の切合い関係が少なく、出土遺物も少量で時期差が明確でないため、それぞれの前後関係には不明な点が多い。ただS B 03・04、S A 06については柱筋の通りや配置の点から、同時期に存在した可能性が強い。

遺物 出土した遺物は、ほとんどが平安時代のもので、土器類が大半を占め、わずかに瓦片がある。これらの土器は、主にS K 09・10・12から出土したもので、9世紀前葉から後葉にかけてのものと推定している。またS K 13から古墳時代の土器が出土した他、平安時代の柱穴からではあるが、有舌尖頭器が1点出土している。

小結 調査地東隣の右京三条三坊では、1町規模の邸宅跡が数箇所を確認されている。それらの主要建物と比べて、今回検出した建物の規模は、あまり大きなものを想定することはできないが、これは調査地が二町の周縁部にあたっているためと考えられる。いずれにせよ、右京三条四坊地区にも平安時代前期の遺構が良好に遺存していることが明らかとなり、古墳時代の遺構の存在も確認することができた。また有舌尖頭器が出土したことなども、今後の周辺の調査に期待が持たれる。

（平尾政幸）

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

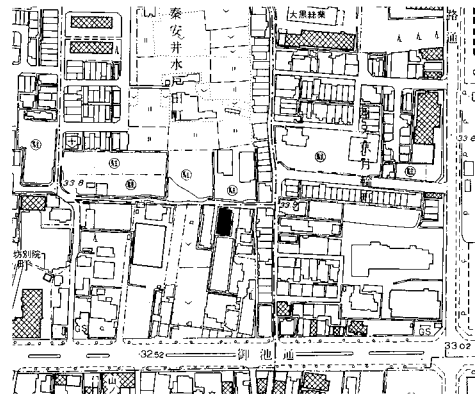


図45 調査位置図（1：5,000）

22 平安京右京四条二坊 (図版1・21)

経過 マンション建設に先立つ事前調査である。試掘調査の結果、良好に遺構・遺物が遺存していることが判明し、発掘調査を実施した。調査地は平安京右京四条二坊二町にあたる。試掘調査では平安時代前期に推定できる柱穴・溝などを確認した。調査トレンチは、当初15×16mの規模で設定したが、掘立柱建物の検出に伴って一部拡張し、最終的に約280㎡を調査した。

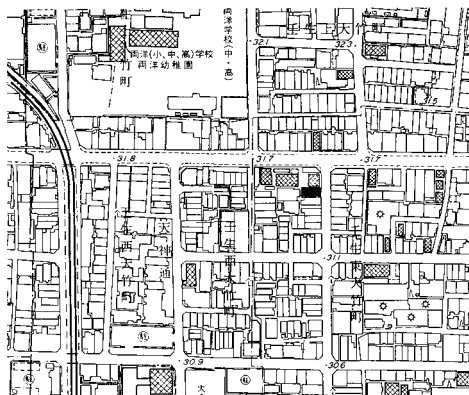


図46 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 調査地の層序は、約40cmの厚さで現代整地層があり、以下、黄灰色砂泥層・黒褐色砂泥層が堆積する。黒褐色砂泥層は下位になるに従いシルト質となり、平安時代中期の土器類を包含する。この黒褐色砂泥層の下層は、調査区の大半にオリーブ灰色泥砂層又は明黄褐色泥砂層が堆積し、東に向かい漸次砂礫層に変わる。

発見した遺構は溝・井戸・土壌・柱穴がある。遺構はオリーブ灰色泥砂層または明黄褐色泥砂層を掘り込んで検出し、上層の黒褐色砂泥層を掘込む遺構は現代攪乱以外にない。溝は全て黒褐色シルト層を埋土とし、9世紀後半から10世紀前半の遺物が少量出土する。柱穴は調査区内で掘立柱建物としての規模を確認できたものが4棟、柱穴の並びだけを確認したものが2列ある。

掘立柱建物S B 65は、東西5間、南北1間以上の東西棟建物である。柱穴の掘形は、一辺約1mを測り、柱間間隔は2.1～2.4mの規模を持つ。他の柱穴は直径30～60cmで掘形も円形を呈する。S B 84は東西2間以上、南北3間の総柱建物になると考えられる。S B 88は東西1間以上、南北2間以上の建物である。S B 56は東西2間、南北3間以上で北側3間目中央に井戸を検出した。井戸と掘立柱建物S B 56との関係は不明であるが、井戸の中心は建物中央柱列に重なる。井戸S E 66は掘形が円形で、上段に円形縦板組みの井筒、下段に径60cmの曲物を置く。検出面からの深さ約70cm、井戸底部の標高は29.3mを測る。

遺物は黒褐色砂泥層、井戸を中心に出土した。土器類には土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器が、瓦類では軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が少量出土している。他に

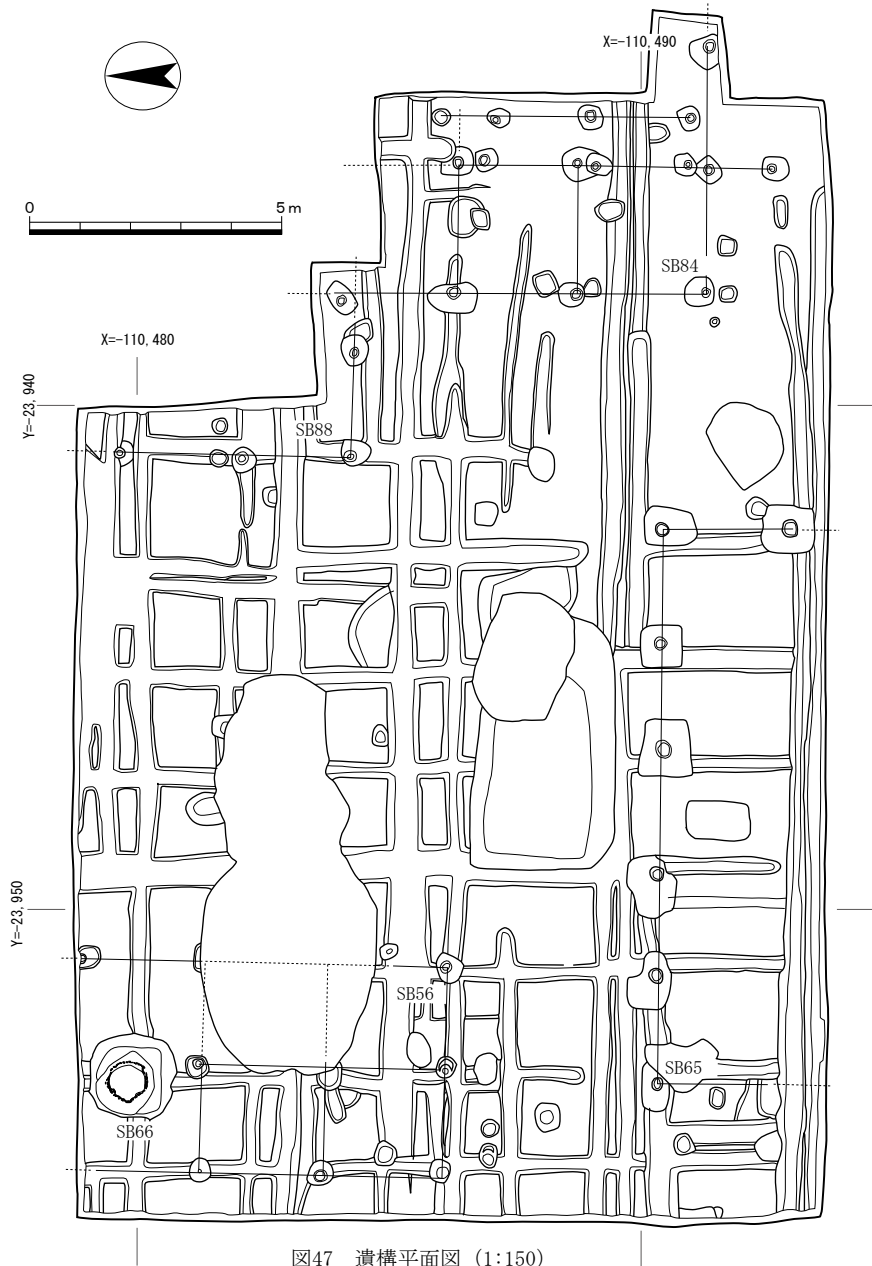


図47 遺構平面図 (1:150)

石帯、銭貨がある。軒瓦は井戸 S E 66 から出土した。

小結 調査の結果、確認した遺構は掘立柱建物4棟、井戸などであった。それらの遺構の年代は遺構を覆う包含層や遺構から出土した遺物の年代から、平安時代前期に比定できる。
(菅田 薫)

23 平安京右京六・七条一坊 (図版1・22)

経過 本調査は、旧大阪ガス京都工場跡地の第3次調査として7・8区の調査を実施した。工場建設時の削平部分を避け、7区は六条大路を横断する位置に、8区は六条一坊十二町内にあたる位置に設定した。(図50参照)

遺構・遺物 7区の調査では、江戸時代の土取穴、平安時代の六条大路北側溝と柱穴、弥生・古墳時代の湿地などを検出した。六条

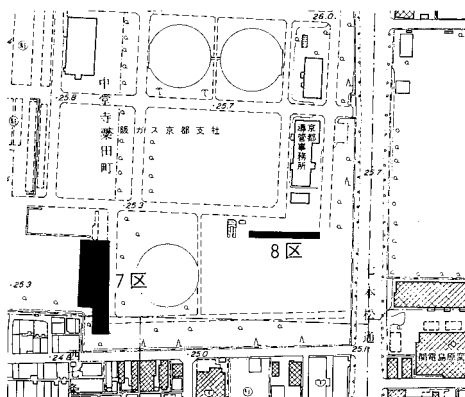


図48 調査位置図 (1:5,000)

大路北側溝は、3時期の重なりがあり、新・中段階は幅1.6m前後で上下に重なる。古段階はその南寄りに痕跡をとどめていた。出土遺物の大半は平安時代前期のものであるが、中段階の溝から平安時代後期の遺物が少量出土している。南側溝は確認できなかった。また、建物と思われる柱穴を調査区北西隅で2基検出した。調査区の東半分は弥生・古墳時代頃の湿地や流路を検出している。多くの流木を含み、縄文時代から古墳時代の遺物が少量出土している。

8区の調査は、全般に攪乱が激しく、江戸時代頃と思われる土取穴を確認するにとどまった。

遺物の出土量は約50箱を数え、土器・瓦・木製品・骨などが出土した。大部分は平安時代のもので、他に縄文・弥生・古墳・江戸時代のもものが少量出土している。弥生時代の遺物には少量の土器の他、石斧・石包丁などがある。

木製品には、六条大路北側溝から出土した平安時代の木筒や、調査区南部で出土した江戸時代の木札などがある。江戸時代の木札は、「越前国□□」「文□五年」と判読できる。

小結 今回の調査は大阪ガス京都工場跡地西地区の初めての調査であり、この調査により西地区の遺構の残存状況の概略を知ることができた。西地区も東地区同様、縄文時代後期以降、古墳時代前期にかけて断続的に形成された流路や湿地が各所に分布する。7区の湿地を外れた地山の安定している地区では、土取りや基礎工事による破壊が少なく、平安時代の遺構が遺存している。8区は逆に土取穴などが密に分布し遺構の破壊が激しいことが判った。今後計画されている7区付近の調査に期待したい。(長宗繁一)

24 平安京右京六条一坊 (図版1・23)

経過 本調査は、大阪ガス京都工場跡地の第4次調査として、9区から14区までを実施した。調査地は六条一坊十三町の東北部と同十二町の北西部にあたる。10・11・13区は東西に連続するように設定し、その北側に14区を設定した。

9区は旧工場の基礎でほとんどが破壊され遺構の検出はなかったが、他の調査区では平安時代の側溝や建物、町内の区画溝などを検出することができた。

遺構・遺物 平安時代の遺構は、盛土下の旧耕作土を除去した表土下約1.3mで検出している。十二町部分の調査では、町の北西部を4分の1町に区切る浅い溝を検出し、その

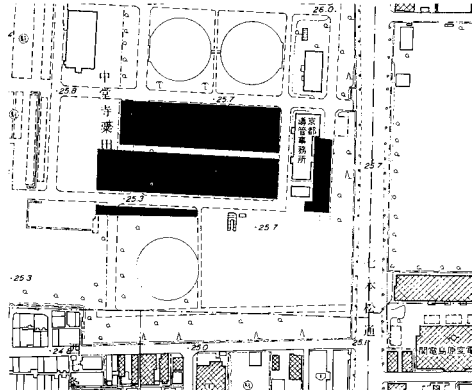


図49 調査位置図 (1:5,000)

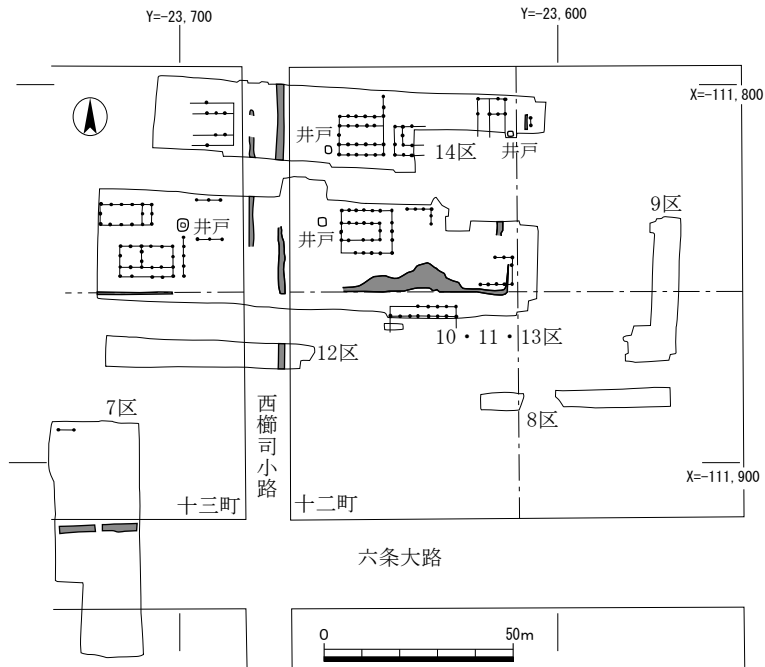


図50 遺構配置図 (1:2,000)

区画の中に建て替えがある建物5群及び井戸3基などを検出した。この区画の南側にも建物を検出した。十三町部分では、3群の建物と井戸を検出した。建物の構造や規模からして8分の1町の宅地と思われるが、今後予定されている西側の調査で明確になるであろう。

十二・十三町を南北に区切る西櫛司小路の平安時代前期の東側溝を検出した。西側溝に該当する部分には平安時代前期のものはなかったが、平安時代末期から鎌倉時代のものを検出した。この時期に対応する東側溝は検出していない。この西側溝は、3次調査（7区）で検出した六条大路北側溝の、平安時代後期の遺物を含む中段階のものと、形状が似ている。

遺物は約100箱出土し、土器・瓦・銭貨・石製品・木製品などがある。大部分は平安時代の遺物が占めるが、まとまった資料としては井戸から出土したもののみである。平安時代の基盤層となる古流路から縄文・弥生時代の土器・石包丁なども少量出土した。木製品は平安時代の柱根・礎板・箸などである。

小結 大阪ガス東地区で実施した第2次調査では、五町のほぼ全域を占める邸宅跡を検出している。その西隣にあたる今回の西地区の調査でも同様な発見を期待し調査に入った。結果、十二町では町の4分の1町を、十三町では確定はできないが8分の1町を占めると思われる宅地を検出した。東地区との成果を合わせ、右京六条一坊での平安時代前期の宅地の様子が明確になった。次年度以降も引き続き調査が計画されており、平安京の宅地利用状況を知ることのできる重要な資料が得られるものと期待される。

（長宗繁一）

註 梅川光隆他『平安京右京六条一坊－平安時代前期邸宅跡の調査－』
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992

25 平安京右京六条三坊 (図版1・24)

経過 工場建設に先立つ事前調査である。平成元年(1989)9月1日試掘調査を実施した。その結果、多数の柱穴・溝などを検出したため発掘調査を実施することとなった。調査地は平安京右京六条三坊四町東一行、北七・八門に位置する。当町内では昭和56年(1981)^{註1}と昭和62年(1987)^{註2}の二度にわたり発掘調査を実施している。これらの調査では平安時代前期に属する掘立柱建物を多数発見しており、今次調査においても建物の発見が期待された。また調査区南端には六条大路北側溝及び築地が推定される。

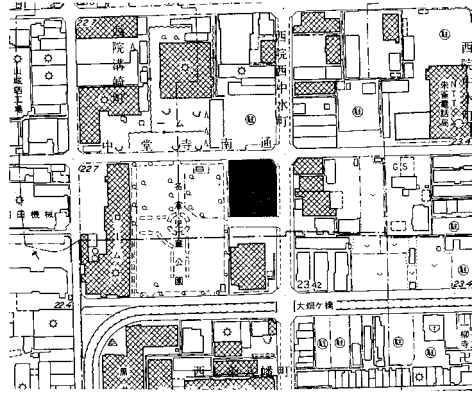


図51 調査位置図(1:5,000)

り、今次調査においても建物の発見が期待された。また調査区南端には六条大路北側溝及び築地が推定される。

遺構 調査地の層序は現代整地層下に旧耕作土及び床土層が約25cm、暗褐色砂泥層が10～15cm、褐灰色泥砂層が約20cmの厚さで堆積する。平安時代の遺構面となる層は褐色砂泥層又は黄橙色砂泥層である。暗褐色砂泥層からは近世の遺物が、褐灰色泥砂層からは平安時代後期の遺物が出土する。

発見した遺構は、掘立柱建物・柵列・土塋・溝などである。溝は鎌倉時代以降の耕作に伴う溝で、平安時代にさかのぼる溝の検出はない。

掘立柱建物は6棟確認できた。これらの掘立柱建物、柵列は柱穴の重複関係などから2時期に分けられるが、柱穴掘形からの出土遺物は年代差が少なく、平安時代前期から中期、9世紀中頃から後半に比定できる。また、掘立柱建物・柵列共に、わずかであるが北に対して東に振れる。

建物S B 23は東西3間、南北2間の東西棟建物で東・南・西に庇が付く。柱間は2.4m等間で、柱穴掘形は径60cm程である。S B 184は東西4間、南北2間の東西棟建物で南側のみ庇が付く。S B 23と柱穴掘形が重複関係にあり、S B 23が新しい。S B 186は南北2間、東西2間以上の東西棟建物、S B 185は東西1間、南北5間の南北棟建物である。柱穴掘形の重複からS B 186が185より新しい。他にS B 183があり、東西2間、南北2間以上の南北建物、S B 206は東西3間、南北1間以上の建物である。S B 206は、南側を近・現代の攪乱層で壊されており、規模は不明である。柱穴掘形は、他の建物柱穴掘形

に比べ小さく、柵列の可能性もある。

調査区南半で土器埋納遺構 S K 188 を検出した。長軸 90cm、短軸 70cm、深さ 15cm を測る。土壌底部には土師器皿が幾重にも重なった状態で検出した。土師器皿は、検出時には完形の状態であったが、土圧による損傷で、取り上げ時に小片化した。土師器皿は、大半が内面を上重ねられており、2枚のみ下を向けて置かれていた。この2枚の土師器皿の中に

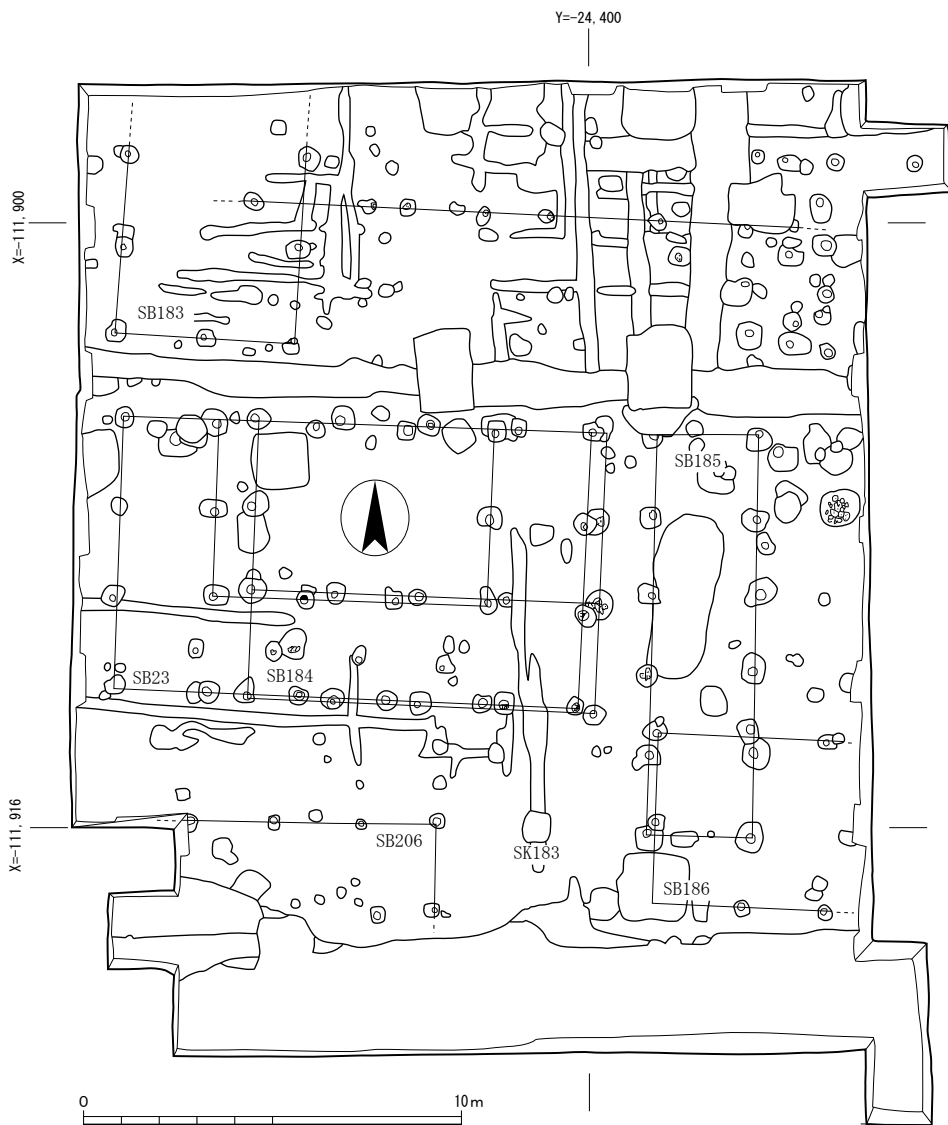


図52 遺構平面図 (1:200)

は、完形の須恵器瓶子が埋納されていた。須恵器瓶子は他に4個体あり、計6個体の須恵器瓶子が完形で土師器皿と共に埋納されていた。

遺物 出土遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・皿・椀・壺・甕、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが出土し、他には、石帯、銭貨が出土している。土器類・瓦類共に、小破片のものが多。図示した遺物はS K 188出土の土師器、須恵器である。前述のように、S K 188では多量の土師器皿を完形の状態で発見したが、取り上げ時に破損しており、総個体数は不明である。

小結 右京六条三坊四町内の既往の調査と同様に掘立柱建物を検出した。これまでの調査で

検出した掘立柱建物の方向が、真北ないしは北に対して若干西に振れるのに対して、今次調査検出の掘立柱建物は全て東に振れており、六条三坊四町内の宅地割りを考える上で貴重な成果を得た。また、土器埋納遺構を検出しており、鎮壇の新資料として興味深い資料を得ることができた。

(菅田 薫)

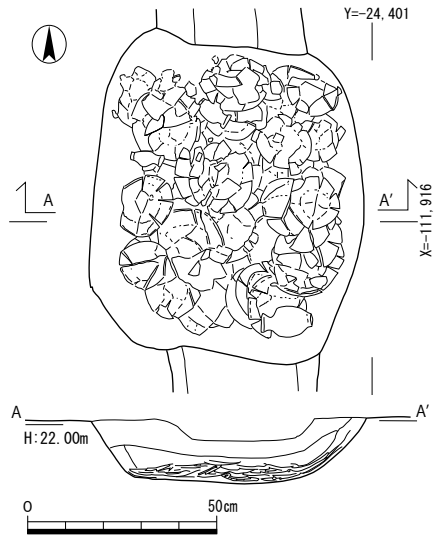


図53 S K 188実測図 (1:20)

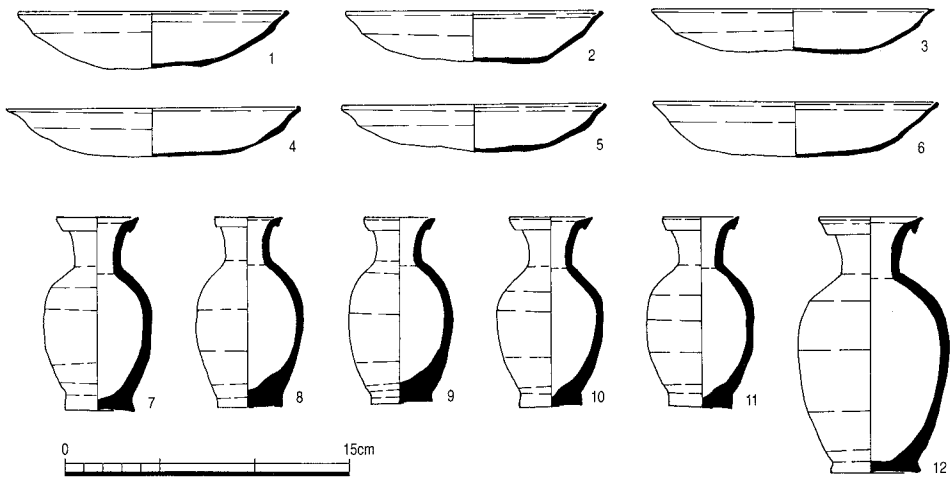


図54 S K 188 出土遺物実測図 (1:4)

- 註1 鈴木廣司「平安京右京六条三坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
 註2 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989

26 平安京右京六条四坊・西京極遺跡 (図版1・25)

経過 調査地は右京六条四坊二町にあると共に、西京極遺跡の範囲内である。既往の調査では、当調査地の西側で弥生時代から古墳時代の河川、南北両側では遺物包含層などを検出している。このため本調査は、弥生時代から古墳時代の集落に関する遺構の確認を目的とした。

遺構 調査地の層序は3層に分かれ、第3層(黄灰色粘土層)の上面(標高22.8m)で弥生時代から平安時代の遺構を検出した。

弥生時代の遺構は、調査区北・南部で検出した竪穴住居5棟がある。竪穴住居は、北と南のグループに分かれ、その間には当該期の遺構が認められず空地と推定できる。北グループの1号住居は小型で無柱である。南グループには2～5号住居があり、5号→4号→3号・2号と変遷する。3号住居は2回、1・2号住居は1回の拡張を行う。1号住居と2・3号住居は、軸線がほぼ同一方向で、同時期の住居と推定できる。1～3号住居は中央炉がかなり焼け、埋土に多くの土器を含む。存続期間は畿内第Ⅳ様式から第Ⅴ様式前半である。

弥生時代以降の遺構には、調査地全域で検出した多くの柱穴がある。柱穴は上部が削平され、建物としてまともならなかった。また出土遺物が少ないため、時期は特定できない。

平安時代の遺構は、調査区北端部で検出した東西溝S D 33(幅0.7m、深さ0.3m)がある。東西溝より南側では、当該期の遺構は全く確認できなかった。溝は、樋口小路南側溝に比定できる。

遺物 遺物は整理箱に35箱で、土器・石製品・土製品などがあり、大半は弥生土器である。弥生時代の遺物には、弥生土器壺・甕・鉢・高杯、石斧・石剣・石鏃・石包丁・砥石、土製品土錘がある。これらは、竪穴住居・柱穴・攪乱層から出土した。土器の時期は、畿内第Ⅲ様式から第Ⅴ様式であるが、第Ⅳ様式から第Ⅴ様式前半のものが多い。古墳時代の遺物には、土師器壺・甕・高杯、須恵器杯・甕があり、柱穴・攪乱層から出土した。時期は、庄内式併行期と6世紀代のものである。平安時代以降の遺物には、土師器杯、須恵器杯・壺・

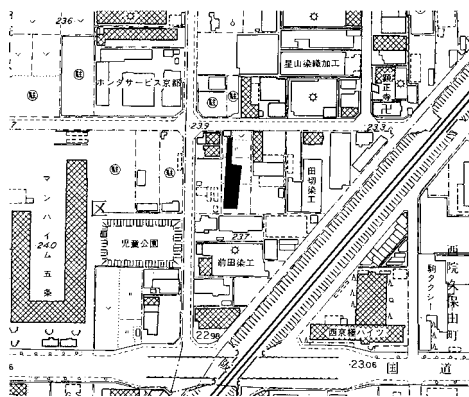


図55 調査位置図(1:5,000)

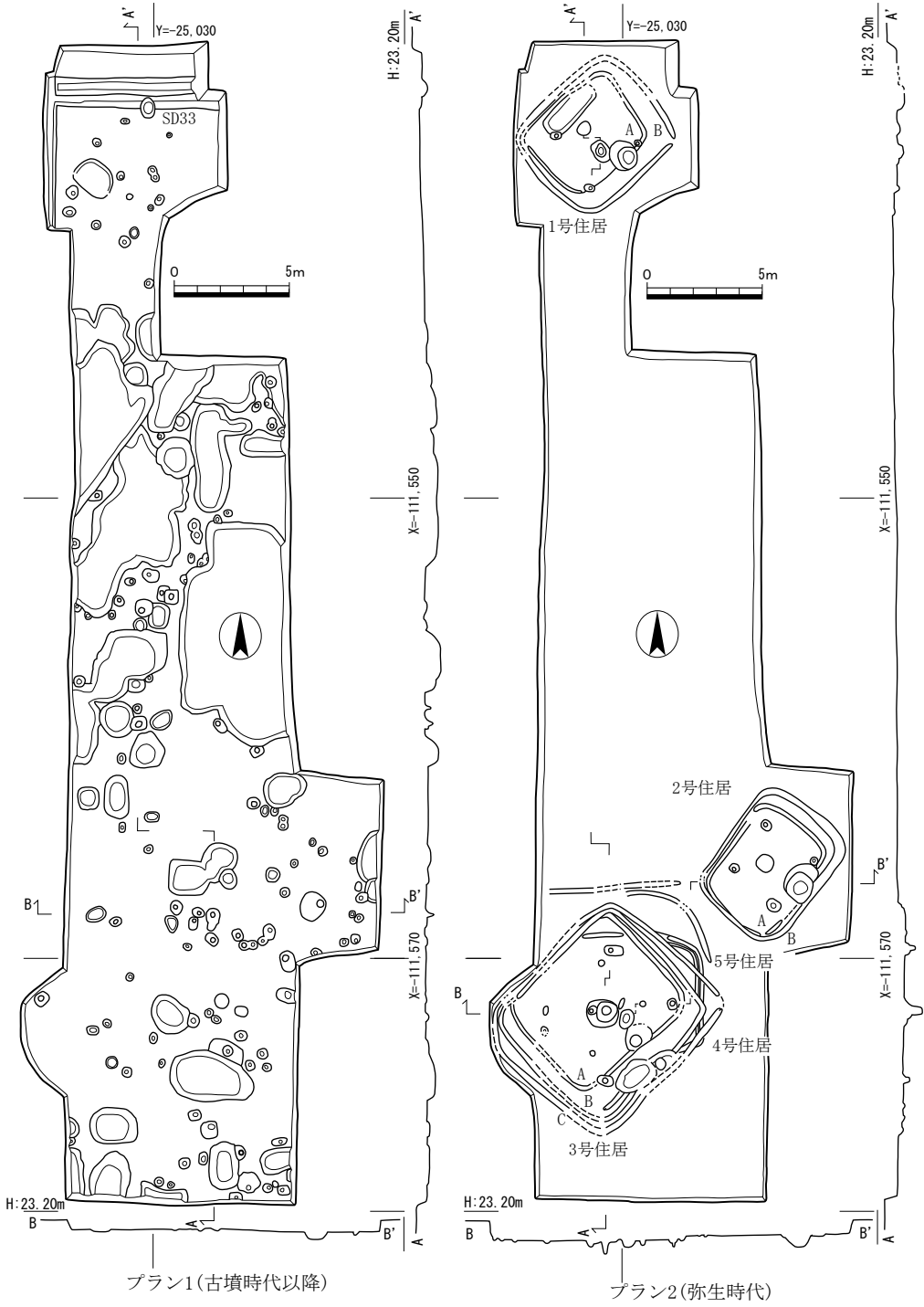


図56 遺構実測図 (1:300)

表2 竪穴住居一覧表

番号	形態と規模			支柱穴		施設			遺物・備考
	平面形	規模	深さ	数	深さ	壁溝	炉	貯蔵穴	
1-A	隅丸方形	4.6×4.0 18.4㎡	0.10	無柱		全周	地床炉 円形	北部中央 長方形	壺・甕・高杯、石包丁
1-B	隅丸方形	5.8×5.3 30.74㎡	0.05	4	0.15	全周	地床炉	南部中央 楕円形	壺・甕
2-A	隅丸長方形	5.1×3.9 19.89㎡	0.05	4	0.30	全周	地床炉 楕円形	南辺中央 楕円形	甕・壺・高杯
2-B	隅丸長方形	5.9×4.6 27.14㎡	0.10	Aと同じ		全周	中央に 炭が散 在	南辺中央 円形	壺・甕・高杯
3-A	隅丸長方形	6.4×5.6 35.84㎡	0.08	4	0.40	全周	地床炉 円形	南辺中央 円形	壺・甕・鉢・高杯・甌、 土製品土錘、石製品砥 石炉東側に長方形土壇 有り。
3-B	隅丸長方形	7.7×6.8 52.36㎡	0.15	4	0.25	全周	地床炉 円形	南辺中央 楕円形	壺・甕
3-C	隅丸長方形	8.4×7.4 62.16㎡	0.18	Bと同じ		全周	中央に 炭が散 在	南辺中央 楕円形	壺・甕・高杯、 石製品砥石
4	隅丸方形	東辺 4.0	0.20	不明			東辺	不明	壺・甕・高杯、 石器磨製石鏃
5	円形	不明	0	不明			北辺	不明	壺・甕・高杯

(m・柱数は単位を省略)

甕、陶器鉢・甕、磁器碗などがある。東西溝・攪乱墳から出土した。

小結 調査では、集落の居住区域を検出した。南グループでは、円形の5号住居が最も古く、次いで北方向の4号住居（第Ⅳ様式）が建てられる。その後、北西方向（N-30°～40°-W）の2号住居と3号住居が大型・小型住居のセットで東西に並ぶ。同じ頃、広場の北側には同一方向で小型の1号住居が建てられる。いずれも中央炉と南辺に貯蔵穴を持つのが特徴である。1～3号の各住居は南側や東・西側に拡張を行っている。

古墳時代初期・後期の遺構は不明確であるが、出土遺物からみれば、当地も集落居住区域の一部と考えられる。

既往の調査から、西京極遺跡の範囲は、東西約0.4km、南北約1kmと推定できる。遺跡の立地は、桂川左岸の自然堤防上にあり、集落は西方が旧天神川、東方が西小路付近に推定される旧河川に挟まれた南北に長い微高地上に営まれたものであろう。調査地の北約2kmには山ノ内遺跡（弥生時代後期から古墳時代前期）があり、京都盆地中央部の集落群の一つを形成していたと推定できる。

(上村和直・西大條 哲)

27 平安京右京七条四坊 (図版1)

経過 調査地は、平安京右京七条四坊九町東三行、北三・四門に該当する。既往の周辺における試掘・立会調査では平安時代の遺構・遺物は発見されていない。当地に倉庫の建設が計画されたため試掘調査を実施した。その結果、平安時代前期と思われる柱穴3基を確認、発掘調査を実施した。調査区は、倉庫建設による基礎掘削で破壊を受ける範囲に設定し、420㎡を調査した。

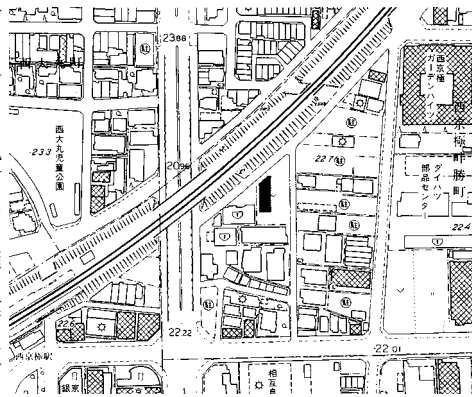


図57 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 調査区の堆積は、耕作土層が約40cmの厚さで堆積し、その下層に遺物包含層の黄褐色砂泥層、オリーブ褐色砂泥層が順次10～15cmの厚さで堆積する。黄褐色砂泥層からは平安時代後期の遺物が、オリーブ褐色砂泥層からは平安時代前期の土器がわずかに出土している。遺構のベースとなる層は砂礫層である。

発見した遺構には、掘立柱建物2棟、土塙、溝がある。遺構は、調査区の北側3分の1に集中しており、南側には南北方向の溝1条を検出した。S B 01は、東西2間×南北3間の建物である。梁の柱間は2.25m等間で4.5m、桁は2.4m等間で7.2mの規模を持つ。建物の主軸は北で東に振れる。S B 13は3間×3間の建物である。柱間は2.4m等間で7.2mの規模を持つ。この建物の軸線も、北で東に振れるがわずかである。S B 13はS B 01と重複するが、柱穴の重複関係からS B 13が新しい。しかし、S B 01北東隅の柱穴掘形から出土した底部片と、S B 13南東隅の柱穴掘形から出土した体部片とは接合でき、完形の灰釉陶器椀となる。

遺物は、遺物包含層・溝・柱穴から出土したが、量は多くない。遺物の大半は平安時代の土器類で占め、他に少量の弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器が出土している。

小結 掘立柱建物2棟を検出することができた。建物の時期は、平安時代前期に比定することができる。この新旧2時期の建物から出土した灰釉陶器椀が接合して、完形となる。建物の建て替えに伴う鎮壇的な行為と考えることもでき注目される。 (菅田 薫)

『平安京跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

28 平安京右京八条二坊・西市跡 (図版1・26)

経過 当該地に高層建築物が建設されることになり、事前に発掘調査を実施した。調査地点は八条二坊一町の北東寄りに位置する。北接する西市の外町に該当し、調査対象地の北部には七条大路南築地心が、同西寄りには東一・二行界が想定できる。調査地点に西接する箇所^{註1}で昭和56年(1981)に調査が実施され、平安時代から室町時代の遺構が検出されている。

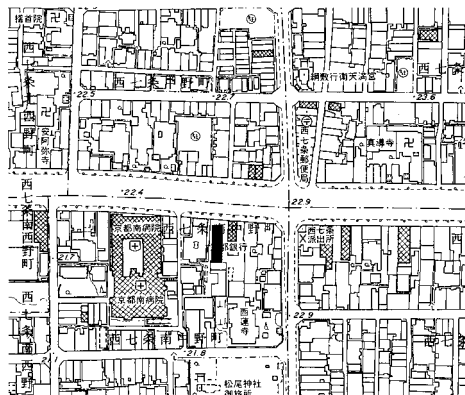


図58 調査位置図(1:5,000)

遺構 調査区内の基本層序は、近現代層が厚さ10～40cm、江戸時代の整地層が厚さ約20～40cm堆積する。整地層下は、調査区南半では無遺物層の明黄褐色砂泥層となる。調査区北部の七条大路南築地想定箇所より北側には、七条大路の道路敷、溝、流路などを形成する土層が、厚さ約80cm堆積している。

調査では、整地層上面、無遺物層上面で各期の遺構を検出した。平安時代に属する遺構には七条大路の道路敷、南側溝、流路、区画溝、土塋(井戸か)、柱穴などが、鎌倉時代から室町時代に属する遺構には七条大路の道路敷、南側溝、区画溝、井戸、溝、土塋、柱穴、土取穴などが、江戸時代に属する遺構には七条通南側溝、溝、井戸、竈、土塋、土取穴などがある。なお、近代のものであるが水琴窟を1基検出している。

七条大路の道路敷は5面検出しているが、補修と考えられる局所的な道路敷を加えるとおよそ8面に達する。最も下層で検出した第8路面とその上層の第7路面上面には、粗砂層と腐植土層が厚く堆積しており、一定期間路面が冠水した後に再度路面を形成している。路面上面の状況は、第8路面では1～3cm程度の細かい礫を使用しているのに対し、第7路面には5～15cmの礫を使用している。上層で検出した数枚の路面についてもおよそ1～5cm程度の礫を敷き詰めている。検出した七条大路道路敷はいずれも宅地内より低位に位置しており、第8路面上面ではその高低差は約80cmにも達する。なお、第8路面の下層に東西方向の流路状遺構がある。平安時代中期にこの遺構を多量の瓦と礫で埋め立てた後、上記七条大路の道路敷、南側溝を敷設している。また、第7路面上で東西方向の流路を検出している。

一方、平安時代の七条大路南側溝と考えられる東西溝の南肩口を、七条大路南築地心から北へ約0.8 mの地点で検出した。溝幅は約1.0 mある。他に同築地心から北へ2.4 m、3.5 mの地点でそれぞれ南側溝と考えられる東西方向の溝の南肩口を検出しており、時代が下るに従って側溝はわずかずつ大路側へ張り出す傾向にある。

宅地内では、南北方向の区画溝と考えられる平安時代の溝340と、鎌倉・室町時代の溝368を検出した。それぞれ東一・二行界心に近接する。溝340は上記七条大路南側溝へ連続し、溝368は築地内溝想定位置で東折する。

柱穴には、根石を持つものと素掘りのものがある。平面形はほぼ円形を呈し、柱穴内に完形の土器を埋納する例がある。大半が鎌倉・室町時代に属する。

土壙24は調査区南東隅で検出した。平面形は一辺約2.4 mの方形を呈し、検出面からの深さは約2 mある。井戸構築部材などは出土していないが、底部が湧水帯にまで達することや平面形などから井戸の可能性があろう。平安時代後期の土器・木器類が出土した。

遺物 遺物は遺物整理箱で115箱出土した。平安時代前期から後期に属する遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦器・土製品・瓦・銭貨・木製品などがある。鎌倉時代から室町時代に属するものでは、土師器・陶器・瓦器・輸入

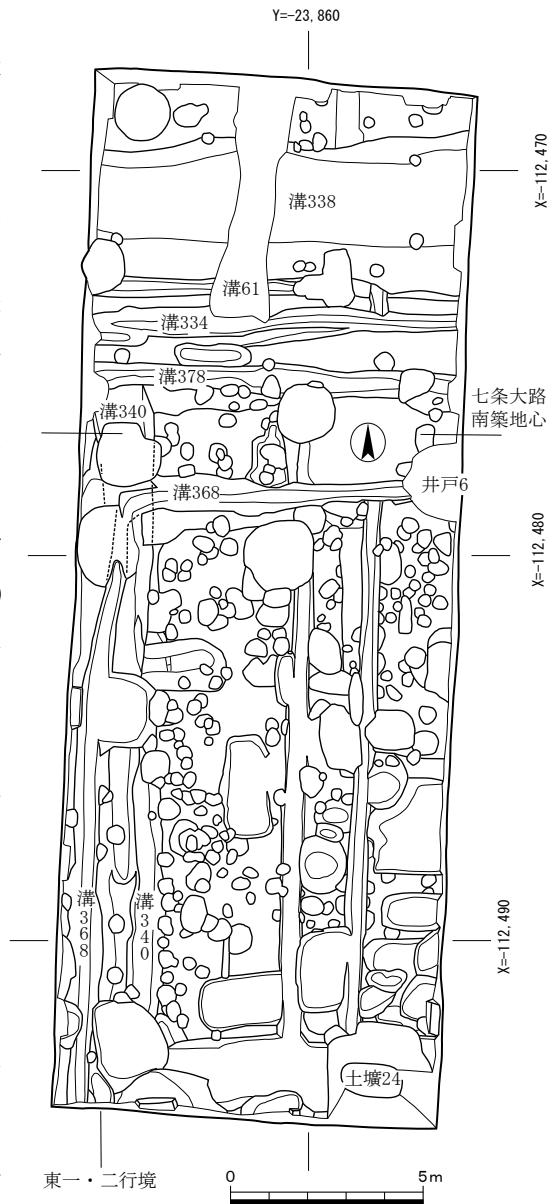


図59 遺構平面図 (1 : 200)

陶磁器・瓦・銭貨・石製品・鉄滓などがある。江戸時代に属するものには、土師器・国産陶磁器・銭貨・石製品などがある。土器類では小破片が多い。

木製品は土壙 24 から出土した、木球ないし木球状を呈するもの 14 個体、籠編物 1 個体、漆器椀 1 個体、箸・加工木などがある。石製品には室町時代後期の井戸や江戸時代前期の井戸 6 から出土した五輪塔がある。空・風・火・水・地輪が連続する一石五輪塔と、空から 3～4 段が連続するか、各々が独立する積上げ五輪塔がある。鉄滓は鎌倉時代から室町時代までの各遺構から出土している。軒瓦は軒丸瓦・軒平瓦が約 20 個体出土した。

小結 七条大路については、路幅八丈（約 24 m）のうちの南半部約 10 m 幅の調査ではあるが、平安時代から連綿と機能が維持されてきたことが明らかになった。

検出した最も古い七条大路は、平安時代中期を前後する時期のものである。七条大路南半の道路敷きの細部を観察すれば、南側溝北肩口から北へ約 2 m の幅で細礫を敷き詰めており、細礫の途切れる箇所から大路中央側へ向かってやや傾斜し、中央寄りの道路敷きには大礫を使用していることが判明した。礫敷き方法や高低差によって道路敷き自体に機能の違いがあるとみられる。このことは、第 7 路面の道路敷き上面に東西方向の流路を敷設することと共通する。これらの遺構の状況から、平安時代中期以後には道路敷き自体が出水時の流路として機能し、細礫道路敷き部分はそのような状態においても通路として機能したものとみられる。平安時代中期をさかのぼると、調査区内では道路敷き相当部分の全体が流路となっている。流路に伴う路面は検出しておらず、平安時代前期の七条大路南半には東西方向の大規模な流路のあったことが想定でき、大路道路敷きの使用形態を考察する資料として重要であろう。

なお、東一・二行界で検出した区画溝については、1 町の各行ごとに南北に通す小径の東側溝であろうと考えている。西接する八町の調査で、同町の中央で南北方向の小径が検出されており、西市外町においても各行界には小径を通していたことがわかる。

この一町では、右京衰退期の平安時代中期以降も活発に土地利用が行われていることが明らかになった。特に鎌倉・室町時代以降、頻繁に建物が建て替えられており、西市衰亡後も旧地の重要性を物語るように人々が営々と住み続けてきたことがうかがえる。

（辻 裕司）

註 1 前田義明「右京八条二坊（1）」『昭和 56 年度 京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1983

註 2 菅田 薫「平安京右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和 63 年度京都市文化観光局 1989

Ⅲ 白河街区跡

29 尊勝寺跡・岡崎遺跡 1 (図版1・27)

経過 調査地は尊勝寺跡推定寺域の西部中央にあると共に、岡崎遺跡にも含まれる。同寺域内では、調査地東側(第2次調査)で推定金堂・回廊跡、北側(第23次調査他)で推定阿弥陀堂跡、西側(第45次調査)で推定西塔跡を検出している。調査は、寺域内伽藍の解明と下層遺構の検出を目的とした。なお、この調査は第62次調査にあたる。

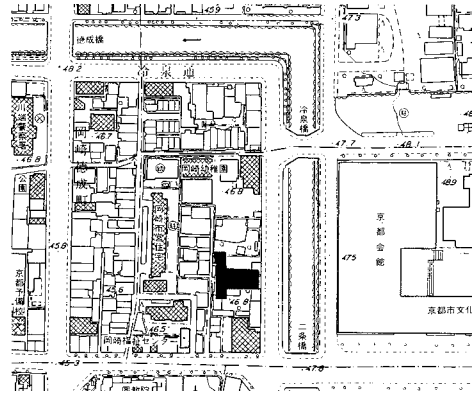


図60 調査位置図(1:5,000)

遺構 基本層序は、第1層黒色土層(近・現代盛土、30～80cm)、第2層灰色砂泥層(中世、30cm)、第3層整地層(平安時代、5～25cm)、第4層黒褐色砂泥層(平安時代包含層、20cm)、第5層黄灰色砂層(無遺物層)である。第3層上面で平安時代後期以後、第5層上面で弥生時代から古墳時代の遺構を検出した。整地層は、黒色土・黄褐色土・褐色砂礫・黄色砂を5～10cmの厚さで版築し、調査区全域で検出した。

弥生時代から古墳時代の遺構には、調査区南半で検出した落込S X 60(深さ0.7m)がある。肩は北東から南西方向で、底は緩やかに南東方向に下がり、凹凸がある。埋土は2層で、下層(黒褐色泥土層)は弥生時代から古墳時代、上層(黒灰色砂泥層)は古墳時代から平安時代の遺物を含む。

平安時代以降の遺構には、瓦溜・土壙・柱穴などがある。瓦溜(一辺3～10m、深さ0.5～0.8m)は、調査区全域で11箇所検出した。埋土は茶褐色砂泥層で、瓦が多量に投棄され、土師器・須恵器なども少量含む。土壙も調査区全域で検出した。埋土は暗灰色砂泥層で、平安時代の土師器・須恵器を含む。特にS K 12では土師器皿が多量に出土した。柱穴は調査区西部で検出したが、建物としてまとまらない。

遺物 遺物は、整理箱に279箱出土し、大半が瓦である。瓦類は主に瓦溜から出土し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・有段平瓦・鬼瓦がある。平安時代後期のものが主であるが、一部鎌倉時代のものも含まれる。

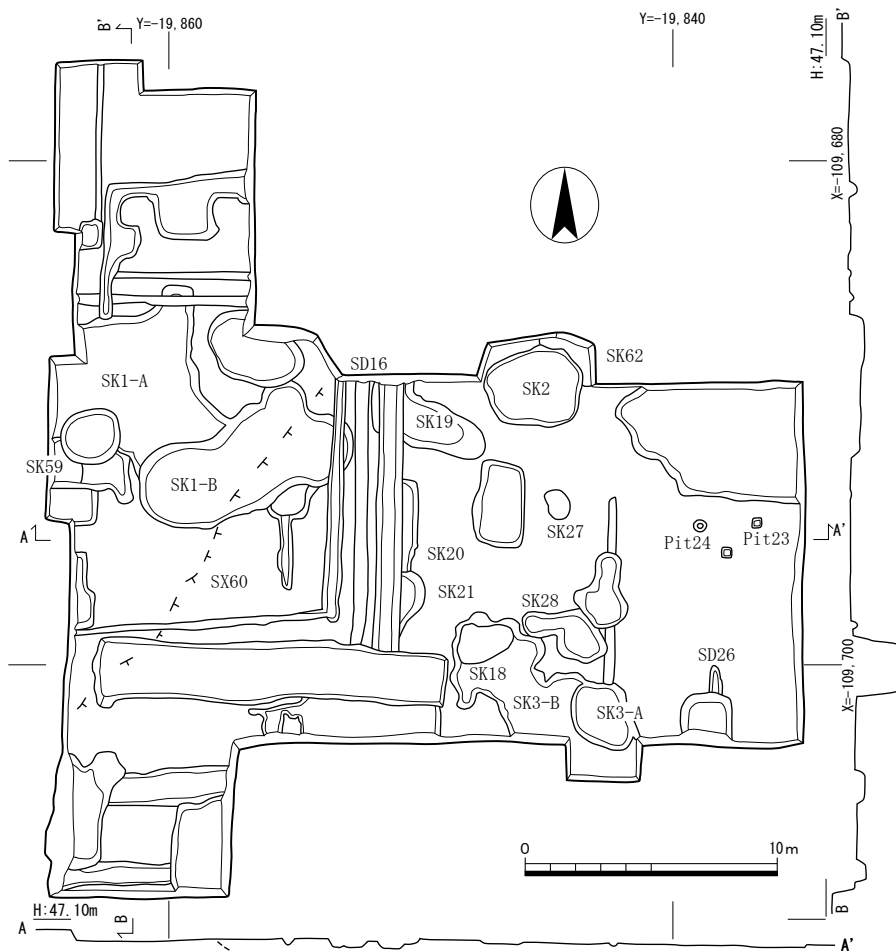


図61 遺構実測図 (1:300)

軒丸瓦は 137 種 413 点が出土し、複弁蓮華文 (34 種 82 点)・単弁蓮華文 (45 種 136 点)・巴文 (57 種 194 点)・宝相華文 (1 種 1 点) がある。軒丸瓦の産地は、山城が約 8 割を占め、播磨は 1 割と少ない。丹波・讃岐・大和は少量である。各種の出土点数は、8 類 26 点、1 類 22 点、10 類 21 点、4・6 類 13 点、9・11 類 12 点で、他はいずれも 1 種 10 点以下である。

軒平瓦は 138 種 286 点が出土し、均整唐草文 (93 種 158 点)・偏行唐草文 (15 種 50 点)・半截花文 (2 種 8 点)・剣頭文 (12 種 40 点)・巴文系 (5 種 13 点)・雁行文 (2 種 3 点)・幾何学文 (9 種 14 点) がある。軒瓦の産地は、山城が約 7 割を占め、播磨は 2 割で、丹波・讃岐・大和は少量である。各種の出土点数は、13 類 18 点、19 類 17 点、22・26 類 13 点、

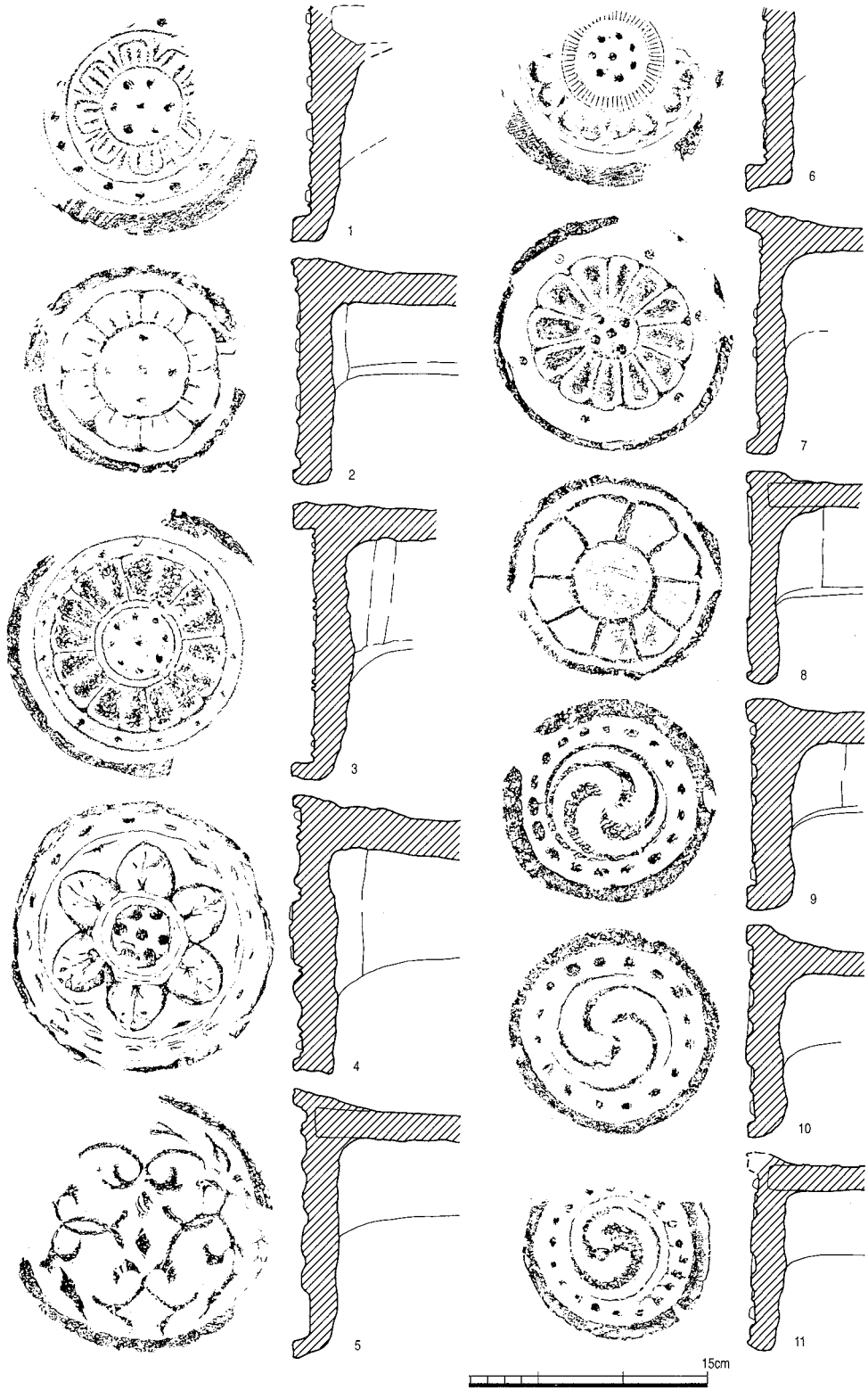


图62 軒丸瓦実測图 (1:4)

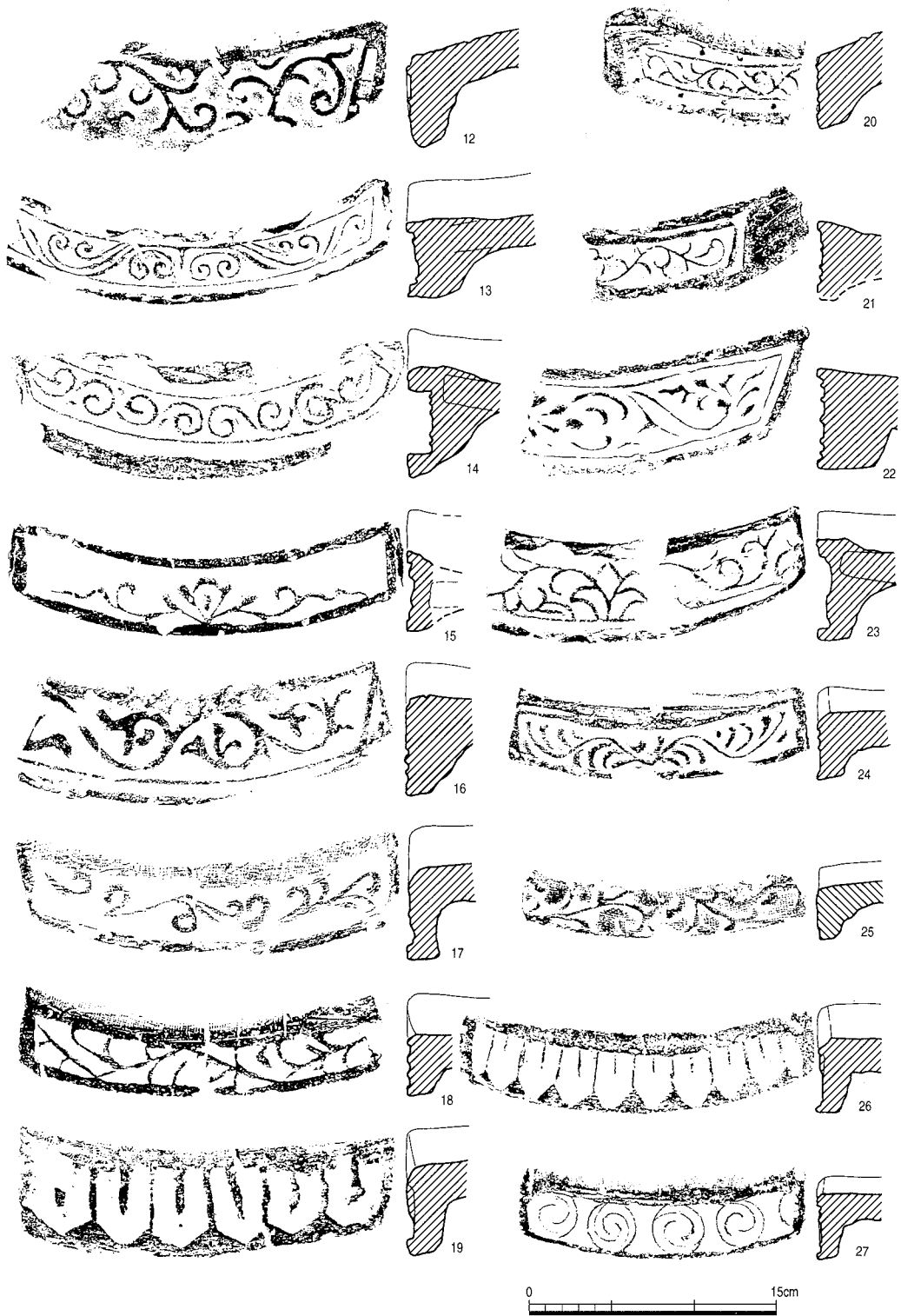


图 63 軒平瓦实测图 (1:4)

17・24類10点で、他は1種9点以下である。

土器には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・磁器などがある。弥生土器（中期から後期）と古墳時代の土師器・須恵器は、S X 60から出土した。平安時代の土器は整地層や土壙・瓦溜から出土したが、量は少ない。土製品には緑釉土塔があり、瓦溜から出土した。石器には石棒・石包丁・石斧・砥石があり、S X 60から出土した。

小結 調査地下層で検出した落込（S X 60）は、弥生時代から古墳時代にかけての自然堆積で埋まるが、上部は寺院造営直前まで窪みとして残り、造営工事で埋められる。その後、建物範囲に限らず、広範囲に整地が施工される。施工時期は、出土遺物からみて11世紀から12世紀初頭と推定できる。

『江都督納言願文集』には、阿弥陀堂の規模は三十三間四面と記載されている。この通りとすれば、北側の調査（第23次調査他）の成果からみて、当調査地で堂の南東部を確認することが予測できた。しかし、調査では阿弥陀堂に関連する遺構は検出できなかった。このため、阿弥陀堂の規模は11間以上、20間以下と考えざるを得ず、当調査地は伽藍内の空閑地と推定できる。

出土瓦は、12世紀前半の尊勝寺創建期のもの、12世紀中頃から後半にかけての堂塔補修などのものがあり、鎌倉時代のものも少量みられる。瓦溜には、焼瓦を多く含むものと、そうでないものがあり注目できる。（上村和直・西大條哲）

註 調査次数は、上村和直「白河に関する基礎的検討 ―調査と研究の動向―」『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993 による。

30 尊勝寺跡・岡崎遺跡 2 (図版1・28)

経過 調査地は、尊勝寺跡推定寺域の北部中央にあたり、岡崎遺跡に含まれる。調査地周辺では、南側(第23・24・29次調査)と西隣(第25・28次調査)の調査で、推定阿弥陀堂を検出した。調査目的は、寺域内伽藍の解明と下層遺構の検出である。なお、この調査は第63次調査にあたる。

遺構 基本層序は、第1層黒色土層(近現代盛土、0.2～1.0 m)、第2層灰色砂泥層(中世、0.1 m)、第3層整地層(平安時代地業、0.7～1.0 m)、第4層黄灰色砂層(無遺物)である。3層上面(標高45.8 m)で、平安時代後期から現代の遺構を検出した。

平安時代の建物S B 10は、調査区南部で検出した。位置や構造から、推定阿弥陀堂(梁行2間、南北棟、二重庇)の東北隅部に相当する。検出した礎石据付痕跡は、S B 10 - 42～44が庇、S B 10 - 38～41が孫庇にあたる。柱間寸法は以前の調査と同様で、身舎の梁行は4.66 m、桁行は庇が4.51 m、孫庇が3.61 mである。礎石は抜き取られるが、S B 10 - 41内に花崗岩礎石の一部が残存する。S X 100は雨落の石敷きで、孫庇から3 mの位置にある。孫庇の南側はS X 100上面から約20cm高く、亀腹となる。

庇の礎石据付痕跡(S B 10 - 42～44)の構造は、円形掘形(径1.7～2.0 m、深さ0.8

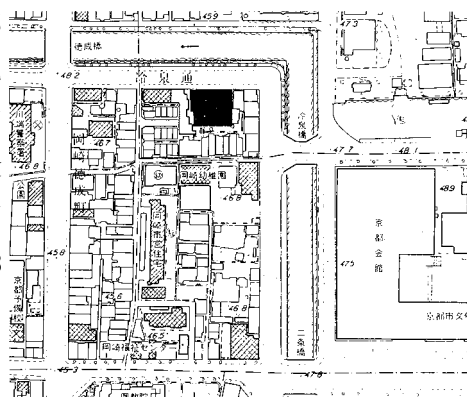


図64 調査位置図 (1:5,000)

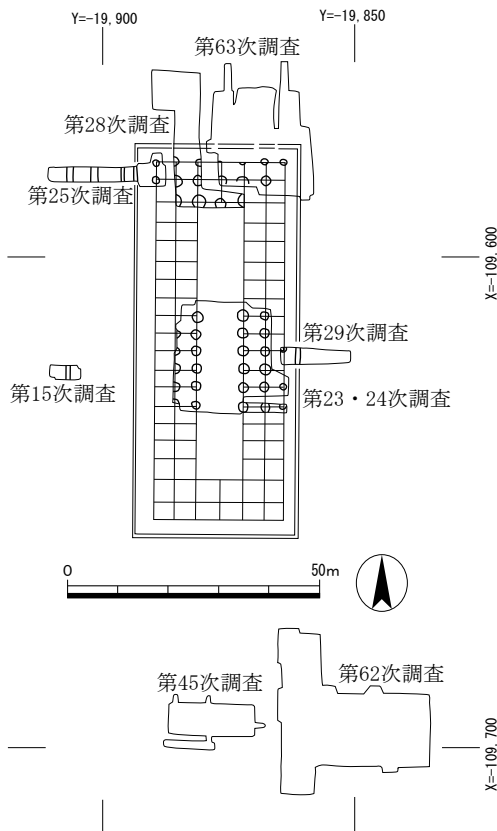


図65 推定阿弥陀堂復原図 (1:1,500)

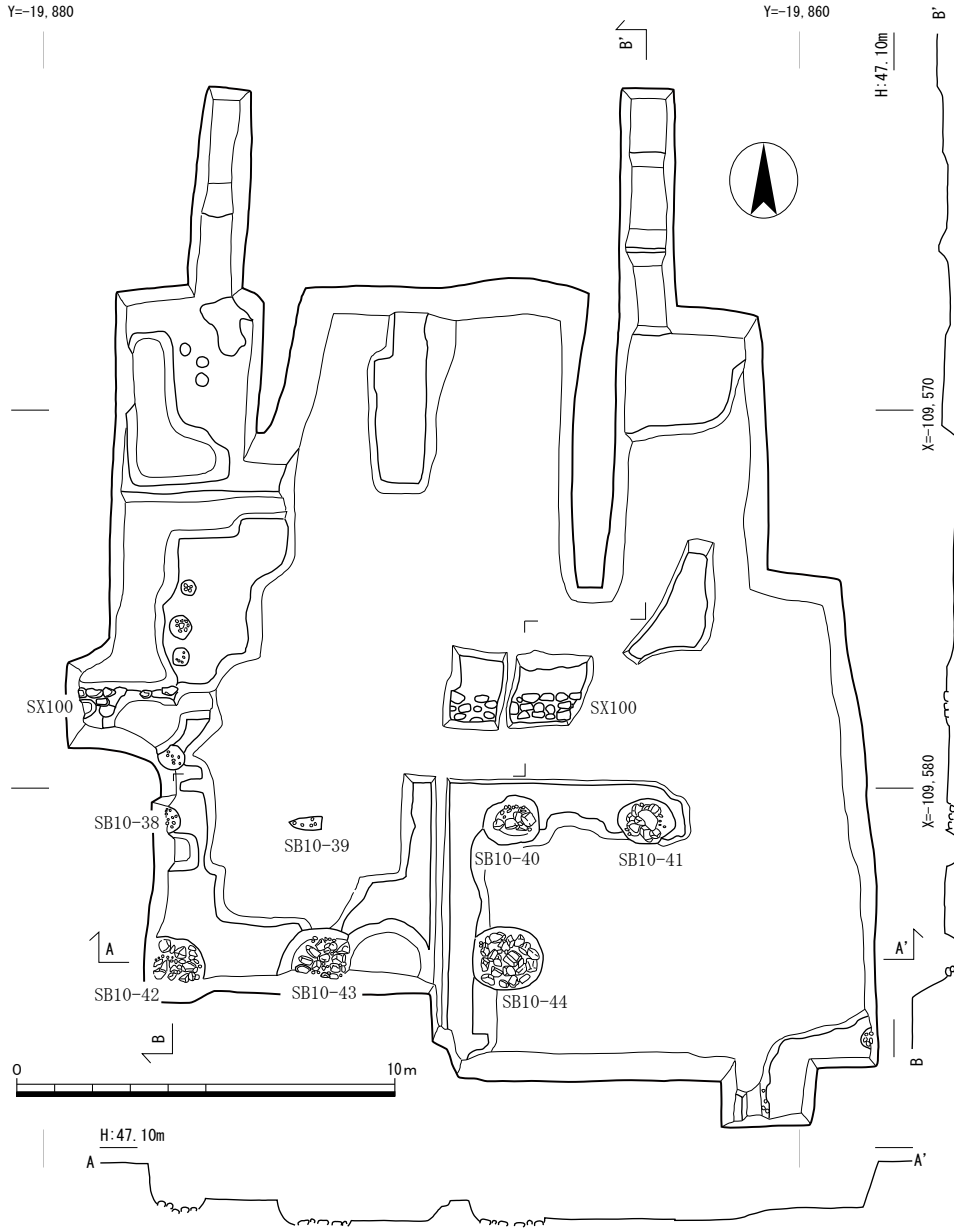


図66 遺構実測図 (1 : 200)

m) の底に大きな根石 (一辺 0.4 ~ 0.7 m、厚さ 0.3 ~ 0.4 m) をドーナツ状に据え、その中に同大の石を据える。更にその上に、同大の石をドーナツ状に積み、中央の窪みに礎石を据える。石の間には、拳大の石を入れて組んでいる。孫庇の礎石据付痕跡 (S B 10 -

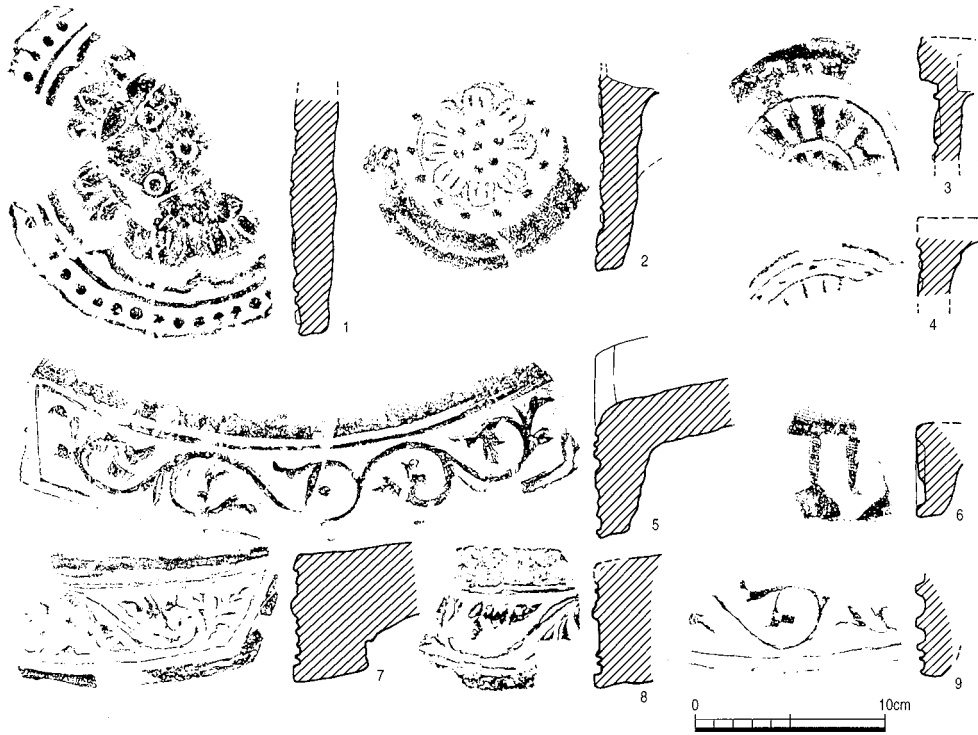


図 67 軒瓦実測図 (1:4)

38～41)の構造も庇と同様であるが、掘形(径1.3～1.5m、深さ0.5～0.7m)・根石(一辺0.3～0.5m、厚さ0.2～0.3m)の規模が小さい。雨落(SX100)の構造は、溝状の掘形(幅0.9m、深さ0.2m)を掘り、自然石(一辺0.3～0.4m、厚さ0.1～0.2m)の平坦面を上面にして3列並べる。据付けには、掘形底部に小礫を用いる。

S B 10の掘込地業は、建物側柱の外側10m以上の範囲に及び、底部は北から南へ下がる。地業は3層で構成され、下層(厚さ0.4m)は暗灰色泥土層で、部分的に黄灰色砂層が入る。中層(厚さ0.3～0.6m)は黒色土・黄色砂・褐色土・灰白色粘土を5～10cmの厚さで版築する。上層(0.1～0.2m)は灰褐色砂泥層で、建物部分のみ残存する。上・中層は硬く締まるが、下層は締まってない。地業から、土師器皿・須恵器鉢・白磁碗・瓦などが出土した。

遺物 遺物は整理箱に22箱出土し、大半が瓦類で、土器類は少ない。瓦類は、主に礎石据付痕跡や第3層から出土し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。時期は、いずれも平安時代後期である。軒丸瓦は5種6点(蓮華文4種・巴文1種)、軒平瓦は4種5点(唐

草文3種・剣頭文1種)である。土器には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・磁器などがある。

小結 今回の調査では、推定尊勝寺阿弥陀堂の北東部を検出し、地業や礎石据付痕跡の施工状況を詳細に観察することができた。阿弥陀堂は、高階為家によって長治元年(1104)に上棟、長治二年(1105)に供養した^{註2}。規模は三十三間四面瓦葺きで、丈六無量仏を九体併座、八尺観音・勢至・地藏・龍樹菩薩を各一体、六尺四天王を四体安置したとある^{註3}。既往の調査では、建物の南北規模は11間以上、20間以下と推定している。これを仏像の数や同時代の阿弥陀堂などから考えれば、身舎桁行15間(4.1m・3.6m×13・4.1m)・梁間2間(4.66m×2)で、庇1間(4.51m)と孫庇1間(3.61m)が巡る、十五間四面の堂宇とするのが最も妥当である。(上村和直・西大條哲)

註1 調査次数は、上村和直「白河に関する基礎的検討 一調査と研究の動向一」
『杉山信三先生米寿記念論集 平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会 1993 による。

註2 『中右記』

註3 『江都督納言願文集』

31 法勝寺跡・岡崎遺跡 (図版1・29)

経過 動物園医療・救護センター建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都市動物園敷地内の北西隅で、法勝寺(1077年建立供養)推定範囲の一角を占める。金堂の西方、寺院の西境界部分にあたるため、築地跡・西門跡などの検出を期待した。また、調査区の南隣接地で行った昭和56年(1981)の調査(動物園内第3次調査)では、弥生・古墳時代の土器・木器などが多量に出土した自然流路を検出し

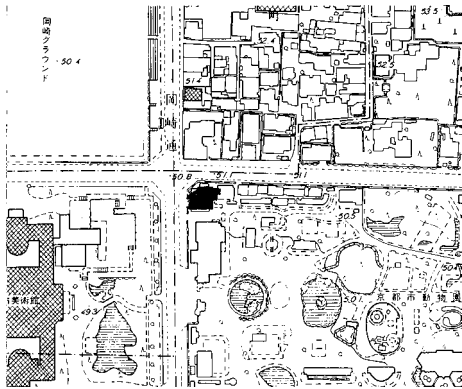


図68 調査位置図(1:5,000)

ており、この北への延長部分の検出も念頭においた。

発掘調査は平成元年(1989)4月24日から開始した。遺構面は現代盛土層直下に検出される黄色砂礫層の上面一面のみであった。この面で江戸時代の掘立柱建物、室町時代の道路側溝などの遺構を調査した。平安時代の遺構、古墳・弥生時代の遺構とも検出されなかった。5月25日に全景の写真撮影を終えたのち、実測図の作成、調査区の部分的な拡張、遺構面の断ち割りなどの作業を行った。断ち割り作業は、遺構面下約2mに広がる平安神宮火山灰層(A.T.)に達するまで掘り進めた。6月2日、火山灰層上に堆積した薄い泥炭層上面から動物の足跡状の遺構を検出したため、調査期間を延長し、断ち割りトレンチを拡張して調査を継続した。その結果、足跡状の遺構の平面的な分布や個々の形状などから、最終氷期の大型偶蹄類の足跡であることを確認し、記録保存に努めた。一部の足跡は遺構面ごと切り取って保存し、他の足跡については個々の足跡を石膏で型取り、凸型模型として残した。6月20日全ての現場作業を終了した。

遺構 江戸時代の遺構には、柱穴底に礎板を持つ掘立柱建物・柱列・溝などがある。掘立柱建物は、東西方向9間以上、南北方向2間の東西に長い建物である。礎板は基本的に長方形の薄い板を用い、北側と南側の柱列では東西方向に、中央の柱列では南北方向に置く。一部の礎板には転用材を用いる。柱穴の掘形から国産染付の細片が出土した。第3次調査で同様の建物の検出例がある。

室町時代の遺構には、南北方向の溝2・46がある。両遺構は調査区西端に、切合う状態で検出した。溝46が古く、溝2が新しい。溝46は、検出幅が約220cm、残存する深さ

は約60cmである。溝2は、溝46と東肩部をほぼ共有するものの、検出幅は310cm以上あり西肩は調査区を外れる。残存する深さは、約40cmと浅い。両遺構からは、瓦が多く出土した。なお第3次調査でこれらと一連の南北溝を検出している。法勝寺寺域西側の南北街路東側溝が中世まで踏襲されていたものとする。

最終氷期の足跡の検出面と、基本層序について述べる。弥生時代以降の遺構面(A層上面)以下は、約2mにわたってアルコース質の水成砂礫層が堆積し、大きくA・B層の2層に分かれる。B層は層中にシルトの薄い層を3層以上含む。B層下には、同じく水成のシルトないし粘土からなるC・D層が約10cm堆積する。足跡はC・D層に覆われ、

保護された状態で、その下の黒褐色泥炭層(E層)の上面で検出される。E層は層厚1～5cmの薄い層で、未分解の植物遺体を多量に含む。E層下には、層厚10～15cmの灰黄色の火山灰層(F層)が堆積する。火山灰層下には、泥炭質黒色粘土層(G層)が40～50cm堆積する。G層は下部に行くに従い砂質が強まり、やがて砂礫層(H層)になる。F層

は平安神宮火山灰層で、足跡の年代決定の手がかりになった。したがって、火山灰層を挟み整合的に堆積するB～H層は低位段丘層相当層と考えることができる。A層とB層の境界は明瞭で不整合の可能性があり、A層は沖積層下部層に相当するかもしれない。

足跡は、E層上面で足跡状の痕跡を22個以上検出した。そのうち15個を確実な足跡として確認できた。しかし、E層除去後の火山灰層上面で、多くのアンダートラック(支持時にかかる過重のため、直接動物の皮膚が触れていない下層に記される足跡)を検出しており、実際はより多くの浅く遺存

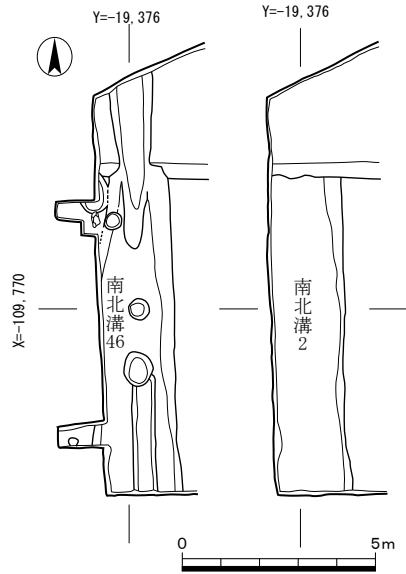


図69 溝2・46平面図 (1:200)

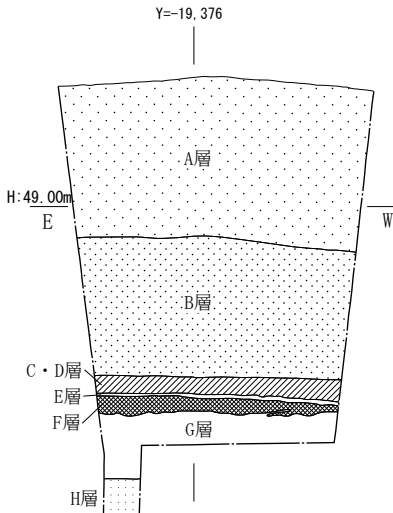


図70 下層層位断面模式図 (1:50)

状態の悪い足跡が存在していたものとする。埋土の断面にはC・D層の葉層がレンズ状に観察でき、足跡がC・D層が堆積する以前にE層上面から踏込まれたことを裏付けた。確認できた15個の足跡は、全て二つに分かれた蹄を持つ大型の偶蹄類のものであるが、種までは特定できない。

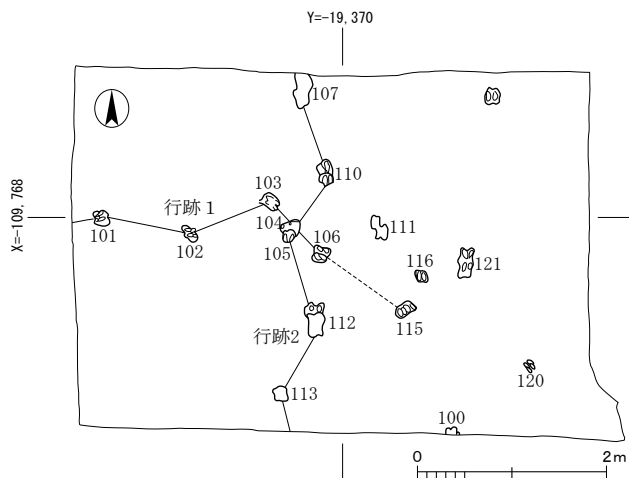


図71 足跡分布図 (1:80)

図示した足跡の105・112は副蹄部分の圧痕を伴う状態で検出し、107・112～114以外は前・後足がセットになった状態で検出した。動物の移動を示す足跡の連なりとしては、東から西に向かう行跡1と、北から南へ向かう行跡2を確認した。また、周辺から樹木の根の痕跡を多く検出した。

遺物 コンテナに44箱出土した。大半は、平安後期から鎌倉時代の平瓦・丸瓦・軒瓦などの瓦類である。また、出土遺物の8割以上が溝2・46から出土したものである。軒瓦は軒丸瓦が21点、軒平瓦が17点ある。土器類は少ない。A層以下の層中からは、人工的な遺物は出土していない。

小結 今回の調査では、法勝寺の明確な遺構は検出されなかったものの、溝2・46は法勝寺の推定地の西限部分にあたり、第3次調査の成果と合わせて中世の法勝寺の範囲と白河街区の条坊の復原研究に手がかりを与えるものとする。また、第3次の調査区で検出した弥生・古墳時代の北東から南西方向の自然流路は検出されなかった。流路は今回調査区を大きく東へ外れていると考える。

予想外の成果として、最終氷期の動物の足跡の検出がある。この時期の足跡は、我が国では長野県野尻湖の検出例について2例目、歩行の様子が判るものとしては初めての例となり、古生物学・第四紀学上貴重な資料となった。同時に、旧石器時代の生活支持面が左京区岡崎一帯に良好な状態で残存していることが明らかになった。今後この面を対象とした調査を継続してゆくことによって、人類の生活痕跡を見いだせる可能性がある。

なお足跡調査に際しては、石垣 忍・神谷英利・亀井節夫・清水大吉郎・樽野博幸・趙 哲済・那須孝悌・吉川周作の各氏を始め、多くの方々の御指導・御協力を得た。(内田好昭)

IV 鳥羽離宮跡

32 鳥羽離宮跡第134次調査(図版2)

経過 調査地は鳥羽天皇陵の南、近衛天皇陵の西にあたる。周辺の調査成果から、鳥羽離宮東殿の園池が見つかることが予想でき、試掘調査の結果もそれを裏付けたので、敷地のほぼ全域を対象とし発掘調査を行った。

遺構・遺物 調査区の南東側で平安時代後期の池を検出した。池は南東方向に落込み、汀線は北東から南西に向かって緩やかな曲線を描いている。肩部は2段となり、下段には洲浜を造っている。洲浜は幅1.0～1.5mで、斜面に薄く砂を置いてから拳大の川原石を敷いている。洲浜の上部には植栽された樹木の根が残っていた。

調査区北西側の陸部では、土壇1基、溝4条を検出しているが、建物などは確認していない。土壇は直径約1.5mの円形で、断面は楕円形である。平安時代後期の瓦が多量に出土した。溝は全て中世の耕作に伴うものである。

出土遺物には、瓦類・土器類・建築部材・木製品・金属製品・経石がある。池から出土した平安時代後期の遺物が大部分を占める。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦がある。軒丸瓦は26種70点、軒平瓦は25種61点ある。土器類には土師器・瓦器・須恵器・白磁がある。また、建築部材には屋根板・野地板・垂木・回り縁・幣軸・柱・床板・根太などがある。転用による二次加工や腐食によりかなり損傷しているものの、当時の建築様式を知る上での好資料である。そのほか仏像の破片・木製人物像・木製五輪塔・経石・羯磨文軒丸瓦など、仏教色の強い遺物も鳥羽離宮を特徴づけるものである。

小結 今回の調査によって、近衛天皇陵の西側の園池の全容がほぼ明らかとなった。中島や南岸に景石を配し、川原石を敷いた洲浜が緩やかな曲線を描いて汀を廻る園池である。また、建物は検出することができなかったが、池から出土した多量の建築部材からみて、近隣に建物があったことは確実である。

(前田義明・山本雅和)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

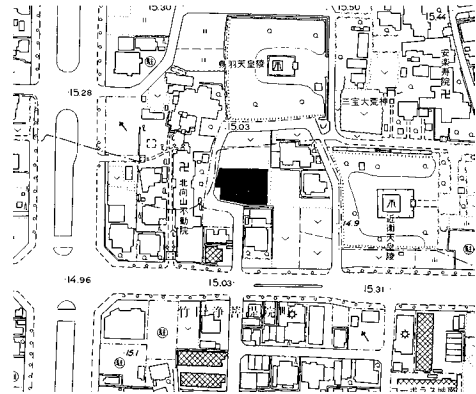


図72 調査位置図(1:5,000)

33 鳥羽離宮跡第 135 - 2 次調査 (図版 2・30～33)

経過 調査地は中島掘端町の南東部に位置する。過去に周辺部で実施した発掘調査では、鳥羽離宮に関する遺構・遺物は検出していない。このため遺構の残存状況を明らかにする目的で試掘調査を実施した。その結果、平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構を発見した。調査地付近で、鳥羽離宮関係の明確な遺構を検出したのは今回が初例であったため、文化財保護課の指導により発掘調査を実施する運びとなった。

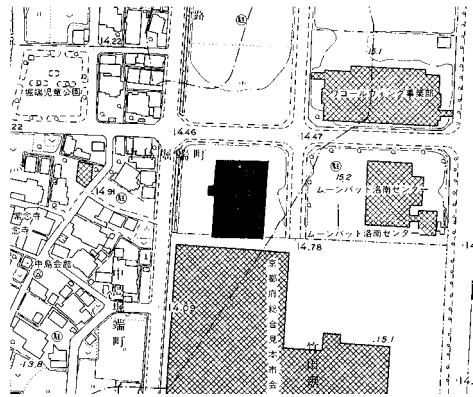


図 73 調査位置図 (1:5,000)

調査は、調査地内に厚く土盛された残土の除去から開始した。調査の進展に伴って、鳥羽離宮期の溝・土壇などを検出した。更に下層遺構の調査を進めた結果、奈良時代から平安時代前期にかけての流路、古墳時代の竪穴住居・柵列・溝などを発見した。

遺構 調査区の基本層序は、現代盛土層が約 190cmあり、以下旧耕作土層 (約 20cm)、オリブ灰色砂泥層 (約 15cm)、オリブ褐色砂泥層 (約 20cm)、灰黄褐色砂泥層 (約 25cm)、灰オリブ色粘質土、暗褐色砂泥層、暗青灰色泥土層である。オリブ褐色砂泥層が鳥羽離宮期の遺構面で、灰黄褐色砂泥層は古墳時代の遺構面である。灰オリブ色粘質土以下の堆積土層からは遺物は出土しなかった。

鳥羽離宮関係の主な遺構には溝 2 条と土壇 1 基がある。溝 1 の規模は幅約 6.3 m、深さ約 1.3 m である。流れは東から南西と考えている。両方の肩口は、素掘りのままで護岸施設は認められなかった。溝内埋土は大きく 4 層に分けられ、上から黄灰色砂土層が 30cm、オリブ灰色砂土層 35cm、灰色粘質土層 25cm、灰色砂土層が約 30cm である。埋土から平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器・瓦類や木製品、金属製品と共に人骨 (頭部 2 体分)、動物の骨、植物遺体などが出土した。溝 2 は、溝 1 とほぼ同様の方向であるが、若干蛇行しながら流れる。規模は幅約 2.0 m、深さ約 0.3 m である。溝の東肩口には、杭を打込み、板をあてた護岸施設が認められた。土壇 3 は調査区南東部で検出した。長辺 1.0 m、短辺 0.5 m、深さ 0.3 m を測る長方形の土壇である。

鳥羽離宮造営以前の主な遺構には竪穴住居・柵列・流路・溝などがある。竪穴住居は 4

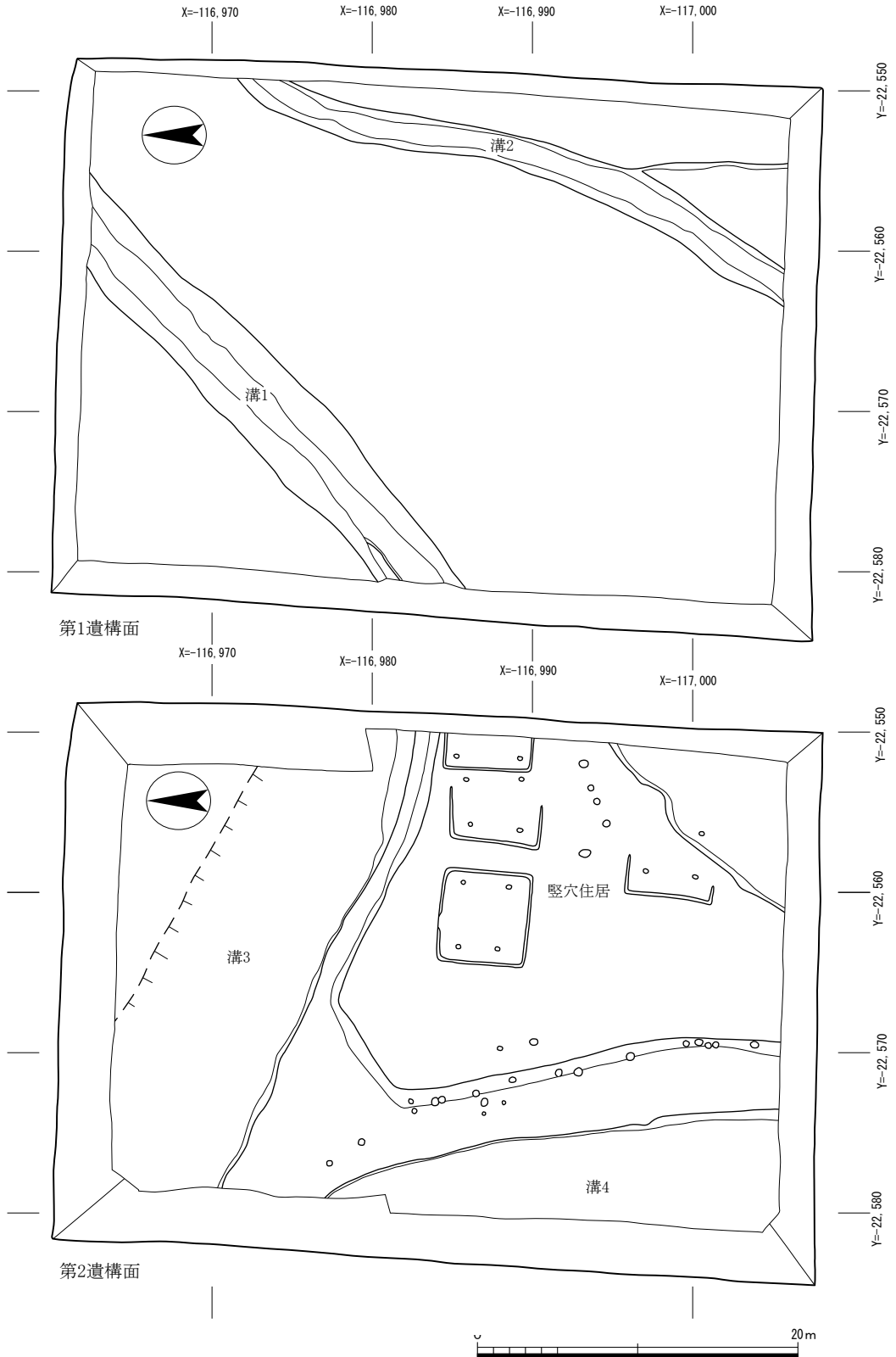


図 74 遺構平面図 (1:400)

棟分検出した。1辺約 6.0 m 前後の隅丸方形の住居で竈のつくものもあったが、出土遺物は少ない。柵列は南北方向のもので、溝 4 の東肩口で検出した。溝は東西方向の溝 3 と、南北方向の溝 4 の 2 条を検出したが、対岸は調査区外のため規模は不明である。溝 3 の底部近くから、ほぼ完形の須恵器・土師器が多数出土した。

遺物 遺物は主に平安時代後期から鎌倉時代の溝や古墳時代の溝から出土した。整理箱で 107 箱分になる。平安時代後期から鎌倉時代の遺物には、土器・瓦類、木製品、金属製品などがある。土器・瓦類には、土師器・須恵器・瓦器・中国製白磁・丸瓦・平瓦・軒平瓦（尾張産）などがある。溝 1 から出土した土師器と瓦器の一部を図 76 に



図 75 溝 1 出土の木簡 (1:3)

図示した。(2)～(5)が土師器、(6)～(12)が瓦器である。瓦器皿(6)は同タイプのものを数点認めた。瓦器碗は、大部分が楠葉系(7～9・11・12)が占め、和泉系(10)は少ない。

木製品には、木簡・木沓・下駄・黒漆塗りの碗や皿・しゃもじ・箸・つまみ付き蓋・人形などがある。木簡は解読できたもので 4 点ある。溝 1 から出土した(1)には、片面に「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」、裏面に「建仁三十八得阿弥陀仏」と墨書している。

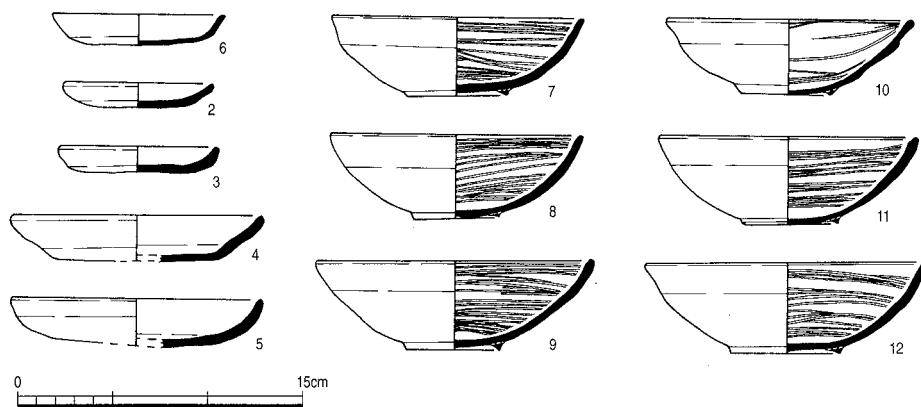


図 76 溝 1 出土土器実測図 (1:4)

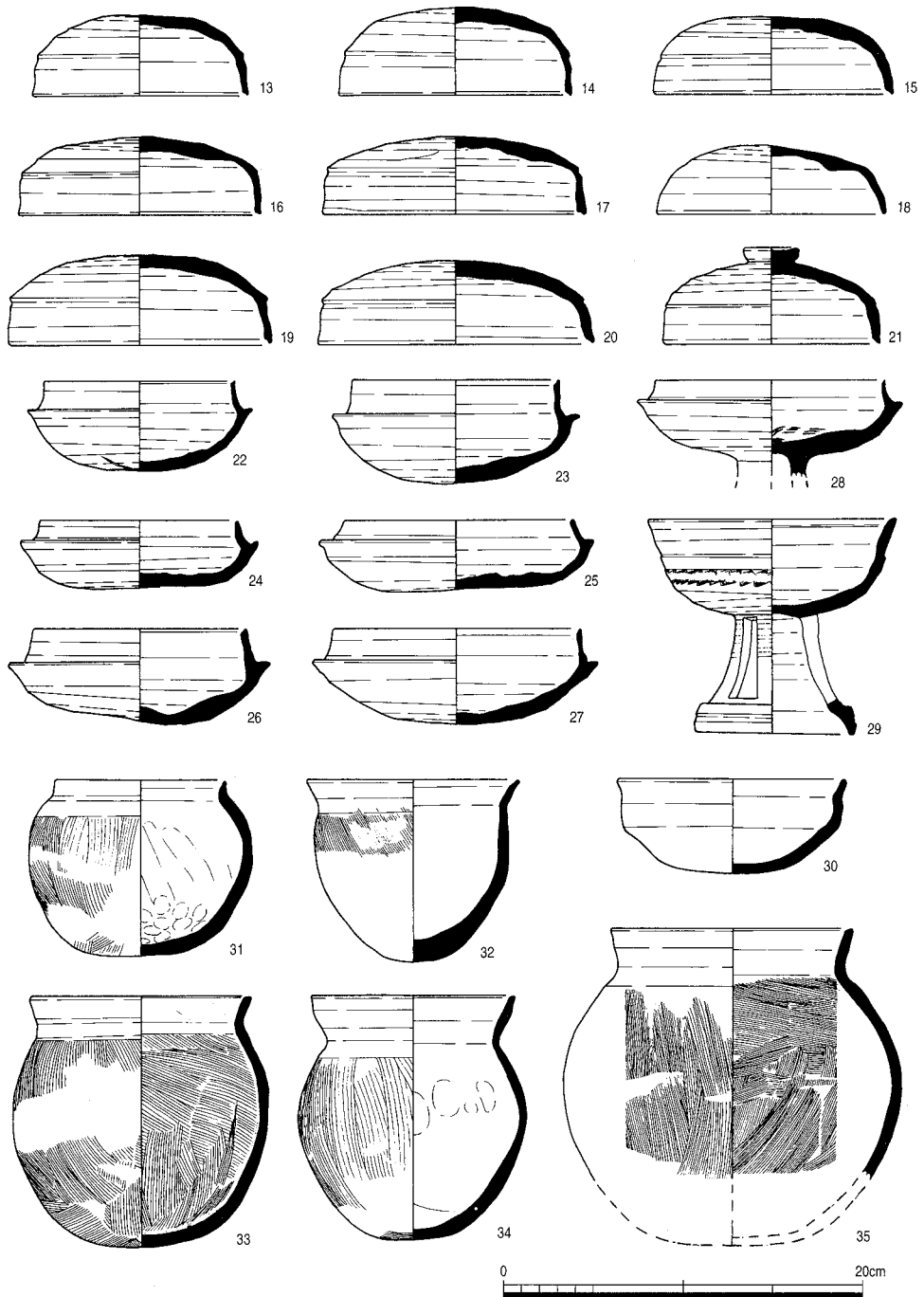


図77 古墳時代の土器実測図(1:4)

肉眼では非常に判読しづらく、実測図には肉眼で確認できた文字だけを示した。供養札と考えられ、「建仁三三十八」とは、建仁三年（1203）四月十八日のことであろう。溝1から出土した人骨との関連が注目される。

金属製品には帯金具・刀子・銭貨などがある。刀子は長さ約30cmで、白木の柄に目釘で止められていた。

古墳時代の遺物には、土師器、須恵器、埴輪などがある。溝3及び溝4から出土した土師器と須恵器の一部を図77に示した。これらの多くは、完形に近い状態で、溝の底に数個体でまとまりを作っていた。須恵器の中には杯身に杯蓋がかぶさった状態で出土した例もあった。土師器（30～35）には杯（30）・高杯・甕（31～35）などがある。いずれも古墳時代後期（6世紀中頃から7世紀前半）に属する。この他、竪穴住居の周辺や溝の底から庄内式や布留式土器に併行する時期のものが少量出土した。須恵器（13～29）には杯蓋（13～20）・杯身（22～27）・有蓋高杯（21・28）・無蓋高杯（29）・甕などがある。杯身（22）には、底部外面にヘラ記号があった。まっすぐに「一」形に線を引いている。有蓋高杯の杯身（28）には、底部内面に同心円文タタキの当具痕跡が残っていた。無蓋高杯（29）は、カキ目や波状文で装飾した後に、ヨコナデで消している。全体にかなり型式差を認めるが、時期は全て古墳時代後期に属する。

埴輪は、溝3・4の埋土から円筒埴輪ないし朝顔形埴輪の小破片を数点認めている。表面は若干損傷しており、溝の上流より運ばれてきたものと考えられる。

小結 調査地周辺部における発掘調査例は少なく、今回の調査が鳥羽離宮跡第1・14次調査に次いで3例目である。今回の調査地は、鳥羽離宮跡の南限に近い所と考えている地域である。こうした場所で、鳥羽離宮併行期の遺構を検出したことは、南限の位置や状況を知る上で重要な発見である。また、出土遺物についても、建仁三年銘の供養札がみつき、共に出土した土器類の実年代が推定できる貴重な資料となった。他に、鳥羽離宮跡の調査で、蓮華文を描いた黒漆塗りの木製の皿や木沓が出土したのも今回が初めてである。

一方、下層から、庄内式併行期から7世紀までの溝、竪穴住居、柵列などが検出できたことは、鳥羽遺跡の広がりや下鳥羽遺跡との関係を考える上で貴重な資料となる。また、鳥羽離宮跡の他の調査でも埴輪が出土している地域があり、今回の出土と考えあわせると、鳥羽離宮地域に多数の古墳が存在していたことは明らかである。

（磯部 勝・山本雅和・鈴木久男）

V 中臣遺跡

34 中臣遺跡第70 - 2次調査 (図版2・34～37)

経過 本調査は都市計画街路西野山・大宅線道路改良工事に伴う、昨年度からの継続調査であり、本年度はⅧ区の調査を実施した。調査地は中臣遺跡の立地する通称栗栖野丘陵の西側段丘端に位置し、以西は旧安祥寺川の氾濫原になる。調査区は2区に分け、東をa区、西をb区とした。a区は比較的遺構が良好に遺存していたが、b区は調査区の西半が削平されて東側とは約1mの段差があり遺構は遺存していなかった。また、b区には南の敷地崖面に以前より石材が露出していることから、中臣十三塚古墳群のうちの1基があるものと想定されていた^{註1}。

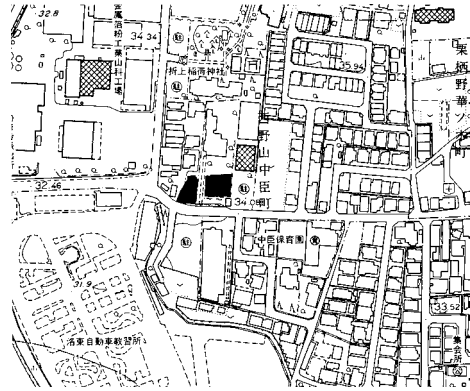


図78 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代前期、室町時代の各時代の遺構を検出した。出土遺物は、整理箱で17箱ある。

縄文時代中期の遺構には土壇群があり、a区で35基、b区で9基検出した。中でもa区土壇12は、幅0.50～0.75m、深さ0.30mで、長さは3m以上の細長い不整形の土壇であり、多量の土器片と石鎌1点が出土した。その埋土には多量の焼土を含むが、土壇壁面は火熱を受けた形跡は認められなかった。出土した土器は、いずれも北白川C式に併行する縄文時代中期末のものと考えられる。

弥生時代後期の遺構はa区東端で竪穴住居1棟を検出した。竪穴住居はその東半が調査区外(Ⅶ区)へ延びるため、西側3分の1程度を調査した。円形の平面形で復原径は約8mとなる。検出面からの深さは0.3mで、床面には炭化材が散乱しており、焼失住居と考えられる。支柱穴は、3箇所検出している。遺物は、埋土から土器片が出土している。

古墳時代後期の遺構は、b区南半で古墳の石室を検出した。石室は石材の大半が抜き取られており、東側壁の一部、最下段の4石が残るのみであった。また、墳丘は室町時代までに削平されており、石室東側に部分的に残る程度であった。しかし、石室床面は石室や墳丘が破壊される以前にある程度埋まっていたと考えられ、ほぼ当時に近い状態が保たれ

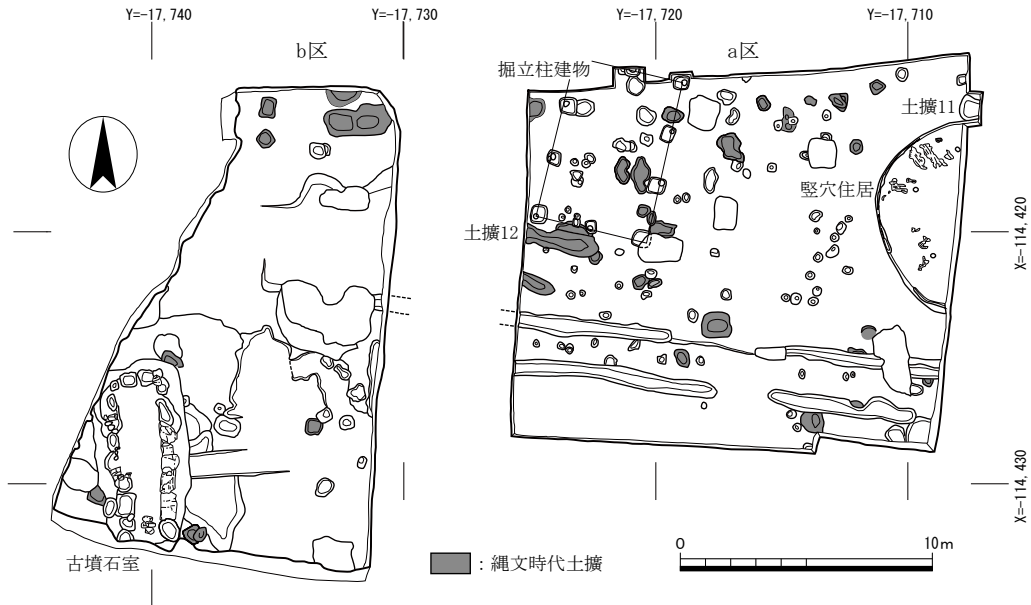


図79 遺構平面図 (1:300)

ていたと思われる。石室の平面形は、残されていた4石と抜き取られた石材の痕跡から復原できた。片袖式の横穴式石室で、長さ34m、幅1.7mの玄室に幅1.0～1.2mの羨道が設けられている。羨道の長さは南を削平されており、全長は不明だが、28m分を検出した。玄室の床面には部分的には失われているが、全面に礫が敷き詰められていたと思われる。また、玄門から南2m付近には閉塞石の一部と考えられる、人頭大の礫群が置かれていた。

平安時代前期の遺構は、a区で掘立柱建物1棟と土壙などを検出した。掘立柱建物は東西2間・南北3間で、柱間は桁行・梁行とも2.1mである。柱穴の掘形はいずれも一辺0.6～0.8mの方形のもので、柱は径が0.2mの円形を呈する。主軸は、真北に対して約15度東へ振る。土壙11は東西0.8m以上、南北0.95mの方形の土壙で、東は調査区外へ延びる。土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土している。

室町時代の遺構は、a区で東西方向の溝2条、b区では古墳の墳丘を削平して行ったと考えられる整地層を検出した。いずれも耕作に関わる遺構であろう。遺物は大半が整地層から出土した土器類であるが、土師器鍋・釜など煮沸形態のものが多い。

ここでは、特に横穴式石室出土の遺物について触れておきたい。石室からは、須恵器・鉄製品・金環・銀環が出土した。図81に示した須恵器には、杯身(1～6)・杯蓋(7～14)・高杯(15・16)・甃(17)・短頸壺(18)・長頸壺(19)・脚(20)・器台(21)がある。須恵器は主に石室玄門付近で出土している。鉄製品には、馬具の他、刀子、鉄鏃、棺に用

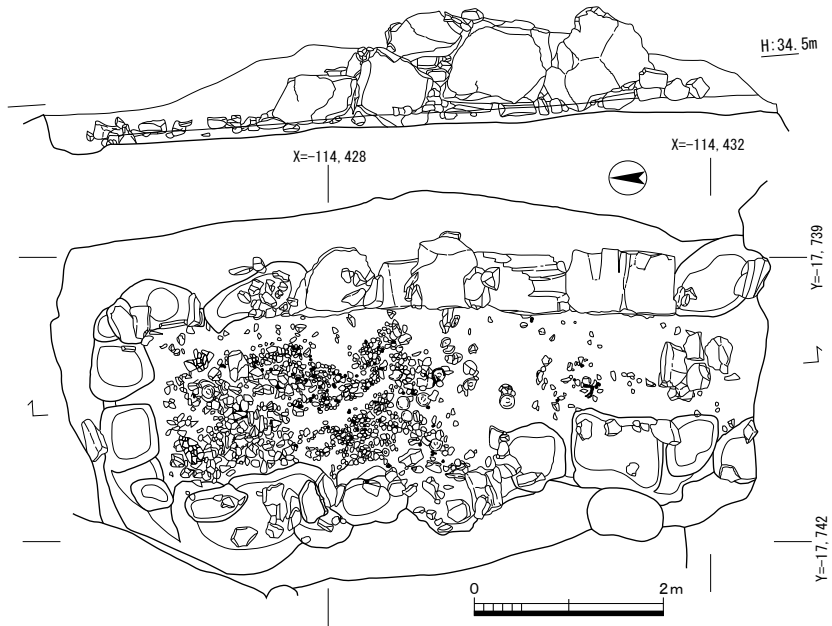


図80 石室実測図 (1:80)

いられたと考えられる釘などがある。馬具には、板状立聞の付く環状鏡板付轡1点、鏡になると考えられる鉸具付き3連兵庫鎖にU字状金具^{註2}の付いたもの1点、U字状金具1点、大きさの異なる2種の鉞各1点などがある。刀子は、刃部破片と柄部破片が各1点あり、同一個体のもと考えられる。鉄鏃は、いずれも埋土中から出土した。有茎平根式のもので、圭頭鏃1点と腸扶柳葉鏃3点がある。釘は16個体分あり、いずれも一辺が0.5cm前後の断面方形で長さ10cm前後である。金環・銀環は、それぞれ銅芯に金箔・銀箔を被せて円形に曲げたもので、金環は2点、銀環は1点出土した。これらの遺物群には、須恵器の年代からみて、6世紀末から7世紀前半の年代が与えられる。

小結 これまで中臣遺跡北西部となる本調査地周辺の調査例は少なく、1977年の第9次調査^{註3}や1984年の公共下水道埋設工事に伴う立会調査^{註4}などがある。

これらの調査では平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物包含層が確認されていた。本調査で検出した縄文時代中期末、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構は、これまで北西部では確認されていなかった時期のものである。また、墳丘は削平されて規模は不明であり、石室石材も大半が失われていたが、中臣十三塚古墳群の一つとみられる古墳の石室や副葬品の一部を明らかにし得た。今後、周辺での調査例の増加が期待される。

(高橋 潔・平方幸雄)

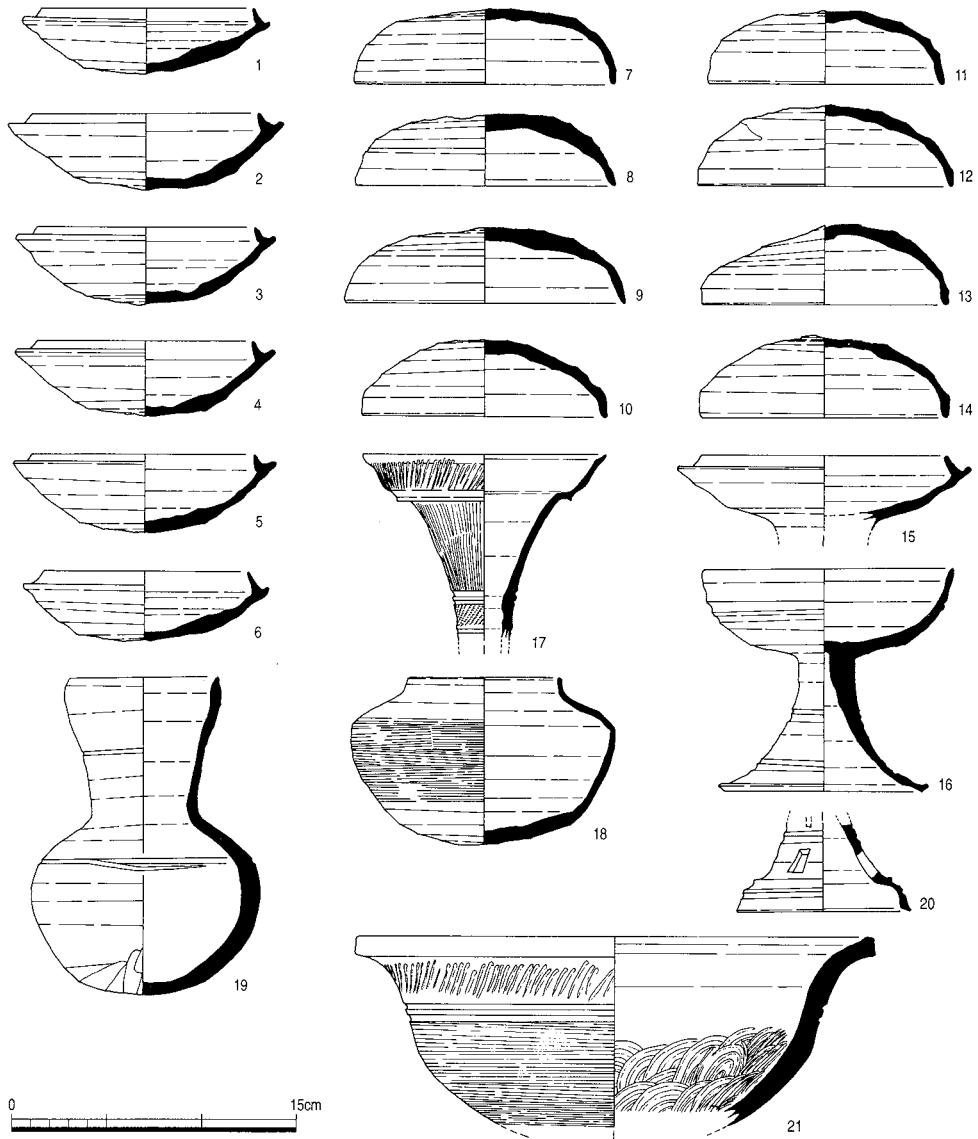


図81 石室出土須恵器実測図(1:4)

- 註1 高橋美久二「東山区中臣十三塚群集墳採集の須恵器」『京都考古』第9号
京都考古刊行会 1974
- 註2 これまでの出土例からみて、ここで言うU字状金具には木製の壺鐙が付くものと考えられる。
- 註3 1977年8月25日から9月10日まで120㎡の調査を実施。(未報告)
- 註4 平方幸雄「中臣遺跡、中臣十三塚、宮道古墳」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987

VI 長岡京跡

35 長岡京左京一条三坊・大藪遺跡 (図版2・38・39)

経過 調査地は駐車場として使用されていたため、その盛土を重機により掘削し調査を開始した。その結果、旧耕作土層直下の黄褐色泥砂層上面(標高14.1m)で各時代の遺構が残存することを確認した。まず中・近世の溝・土塋などの調査を行い、続いて長岡京期の遺構、古墳時代・弥生時代後期と順次調査を進めた。ほぼ同一遺構面上での調査であるが、各遺構ともに重複関係が複雑なため7時期に分けて説明する。

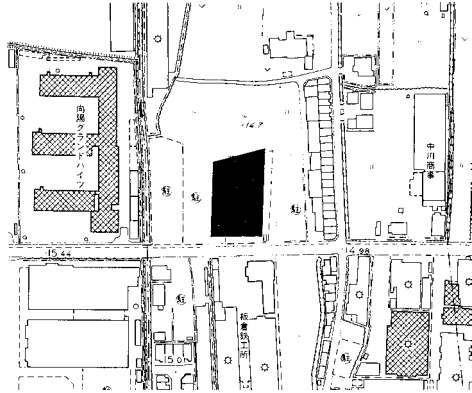


図82 調査位置図(1:5,000)

遺構 7期として中・近世の遺構を調査した。江戸時代の遺構は、溝・土塋・土塋墓などがある。室町時代の遺構には、農耕に伴う多数の小溝群がある。小溝群は1条のみ東西方向がみられる以外は全て南北方向で、北がやや西に振れる傾向を持っている。

6期は、長岡京期である。調査区の南西部で大型の総柱建物を検出した。柱穴は方形から長方形で一辺0.80～1.20m、深さ0.35～0.80mを測る。柱間は全て3mの等間隔で南北5間×東西3間分を認めた。更に西へ延び、5間×5間の規模の倉庫になると考えられる。調査対象地の南部に薄い遺物包含層があり、これを除去した後に南北方向の柵列1条、調査対象地以西に延びる掘立柱建物1棟の他、柱穴数基を検出した。

5期は、古墳時代中期に相当し、溝・掘立柱建物・小柱穴群などがみられるが、いずれもまとまりに欠ける。

4期は、古墳時代前期から中期に推定できる。土塋墓群と溝状の遺構を検出した。

3期は、古墳時代前期と考えられる。5号住居とした竪穴住居1基を、調査区の北部で検出した。規模は2.75×2.90mで、深さは約10cmを測る。小型で長方形を呈する。壁溝は廻るが、柱穴は認めることができなかった。中央部に炉と思われる炭化物層と、その南側の壁沿いに小さな土塋がある。竪穴住居は西部と北東隅を土塋墓により壊されていた。

3期から5期を通じて、調査区の南半部にはいくつかの溝状遺構・小柱穴がみられるが、

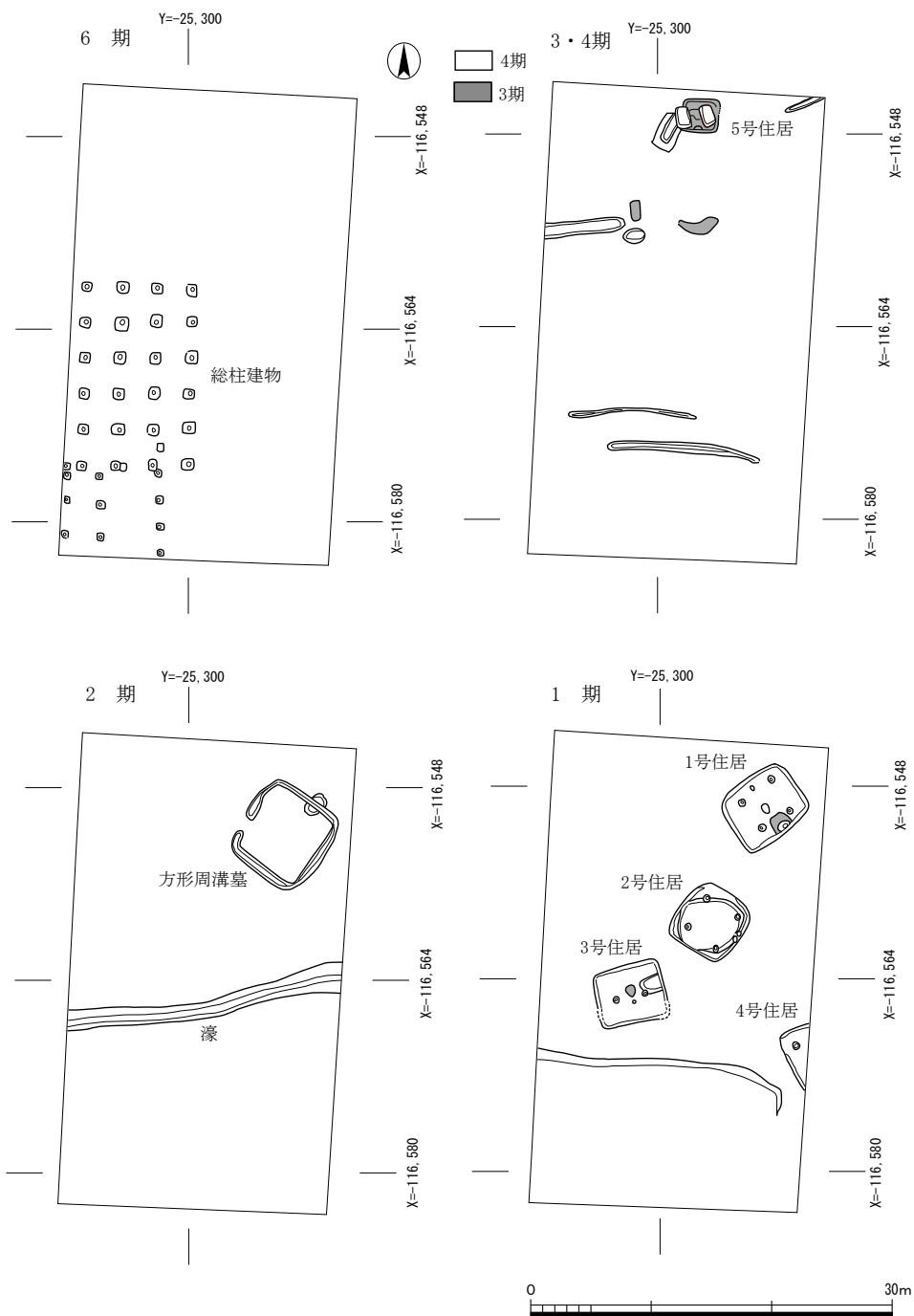


图83 遺構平面図 (1:600)

主要な遺構は北半部に集中している。

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居が造られる時期（1期）と方形周溝墓が造られる時期（2期）の2時期に分かれる。

2期の遺構は、方形周溝墓と東西方向の濠がある。方形周溝墓は主体部を失っている。周溝は7.5×7.6 m、深さ0.2～0.4 mの規模を測り、北西辺の一部が途切れる。周溝の最大幅は約90cmで、四隅では細く、やや浅くなる。南西辺の溝の途中で壺・高杯などの土器が出土した。東西方向の濠は、北東から南西方向にやや傾く。幅約1.5 m、深さ約0.9 mを測り、逆台形状の断面形をなす濠である。畿内第V様式の特徴を持つ弥生土器が多量に出土した。

1期の遺構は、竪穴住居4基と、南半部のほぼ全域と東側の一部に広がる湿地状の堆積がある。竪穴住居は、北から順に1～4号住居としている。

1号住居は5.6×6.5 m、深さ0.2 m程の隅丸長方形で、壁溝が廻り、4基の柱穴を持つ。中央に炉がみられる。南東辺の middle に壁に接して、直径約50cmの土壇とその周囲に小礫を敷き固めた施設を検出した。方形周溝墓が、1号住居上に重なる。

2号住居は5.8×5.9 mを測る。各辺が弧状に外に張り出し丸みを帯びるが、総体的には隅丸方形といえよう。北東辺の一部を除いて壁溝が廻る。4基の柱穴を持つ。内部が大きく不整形な円形状に掘り窪められているため、深さは壁溝付近は10cm程、中央部付近は20cm程になり、ベッド状の施設があった可能性がある。後に、窪み部分を埋めて貼床とし、第2次床面を形成している。その際、小礫と共に小壺1個を埋納した直径50cmの土壇を貼床下に埋めている。この土壇は、南東辺の middle に位置する。炉は認められないが、第2次床面の中央部に薄い炭層がみられた。

3号住居は4.7×5.8 mを測り、長方形をなす。遺存状況は良く、深さは40cmを測り、壁溝は全周する。柱穴は中央部に東西方向に2基並ぶ特異な形状をなす。東側の柱には礎板が据えられていた。炉跡は柱間の北寄りにある。2期の濠により分断されている。

4号住居は、北西部の隅のみ検出した。調査区外に延びるが、隅丸方形と思われる、壁溝を持つ。柱穴は、底部に礎板を据えたものを1基検出している。

遺物 今回の調査で最も注目すべきことは、全遺物出土量の60%を越す弥生土器の出土である。これらは大部分が弥生時代後期の濠から出土したもので、濠の中層から長さ20 mにわたり土器が折り重なった状態で出土した。壺、高杯、器台などの器種があり、その特徴から畿内第V様式に包括できよう。遺存状況は良好で完形品に復原できるものも

少なくない。短期間に、あるいは一気に投棄された状況にある。一方、竪穴住居から出土した土器は少量である。他の時代の遺物は、器種・器形ともに多様であるが、遺存状況はよくない。

小結 弥生時代後期から古墳時代にかけて、調査地は居住域としての日常的空間と、墓域としての非日常的な空間の入れ替わりを繰り返す。調査区の西側には川があることが、既往の調査からわかっている。この川の東岸に弥生時代後期の集落が営まれる。昭和63年（1988）に行った北側敷地の調査で検出した竪穴住居群を含む集落が想定できる。竪穴住居群の次に濠が住居を切って掘られ、更に方形周溝墓が造られる。

古墳時代前期には再び竪穴住居が出現するが、古墳時代の中頃には墓域となる。偏在するものと1基離れるものがあり、計5基を検出した。昭和63年調査地ではみられないことから、なんらかの形で居住域と墓域の区別がなされていたのであろう。

この後、掘立柱建物が造られる時期となる。昭和63年の調査成果では7世紀代とされる。中央部の小柱穴・杭穴群は、東西に並ぶ柵列状にも解釈できるが不明な部分が多く、掘立柱建物の時期に伴うものか、以前にさかのぼるものかは即断し難い。これ以後、長岡京が造営されるまでは、空閑地となる。

長岡京では、左京一条三坊十六町にあたり、宮からはかなり離れた位置にある。今回検出した総柱建物（倉庫）は長岡宮・京を通じても類例をみない大型のものである。この倉庫を5間×5間に復原すると、1町内に占める位置は、建物の南北の中心線が1町を2分する位置となる。また東西の中心線は、1町をほぼ4分する位置にあたり、京造営に関連する問題を提起している。また倉庫が1棟か複数かについては、今後の調査を待たねばならない。昭和63年に調査した北側の地区では検出していないことから、南半の2分の1町に建物群が展開する可能性が残っている。また倉庫の南側の建物群との関係は、西南部の一行は座標に対してやや東に振れ、倉庫の主軸と一致するが、これ以外は逆に西に振れる傾向を持つことや遺物包含層の下層で成立することなどから多少の時期差を認める必要がある。

都が平安京に移ると、一帯は田園地帯に変貌する。江戸時代の中頃までに、北部の一画が墓地になるが、再び田畑となり今日に至っている。

（鈴木廣司）

註 上村和直「長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大森遺跡発掘調査概報』昭和63年度京都市文化観光局 1989

36 長岡京左京南一条三坊・東土川遺跡 (図版2・40)

経過 本調査は西羽東師川の河川改修に伴う、第9次の調査である。調査地付近は長岡京左京南一条三坊九町にあたり、弥生から古墳時代の東土川遺跡にも該当している。

調査地は盛土が厚く、調査深度が深いため、掘削によって現地表面との比高差が大きくなる東側部分には安全のためシートパイルを打ち込んで土止めを行った。調査は残土置場の関係から、調査区を2箇所に分け、北側（1

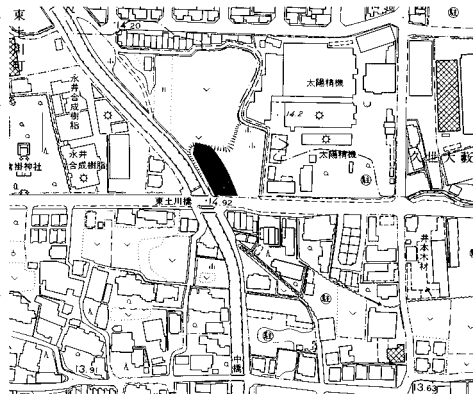


図84 調査位置図 (1:5,000)

トレンチ) から開始し、それが終了後、反転して南側（2トレンチ）を調査した。

遺構・遺物 調査では、弥生時代から中世に至る遺構を同一面（地山面）で検出した。

弥生時代の遺構は、調査区の北部で2条の溝を検出した。これらから中期の土器(壺、甕)がややまとまって出土している。

古墳時代の遺構は、北東方向から流れ、調査区付近で湾曲し、方向を南へ変える河川の一部を検出した。この河川は、幅約12m以上、深さ1.5mで、木製品や土師器・須恵器などの土器類が出土している。また、河川の東岸部ではしがらみ状の遺構を検出した。この遺構は、丸太などの横木を交差させ、打ち込んだ杭で固定し、これを核として砂、粘土、植物繊維などを交互に積み重ねて構築したもので、水量を調節する堰の一部と考えられる。用いられている木材の大半は、自然木を伐採して簡易に加工したものであるが、柱や板材などの建築部材と考えられるものも多く転用されている。

この他に、中世の小規模な溝を数条検出している。

小結 今回の成果は、東土川遺跡に該当する弥生から古墳時代の遺構が検出できたことである。中でも、河川の東岸部で確認した、しがらみ状の遺構は古墳時代後期（6世紀初め）に造られた灌漑用の堰の一部と推定され、当遺跡の性格を考える上で興味深い。

また、今回の調査では長岡京期の遺構は確認できなかったが、河川の最上層からは長岡京期の遺物が出土しており、この時期に上面を整地していると考えられる。したがって付近には長岡京の遺構が存在している可能性が高く、今後の調査が期待される。

(吉崎 伸)

37 長岡京左京五条三坊 (図版2・41・42)

経過 工場新設に伴い、平成元年(1989)10月から12月と、翌年の4月から6月の2次にわたり発掘調査を実施した。同一地区の連続した調査のため、次年度の調査と合わせて報告する。同地は長岡京左京五条三坊に位置すること、及び乙訓郡条里では水將里六坪にあたること、また現社屋建設に先立つ昭和59年(1984)の発掘調査^{註1}で、平安時代及び古墳時代の水田と弥生時代の遺構面を認めていることなどから発掘調査が必要とされる地点である。

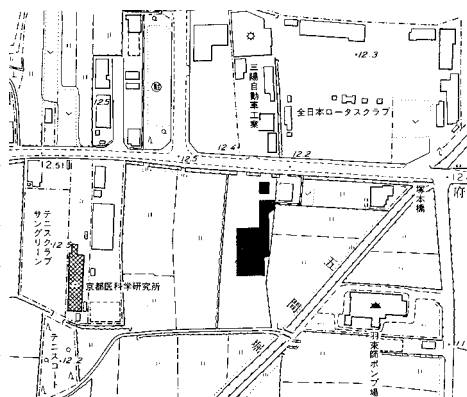


図 85 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査地は、旧耕作土上に北側の府道の高さまで約1.5mの盛土がなされており、これらを取り除いた直下に平安時代中頃の水田が広がる。これを第1水田とし、以下4面の水田と、弥生時代の遺構面を合わせ計6面の調査を実施した。

第1水田は標高10.3～10.4mに展開する。第1水田のほぼ全面を洪水により運ばれた砂礫が覆い、北に向かって厚く堆積する。また第1水田を刻み込んだ自然流路は、洪水の凄まじさを物語っている。しかしこのため、畦畔や人・偶蹄目の足跡が残り、水田発見の契機となった。第1水田では南北に2条の畦畔を検出した。いずれも若干北が東に振れている。また畦畔は数回の補修、造り替えがある。東西の畦畔は遺存状況が悪く、部分的に認めただけである。

第1水田から第2水田まで約20cmの堆積がある。第2水田の南北畦畔は第1水田とほぼ同位置で検出した。東西畦も第1水田と同様に遺存状況は悪い。

第2水田から第3水田まで10～20cmの堆積がある。ここでは幅約80cm、深さ約20cmの東西溝と、それを切る南北幅60～90cm、深さ5～15cmの溝を検出した。南北溝は両肩に畦を持つが、北部では不明瞭に広がり、やがて消滅してしまう。また東西溝の北肩に畦畔が付属するが、この畦畔は溝の埋没後も第2水田の畦畔として踏襲される。

第4水田は調査区の北半部にみられる。北西から南東の太い畦畔に1条の畦が取り付くのみであり、明瞭な水田の姿としては捉えられなかった。第3水田の埋土から5cm未満でこの畦畔の上面がみられる。

第5水田の畦畔は北西から南東方向が主軸となり、それに直交する形にやや低い畦が取り付き、原則として長方形をなす。面積は7.5㎡から20㎡を越すものまで様々な大きさの水田が形成される。調査区の中央に幅約1.5m、高さ約20cmの太い畦畔がみられ、その両

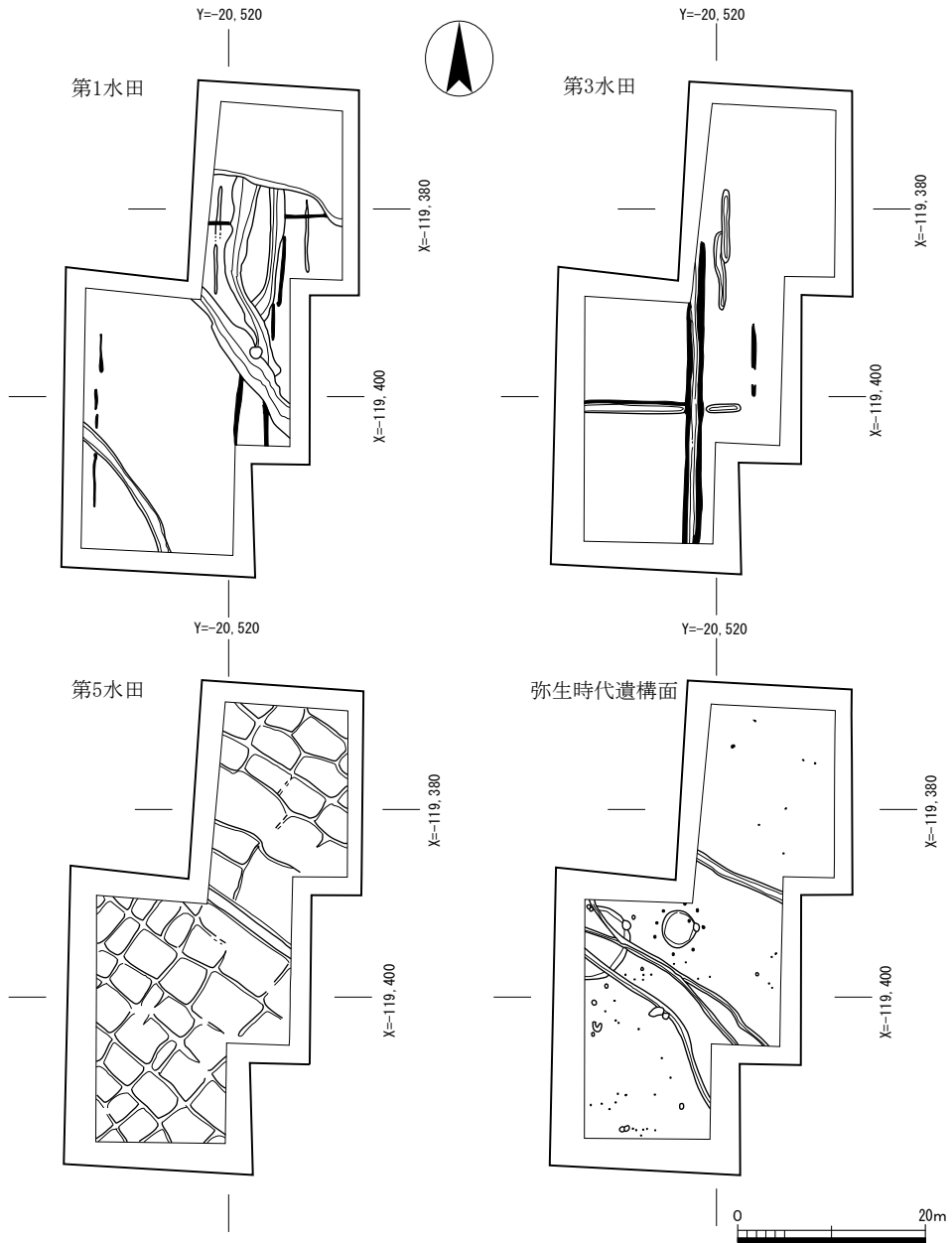


図86 遺構平面図(1:800)

側に水田が展開するが、この太い畦畔を境に両者には高低差があり、調査区の南半部に比べ北半部は約 20cmほど低くなっている。

弥生時代の遺構面では、幅約 30cm、深さ 5～10cmの溝が 3.5 × 3.2 mの楕円形に廻り、その外側に径約 20cmの柱穴 8 基が取巻く遺構を認めた。この他、直径 7.5 mの円弧を描く溝、北西から南東方向に傾きを持つ溝 4 条を検出した。

遺物 出土量は少なく、大部分が破片であるにもかかわらず、それぞれの水田面から出土する遺物は混入がなく、それぞれの存在した時代を推定する指標となった。第 1 水田では、10 世紀中期以降の「て」の字状口縁の土師器皿や、緑釉陶器と共通の形態を持つ須恵器の椀が出土した。第 3 水田では、奈良時代の特徴を示す土器が若干出土した。第 5 水田では 6 世紀後半及び 7 世紀中頃の時期の須恵器が出土した。弥生時代の遺構面では、南側の溝で畿内第Ⅲ様式と考えられる高杯が出土した。しかし第 5 水田などに混入する弥生土器は V 様式に属するものが多い。

小結 今回の調査で検出した弥生時代の 8 基の柱穴に取り巻かれる円形遺構は、内部面積約 8 m²を測る。一案として周溝の外側に堤を築き外部からの水を遮断すると共に、堤の外側に杭を打ち、そこから斜めに架けた 8 本の支柱を中心部で束ねるような工法をとれば、屋根を架けられることから、堅穴住居の可能性を考えておきたい。この後 6 世紀中頃以降に水田が形成されるまで、しばらく空閑地となる。

古墳時代後期に比定できる第 5 水田は、通路と考えられる太い畦畔を挟んで整然と経営されている。北側の水田は弥生時代の面自体が低いことからそのまま地形に沿って造られたものであろう。主軸となる畦畔は造り替えなどが少ないのに較べ、それに取り付く畦は幾度か造り直され、一枚の田の面積変更もしばしば行われている。主軸の畦畔の方向は、京都市外環状線道路建設に伴う発掘調査において伏見区羽東師菱川町などで検出した古墳時代の畦畔にもみられ、調査地周辺に共通した傾きであるといえる。また自然流路なども同様の傾きをもつ例が多く、小畑川系の旧河川の傾きに沿った水田経営がなされていたのであろう。これらの水田は 7 世紀の中頃まで存続し、条里制施行時に大改編を受ける。

これまでの条里制の研究により、乙訓郡ではその痕跡は現在も道路（農道）や水路として残っていることが知られる。調査地近辺もその例にもれず条里一坪（約 109 m²）を一単位とするメッシュを地形図に重ねると、その線に乗ってくる道や水路が数多い。また発掘調査では前述の外環状線の調査や、昭和 51 年（1976）に鳥羽離宮跡調査研究所が実施した、日本専売公社（現・日本たばこ産業 K K）工場新設に伴う調査^{註 2}などで、条里の坪

境の畦畔、溝などを検出している。

これを踏まえれば、調査地は乙訓郡条里の水將里六坪にあたり、府道を境に北側は苗生里となる。また第3水田で検出した東西の溝は、水將里六坪の中央に推定でき、これに交差する南北の溝は一坪を東西に5分割する位置にあたる。しかし東西溝は、西側の第1次調査では認められず、更に今回の調査でも東へ連続しないなど問題は多い。第3水田はこの後洪水にみまわれる。調査区の北半部では厚さ40cmの砂礫の堆積がみられ、耕作地としての機能を停止している。次に水田として甦るのは平安時代になってからである。

第2水田は、調査区北部にある砂礫層から南の一带に展開する。検出した南北の畦畔間距離は約19mを測る。引き続いて第1水田が経営される。畦畔は、ほぼ前位置を踏襲し、畦間も約19mと等しい。また東側の畦畔を境に、水田面を高くし砂礫を覆うことにより耕作面積の拡大を図っている。この後、第1水田は水田面を切り刻んで水路ができるような凄まじい洪水により終末を迎える。ここから出土する遺物の下限は10世紀中頃から後半代に求められ、水田の終末を知る手がかりになった。

調査地は長岡京左京五条三坊七町にあたり、五条条間小路両側溝及び東三坊坊間小路西側溝の検出が望める位置にある。しかし長岡京に関する遺構は認めることができなかった。

これまでの周辺の調査では、調査地より北部は当研究所による外環状線の調査及び西羽東師川改修に伴う発掘調査などで大路・小路を認めている。南部は(財)長岡京市埋蔵文化財センター^{註3}の発掘調査で左京東二坊大路や、左京五条条間小路^{註4}を検出していることなどがあり、当調査地に条坊の施工が及ばなかったとはいえない。長岡京以前から水田耕作地帯であったために、洪水の影響で湿地化しており、施工できない状況であったものか。今後の周辺の調査の進展に期したい。

(鈴木廣司)

註1 長宗繁一・鈴木廣司「左京五条三坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985

註2 杉山信三 他『日本専売公社工場用地内埋蔵文化財発掘調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1977

註3 小田桐 淳・原 秀樹「左京第107次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和58年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1984

註4 中島皆夫「左京第235次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成元年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1991

38 長岡京右京一条四坊 (図版2・43)

経過 当調査は小学校新設計画に伴うものである。まず敷地全域を対象とした試掘調査を実施し、その結果から敷地南西部で発掘調査を実施した。当地は、長岡京右京一条四坊の北限の一・二町にあたり、地形的には現小畑川の右岸、丘陵の崖下に位置している。付近は小畑川を挟んで、東及び西に丘陵が南北に延び、小畑川の流域幅はおのずと制限されており約300mを測る。周辺での調査例は全

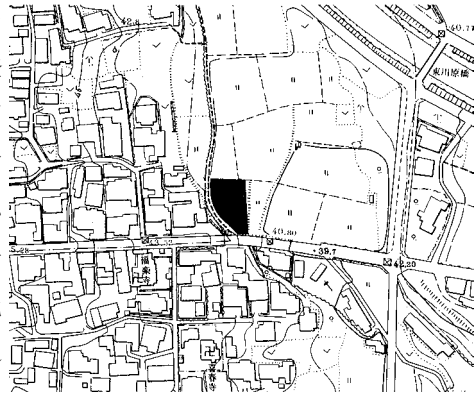


図 87 調査位置図 (1:5,000)

くなく、長岡京跡及びそれ以外の遺跡の状況についても知る事ができない。ただ、敷地の南側を東西に走る道は、古山陰道といわれている。

試掘調査は敷地全体で8箇所設定した。その結果、敷地の大部分で耕土層下に砂礫層の堆積がみられ、小畑川の氾濫による堆積であることがわかった。各トレンチ共に砂礫層は、3m以上堆積していることを確認できたが、底部は検出していない。ただ一部ではあるが、敷地の南西端に古墳時代の遺物を含む土層が広がり、表土下約3mに緑灰色粘土層が堆積していることがわかった。試掘トレンチでは遺構の状況がつかめないため、この部分を対象に発掘調査を実施することとした。以下、その概要を述べる。

遺構・遺物 遺物を含む土層は、調査区の南西側に現丘陵に沿う形で広がり、北西部分は後世の川ですでに削平を受け、砂礫層が堆積する状況であった。この遺物包含層の厚さは、厚い箇所ですら約0.3mを測る。平安時代の旧小畑川の堆積層であろう。

包含層下には、全面に砂層ないしは砂礫層が堆積し、顕著な遺構としては丘陵に沿う形で溝状遺構を検出するにとどまった。溝状遺構の幅は調査区外に延びることから不明であるが、深さは0.2m程度の浅いものである。一時期の人工的な流路であろう。溝状遺構のベースである砂層・砂礫層も、それ以前の小畑川の堆積層である。

遺物包含層や溝状遺構から出土した遺物は、時期的には6世紀後半から10世紀中頃までの遺物を含み、遺物箱で6箱分出土した。古墳時代の須恵器杯身の完形品も含むこと、全体に摩耗がほとんどないことから、西側に位置する丘陵上から流入したものとみられる。他の遺物としては、奈良時代の土師器杯・椀、須恵器杯・蓋・甕、平安時代の土師器、須

恵器、緑釉陶器碗などが出土している。

小結 今回の調査地は全体が旧小畑川の流路内に位置していることが判明した。おそらく、調査区西側に現在も残る丘陵の段差付近が旧小畑川の西岸となるものと思われる。発掘調査区では、ベース層となる青灰色粘土層を確認できたが、東側及び北側の試掘区域では厚く堆積した砂礫層を確認するにとどまった。砂礫層の堆積状況は何層にも複雑に入り組み、大小の砂礫が互層となっており、幾度となく流れを変え、氾濫を繰り返した小畑川の状態を知ることができた。小畑川は長岡京廢都原因

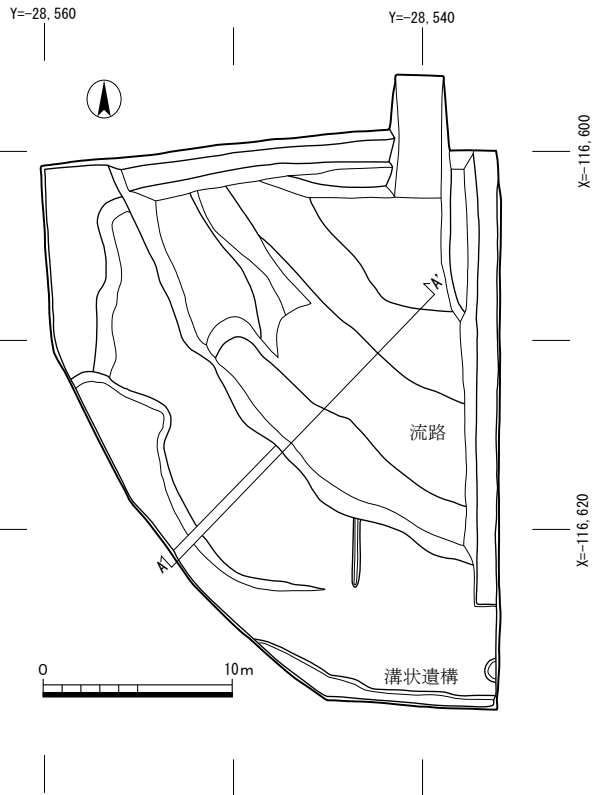


図 88 遺構平面図 (1:400)

の一つになっているほどの川で、当調査地から南東に約 4 km 離れた左京四条三坊の外環状線建設に伴う発掘調査でも旧小畑川の流路を各所で検出しており、多量の砂礫層が堆積し、長岡京の遺跡を削り取って激しく流れていたことがわかっている。

包含層から出土した遺物から、西側の丘陵上には古墳時代から平安時代にかけての遺跡が存在していることは確実で、今後この丘陵上の調査に注意する必要がある。

(長宗繁一)

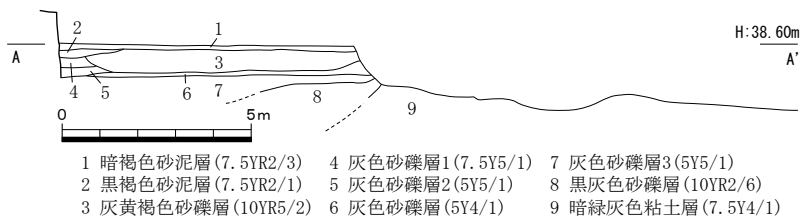


図 89 A-A' 断面図 (1:200)

39 羽東師志水町遺跡 (図版2・44・45)

経過 外環状線建設に伴う継続調査である。今年度の対象地はY-4・6区^{註1}で、長岡京跡の東にあたり、羽東師志水町の集落の北側に位置する。昨年度報告したY-3・5区に連続した調査である。Y区全体は、現羽東師志水町につながる集落跡で、平安時代末頃に始まっていることがわかってきた。したがって、鎌倉・室町・桃山・江戸

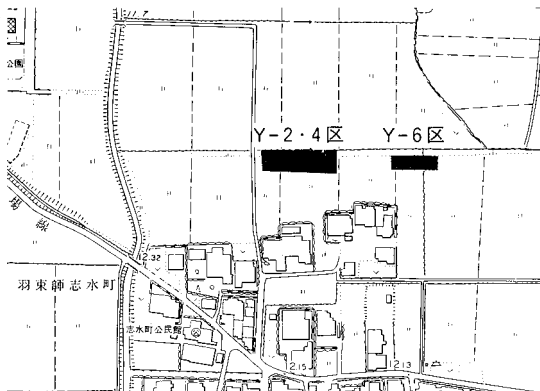


図90 調査位置図 (1:5,000)

の各時代の様子を土地利用の変遷と共に知ることができた。以下、昨年度報告した内容と重複する部分もあるが、Y区全体の概要を述べる。

遺構 Y区全体の遺構のベース層は、平安時代に厚く堆積した砂礫層で、西が高く東に低くなる地形を呈する。平安時代末から鎌倉時代の遺構は、柱穴が砂礫層上のほぼ全域に分布するが、主要な遺構は調査区の東端部の最も低い部分であるY-5・6区に集中する。建物・井戸・土塋・池・溝などを検出した。建物の規模・配置及び形態は、通常の農家と考えるよりも、小規模な邸宅と推定できる内容である。

室町時代の遺構は、Y-2～5区に展開し、Y-6区は湿地となる。建物と墓で構成され、井戸・土塋・濠など多くの遺構を検出した。墓は、木棺の火葬土塋群である。

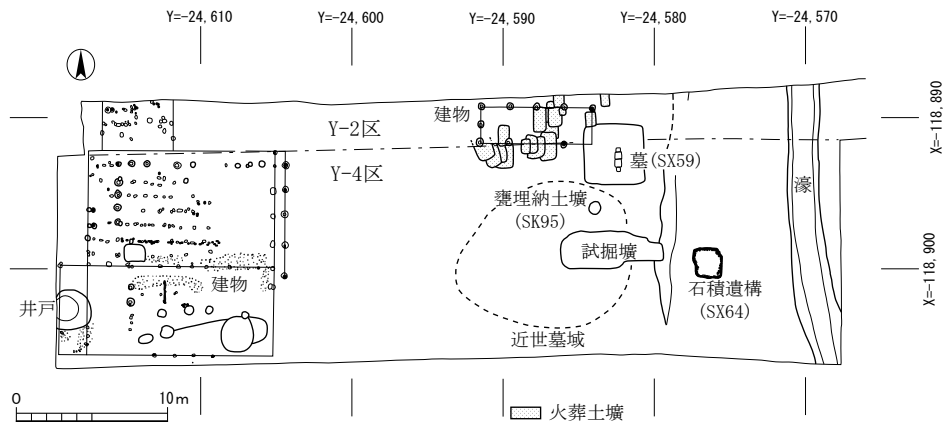


図91 Y-2・4区中・近世遺構配置図 (1:500)

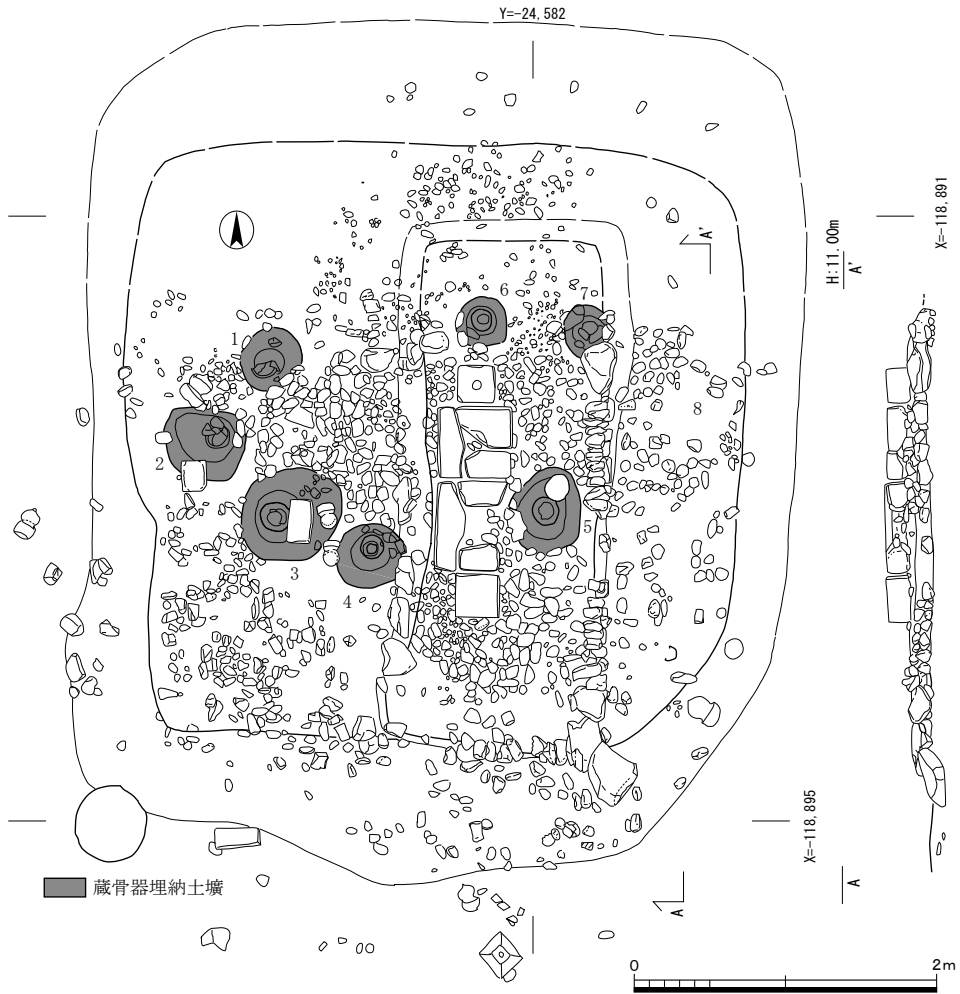


図92 SX 59実測図 (1:50)

桃山時代の遺構は、Y-3・4区を中心に展開し、Y-5区以東は湿地となる。建物・井戸・墓・濠などを検出した。特筆すべきものに、Y-4区中央北辺で検出した墓（SX 59）がある。一片4mの低い方形の塚上に、石で囲んだ南北3m、東西1.5mの長方形の区画を有する。この墓は中心に五輪塔を据えたものらしく、その基礎となる方形の台座が残存していた。更に、塚上に8個の蔵骨器、塚の南側には大甕1個（SK 95）が埋納されていた。この南東側に一辺1.8mの方形の石積み遺構（SX 64）を検出したが、これには埋葬施設はなかった。この遺構で注目されるのは、慶長元年（1596）の大地震により生じた^{註2}とされる噴砂が石積みを分断していたことである。また噴砂はSK 95にも及んでいた。これらの遺構の最盛期は桃山時代にあるが、成立時期は室町時代後半代と考えられる。

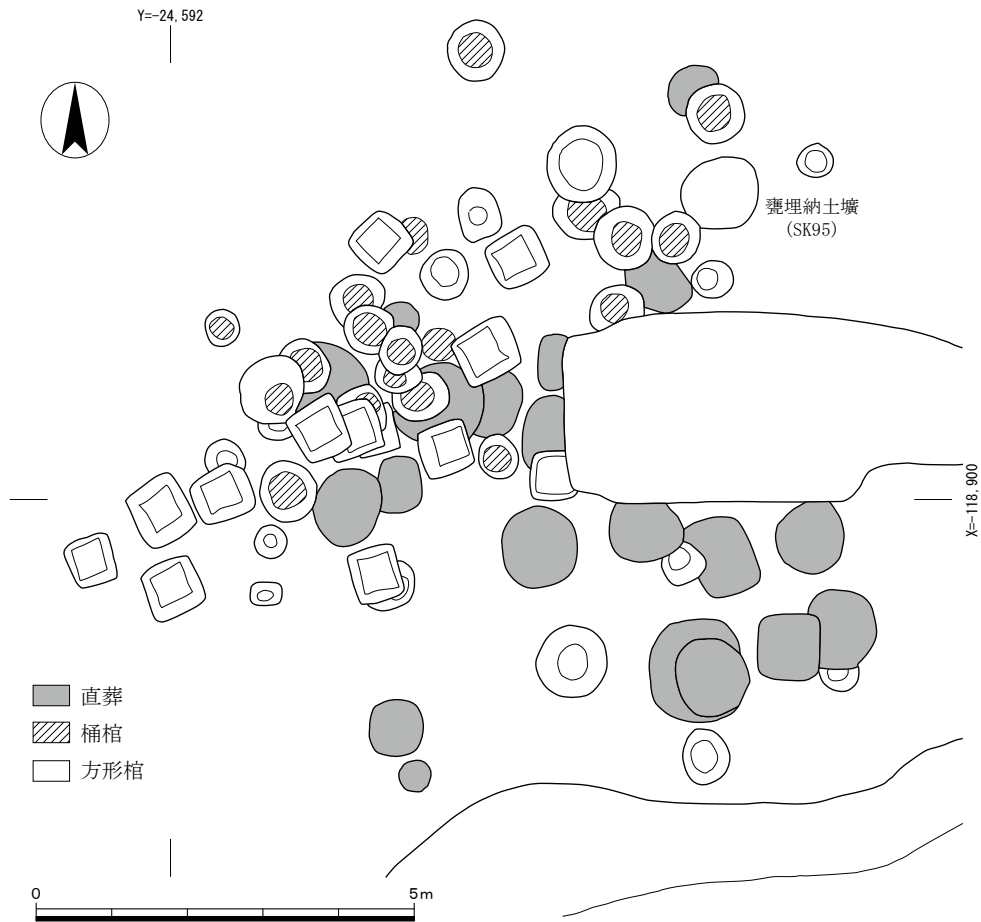


図 93 江戸時代の墓壙群配置図 (1:100)

江戸時代の遺構は、Y-4区に墓が造られる他は、集落に関する遺構はない。墓域は、先の桃山時代の墓の西南側に展開する。一定の区画を何世代かにわたり埋墓としていたもので、多数の墓壙を重なり合った状況で検出した。これらの墓壙は、埋葬形態の変遷を辿ることができ、最初は棺に納められずに直葬されていたものが桶棺となり、次いで方形棺へと変わる。この墓では、寝棺は一例も用いられていない。

遺物 Y-2・4・6区から出土した遺物のみ取り上げる。平安時代末から鎌倉時代の遺物としては、Y-6区の池から多量に出土した12世紀前半代の土師器皿、瓦器椀などがあげられる。またY-2区では、瓦当が50点余り出土した。室町時代の遺物は溝・土壙・井戸などから土師器、瓦器、陶器I・II類、輸入陶磁器などが出土した。量的には、久我

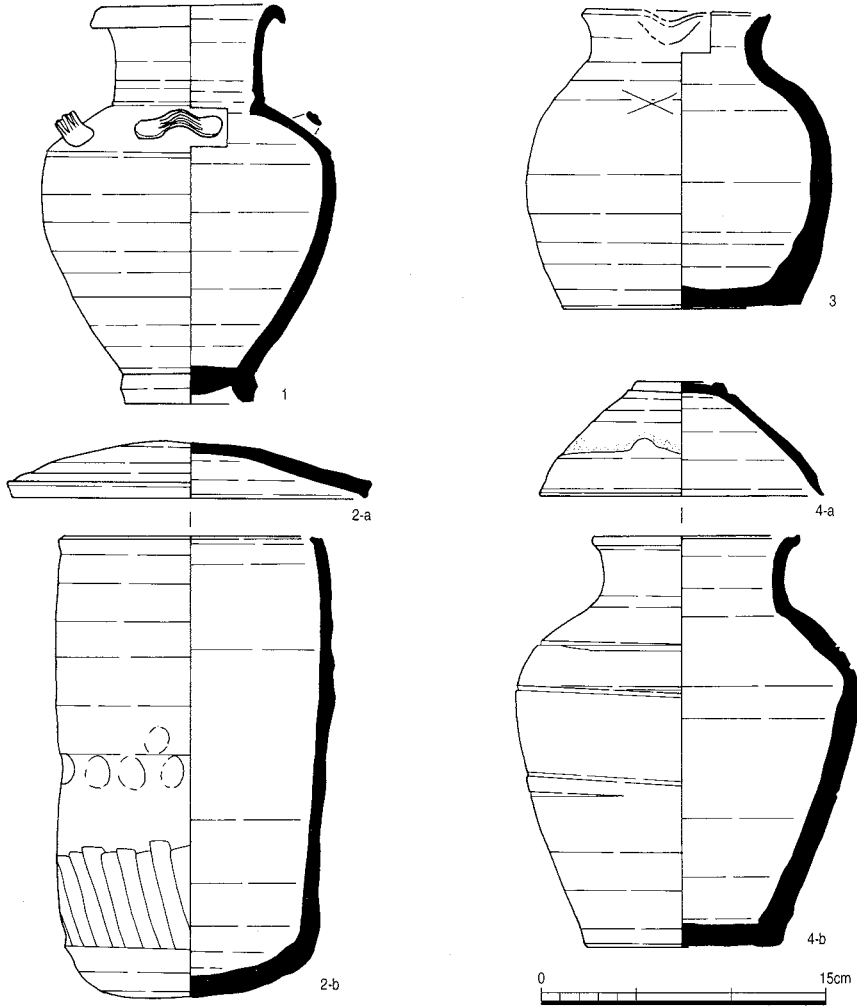


図94 S X 59 出土蔵骨器実測図 (1 : 4)

東町遺跡の同時期の遺物と比較すると集落の中心部から外れているらしく少量である。

桃山時代の遺物は、墓を中心に土師器、陶器Ⅱ類、輸入陶磁器などが出土した。また、墓(S X 59)から出土した蔵骨器には陶器Ⅱ類、施釉陶器Ⅱ類と輸入陶磁器の壺や瓦器の蓋付円筒状容器がある。これらの蔵骨器に転用されたものの中には、鎌倉時代のものもあり墓の成立・存続年代とは軌を一にしていない。江戸時代の遺物は溝、土壇から出土したものと、墓の副葬品がある。土師器、陶器類の他銭貨が多い。墓の形態変化と共に、埋納される銭貨が宋銭などの輸入銭から寛永通寶に移り変わる様子が認められた。

小結 今年度は、羽東師志水町遺跡の調査を実施し、平安時代末から今日に続く志水村

の変遷の一端を知ることができた。文献史料では室町時代頃から現れる「志水」は、平安時代後期には一部ではあるが始まっているといえる。平安時代末期から鎌倉時代にかけては、溝ないしは濠が造られ環濠集落となっていたことがうかがえる。室町時代から江戸時代にかけては、調査区全体のうち一部を除き概して埋葬の区域として使われ、集落本体は南側に位置していた可能性が大である。北側約200 mに位置する久我東町遺跡が短期間に終わる環濠集落であったのに対し、当遺跡は連続して今日の志水町につながっていることがわかる。

外環状線建設関係の調査は、一時中断の年を含めて都合10年間を要した調査と

なったが、今年度調査で全てを終了した。遺跡としては弥生・古墳・奈良時代の集落跡や水田を検出した羽束師遺跡、長岡京跡、中近世の羽束師菱川・羽束師志水の集落跡を調査し、多くの成果をあげることができた。詳細は今後の整理を待って報告したい。

(鈴木廣司・吉崎 伸・長宗繁一)

- 註1 吉崎 伸 他「長岡京左京四条三・四坊、羽束師志水町遺跡」
『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993
- 註2 通産省工業技術院地質調査所 寒川 旭氏のご教示による。
- 註3 陶器Ⅰ類は須恵器系陶器、陶器Ⅱ類は焼締陶器系陶器、施釉陶器Ⅱ類は瀬戸・美濃系陶器である。古代と中世の焼き物を区別する意図で鈴木が使用している。

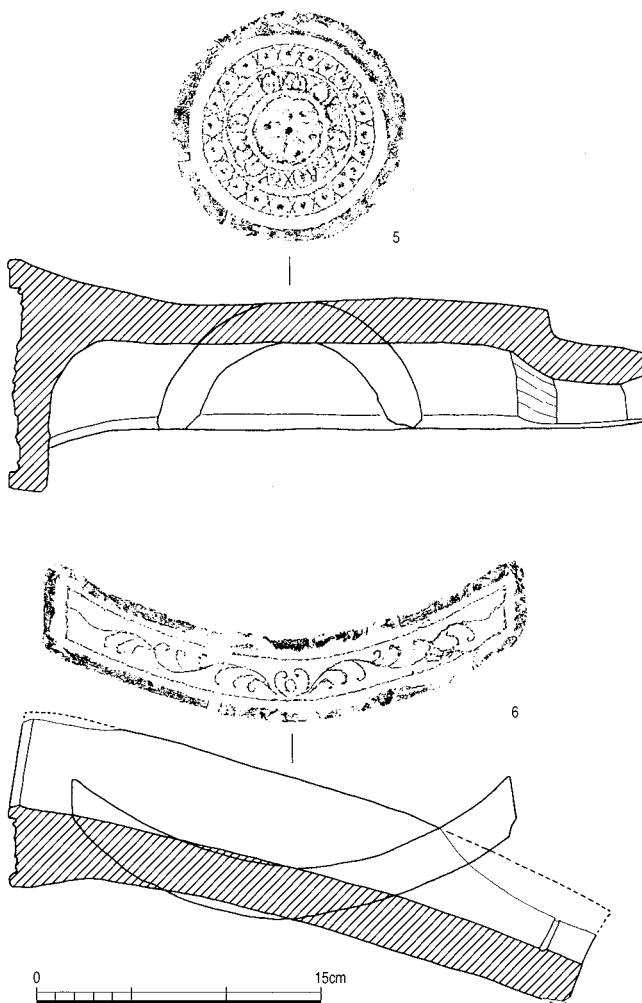


図95 Y-2出土軒瓦実測図(1:4)

Ⅶ その他の遺跡

40 南ノ庄田瓦窯跡 (図版2・46・47)

経過 調査は、市道岩倉上賀茂線の拡幅工事に伴うものである。調査地は、深泥池より岩倉盆地に入る峠の、切り通し部分南東側に位置する。南ノ庄田瓦窯はこれまで3基が知られているが、今回調査した窯跡は昭和7、8年の道の改修工事の際に、崖面に露呈し発見された瓦窯と考えられる^註。

調査はまず樹木の伐採後、地形測量を行った。次いで重機で表土を掘削、人力による発掘調査を実施し、瓦窯は最終的に窯材である瓦を除去し全て解体した。

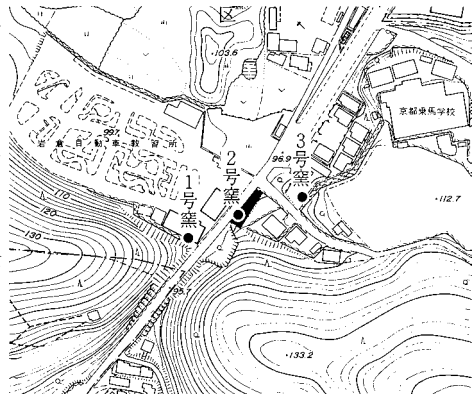


図96 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査地は北東側が崖面であり、南西側も攪乱を受け、調査区の遺存状況は良くない。

遺構には重複関係がみられるが、出土遺物からその大半は平安時代末から鎌倉時代前期の遺構と考えられる。本調査では瓦窯1基、建物2棟を始めとして、溝・土壌などを検出した。

瓦窯は斜面を削り平坦面を造り出し、その奥の崖面に焚口が来るように造られている。瓦窯の西側は破壊されていたが、検出部分についてはおおむね良好に残る。残存長は217cmを測る。瓦窯は分焰壁を持つ分焰床式平窯であるが、構築方法は燃烧室と焼成室側で異なる。燃烧室は地山を横から掘り抜いた地下式で、壁面

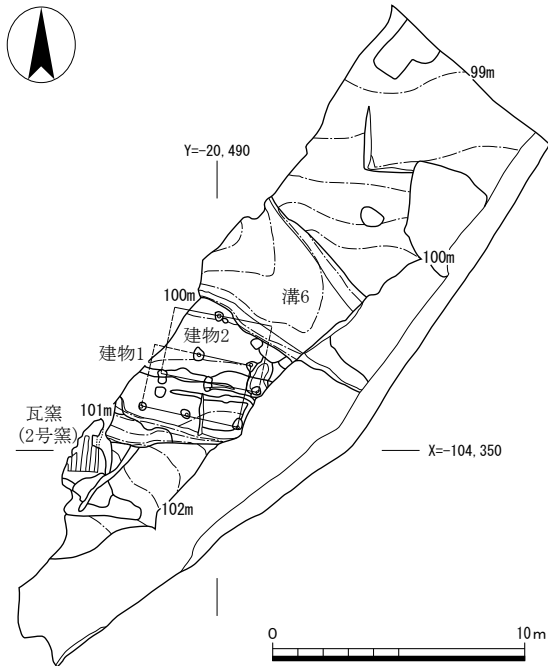


図97 遺構平面図 (1:300)

には手を加えていない。それに対して、焼成室は地山を上方から掘り込み、瓦とスサ入り粘土で壁面を補強するものである。

焚口は梅原氏の報告では支柱石が描かれているが、その後崩落したのか確認できなかった。燃焼室は天井の立ち上がり部分が残存しており、その状況から天井はアーチ状を呈したと思われる。隔壁は分焰床と燃焼室側天井の隙間を埋めるように瓦とスサ入り粘土を用いて造られている。焼成室は奥行112cm、奥壁の幅118cm、最大残存高88cmあり、分焰壁を3本持つ。その1本の幅は21～24cm、焰道床面から高さ37～42cmほどある。

窯は、奥壁と分焰壁そして側壁の一部を造り直している。新しい奥壁は古い奥壁を残したまま、その前面に瓦とスサ入り粘土で新たに造られ、側壁は瓦をほとんど使わずスサ入り粘土で塗り直されている。一方、分焰壁は古い分焰壁を全て除去し、床面をスサ入り粘土を塗り新たに構築している。改修後は、分焰壁が燃焼室側に張りだすために燃焼室が縮小され、また焼成室も奥壁が前進するので、若干狭くなる。

また2号窯の北東側では、2棟の重複した建物を検出した。建物1は東西2間、南北1間(約4×2.5m)の小型の建物である。平坦面を造りだした際の崖面に沿って建てられている。建物2も同じく2×1間と考えられる。ほぼ同規模、同方向に建てられたものである。両者の先後関係は不明である。溝6は建物1の北東側に位置し、南東から北西方向



図98 軒瓦実測図(1:4)

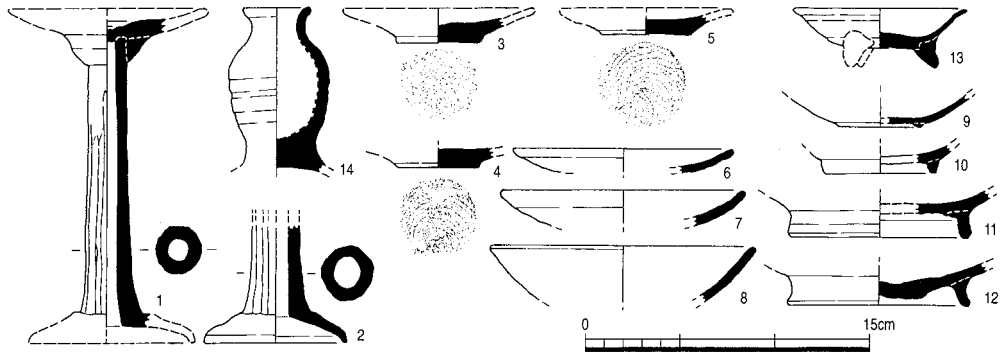


図99 出土土器実測図(1:4)

に延びる。幅3.9～4.9 m、残存長約8 m、深さ0.7 mの比較的大規模な溝である。

遺物 遺物は、丸瓦・平瓦・軒瓦の他、鬼瓦や甃が出土している。軒丸瓦の文様には巴文・蓮華文・宝相華文などがあり、軒平瓦は剣頭文・剣巴文・唐草文・半截花文・斜格子文などがみられる。軒丸瓦は巴文、軒平瓦は剣頭・剣巴文系が主流をなし、時期的な特徴を示すようである。また、土器類は平安時代末期から鎌倉時代前期のもので、白色土器がその多くを占め、高杯(1・2)・皿(3～7)・碗(8～12)・三足杯(13)・瓶(14)などが出土している。本遺跡での出土土器全体に占める白色土器の比率は、京域では考えられないほど大きく、すべて当所で消費された土器とすることはできない。恐らく付近に白色土器を焼いた窯があり、その破棄された土器とみるのが妥当だろう。

小結 本調査で平安時代末期から鎌倉時代前期の、瓦窯と関連する遺構を検出することができた。瓦窯は斜面を削り平坦地を造りだし、その崖面に焚口がくるように構築され、平坦部には小規模な建物が造られる。瓦窯は3本の分焰壁を持つ分焰床式平窯で、燃烧室側のみ地下式に造られる特異な構造を持つ。また瓦窯は改修を受けており、奥壁・分焰壁などが造り直されている。建物は、その規模や瓦窯の脇にあることなどから、薪あるいは瓦を一時的に集積した小屋と考えておきたい。また溝も同じく瓦窯に関連する遺構であると思われるが、その性格は不明である。(高 正龍)

注 これまで、南ノ庄田瓦窯に対する窯番号の整理はされていない。そこで今回の報告にあたり、瓦窯の発見・報告年代順に番号を付与することを提案しておきたい。すなわち木村捷三郎氏が道路の西側で発見されたものを1号窯、次いで道の東側で梅原末治氏が報告したものを2号窯(本報告分)、幡枝2号墳の東側で確認されたものを3号窯とする。木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址—延喜式に見えたる栗栖野瓦屋—」『史林』第15巻 第4号 1930 梅原末治「南庄田の一窯址」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第15冊 京都府 1934 網 伸也「瓦類」『岩倉幡枝2号墳—木棺直葬墳の調査—』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

41 植物園北遺跡 1 (図版 1)

経過 調査地は上賀茂小学校の北側に隣接する社家住宅の旧陳氏宅である。集合住宅が建築されることになり、発掘調査を実施することになった。本調査は弥生時代から古墳時代の集落跡として知られる植物園北遺跡の5次調査にあたる。また当該地は上賀茂神社の中世社家町の範囲とも重なり、関連遺構の検出が予想された。

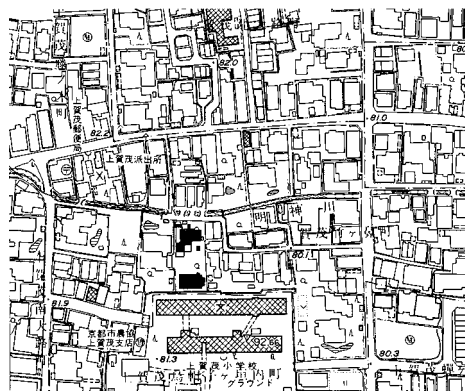


図 100 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 検出した遺構は古墳時代の竪穴住居・柱穴・土壌、鎌倉時代から室町時代の井戸・柱穴群・溝・集石土壌、桃山時代の小石室・集石土壌・柱穴、江戸時代のごみ捨穴・柱穴・土壌などである。古墳時代の竪穴住居は前期が2棟、後期が8棟で、合わせて10棟を検出することができた。これらは後代の遺構によって削平・攪乱されており、遺存状態は極めて悪い。鎌倉時代から室町時代の遺構で特筆すべきは溝(堀)である。溝1は調査区南側で検出した東西方向のもので、幅4.45～4.85m、深さ1.31mあり、東西とも調査区外に延びる。土橋状の張り出しを持つ。溝4は、南西隅を検出したL字形の溝である。幅約1.0～3.0m、深さ0.6～1.1mあり、東と北の調査区外に延びる。いずれも埋没時期は室町時代後半である。

遺物は50箱出土した。その内容は弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、鎌倉時代から室町時代の土師器・瓦質土器・輸入陶磁器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶磁器・瓦・銅銭などである。特筆すべき遺物は、須恵質の素地に陰刻の文様のある華南産と推定される中国陶磁器で、やや青味を帯びた透明感のある釉と部分的に黒釉を施す。

小結 立会調査の成果によれば、本調査区周辺は古墳時代後期の竪穴住居が分布する地点として知られてきた。本調査でそれを面的に確認することができ、竪穴住居が集中して営まれていたことがわかった。また中世上賀茂神社社家町の構と考えられる2条の溝(堀)を検出することができ、社家町関連の遺構が良好な状態で遺存していることが明らかになった。本社家町に対する調査は今回が初めてであるが、今後の社家町の構造を解明する上で重要な第一歩になるものと思われる。

(高 正龍・平方幸雄)

『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度 1990年報告

42 植物園北遺跡 2 (図版1・48)

経過 地下鉄烏丸線北進工事(北大路通から北山通)に伴う遺跡調査のうち、同路線工事に伴った北山通道路上での一連の発掘調査や立会調査については、昭和61年度にほぼ終了している。今回の発掘調査は、北山駅舎に関連する施設の建設工事に伴うものであり、本発掘調査終了をもって地下鉄烏丸線北進工事関係の遺跡調査は全て完了することとなった。

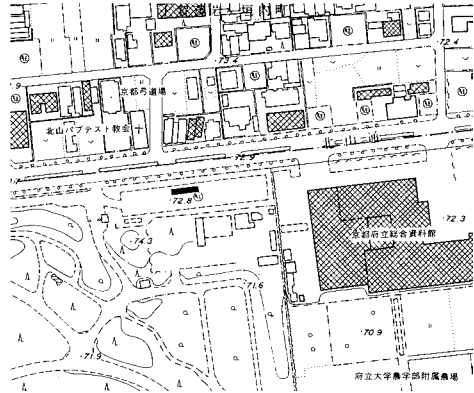


図101 調査位置図(1:5,000)

今回の発掘調査を実施するに先だて、調査対象地内にテストピットを設け試掘調査を行った。その結果、遺構面の遺存している部分が明らかとなり、遺存状況がより良好な部分にトレンチの調査区を設定し、発掘調査を実施した。

層・遺構 弥生時代から鎌倉時代までの、各時期の遺物包含層を検出している。平安時代以前の遺物包含層は、調査区東半部の、地山が東方に緩く下がる傾斜面に堆積しており、弥生時代、奈良時代、平安時代前期の土層が確認できた。

平安時代以前の遺構は、調査区東壁沿いで検出した掘込1とした遺構1基である。掘込1は、調査区内では西肩部から壁面及び底部の一部を検出したにとどまる。遺構の全形は確認できなかったが、堆積土や検出状況からみて、南北方向の溝の一部と考えている。時代を確定できる遺物は出土していないが、層位関係から判断して弥生時代から古墳時代の遺構であり、古墳時代には埋没したものであろう。

平安時代中期から中世の遺構も、検出数は少ない。主なものとしては、平安時代中期の溝状遺構1、鎌倉時代の土壇6、室町時代の溝1などがあげられる。

溝状遺構1は平安時代中期後半代、溝1は室町時代後半代には埋没している。時代差が大きく、直接関連することはないが、両遺構とも西北西から東南東方向へ延び、近接した位置に並走する状態で検出しており、各時期の遺構との関連でみれば、位置や機能が類似した性格を持つ遺構の可能性もある。

江戸時代の遺構は、土壇、ピットなどを検出している。他の時代に比較して、検出数はやや多いといえるが、性格を把握できるものはない。

遺物 堆積層及び遺構から、弥生時代以降の各時代の遺物が、整理箱に5箱出土している。遺物出土量は、全体的に少ないが、これらのうちでは平安時代と鎌倉時代に比定できる遺物にまとまりがみられる。

小結 今回の発掘調査において、弥生時代以降の各時代の遺構、遺物を検出することができたが、両者とも各時代を通じて多くはない。しかし調査成果は、当地を含む植物園北遺跡が長い歴史を持つことを示している。当調査地点は、遺構、遺物の検出状況からみて植物園北遺跡とされている遺跡内に含まれているが、各時代を通じて、集落跡などの中心部分からはやや外れた地域に位置していると考えられる。 (長戸満男・小森俊寛)

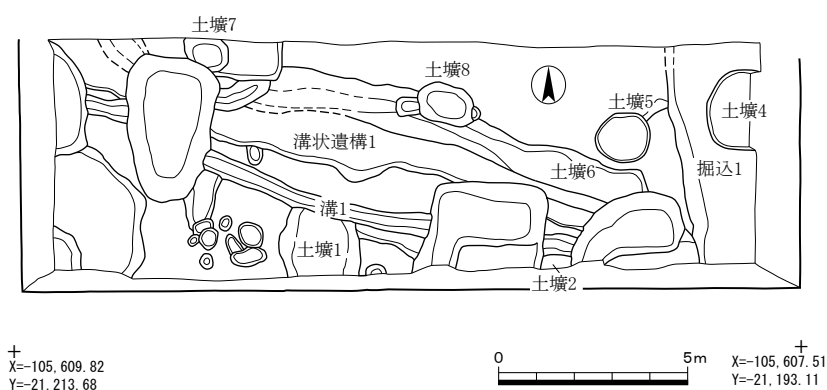


図 102 遺構平面図 (1:200)

43 特別史跡特別名勝鹿苑寺庭園（図版1・49）

経過 今年度は、昨年度に実施した貯水槽から延びる、送水管・電線及び共同溝の埋設部分を中心に、第2次調査として行った。調査区は、E区からV区までの18箇所である。調査は、共同溝予定地から開始して、次に鏡湖池東側の園路の調査を行った。同時に送水管と電線の埋設に伴う立会調査も実施した。

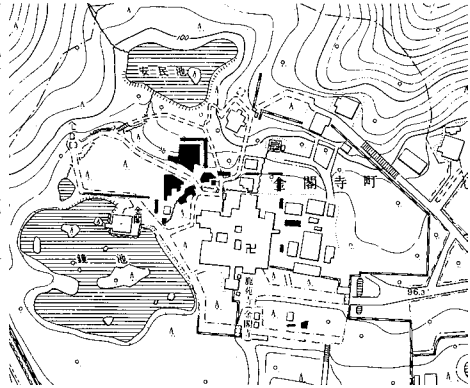


図103 調査位置図(1:5,000)

遺構 検出した主な遺構は、石組遺構・景石・溝・石列遺構・築地遺構などがある。切通し

の西側斜面のJ区では、石組遺構を検出した。石組みは石を縦に組み、滝組みのようにもみえる。N区では、修羅が縦に2基並べられたような状態で出土した。N・I・R区では、現在の水路と重複して南北方向の溝を検出した。O区では、斜面の裾部で東西方向の石列を検出した。石列は西半部がチャート、東半部が花崗岩を並べている。花崗岩は立方体に加工したもので、方形のほぞ穴や「二」の刻印が認められた。L区では、立会調査で石列をみつけたため発掘調査に移行し、築地を検出した。築地は層序からみて平安時代後期に比定される。

遺物 出土した遺物は、平安時代中期から江戸時代まで及び、その中では室町時代の遺物が最も多い。N区では修羅が2基出土し、多くの土器と木製品が共伴している。修羅の樹種はクリとケヤキで、どちらもY字型を呈する二股の木を利用している。土師器は大半が皿で、大きさによって6種類に分けられる。輸入陶磁器は染付の椀・皿があり、二次焼成を受けている。木製品には祭祀具・部材・食膳具・容器・墨書板・仏頭・燈台などがあるが、用途不明品も多い。室町時代の瓦は1次調査と同様な文様と形状を示し、軒丸瓦は三巴文、軒平瓦は菊花唐草文が最も多い。

小結 今調査は幅の狭い調査区ばかりであったが、修羅の発見、石組みや石列遺構、築地の検出など、多くの成果が得られた。書院北側の切り通しを境として、東には顕著な遺構はみられないが、西には重要な遺構が集中していることが判明した。また唐門や鐘楼付近では、室町時代をさかのぼる遺構・遺物が認められ、西園寺北山第や平安時代後期の遺跡の一端が明らかにできた。

(前田 義明)

44 室町殿跡 (図版1・50)

経過 調査は、上京区烏丸通今出川上る岡松町・御所八幡町に所在するマンション新築工事に伴って実施した。当該地は烏丸今出川交差点の北西、烏丸通と室町通に挟まれた一画で、室町殿（花の御所）推定地にあたる。周辺部における近年の調査で庭園に関連した景石群が発見されたことから、それに関連した遺構の検出が期待された。

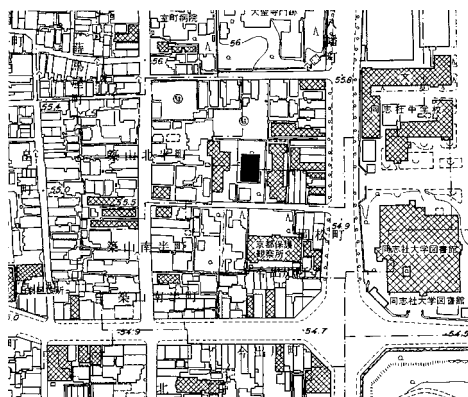


図104 調査位置図 (1:5,000)

発掘調査にさきがけて、遺構の有無を確認

するために敷地内の3箇所に小規模な調査区を設けて試掘調査を行った結果、石敷き施設や焼土が確認され、良好な状態で遺構が残っていることが判明した。以上のことから工事範囲全域を調査対象として、東西15m、南北17.5mの調査区を設定し、調査を実施した。

層位・遺構 調査区内の基本層序は、現地表下は近・現代整地土（厚さ30～55cm）、次いで黒褐色砂礫層（厚さ25～50cm、19世紀）、黄灰色砂層（厚さ8～20cm、18世紀）、灰黄褐色砂泥層（厚さ8～22cm、17世紀）、暗褐色砂泥層（厚さ15～20cm、16世紀末）、黒褐色泥土層（厚さ15～30cm、16世紀）、黒褐色泥砂層（厚さ14～25cm、15世紀）、暗褐色泥砂（厚さ20cm前後、10～13世紀）、暗褐色砂礫層（無遺物層）となる。確認した遺構は総数108基を数え、時期は13世紀から18世紀にわたる。16世紀末から17世紀初頭（Ⅲ期）の遺構群は暗褐色砂泥層上面、15世紀末から16世紀前半（Ⅱ期）の遺構群は黒褐色泥砂上面、14世紀から15世紀後半（Ⅰ期）の遺構群は暗褐色泥砂層上面で各々確認できた。そのうち16世紀前半を境に、Ⅰ期の一部とⅡ期は室町殿に関するもので、以降のものは寺院と町屋に関するものと考えられ、各々の性格は大きく異なっている。以下主要なものについて概略する。

Ⅰ期 この時期のものは、室町殿の庭園に関するものと、石組遺構、溝などがある。庭園に関するものは、調査区北半でその一部と考えられる築山と景石2基がある。景石は築山の北とその東南に斜めに配置され、規模は長径1.6～1.8m、短径0.6～1.0mを測る。石質はチャートと、讃岐から和歌山にかけて産する緑泥片岩である。築山は盛土で築成されるが、版築のように築き固めた痕跡は認められなかった。調査区の中央では、石組遺構

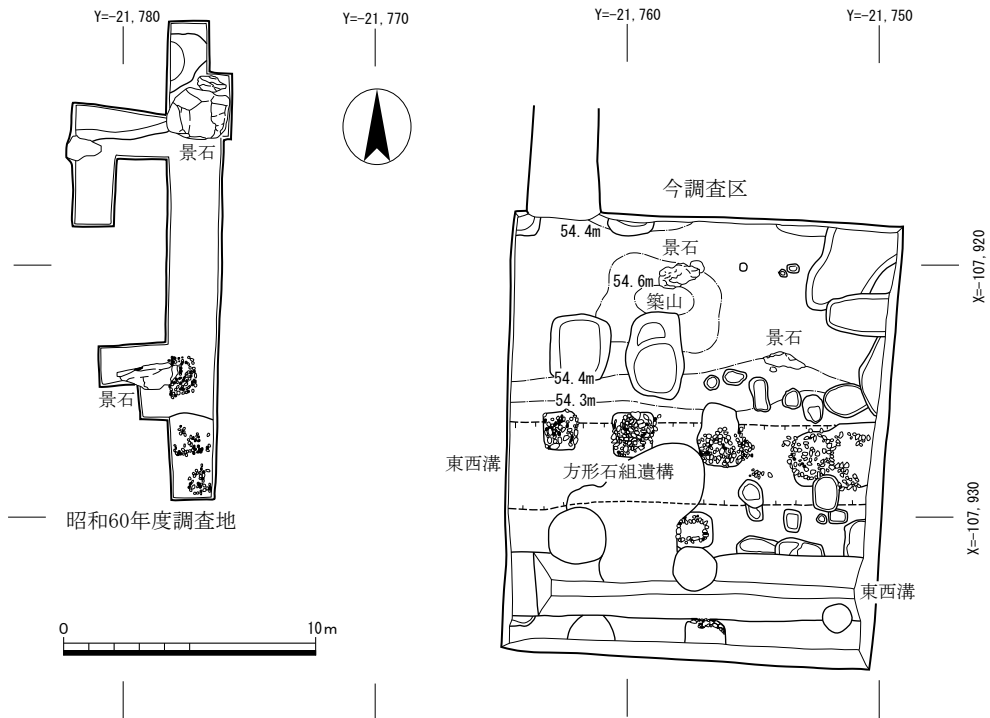


図 105 室町殿跡遺構配置図 (1:300)

と東西溝2条を確認した。このうち北側の東西溝と石組遺構は重複関係にあり、東西溝の方が古いことが判明した。この溝は幅3.4m、深さ1.5mを測り、断面逆台形を呈する。石組遺構は東西に5基並んだ状態で確認した。一辺1.3m～1.8m、深さ0.5mで方形を呈し、底はいずれも平坦である。この石組遺構群から3.5m南に、付け替えと考えられる東西溝がもう1条認められた。溝幅2.7m、深さ1.7mを測り、断面V字形を呈する。溝の中位からは15世紀中頃の遺物がまとも出土し、上部からは15世紀後半のものも認められる。

Ⅱ期 この時期も前代と同様に、庭園の一部と考えられる築山と景石が確認された。これらは前代のものに整地を行った上で再利用しているため、築山や景石は一回り規模が縮小されているように見える。調査区南側には、南に緩やかに下がる落込の北肩部が確認できる。肩部は直線ではなく緩やかに弧を描き、その一部に小礫を敷いた痕跡も認められることから、園池の汀線とも考えられる。また調査区南端中央に舌状を呈する石敷き施設も認められた。落込の埋土中からは、16世紀前半の遺物が出土する。

Ⅲ期 建物、軛組遺構、石敷遺構、石組遺構、東西溝、土壌などがある。建物は軛列を基礎とするもので、1棟の西半部を確認した。この遺構は堺環濠都市遺跡などでみられる

建物の外周だけに甃を廻らすものではなく、縦横に甃列がみられる。甃列は建物西端の東西3.5m、南北5.6mの範囲に南北方向に6列、それより東には東西方向に10列認められ、その間隔は外側が広く内側に向かうに従い狭くなる傾向にある。いずれも一段だけ立てられている。甃組施設は、建物内の南端中央寄りに認められる。規模は東西1.8m以上、幅0.7m、深さ0.5mを測り断面逆台形を呈し、底は平坦である。甃は壁に沿って2段立てられている。甃の大きさ・成形技法は建物のものと全く同様である。

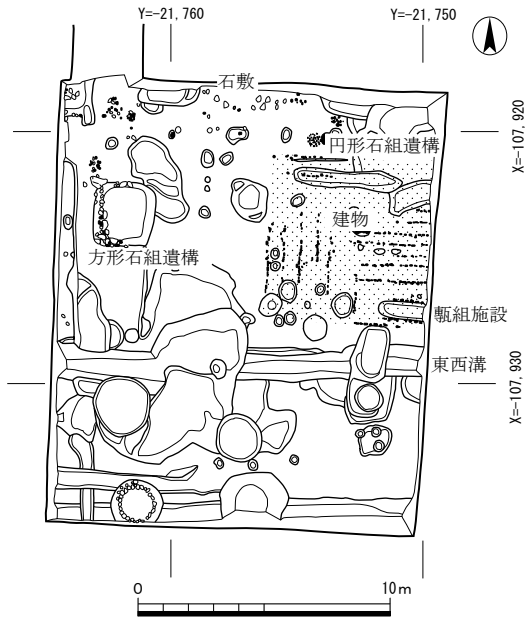


図106 近世遺構配置図(1:300)

石組遺構は、建物の西方で1基認めら

れた。東西約2m、南北2.8mの方形を呈し、深さは1.6mで、底は平坦である。石組は西壁が丁寧であるのに対し、南・北壁は上部に一段あるだけで、東壁には全く積んだ痕跡がみられなかった。遺構の下部からは多量の炭・灰と共に17世紀初頭の遺物が出土した。石敷き施設は北端中央で偏平な石を2列接して東西に2.6mの範囲で認められる。

遺物 出土した遺物は整理箱に143箱で、奈良時代から江戸時代までのものがある。そのうち室町時代のもので全体の半数以上を占め、次いで江戸時代、桃山時代となり、奈良時代のもので最も少ない。室町時代のもので内訳は、土器類が半数以上を占め、瓦類や輸入陶磁器がやや目立つに過ぎない。桃山時代のもので半数以上が土師器皿で占められるが、志野や唐津の製品も少なからずみられる。また明染付などの輸入陶磁器もまとめて出土し、兜鉢、香合、角形花瓶、蓋、壺などがみられる。江戸時代のもので生活用具が主なものであるが、中には風炉に用いる「楽」印を捺した「前土器」も出土している。

小結 14～15世紀における室町殿に関する東西濠の検出は、室町殿の南限に関わるものと考えられ、その規模を想定する上で貴重な手がかりとなった。また園池に伴う築山や景石には大規模な庭園の一端がうかがえる。17世紀前後の遺構群は、寛永十四年(1637)の宮内庁所蔵の洛中絵図にある「盛方院」に関わるものと考えられる。(堀内明博)

註 辻 純一「室町殿跡(RH18)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度
京都市文化観光局 1986

45 北野廃寺跡 (図版1)

経過 調査地は、北野白梅町交差点から北へ約30mの西大路通西側にあたる。当地に建物新築工事が計画されたが、敷地北側に接する昭和52年度の発掘調査(北野廃寺第2次調査)では、講堂跡に推定される瓦積基壇建物跡を発見しており、当該地においても講堂跡、回廊跡の検出が予測できることから、発掘調査を実施することになった。

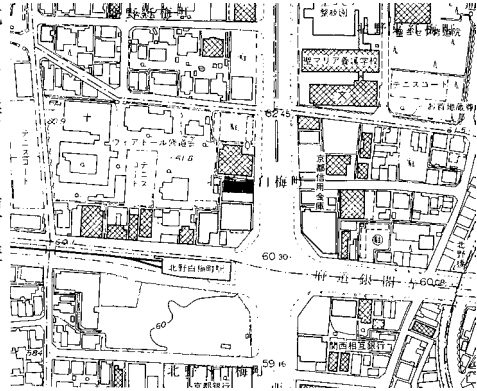


図107 調査位置図(1:5,000)

調査地は東西に細長い敷地で、北・西側隣接地と比べて約1m低い。調査区は東西15m、南北6mで90㎡を調査した。

遺構・遺物 旧家屋解体後の整地層約20cmを除去すると、西側で砂礫層、東側で黄褐色砂泥層の無遺物層となる。

遺構は、調査区東側で検出したが、2基の土壌を除き全て旧家屋解体に伴う攪乱土壌であった。土壌S X 7は、攪乱土壌によって上部を削平されており、元の形状をとどめていない。10世紀前半の土師器が少量出土している。土壌S X 8は、検出面で長径60cm、短径50cm、深さ30cmを測り楕円形を呈する。奈良時代の土師器、須恵器が出土する。

北側隣接地との境界部分の断面で、基壇版築と考えられる土層を確認した。版築は、ベース層の砂礫、黄褐色砂泥層の上に40～50cmの厚さを持ち、黒色砂泥層・黄褐色砂泥層・砂層などをそれぞれ3～5cmの厚さで突き固めている。出土遺物は少なく、また大半は攪乱土壌より出土した瓦が占める。

小結 今次調査で発見した遺構は、平安時代と奈良時代の土壌各1基にとどまった。これは調査地点の現地表面の標高がほぼ61.0mであるのに対して、調査地北側の第2次調査版築上面が約62mを測ることから、すでに削平を受けていたと考えられる。また、敷地北側境界部分の断面観察によって版築の土層を確認した。第2次調査の成果から、講堂に取付く東回廊と推定することができる。

(菅田 薫)

『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』平成2年度 1991年報告

註 梅川光隆 他『北野廃寺跡ハイツねむの木建設に伴う発掘調査の概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982

46 史跡天皇の杜古墳 (図版2・51・52)

経過 昨年度は昭和63年(1988)12月から翌平成元年(1989)3月にかけて、周濠の存在が想定される水田部分を対象に発掘調査を実施した。しかし周濠の形跡は認められず、この古墳には周濠が廻らないことが明らかとなった。またこの調査では、後円部の南西側に設定した調査区で葦石と埴輪を検出し、外表施設の一端を知ることができた。

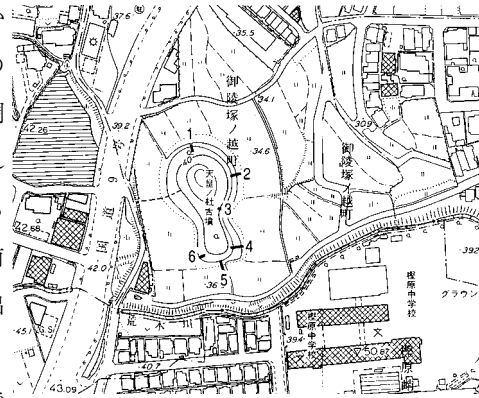


図108 調査位置図(1:5,000)

今年度は、これらの外表施設が墳丘各部分どのような状態にあるのかを明らかにすることで、古墳の正確な規模や形状、築造時期など、整備に必要な資料を得る目的で実施したものである。

発掘調査は9月25日より開始した。調査区は幅2mを基本とし、前回設定したものを墳丘上方に延長することとした。各調査区で、上段斜面の葦石・埴輪列・テラス・下段斜面の葦石を順次検出し、10月31日に写真撮影、以降は実測作業を行った。また東側くびれ部の状態を知る目的で、3トレンチを設定し調査した。11月10日には文化庁の視察があり、調査方針の指導を受けた。11月12日には現地説明会を開催した所、約400名の見学者があった。その後、各調査区の断面図を作成し、埋戻しを行って、11月27日に道具類を撤去した。調査総面積は、71.3㎡である。

遺構 今回の調査で確認した墳丘の外表施設は、上段斜面の葦石・埴輪列・テラス・下段斜面の葦石である。以下、その要点を記す。

上段斜面の葦石 上段斜面に葦石が施されることは、後円部の西側斜面に葦石が露出することから想定できた。今回は6箇所の調査区すべてで、約1m分ほどの葦石を検出した。残存状態は非常に良好であった。これらには、拳大から人頭大の川原石が用いられ、小口を墳丘斜面に向けて重ねるようにして葦かれる状況が観察された。上段斜面の下端に置かれる根石は、斜面の葦石に比べると大きめの川原石が用いられ、横方向に直線的に据えられていた。

埴輪列 6箇所の調査区全てで、テラスに樹立された埴輪列を検出した。これらは上記の根石の外側50～60cmの位置にあり、心々50～60cmの間隔で据えられていた。埴輪は、

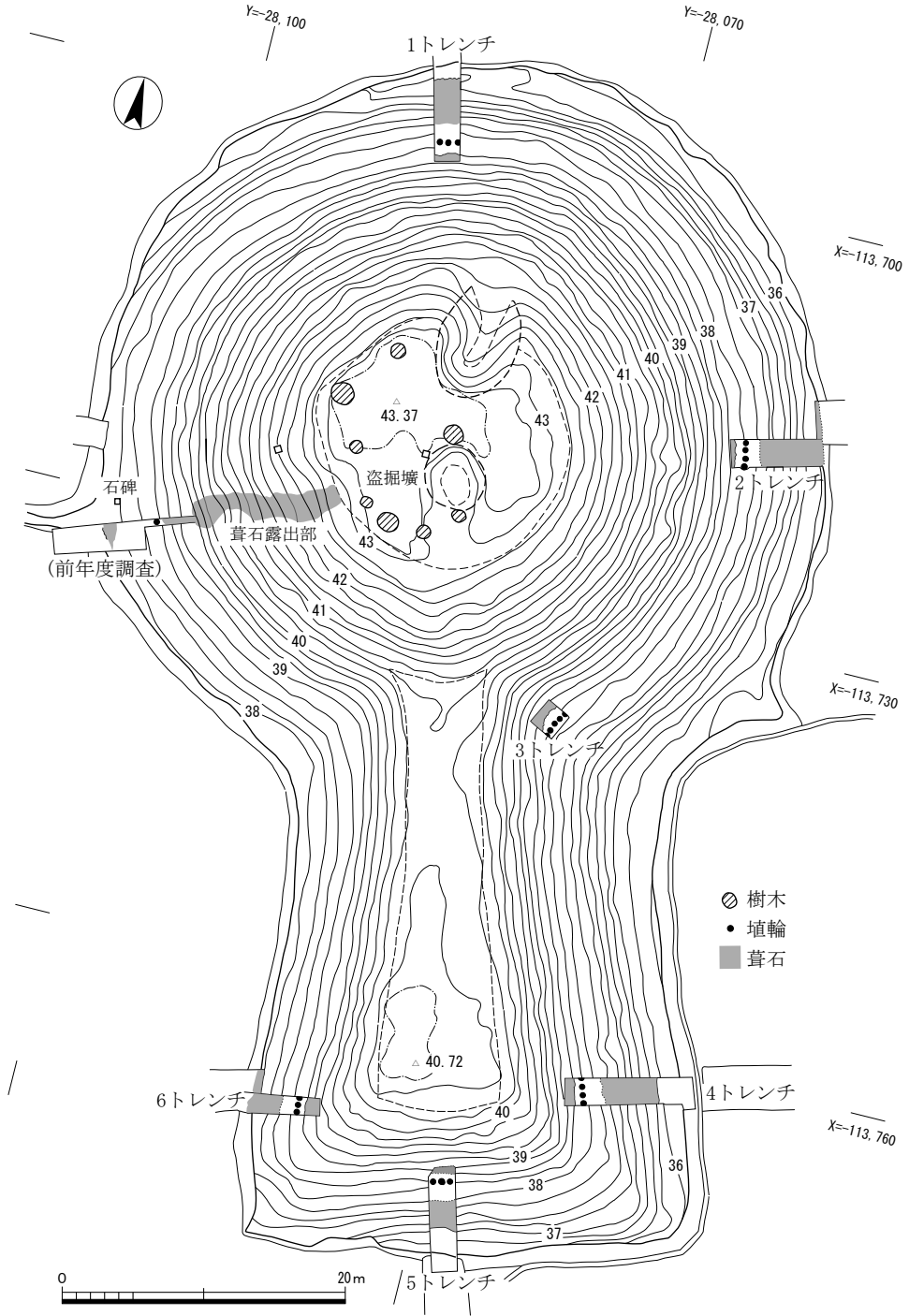


図109 天皇の杜古墳墳丘測量図 (1:500)

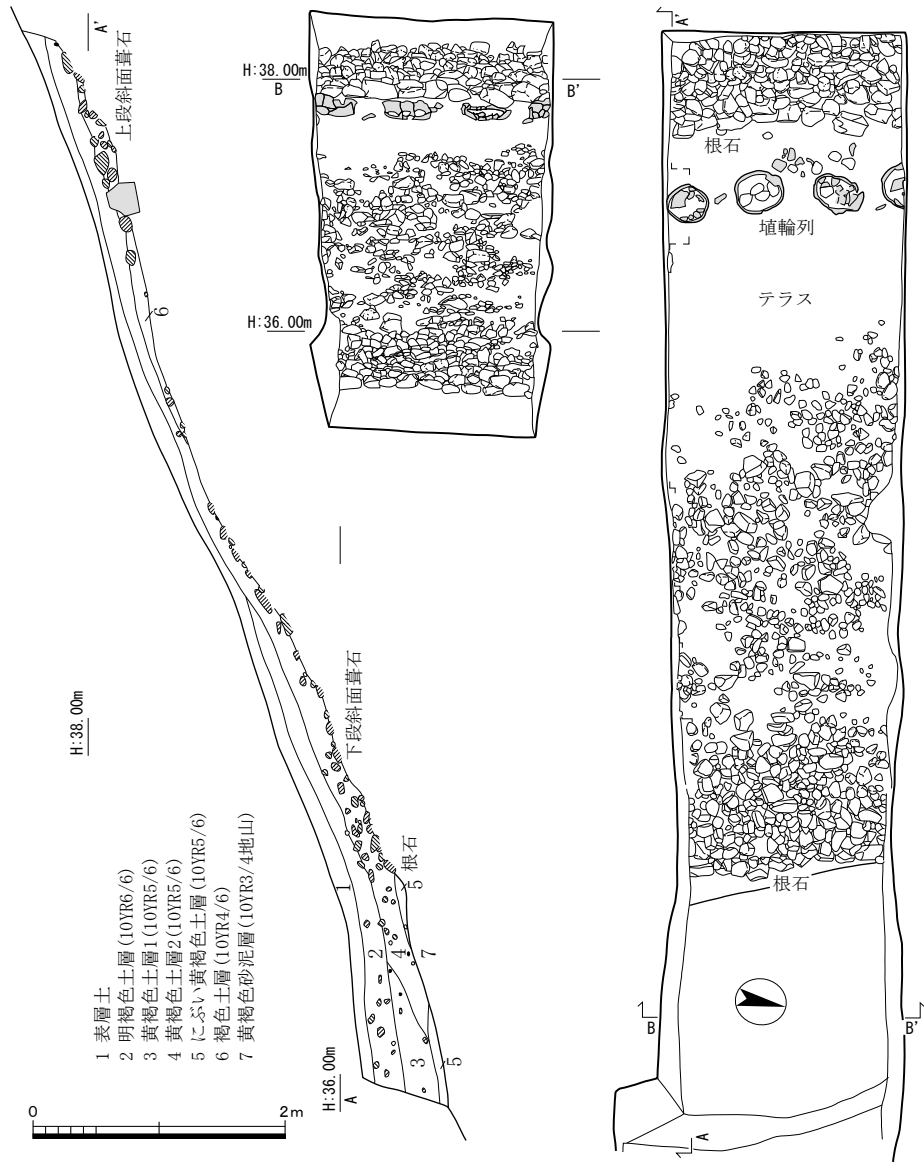


図110 4トレンチ実測図 (1:60)

円筒と朝顔形で構成されるが、配置関係は明らかでない。いずれも最下段タガより下部が
残存しており、周囲には破片が散乱する状態がみられた。また、断ち割って据え付け状態
を調べたが、いずれの箇所も明確な掘り込みは認められなかった。

テラスに据えられた埴輪の総数は、心々を 55cmとした場合、376本と算出できる。この
他、前方部・後円部の墳頂平坦面にも埴輪が全周すると考えられるので、これらを合計す

ると、本古墳に使用された埴輪の総数は600本強と算出できる。

テラス 上段斜面と下段斜面の境にはテラスが全周する。その状態は前回の調査で作成した墳丘測量図からも推定できたが、それが推定通りであることを調査によって確認した。テラスは幅が2m前後で、緩やかな傾斜を持つ。特に後円部の北・東側は当初の形状が良好に残されていた。テラスの上面には、転落した埴輪や葺石が多量にみられた。現在の墳丘表土からテラス面までの堆積層は、平均30cmであった。

下段斜面の葺石 葺き方や根石の状態は、上段斜面の葺石に共通する状態がみられた。斜面上半部の葺石は抜け落ちたものも多くみられたが、下方ほど保存状態は良好で、特に根石付近は当初の状態が良好に残されていた。2トレンチでは特に大きめの石が用いられ、丁寧に葺かれていた。下段斜面の根石は墳丘裾を明示する重要なもので、1・4トレンチでこれを検出した。しかし、2トレンチでは根石に相当する位置に石列があり、その下方にも葺石が連続して葺かれる状態がみられた。

墳丘外側の状況 墳丘の外側については、各調査区で異なった状況がみられた。1・4トレンチでは、地山上面で根石を検出し、外側に平坦面が続くことを確認した。2トレンチでは根石に相当する位置に石列があり、その外側にも葺石が続く状態がみられた。

遺物 整理箱で17箱出土した。埴輪が中心であるが、古墳時代後期、平安時代の土器も少量出土している。

埴輪には円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。朝顔形埴輪は、2・4・5トレンチで各1個体ずつ確認できた。埴輪は総じて橙色から明黄褐色を呈し、焼成は良好で黒斑を有する。全体の構成は5段と推定され、底部から第1タガまでが18.5～20cm、各タガ間は平均13cm、口縁端部と最上段タガの間は9～10cmを測る。底部径は28～30cmある。外面調整はタテハケののちA種と呼ばれるヨコハケを時計回りに施す。内面調整もタテハケののちナデやオサエ、ヨコハケを施す。(5)はタテハケののち指ナデを螺旋状に施す。タガはしっかりした台形のものが多く、スカシには方形(3・4)と円形がある。線刻したものや円形スタンプを押圧したもの、外面に赤色顔料が塗られた破片もある。

小結 外表施設の状態が判明したことで、古墳の正確な規模や形状、築造年代に関する資料を得ることができた。本古墳は2段築成の前方後円墳である。各部の寸法は、下段全長が推定で約83m、上段全長が約72mで、後円部直径は下段が50.5m、上段が40.5m、前方部幅は下段が33.5m、上段が20.5mを有する。墳丘高は、西から東に下る地形のため、後円部東側で7.2m、西側で6.0m、前方部東側で4.8m、西側で3.3mを測る。前方部と

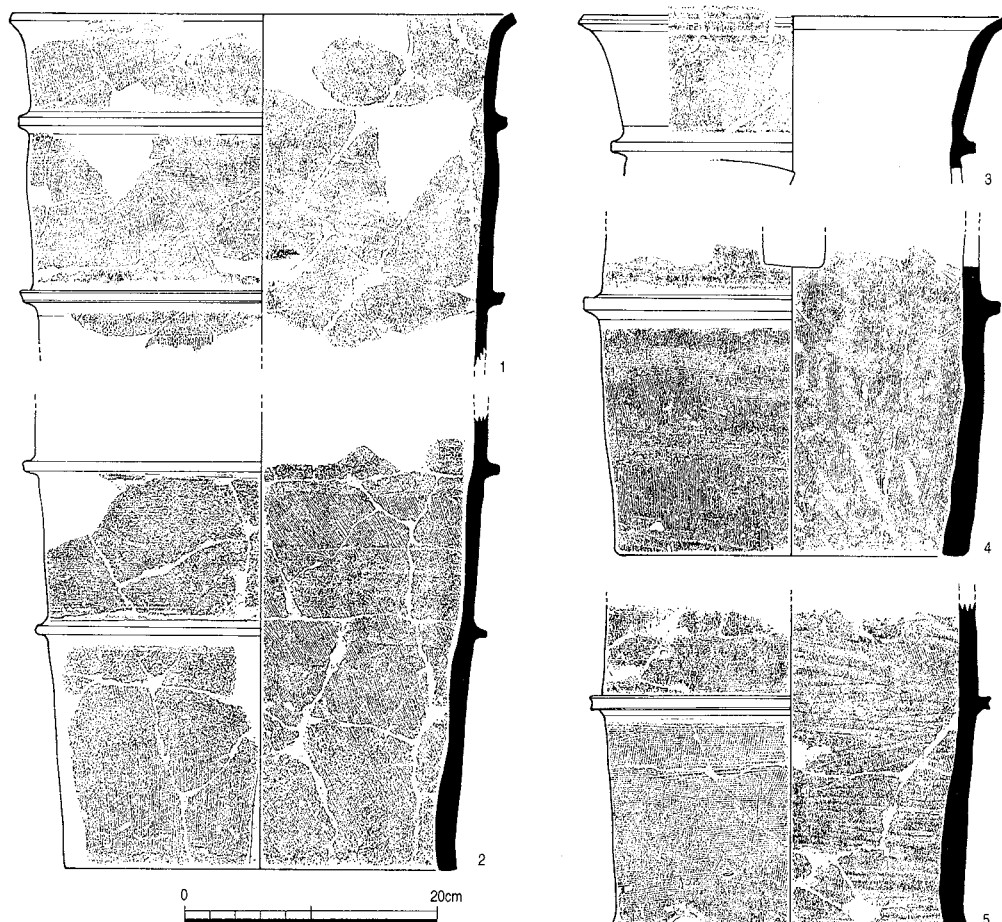


図 111 出土埴輪実測図 1・2: 1トレンチ 3: 5トレンチ 4: 2トレンチ 5: 6トレンチ (1: 6)

後円部の比高差は、後者が2.7 m高い。古墳の墳丘裾は西側では削平されているが、東側では崩落土に覆われ根石まで完存することも判明した。年代に関しては、埴輪の特徴から古墳時代前期末に築造されたとみられる。

本古墳は、墳丘が完存する点で山城地方を代表する古墳とされてきたが、調査によって上記の内容が判明し、更にもその位置付けが明確となった。今後、史跡公園として整備されることで、更に地域に密着した文化財として活用されることが期待される。

(丸川義広)

註 丸川義広「史跡天皇の杜古墳」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

47 南春日町遺跡第17・19次調査 (図版2・53～55)

第17次調査

経過 土地基盤整備事業に伴う発掘調査である。平成元年(1989)3月に第16次調査を実施し、平安時代から室町時代の遺構群を検出した。更に遺構の広がりを確認するため、調査区の東南部を拡張した所、古墳の主体部である横穴式石室の基底部と考えられる石列を検出した。そのことから新たな調査の必要性があると判断し、今回の調査となった。

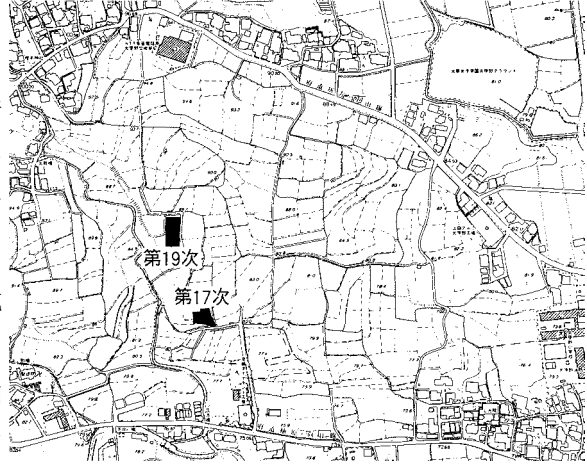


図112 調査位置図 (1:5,000)

調査の結果、石列は横穴式石室の基底部であることが判明した。更に墳丘の裾部、周溝などを検出し、古墳時代後期の円墳であることも明らかになった。

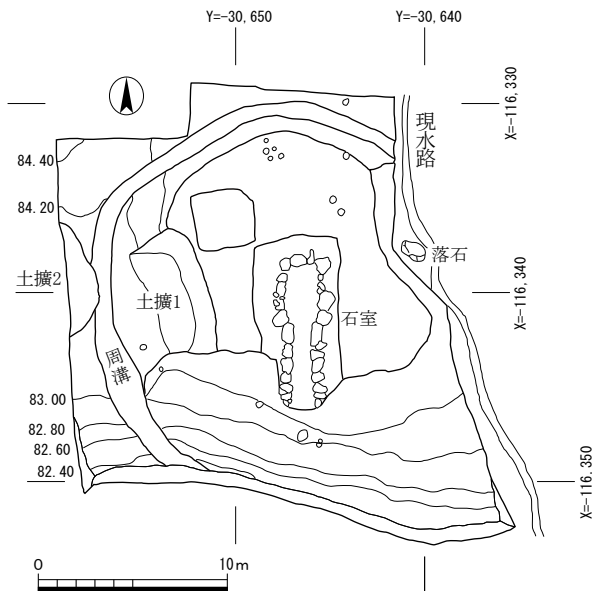


図113 墳丘測量図 (1:400)

遺構 古墳の墳丘規模は直径が墳丘裾で18m、周溝心では20m。墳丘を構成する封土は平安時代以降の整地のため削平されている。地山は黄褐色砂泥で、地山面は本来平坦面を形成していたと考えられ、その上に盛土を行い墳丘を構築していたと思われる。

主体部は両袖式の横穴式石室である。規模は全長が7.5m以上で、玄室は長さ3.0m、幅1.4～1.8m、羨道部は長さ4.5m以上、幅1.0～1.2mである。石室の主軸方向は、ほぼ真北方向である。掘形は

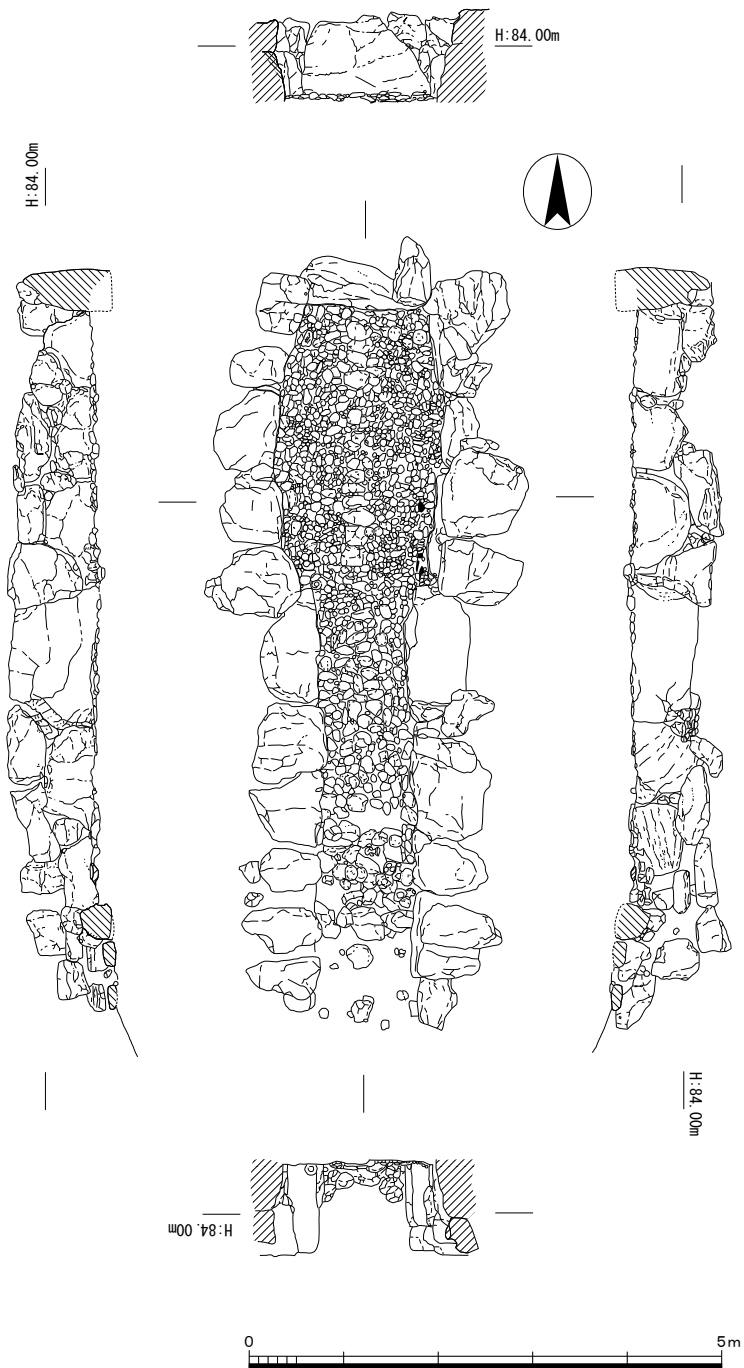


图114 石室实测图 (1:80)

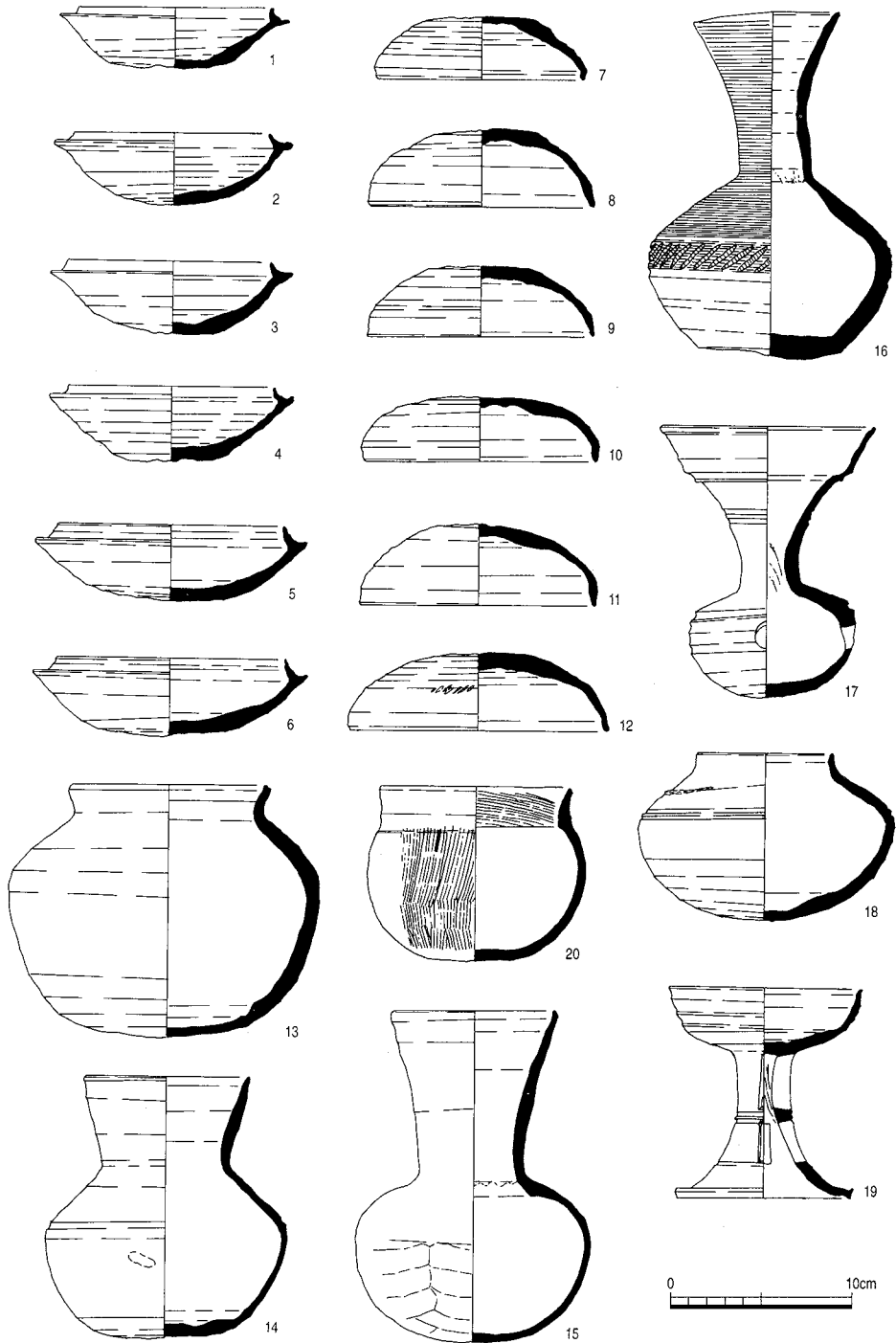


图 115 石室出土土器実測図 (1 : 4)

幅が4.0～4.5 m、深さは地山面から1.4 mである。石室の埋土は、褐色混礫砂泥層である。

周溝は、主に北方にあたる丘陵側で明瞭に認められた。周溝の幅は1.0～1.9 m、深さは0.5 m前後である。断面の形状はU字形を呈する。墳丘を廻る周溝の平面形状は、やや楕円形をなし、石室に直交する方向にやや広がる。周溝の埋土は暗褐色混礫砂泥で、部分的には炭層も含まれていた。

室町時代の遺構は、石室西側で土壙を2基検出した。土壙1は墳丘部で検出した。南北長6.5 m、東西長3.0 mの方形で、深さは0.4 mである。土壙2は周溝の西肩の一部を切った状態で検出した。径が約6 m、深さは0.6 m以上の円形の土壙である。

遺物 石室内から多量の遺物が出土した。出土遺物の内容は土器類と金属製品である。土器類には須恵器と土師器があり、金属製品には金環、銀環、鉄釘、鉄鏃、馬具がある。遺物の出土状況をみると、玄室では須恵器杯身・杯蓋・短頸壺・長頸壺、土師器鉢・甕、金属製品の金環、銀環、鉄釘、鉄鏃、馬具が出土している。羨道部では、須恵器杯身・杯蓋・高杯・短頸壺・長頸壺、土師器短頸壺・長頸壺・甕が、周溝からは須恵器杯身・高杯が出土している。

土器類については、完形のもの、完形に近いものの中から主要なものを図115に示した。図示した土器類は須恵器杯身（1～6）・杯蓋（7～12）・短頸壺（13）・長頸壺（14～16）・甕（17）・無頸壺（18）・高杯（19）、土師器甕（20）である。

小結 当地域における周知の古墳の分布をみると、西山山地から裾部の大原野台地にかけて勝持寺古墳群、円山古墳群、八幡宮古墳群などが散在し、更に善峰川南岸には灰方古墳群がみられる。いずれも古墳時代後期の群集墳であるが、これまでに発掘調査がなされた古墳は1基もない。今回の調査が、当地域で初めての古墳の発掘調査であった。

調査の結果、主体部である横穴式石室の形態、出土遺物の内容から6世紀末に築造され、その後2回以上の追葬が行われたことが判明した。これらは、京都市内の当時期の古墳の一般的な在方であるが、未調査である大原野地域の古墳群を解明する上で重要な資料といえる。更に群集墳が全国的に盛行するこの時期を考えるなら、当地区で新たな古墳が発見される可能性もあり、本古墳の名称は、当地区の小字名から下西代古墳群1号墳とした。

第19次調査

経過 土地基盤整備事業に伴う第19次調査である。調査地は水田で、小字名は西代、下西代にまたがっている。現地形をみると北西から南東にかけ緩やかに傾斜する丘陵の中位から下位にあたっている。西側は、崖下に社家川が地形に沿って南流する。また当調査地の北西700mほどに大原野神社が位置している。

遺構 鎌倉時代から近世の遺構を検出した。遺構総数は543基である。検出した遺構の主体は、鎌倉時代から室町時代のものである。

鎌倉時代の遺構には柱穴、溝、土壇、井戸、石組遺構がある。井戸1は調査区北半部の中央に位置し、直径1.6m、深さ2.0mの円形の素掘井戸である。

溝1は調査区北半部の西端を南北方向に流れるが、上流にあたる北端部では、東へ曲折している。幅3.0m、深さ1.0mの大溝である。断面の形状はV字状に近い。溝2は調査区中央よりやや北に位置している。幅0.8m～0.2m、深さ0.5mで、断面の形状は逆台形。東側は削平されているが、コ字状に残存していることから石組遺構に伴う周溝の可能性が高い。

石組遺構は、溝2の内側の北西隅に位置する。人頭大の石の平らな面を上にして、L字状に据えられていた。

室町時代の遺構には柱穴、溝、土壇、井戸などがあるが、調査区南半部の井戸群について概述しておく。

井戸には、井戸2～4がある。いずれも円形の石組井戸で、石組み上部は削平され下部が残存していた。井戸2は径2.1m、深さ1.3m、井戸3は径2.0m、深さ1.3m、井戸4は径2.4m、深さ3.0mである。

遺物 出土した遺物は整理箱に19箱で、平安時代末から近世の遺物が出土した。そのほとんどが土器類である。土器類以外には瓦、木製品、鉄製品、石製品などがある。土器類には土師器、須恵器、瓦器、陶器、輸入陶磁器がある。土師器、瓦器が多くみられ、鎌倉時代から室町時代のもものが主体である。遺構との関連でみると、井戸1内から鎌倉時代の土師器、瓦器が多量に出土したが、瓦器碗の完形品が多く、土師器皿の完形品も含まれていた。また井戸3からは室町時代の土師器皿と鉄鎌の刃が出土している。

小結 調査の結果、鎌倉時代から室町時代の柱穴、溝、土壇、井戸などの居住地を示す遺構群を検出した。柱穴は重なった状態で検出しており、幾度も建て替えがあったことがうかがえる。調査区西端を南北に流れる大溝は居住地を大きく区画する溝と考えられる。

溝は更に調査区北端で東に折れ曲がる状況であったことから、居住地も東へ広がることが判明した。また周溝を伴った石組遺構は特殊な施設と考えられ、居住地の性格を検討する上で重要な資料となった。調査区南半部は大きく削平を受けていたため柱穴、土壌などの浅い遺構は検出できず、室町時代の井戸群が残存していた。大原野地域での井戸の検出例は少なく、今回のようにまとまって検出できたことは当時期の調査地のありようを考える上で興味深い。

調査地は大原野神社から東南700 mに位置しており、小字名からみると西代と下西代にまたがっている。西代、下西代地区での既往調査の検出遺構については大原野神社を支える神職集団の居住地である社家遺構として捉えている。

今回の調査地での遺構のあり様をみると、大溝の区画内に居住地が存在することから、神職集団内か、あるいは神職集団によってなんらかの規制を受けた人々の居住地区とも考えられ、社家遺構の多様性を検討する契機となった。

(加納敬二・永田宗秀・小檜山一良)

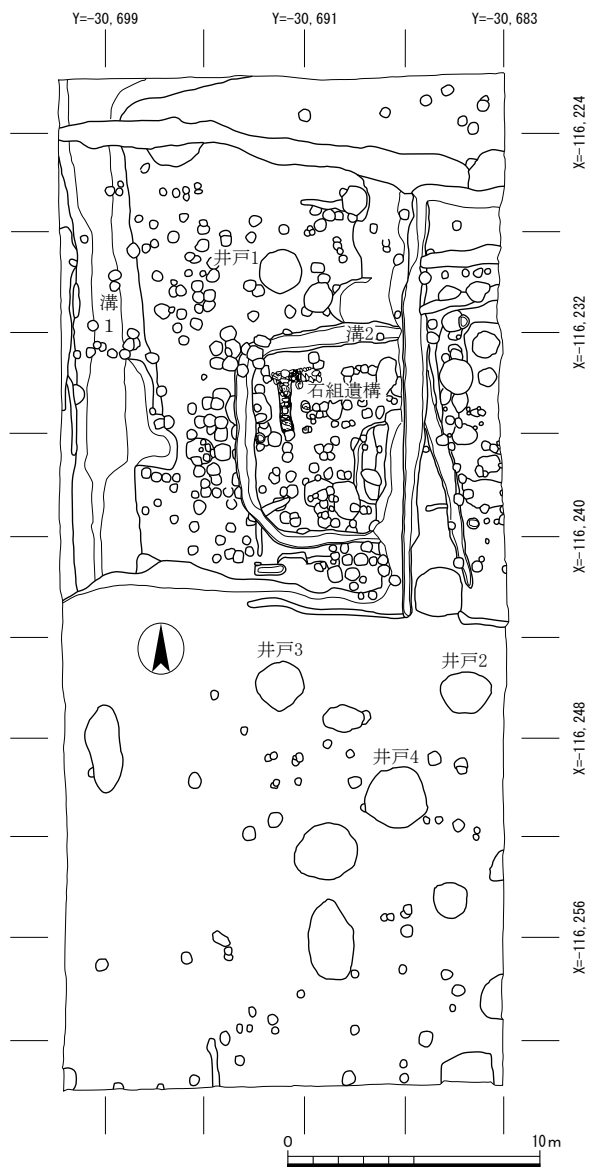


図 116 遺構平面図 (1:300)

48 中久世遺跡 (図版2)

経過 本調査は事務所ビル建設に伴う調査である。当地は中久世遺跡に該当し、弥生時代から中世に至る複合遺跡である。これまでに弥生時代の方形周溝墓や河川、奈良時代から室町時代の建物や井戸など多くの遺構を検出している。

また、当地では昭和57年度に駐車場造成工事に先立って試掘調査を実施し、竪穴住居などの遺構を比較的浅い所で確認している。

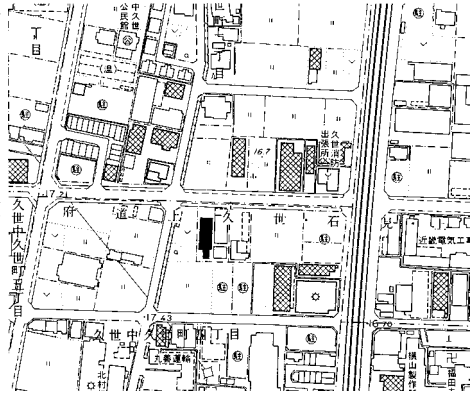


図 117 調査位置図 (1:5,000)

遺構 検出した遺構は竪穴住居、掘立柱建物、柵列、土壇、溝、多数の柱穴があり、時間的には弥生時代から平安時代までに及ぶ。

弥生時代から古墳時代の遺構は、竪穴住居4棟を検出した。この他にも、削平を受けた竪穴住居の残欠と考えられる柱穴、土壇がある。検出した竪穴住居はいずれも一辺約5mの隅丸方形で中央に炉がある。また、壁際に貯蔵穴を持つものもある。

奈良時代の遺構は、中期から後期にかけての掘立柱建物3棟、柵列2条からなる建物群の他、多数の柱穴、土壇などを検出している。この時代の遺構は調査区の中央部から南側に分布しており、土地利用に計画性があったことをうかがわせている。また、遺構の重複関係と方位から、大きく2時期に分かれるようである。

遺物 遺物は、整理箱に12箱出土した。その大半が土器であり、他に土製品・石器などが出土している。この中では、弥生時代から古墳時代の土器類が最も多い。

小結 これまでに中久世遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての各種の遺物が、河川や溝などの遺構から多量に発見されていた。しかし、これらの遺物を用いた人々の集落は明確ではなかった。今回、竪穴住居群を検出し、集落の一端を知り得たことは大きな成果である。中久世遺跡内には、幅10～20mに及ぶ数条の河川が流れていたことがわかっている。今回の調査区は、これらの河川に挟まれた微高地の部分にあたり、集落がこうした水利のよい土地に営まれていたことがうかがい知れる。

また、奈良時代の建物群を検出できたことも成果である。これまでも遺跡南部でこの時代の建物を確認しており、比較的大規模な集落が想定できる。(吉崎 伸)

49 六波羅政庁跡 (図版1・56)

経過 調査地は、平安時代後期以降の六波羅政庁跡、桃山時代の方広寺跡にあたる。当地にマンション建設が計画されたため、これを契機として発掘調査を実施したものである。試掘調査の結果、対象地の西半には以前地下室があり、地山が相当深く掘削されていることがわかっていたため、調査区は比較的遺構の遺存状況の良いと考えられる東半に設定した。しかし、東半にも全域にわたって一

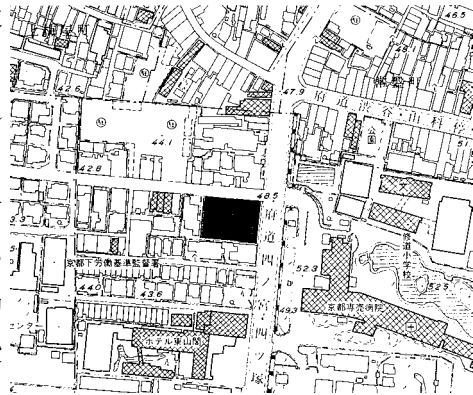


図118 調査位置図 (1:5,000)

辺4m以上の建物のコンクリート基礎が残されており、遺構の遺存状況は不良であった。

遺構・遺物 本調査では、平安時代末期、室町時代、江戸時代以降の遺構を検出した。遺物は、遺物整理箱に31箱出土している。

平安時代末期の遺構は、方形縦板組みの井戸 (SE5) 1基であった。掘形は、検出面

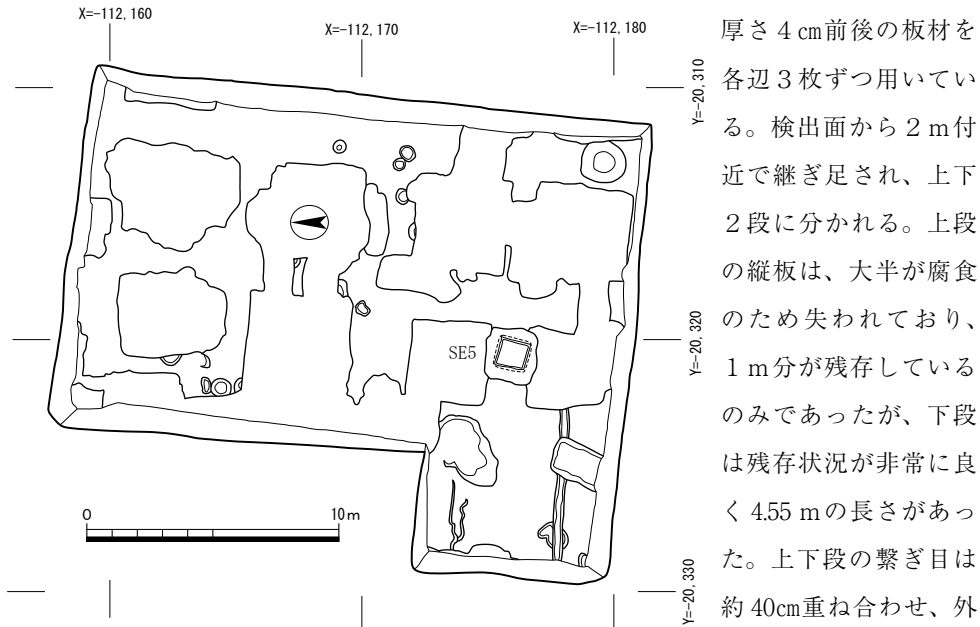


図119 遺構平面図 (1:300)

て補強している。横棧は角材の両端にほぞを穿って組み合わせ、約70cmの間隔で配しており、4段までは確認した。枠の内側四隅には角材を配して、横棧の支柱としている。検出面から約2mまで人力で掘り下げたが、掘形の南北両側に大型のコンクリート基礎があり、湧水も伴ったため、中断した。それ以下については調査の最終段階に、西半分を遺構面より約6mまで重機によって掘り下げたが、井戸の底面には届かず、底部の状況については不明である。遺物は土師器・須恵器・陶磁器・瓦の他、木製品が少量出土している。この井戸は、鎌倉時代前期には埋められ、後述の整地層に覆われていることから、室町時代には上部を削平されていたと考えられる。

室町時代の遺構は、調査区西半で整地層を検出した。整地層は3層確認し、いずれも土師器や瓦の小片が出土したが、大きな時期差はないものと思われる。また、これらの整地層に伴う遺構は検出できなかった。

江戸時代以降の遺構には、溝・土壇・井戸などがあり、遺物は最も多い。井戸は石組みのもので、最下段の石組みが残っており、底部施設には桶を転用している。また、現代の攪乱層から径20cmを越える五三桐文軒丸瓦片が出土している。

小結 平安時代末期から鎌倉時代前期の井戸は、上段の枠板に下段のものと同じ長さの板材を用いたとすれば、8m以上の深さになる。規模・構造とも優れたものであり、六波羅政庁に関連する井戸である可能性が高い。周辺の既往の調査では、六波羅政庁に関連する明確な遺構は検出されておらず、重要な成果といえよう。(高橋 潔)

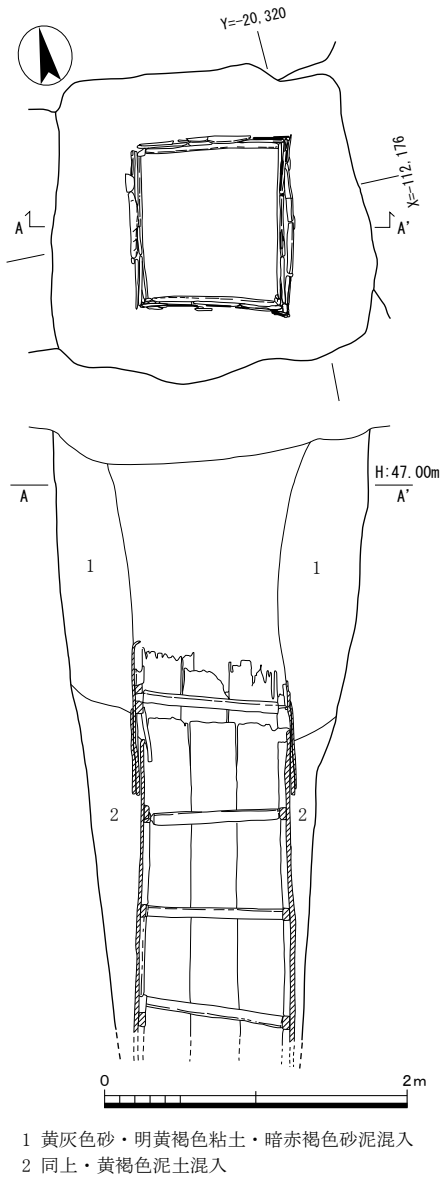


図120 SE 5 実測図 (1:50)

50 伏見城跡 (図版2・57～59)

経過 調査地は、桃山丘陵の南端から西方に派生する緩やかな尾根上にあたり、西を国道24号線、南を大手筋、北西から南東をJR奈良線によって画された、およそ三角形の敷地である。伏見城(1592年築造開始)とそれを廻る城下町の中央南寄りに位置し、東に本丸のある城山を望む。関ヶ原前哨戦(1600年)による焼亡以前の伏見城下と、徳川家康復興以後の城下が渾然と描かれている『伏見

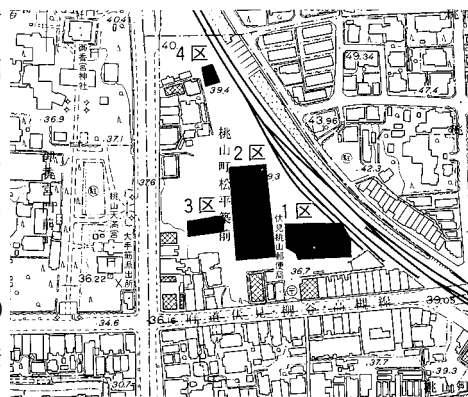


図121 調査位置図(1:5,000)

城御城古図』(1776年)には、調査敷地内の北端に榊原遠江守邸、東部に肥前中納言邸、中央から西部に榊原式部太夫邸が記される。また、調査地の西側に隣接する御香宮神社境内で奈良時代の瓦が出土しており、寺院跡(御香宮廃寺)の存在が推定されている。

工事計画図に基づき敷地内の建築予定部分に3箇所の調査区を設け、東から順に1～3区としたが、調査開始直後、調査敷地内北端を急遽調査する必要が生じ、新たな調査区を設け、これを4区とした。平成元年(1989)5月8日に現代盛土層の重機掘削を開始した。平面的な調査は、桃山時代の整地層上面から行った。3層ある桃山時代の整地層下に鎌倉時代から戦国時代の遺構面を認め、地山上面で平安時代と奈良時代の遺構を若干認めた。4区では全域に現代攪乱があり、遺構は残存していなかった。12月28日、すべての現場作業を終了した。

遺構 基本層序は第1層現代盛土層・第2層旧耕作土層以下、第3～5層の桃山時代の整地層、第6層の褐色砂泥層である。遺跡の基底(地山)は固く締まった砂礫ないし粘土層からなり、2区の北半では大阪層群が地山を形成する。調査地は北東から南西に向かって下る緩斜面に位置するため、地山は1区の東端と2区の北端で最も高く(標高38.5m)、3区の西端が最も低い(標高36.4m)。桃山時代の整地層は、第3層整地層1が調査区全域に層厚約50cmで一様に堆積する。第4層整地層2は、地山の最も深い3区の全域と2区の西南部にのみ認める。層厚は3区で約50cmあるが、東に向かって徐々に薄くなり、2区では約10cmとなる。第5層整地層3の分布も第4層と同様で、層厚は全体に約10cmと薄い。第6層は、3区では層厚約60cmあり、東北に向かって徐々に薄くなり1区では

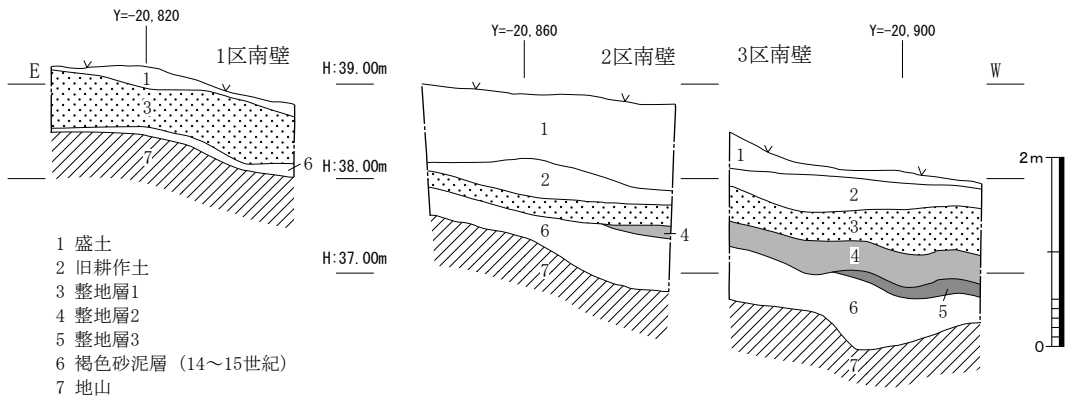


図 122 断面模式図 (水平=1:800 垂直=1:80)

10cm程度であるが、2区の北半では認めることができない。

第3～5層は、桃山時代の土器・陶磁器・瓦類を包含し、文禄三年（1594）から本格的な普請が開始され寛永元年（1624）廃城となる伏見城とその城下町に伴う整地層と考える。ただし第5層上面では明確な遺構を検出できず、単に整地の作業単位であると思われる。第4・5層の整地は、調査区全域には及ばないものの、伏見城以前の濠を均質な土砂で一気に埋めているほど大規模なもので、豊臣秀吉による伏見城築造時の整地層と考えることができる。第3層の整地は、第4・5層の整地を凌ぐほど更に大規模なものである。この整地層を、関ヶ原前哨戦で焼亡した後に徳川家康によって復興された伏見城に伴うものとする。以上の所見は、出土遺物の整理と周辺地域の調査を通じて吟味する必要がある。

第3層上面で検出した遺構には、掘立柱建物・柱列・井戸などがある。3区で検出した建物1は、南北2間、東西5間の東西に長い掘立柱建物で、北で西に1～2度振る方位を持つ。これに対して3区の布掘り状の柵列2と2区のL字状の柵列3は北で西に5度程度、1区の柵列6・7は北で東に1～2度振る。1区で検出した井戸47は方形横板組みの水溜を有する石組井戸で、残存深が1m程度の浅いものである。町屋地域の調査にみられるような、大規模な土壇、井戸が多数切り合う状況ではなく、遺構の密度は粗い。

第4層上面で検出した遺構には、礎石建物・柵列・溝などがある。第4層は3区の全域と2区の一部にしか存在していないため、1区の全域と2区の大部分は第3層を除去した段階で検出した遺構をこの時期のものとした。3区で検出した建物4は、東西7間以上、南北5間以上の礎石建物部分と東側に取り付く掘立柱の建て増し部分からなる。礎石は2箇所のみ残り、その他は抜き取られている。建て増し部分の掘立柱跡には、後の礎石に置

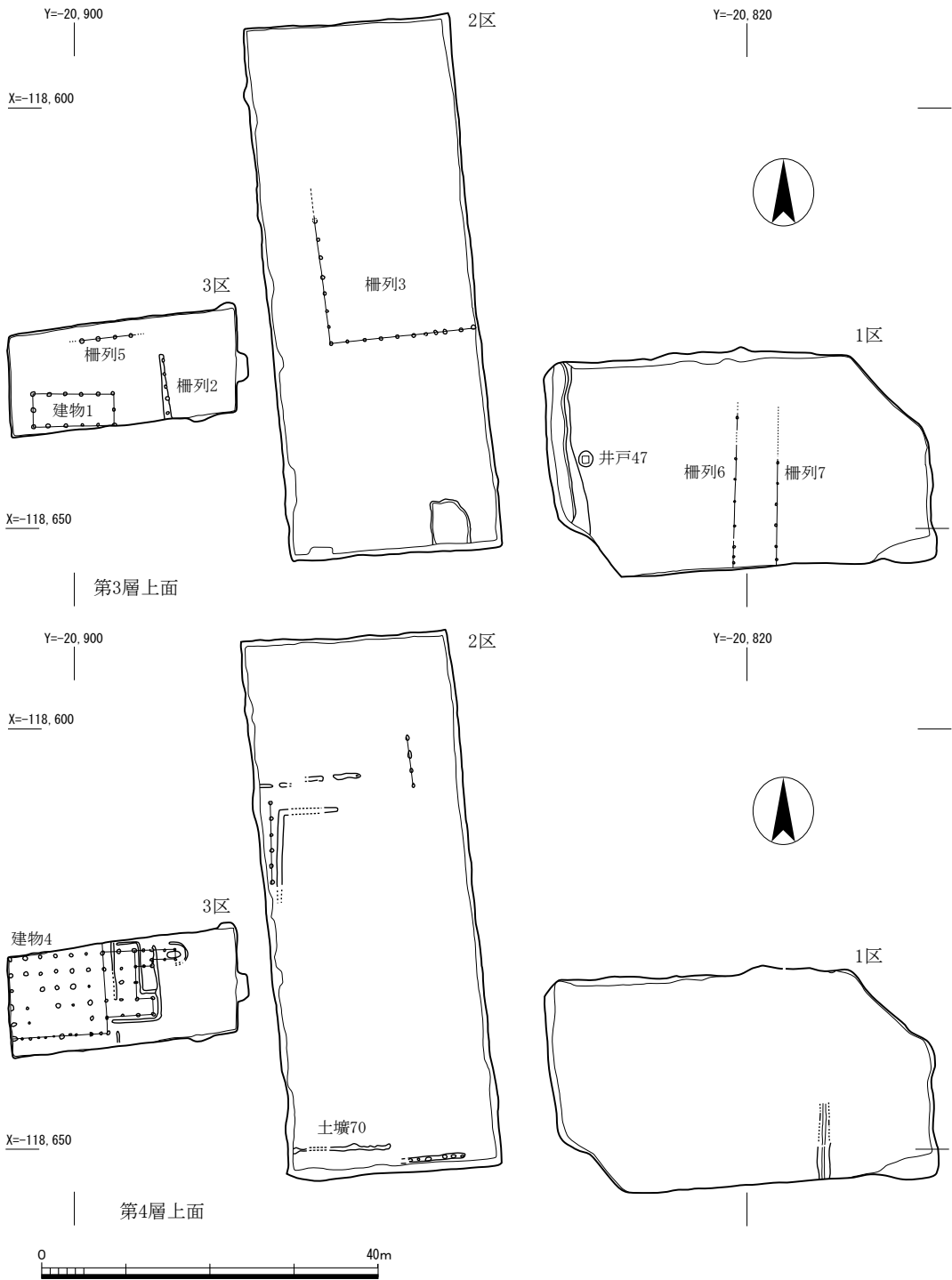


图 123 伏見城関係遺構平面図 (1:800)

き換えた修築痕を認めた。礎石建物部分の西側には砂化粧状の整地を認めた。また建て増し部分の北東部には、東西2間分の渡廊下と1間×1間の小建築が取り付け、小建築の中央に楕円形の土壙を、土壙の東半には馬蹄形の排水溝を検出した。便所の遺構と考える。2区では、北半に南北方向の柵列数列とL字状の区画溝を、南東部に柱穴群を検出した。南西隅で検出した土壙70は、底部を小礫で固めた特殊なもので、土蔵の基礎の可能性はある。ただ東肩部が緩やかなスロープをなしていることから、屋敷内の通路部分の可能性も否定できない。1区では、南北方向の溝を検出した。

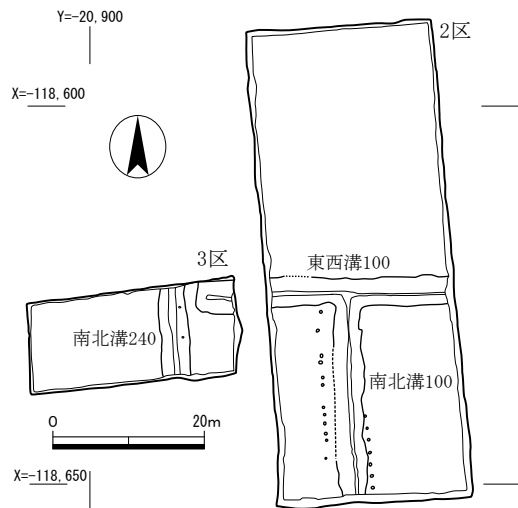


図124 伏見城以前の濠平面図(1:1000)

伏見城以前の遺構には、濠・柵列・溝・柱穴群・井戸・土壙などがある。これらの遺構は、3区と2区の北半と南西部では桃山時代の整地層を完全に除去した面で、2区の南東部では中世の包含層を若干掘り下げた面で、1区では地山の上面で検出した。東西溝100と南北溝100はT字形に交わる一連の濠である。また幅1.0～1.5mの土橋部分を挟んで西側に検出した南北溝240もこれらと一連の施設と考える。これらは、伏見城築造時の整地によって人為的に埋められている。南北溝240の西側には土塁状の高まりを検出し、それより西には遺構をほとんど認めない。南北溝100の両肩部に平行する柱列を検出した。東西溝100と南北溝100とで画された2区の南東部と1区の全域で多くの柱穴を検出した。建物としてのまとまりはつかみきれないが、柱列を数列認める。

2区の南西部の地山上で、10世紀の柱穴・南北溝などを検出した。また、2区の地山上で奈良時代の土壙を、3区の地山上で土器溜280を検出した。両土壙から多量の瓦と土器が出土した。

遺物 第3～6層、各時代の遺構中から、飛鳥・奈良時代の瓦が多量に出土する。また、桃山時代の整地層と遺構中からは同時期と思われる瓦類が多く出土する。出土遺物の大半はこれら瓦類が占め、中世の土器類がこれに次ぐ。桃山時代から江戸時代初頭の土器・陶磁器類は少なく、細片が多い。

伏見城関係の瓦類の中には、金箔を施した軒瓦がある。瓦当文様が明確なものに「加賀梅鉢」の軒丸瓦がある。また、金箔を施したほぼ完形の鬼瓦も出土している。

鎌倉・室町時代の土器類は各調査区で出土し、土器類の中では最も量が多い。平安京城に比べ明らかに瓦器の割合が高い。

飛鳥・奈良時代の遺物は瓦が大半を占め、土壙 110 と土器溜 280 及び桃山時代や中世の遺構、包含層中からも多く出土している。胎土は黄橙色を呈し、軟質のものが多い。軒瓦は3区で1点のみ出土している。単弁八葉蓮華文の軒丸瓦でわずかに残存する外区に唐草文を認める。土器類では土師器の杯・甕、須恵器の蓋杯・横瓶・平瓶・壺などがある。いずれも7世紀後半から8世紀にかけてのものである。

古墳時代の遺物として円筒埴輪と須恵器が少量出土している。須恵器は5世紀後半のものを含み、主に桃山時代の整地層から出土している。

小結 大きく2時期に分かれる伏見城関係の遺構は、小規模な宅地が集住する町屋的な様相を示さず、調査地を武家屋敷として示す古絵図・文献資料などの記載を裏付けた。とりわけ第4層上面で検出した建物4は武家屋敷にふさわしいもので、重要な成果といえる。第3層上面の遺構の在方は必ずしも武家屋敷の存在を積極的に示すものではないが、近代以降の開発で遺構面の上面が削平されていること、関ヶ原戦以降復興された伏見城がほとんどなく廃城に至り、以後荒廃したこと、武家屋敷が町屋に比して十分な空間地を有していたと推定できることなどを考えあわせると、武家屋敷の一部とも理解できよう。また、検討すべき点も多く即断はできないが、豊臣期の伏見城に伴う整地層と徳川期に伴う整地層とを把握できる端緒を得たことは重要である。先に記した所見が正しければ、徳川家康による伏見城の復旧は、豊臣期の伏見城の景観を一変してしまうような大がかりな普請であったとみなさなければならない。いずれにしても、整地層の年代比定を重要な留意点に据え、伏見城の辿った諸画期を明瞭にしつつ、今後の調査を継続実施する必要がある。

伏見城築城以前の濠については、『山州名跡志』巻十三に、御香宮の東に伏見城築城に先立って「水淵大和守」築造の小城が存在していたとの記載があり、関連に注目したい。「水淵大和守」は三淵大和守の誤記とみられ、室町幕府の幕臣三淵藤英の兄にあたる人物である。

飛鳥・奈良時代の寺院跡の遺構は検出されなかったものの、この時期の瓦類が多量に出土し、御香宮廢寺の存在を裏付けたことは重要な成果であった。

(内田 好昭・丸川 義広・高橋 潔)

第2章 試掘・立会調査

I 平成元年度の試掘・立会調査概要

本年度の原因者負担による試掘・立会調査は、28件を実施している。このうち試掘調査が11件、立会調査が16件、試掘と立会調査の両者を含むものが1件である。この他に文化庁国庫補助事業として継続している京都市内一円で実施している試掘立会調査がある。これに関しては『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』、『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』として報告しており、本書では省略している。

実施した主な調査は平安宮・京跡が9件、鳥羽離宮跡が5件、長岡京跡関係が3件、その他の遺跡として太秦地区が2件、洛北地区が1件、南桂地区が2件、洛東地区が1件、伏見醍醐地区が5件である。このうち9件について概要を掲載している。以下その概略を記述しておく。

平安宮跡 平安宮内裏・縫殿寮・長殿・率分蔵跡（1）では、内裏内郭回廊の東回廊西面化粧石と西回廊の東面化粧石抜き跡を確認し、回廊内端の位置と距離が判明している。また平安宮朝堂院・太政官・宮内省・主水司跡（2）では、朝堂院東第2堂の西端にあたる位置で凝灰岩の抜き跡や、中務省西側築地外溝と考えられる溝状遺構を検出している。これらの成果は、平安宮の復原を行う上で重要な定点となる資料である。

鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡（3）は、北殿、田中殿、馬場殿、東殿などの殿舎跡を含む広範囲にわたる立会調査である。勝光明院経蔵の西北部の位置を検出し、東西規模を明らかにしている。金剛心院関係の廊の礎石や庭園、田中殿の建物地業や北限の濠に加え、広い範囲で池の汀線の状態を明らかにすることができた。鳥羽離宮跡第132次調査（4）では、南殿跡の園池を確認し、更に南に広がる可能性を示している。

長岡京跡 長岡京左京一条・南一条四坊（5）は、昨年の成果と合わせて、当地域の地形の概略を確認できた。微高地の広がる北側区域では、集落の営まれた可能性が高い。長岡京左京四条二・三坊（6）では、全体に古墳時代から平安時代にかけての小畑川の旧流路域にあたり、部分的に弥生時代以降の微高地が点在している。これは周辺での既往の調査成果を裏付けている。また、川原寺に関係すると考えられる、長岡京期の柱穴・縦板組井戸・石敷遺構なども検出している。

その他の遺跡 上ノ段町遺跡・仲野親王陵古墳（7）では、仲野親王陵古墳の濠を古墳後円部先端で検出し、古墳築造時を下限とする墳砂を確認している。上ノ段町遺跡としては、古墳時代後期の整地層を確認しているが、その分布範囲は平安時代中期の遺構群と重複している。南春日町遺跡第18次調査（8）は、下西代1号墳の発見を契機として下西代地区を対象に実施したもので、1号墳の東約50mの地点で破砕された状態の石室石材を検出しており、今後の調査に期待が持たれる。

伏見城跡（9）は、伏見城の南面にあたる、指月城跡推定範囲の、東側と南側で実施し、桃山町鍋島の東境で石垣基底部を検出し、伏見城の区画が現代の区画に踏襲されていることを示す資料を加えることになった。また、調査地西部で検出した土壙からは金箔瓦を中心とする瓦類が多数出土している。（原山充志）

II 平安宮跡

1 平安宮内裏・縫殿寮・長殿・率分蔵跡 (図版1)

経過 北は中立売通、南は下立売通、西は千本通、東は智恵光院通に囲まれた地区の配水管敷設替工事に伴う立会調査である。当該地は平安宮の内裏、縫殿寮、長殿、率分蔵にあたる。調査期間は平成元年(1989)8月3日から9月30日までである。

遺構・遺物 遺構は基壇状遺構(A・B地点)、石敷遺構(C地点)、雨落溝状遺構(D地点)などを検出した。A地点の基壇状遺構では、原位置を保つ凝灰岩を検出した。この地点は、内裏内郭回廊の東回廊推定地にあたり、回廊の西面化粧石の延石と考えられる。またB地点では、凝灰岩が抜き取られたと思われる、凝灰岩の痕跡が残る土壌を検出した。この地点は、内裏内郭回廊の西回廊の推定地にあたり、回廊東面の化粧石のあった地点と考えられる。

遺物は、各遺構より9世紀後半から11世紀代の土器類、瓦類が出土している。

小結 A・B地点の基壇状遺構が、内裏内郭回廊の内端部分と考えれば、A・B地点間の距離は156.91mを測り、平安京造営尺に換算すればほぼ53丈になる。回廊の幅4丈分を加えると、内裏内郭の東西幅(東西回廊の心々距離)は57丈になることがわかった。

(川村雅章・吉本健吾・本 弥八郎)

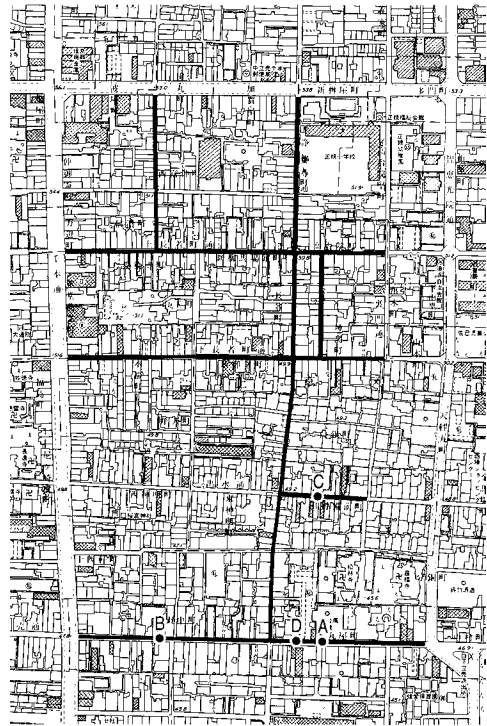


図125 調査位置図(1:7,500)

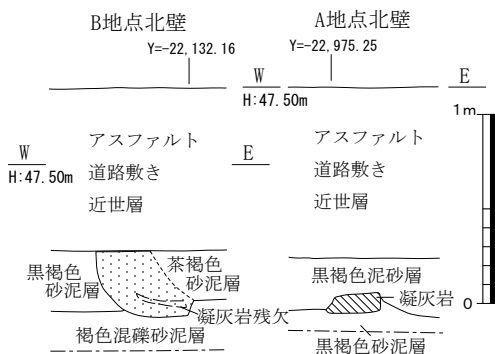


図126 断面図(1:40)

2 平安宮朝堂院・太政官・宮内省・主水司跡（図版1）

経過 千本丸太町の交差点の南東部分の区画、上京区主税町、中務町、西院町の3町にわたる地区の配水管敷設替工事に伴う立会調査である。当該地は平安宮の朝堂院、太政官、宮内省、主水司など主要な殿舎・官衙が配置されていた遺跡にあたる。調査期間は平成元年（1989）8月18日から10月24日である。

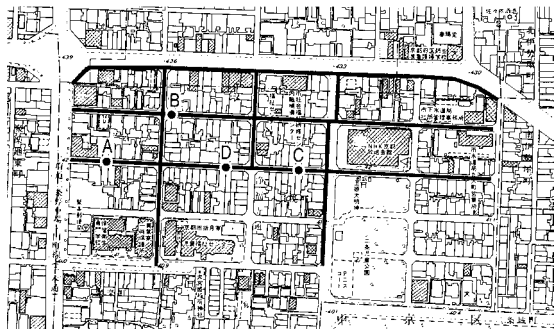


図 127 調査位置図（1：7,500）

遺構・遺物 調査地全域のベースは、黄褐色砂泥層のいわゆる聚楽土と言われているもので、深い地点では地表下1.2m、浅い地点では道路直下（0.2m）で検出できる。平安宮に関係した遺構は主にこの黄褐色砂泥層の上面で成立している。主要な遺構は、落込み（A地点）、溝状遺構（B地点）、土壌群（C～D地点）を検出した。

A地点の落込みは、東部を攪乱墳によって破壊されており西肩部分のみを検出した。凝灰岩の小片を多量に含む遺構で、凝灰岩の抜取穴と考えることができる。またB地点で検出した溝状遺構は、幅1.2m、深さ0.26m以上を測り、南北方向の溝と考えられる。

遺物は、推定の太政官域であるC～D地点で検出した土壌群から、平安時代の瓦片が多量に出土している。

小結 A地点は推定の朝堂院の東第2堂（含章堂）の西端にあたり、検出した落込み東

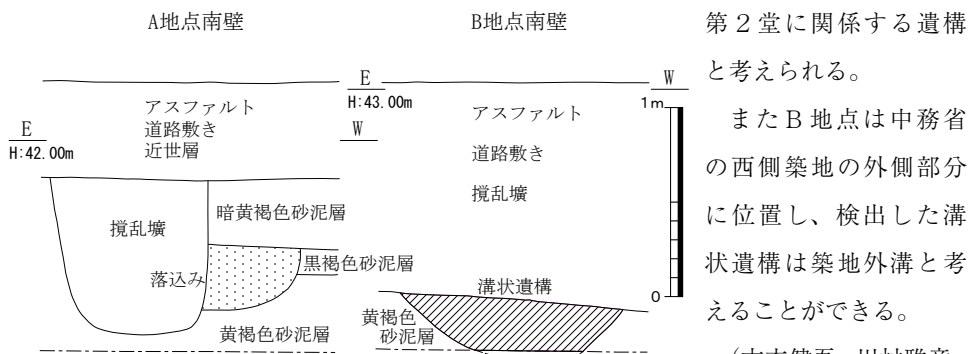


図 128 断面図（1：40）

第2堂に関する遺構と考えられる。

またB地点は中務省の西側築地の外側部分に位置し、検出した溝状遺構は築地外溝と考えることができる。

（吉本健吾・川村雅章・

本 弥八郎）

Ⅲ その他の遺跡

3 鳥羽離宮跡（図版2）

経過 京都市伏見区中島北ノ口町、中島宮ノ前町、中島宮ノ後町、竹田小屋ノ内町、竹田田中殿町、竹田内畑町、竹田浄菩提院町において公共下水道工事に伴う試掘調査や立会調査を実施した。調査地一帯は、鳥羽離宮跡、鳥羽遺跡内にあたる。調査は、平成2年（1990）3月から平成3年（1991）1月に及んだ。

調査地内は、北殿、田中殿、馬場殿、東殿などの殿舎跡に比定され、周辺部で実施した発掘調査では建物や庭園遺構など良好な状態で検出している。調査は対象地が広範囲にわたるため、遺構の規模を確定することや遺構配置を明らかにすることを主眼に置いた。

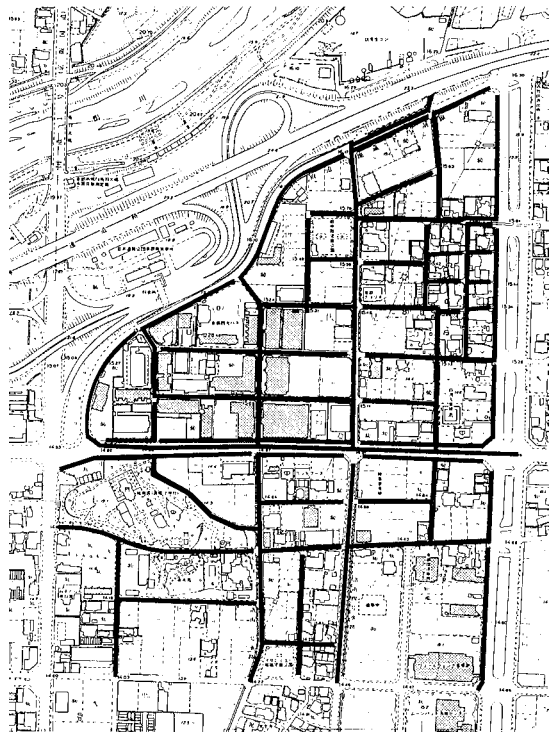


図129 調査位置図（1：10,000）

遺構 調査の結果、鳥羽離宮跡関係の遺構や鳥羽遺跡の一角を確認した。以下、その成果を各地区ごとに概観する。

北殿 勝光明院経蔵跡と推定している建物遺構の一部である基壇西辺の一部、雨落溝の北西隅、礎石などを明らかにした。今回発見した基壇西辺部は、凝灰岩の切石を用いて基壇化粧をしていた。また、雨落溝には川原石を並べ、溝の上面には鬼瓦が落ち込んでいた。この他にも基壇上で礎石1基を検出している。

金剛心院 九体阿弥陀堂と一間四面堂とを結ぶ廊の礎石を2基発見した。礎石は、いずれも花崗岩で柱座を造り出している。また、九体阿弥陀堂の前池東岸において3基の景石を検出している。一方、金剛心院南側と城南宮北側の間に位置する池の汀を数箇所で見出し、釈迦堂の東側に設けられた釣殿廊の北側柱筋において礎石1基を発見した。

田中殿 田中殿公園の北方にも、玉石を用いた建物地業の広がりを確認した。また、田中殿の北を限る濠を、公園の東北方向で検出している。第14次調査地の北側において瓦積み井戸を2基、第72次調査で検出した道路南側溝の延長を同調査地の東方で発見している。

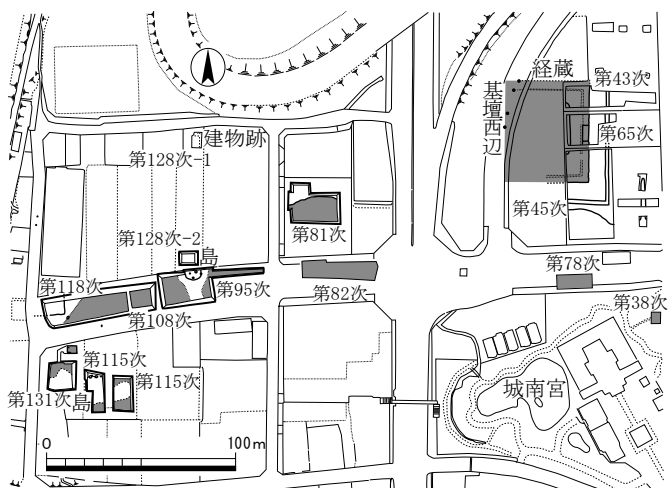


図130 遺構配置図(・遺構検出地点) (1:4000)

一方、池の東岸でも東方の延長線上に、同様な東西溝を検出した。また、田中殿の東側に位置する池の東岸、南岸の一部も確認している。

馬場殿 現在の城南宮境内周辺部は馬場殿の一部と推定しているが、鳥羽離宮が営まれていた頃は現在の中島町と陸続きであったことを確認した。

鳥羽遺跡 田中殿と東殿との間で、弥生時代の土器や流木を含む旧水路を確認した。

遺物 出土した遺物は、鳥羽遺跡関係のものとは鳥羽離宮跡に関連するものとは大別できる。鳥羽遺跡関係の遺物は、田中殿の東側で検出した流路や白河天皇陵の南方から主に出土した。全て土器で、弥生時代中期の壺、甕、蓋や弥生時代末期から古墳時代にかけての土器などである。また、わずかに6世紀代の須恵器片もみられる。

鳥羽離宮跡に関連する遺物には、瓦類、土器類、木製品、景石、基壇の化粧石などがある。瓦類は、金剛心院関係の建物、勝光明院経蔵、田中殿などから出土している。勝光明院経蔵の築地北西隅の雨落溝からはほぼ完形の鬼瓦が出土した。これによって、第43・45・65次調査などで出土した同種類の鬼瓦片の全容を知ることができるようになった。

小結 今回実施した立会調査の重要な成果として、勝光明院経蔵の西北部の位置を明らかにしたことがあげられる。これによって、経蔵の周囲を廻る築地雨落溝の東西規模が約38mであったことが判明した。

また、調査対象地が広範囲であったため、北殿から東へ続く池の汀線のある程度まで明らかにすることができた。更に現在の城南宮にあたる馬場殿の一角が、島ではなく中島町の位置から陸続きで延びる半島状を呈していたことも明らかになった。(鈴木久男)

4 鳥羽離宮跡第132次調査 (図版2・60)

経過 調査地は、京都市伏見区中島御所ノ内町・前山町の鳥羽離宮跡公園（鳥羽離宮南殿跡）を取り囲む各道路敷である。南殿公園が史跡指定されているため、文化庁の指導により文化財保護課、下水道局、当研究所の三者による協議の結果、下水道管理設工事に伴う立会調査であるが、一部の工事区で工事に先立って発掘調査（延約180m²）を実施することになった。発掘調査は1～3区の3箇所のトレンチを設けて実施した。調査の結果、池や庭園に伴う景石、土壌、柱穴などを検出した。また立会調査は、総延長約2000mの範囲で実施し遺物包含層、湿地状の堆積層、流路などを数箇所で見出している。

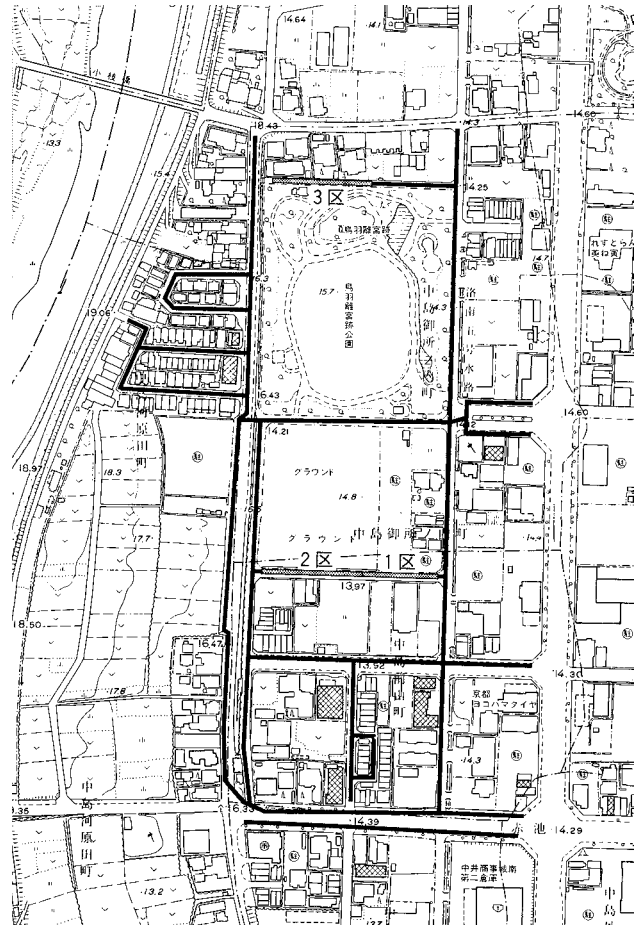


図131 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 立会調査でも上記のような遺構や遺物などを数箇所で見出しているが、ここでは発掘調査で見出したものについて述べる。

調査を実施した1・2区の基本層序は、現代盛土層が約50cm、旧耕作土層が約40cm、オリブ灰色泥砂層（遺物包含層）が約20cmの厚さで堆積し、以下は暗褐色砂泥層である。暗褐色砂泥層からは遺物は出土していないが、歴史時代以前の旧流路の堆積層と考えている。池はオリブ灰色泥砂層を切り込んで成立している。池肩口の一部には洲浜を意識して小石を敷いている。池の堆積土層は約40cmあり、炭化物、植物遺体などを含む緑

灰色砂泥層と褐色泥土層の2層に分けられる。庭園に伴う景石を検出したのは1区西半部の中央付近である。景石は2個あり、石材は共にチャートである。規模は、1個が長辺100cm、短辺70cmで、他は長辺110cm、短辺65cmを測る。景石の掘形は、東西が約240cmで、南北は調査外に及ぶため不明である。景石底部には、一部に拳大の石を詰め景石の景観を良くしている。1・2区で検出した池とこの景石は一連のもので、園池を構成する遺構と考えている。

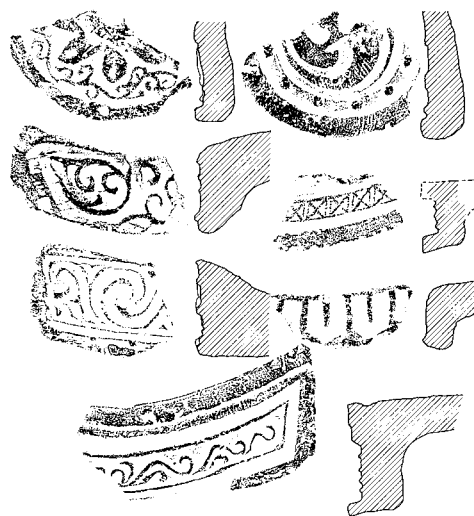


図132 出土瓦実測図(1:4)

秋の山の北側にあたる3区では、現代盛土層(約90cm)以下に湿地状の土層が堆積しており、遺構・遺物は検出できなかった。

遺物は土師器、瓦器、瓦など整理箱に5箱出土した。瓦類のうち、軒瓦は軒丸瓦4点、軒平瓦10点である。これらの遺物は、遺物包含層、景石の据付穴、池などから出土したもので、平安時代後期から鎌倉時代後期に属するものである。

小結 南殿公園にある秋の山は古墳の一部ではないかと考えられている。その北側に位置する3区では、盛土層以下が湿地状の堆積層で、古墳の周溝やそれに伴う古墳時代の遺物などは検出されず、今回の調査の成果では秋の山が古墳か否かの判断はできない。1・2区で検出した池や景石は鳥羽離宮跡3～6次調査で発見された建物、庭園遺構など一連の南殿跡に関連する遺構と考えることができる。また立会調査の成果からみても、南殿跡の遺構は南へ広がる可能性があり、今後のこの周辺の調査の成果を待ちたい。

(磯部 勝・桜井みどり)

5 長岡京左京一条・南一条四坊、東土川遺跡（図版2）

経過 伏見区久我本町・南区久世築山町において実施した、広域下水道工事に伴う継続立会調査である。昨年度に続き、長岡京左京一条・南一条四坊に位置する区間で調査を実施した。昨年度実施範囲の南・北側にあたる。

遺構・遺物 確認した土層の深さは表土下約 1.0～2.5 m までであった。全域のベース層は砂礫層で、この上に泥土・粘土層の堆積がみられ、微高地では更にこの上に黄褐色泥土層が堆積する。北側区間の東端南北道路では、砂礫層が表土直下から厚く堆積している。これは前述したベース層となる砂礫層とは異なるもので、桂川の氾濫に関係する堆積層と思われるが、時期は明確でない。

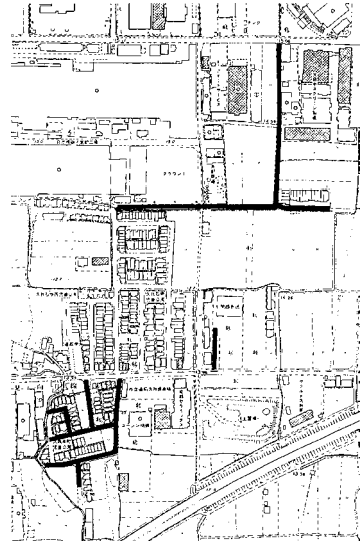


図 133 調査位置図（1：10,000）

確認した遺構としては、南側区間の弥生時代の沼、流路状遺構があげられる。落込の段差は 2 m 以上を確認した。北側工事区間の東端は、長岡京東京極大路の推定地に位置し、その成果を期待したが、陸部であることが確認できたのみで大路に関する遺構の検出はない。そのほか陸部の黄褐色泥土層上に、焼け灰が散布する箇所を数箇所確認した。

遺物としては、南側区間で沼状遺構の灰色砂層より弥生土器が出土した。中期の壺、後期の甕片などを含む。

小結 今年度までの立会調査の結果、当区域の陸部と沼、流路の範囲がおおまかではあるが確認できた。北側区間一帯は、昨年度の調査区域を合わせ、若干の高低差はあるものの大部分が陸部で、一部には溝、流路がみられる。今回の立会調査では明確な遺構は検出できなかったが、東側に位置する左京南一条四坊十六町内の調査では^註弥生時代の方形周溝墓を検出しており、この微高地に弥生時代の集落が営まれていた可能性は高い。これに反し南側区域の南半部は沼、流路となることが明確になった。この遺構は、北西から南東に延び、時期的にその方向を変えて存続してきたものと考えられる。（長宗繁一）

註 北田栄造「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡 発掘調査概報』昭和 63 年度京都市文化観光局 1989

6 長岡京左京四条二・三坊（図版2）

経過 伏見区羽束師菱川町で公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。区間は府道志水向日町停車場線の内、国道171号線から東へ約700m、神川中学校に至る東西道路、南北道路2本である。区域は長岡京左京四条二・三坊に位置する。区間の南側には外環状線建設に伴う発掘調査地が沿っており、この調査で多くの長岡京期の遺構・遺物を発見している。

遺構・遺物 掘削の深さは0.5mから約2mであった。付近の基本的な層位は、旧小畑川による流入土砂による堆積が主で、部分的に弥生時代以降の微高地が点在している。区間の各所で古墳時代から平安時代にかけての小畑川の旧流路がみられ、砂礫層の堆積を確認した。検出した遺構は、長岡京期の柱穴・縦板組井戸・石敷遺構、遺物包含層、奈良時代の水田、平安時代の小畑川旧流路・杭列及び遺物包含層、近世の路面などである。長岡京期の遺構では柱穴・井戸・石敷遺構などがある。柱穴には柱根が残存したのがあり、位置からみて川原寺に関係するものと思われる。井戸は縦板に横板組みのものである。平安時代の遺構には、調査区間の大部分で確認した小畑川旧流路があり、一部で護岸に用いた杭列を検出した。近世のものは、現道路の下に路面を確認した。

遺物は、整理箱に1箱で、長岡京期の土師器皿・杯、須恵器蓋、平瓦などが遺物包含層から出土した。小畑川の旧流路からは、長岡京期の土師器高杯が出土している。

小結 今回の調査で東西に走る府道が、小畑川の旧流路上に位置していることが明らかになった。この地域は、砂礫層の流入堆積によって周辺より地形的に高くなり、この上に道路や平安時代以降の集落が築かれ今日に至っている。当地一帯に旧小畑川が影響したのは、古墳時代からこの時期までと判断できる。

（長宗繁一）

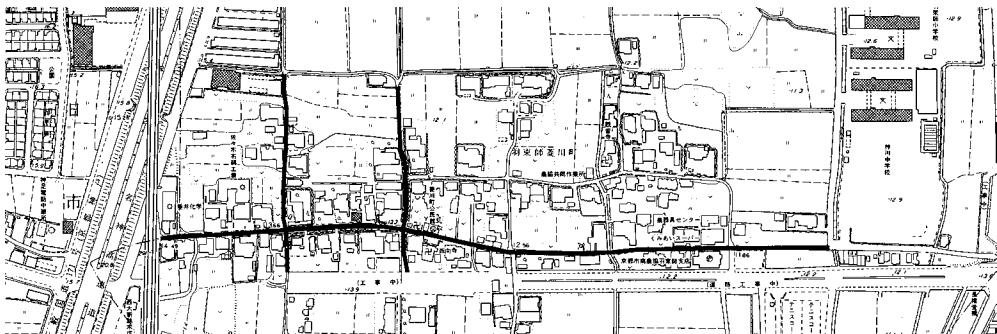


図134 調査位置図（1：7,500）

7 上ノ段町遺跡・仲野親王陵古墳 (図版1・61)

経過 西部第二配水区西部(第二)系統嵯峨野(その6・その7)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地区は、右京区太秦上ノ段町、太秦垂箕山町、太秦帷子ヶ辻町、太秦一町芝町、嵯峨野神ノ木町、嵯峨野開町地内である。調査総延長距離は4.3kmに達した。調査期間は平成元年(1989)3月27日から平成2年(1990)3月26日までであった。

遺構 調査では古墳時代中期の仲野親王陵古墳濠、古墳時代後期の遺物包含層、平安時代中期の土壌、遺物包含層、江戸時代以降に属する井戸などを検出した。その他、地震発生時に生じる液状化現象に伴う噴砂を検出している。

古墳時代中期の仲野親王陵古墳濠は、後円部先端で検出した。東西幅8m、深さ2m以上を測る。南北端で幅を減じる傾向がみられ、古墳全体に廻らせた周濠ではなく、築造時に丘陵から古墳を切り離すための掘り切りの可能性もある。調査では北側肩口(1)、南側肩口(2)、東側肩口(3)を検出している。噴砂はこの東側肩口で確認した。黄色粘土層の断面に、縦方向に1.5m前後の長さで幅5～10cmの帯状に灰白色微砂層が確認できる。噴出面は地山である黄色粘土直上で墳丘からの崩落土層に達せず、噴砂発生時期の下限を、仲野親王陵古墳築造時に限定できる。

古墳時代後期の遺構は、蜂ヶ岡中学校南側の道路と道路以南に検出している。検出した遺構は遺物包含層にとどまるが、安定した黄褐色の粘土層上に立地しており、面的な広がりを持った調査が実施されれば柱穴、溝などの遺構の検出される可能性は高い。この地域は平安時代中期の遺構群と重複して検出されるのが特徴である。平安時代中期の遺構には、溝、土壌、遺物包含層などがある。江戸時代以降の井戸なども、同じく蜂ヶ岡中学校東南辺に検出しており、この付近一帯も広隆寺寺内町の一部を構成していたことが遺構の分布

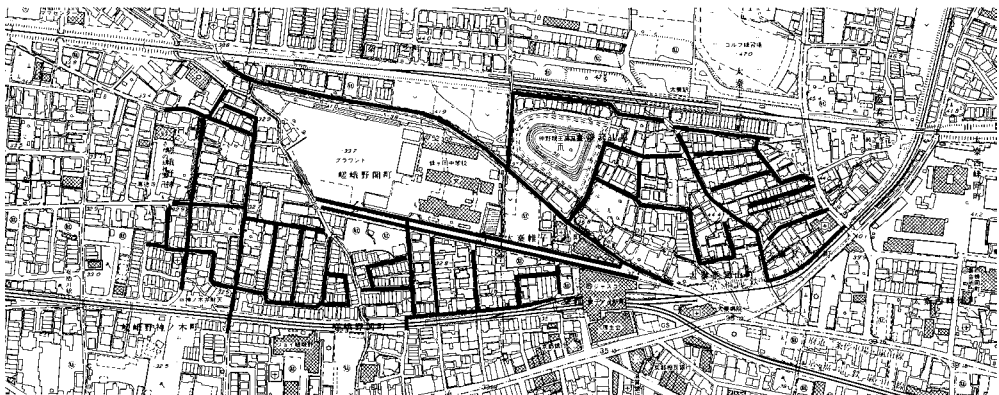


図135 調査位置図(1:7,500)

からも裏付けられる。

遺物 古墳時代後期の遺物には、土師器甕、須恵器甕などが出土している。7世紀前半に属するもので、量的には少なく、蜂ヶ岡中学校南辺で検出したものに限られる。平安時代中期の遺物は、10世紀前半に属する土師器皿があるが、これも量的に少量である。江戸時代以降の遺物は、陶器、染付陶磁器、瓦などが出土している。

小結 嵯峨野開町、太秦帷子ヶ辻町、蜂ヶ岡中学校一帯は上ノ段町遺跡の中心地で

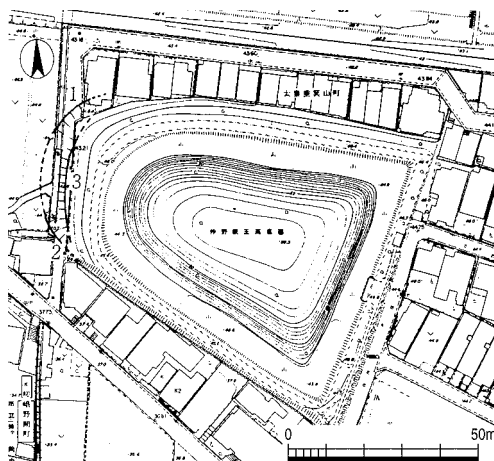


図 136 仲野親王陵古墳濠調査地点 (1:2,000)

ある。今回の調査では、仲野親王陵古墳濠と共に、上ノ段町遺跡の南辺地区の様相を明らかにした。遺跡の範囲は、西北から東南方向への広がりを持つと考えられよう。この遺跡の西南部である嵯峨野神ノ木町、嵯峨野有栖川町では広範囲な広がりを持つ湿地状堆積層や流路状堆積層を検出した。これは有栖川の旧流路に関係したものとすることができる。

現有有栖川の西方には、車折神社、鹿王院が置かれ、旧自然堤防である黄色粘土層を主体にする安定したベースが広がっている。周辺一帯の隣接地調査では7世紀半ば、平安時代前期、室町時代前期の遺構、遺物の検出がある。この遺跡は長期にわたる大規模な複合集落遺跡であり、西辺は瀬戸川に及び、北辺は有栖川新宮橋に達すると考えられ、嵯峨野での新たな集落跡を発見したものといえる。仲野親王陵古墳の北側台地一帯には平安時代を中心とした夥しい数にのぼる土壇墓が検出されている。本調査地区である太秦上ノ段町や、太秦青木元町を南東限として太秦開日町、嵯峨広沢南馬野町、阿刀神社東辺に及ぶ。土壇墓は多数が幅60cm前後、長さ150cm前後、深さ70cm前後を測る。いずれも黒褐色系の埋土層を持ち、土器数点の副葬品を埋納する例もあるが、棺郭などの施設の痕跡は認められない。

この他、仁和寺院家跡隣接地である御室川右岸の鳴滝地域で、平安時代前期、平安時代後期から室町時代にかけての遺物が出土し、瓦窯、溝、土壇、柱穴などの遺構が検出されている。範囲は、平安時代前期が鳴滝安井殿町、後期以降は鳴滝中道町、鳴滝本町を中心とした地区である。このうち前期の遺跡に関しては有力貴族の山荘跡とみることができる。

(平田 泰)

8 南春日町遺跡第18次調査(図版2)

経過 農業土地基盤整備事業に伴う第18次試掘調査である。下西代1号墳の調査として実施した第17次調査の成果によって当地周辺に新たな古墳の存在が想定できることから、確認のための試掘調査が必要であると判断し、京都府・市、地元と研究所が協議を行い、下西代地区を対象に試掘調査を実施することになった。



図137 調査位置図(1:10,000)

調査の結果、1号墳から東約50m地点で、石室の石材を破碎された状態で検出した。調査は時間的制約もあり、図面、写真などの記録作業にとどめ、次期の発掘調査に備えた。

遺構・遺物 1号墳が群集墳の一つであるという判断から、確認のため10地点(No.1～10)の試掘調査を行った。トレンチ設定にあたっては1号墳が棚田の端地に残存していたことを重視し、また標高も考慮して設定した。調査の結果、No.9の現耕作土、床土直下で石室の石材を検出した。石材は細かく破碎されたものもあったが、中には幅0.5m、長さ1.0m以上の石材も認められた。石材を覆う埋土からは、須恵器杯身が出土している。またNo.3では、古墳は確認できなかったが、鎌倉時代の石積遺構を検出した。石積遺構は幅0.8m、長さ1.2mの長方形に切られた凝灰岩の周囲に、拳大の石を積んだ状態であった。遺構内からは鎌倉時代の瓦器碗が出土した。当地点も完掘を避け次期の調査に備えた。

小結 調査の結果、No.9地点で石室の石材を検出することができた。検出地点は1号墳から東に50mしか離れておらず、近接した距離にある。試掘トレンチ東接地にあたる棚田斜面に大石の一部が露出していることから、石室本体は当地点から北に残存している可能性が高く、検出した石材は耕作のために破碎されて、石室本体から取り除かれたものと考えられる。今回の試掘調査で新たに発見した古墳は位置関係から1号墳と同一の古墳群を構成するものと考えられるが、その規模、内容の解明は本格的な調査を待たなければならない。

(加納敬二・永田宗秀)

9 伏見城跡（図版2）

経過 京都市下水道局の委託を受けて、平成元年（1989）5月から平成3年（1991）3月5日にかけて、主に3工区に分けて立会調査を実施した。調査地は、伏見区桃山町泰長老・本多上野・伊賀の台地上と低地部が対象で、伏見城の南面にあたり、主に指月城跡と推定されている範囲の、東側と南側の地である。城郭施設として城跡外郭部分、高台の各郭部、付属の御舟入、登口、馬出などが推定できた。

遺構・遺物 主要な調査地点を、1～7として調査位置図に示した。以下に、各地点での調査内容の概略を列記しておく。

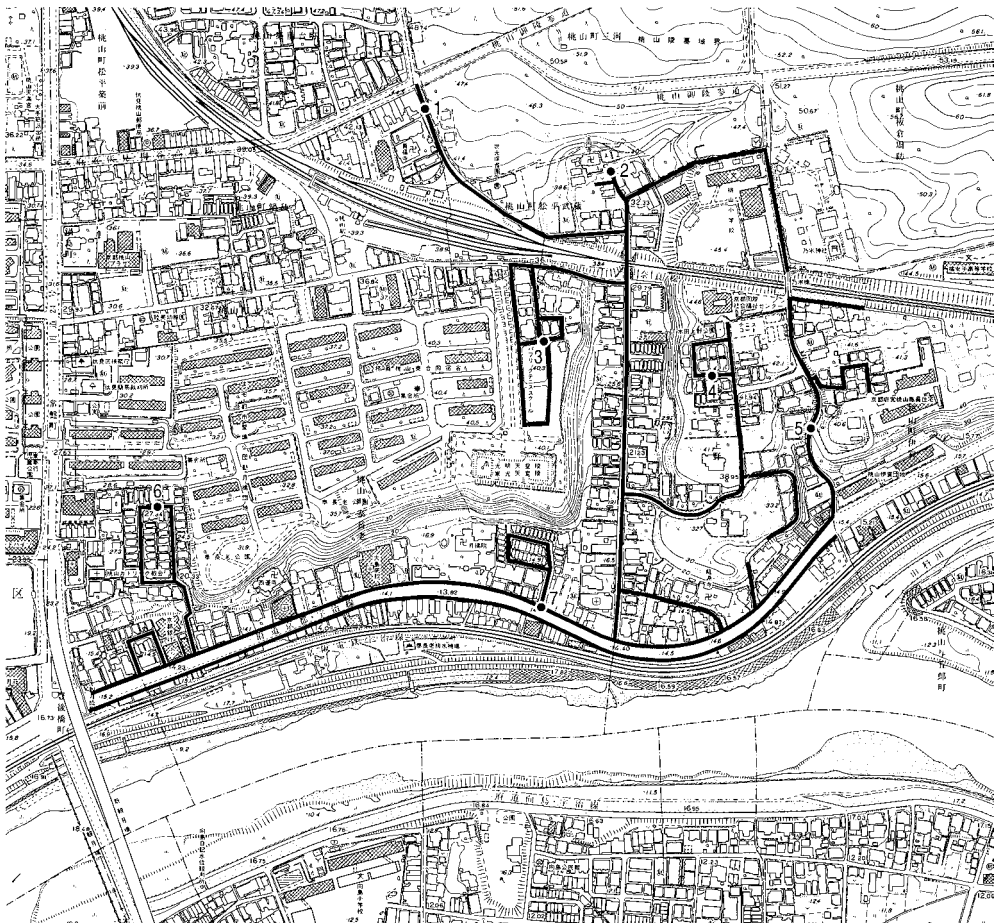


図138 調査位置図（1：7,500）

(1) 桃山町鍋島と宮内庁敷地(桃山町三河)との区割境にあたり、境界線に沿って花崗岩の石列を検出した。出土した遺物には、三巴文軒平瓦や平・丸瓦などがある。

(2) 桃山町松平武蔵の北部に位置し、指月城の舟入に推定している凹部の最北端にあたる。堆積層は、泥土層を中心とした土層で、木製品や竹などが腐植せず、良好な状態で遺存していた。また、当地点の南方では金箔瓦が出土している。

(3) 桃山町泰長老の北東端、指月城天守閣の推定地にあたり、大光明寺跡とも考えられる地点である。地表下50cmに土師器の包含層が広がっていた。細片のため時期は確定できない。

(4) 桃山町本多上野の中心部にあたる。南北方向の溝を確認したが、遺物が包含されず時期は不明である。

(5) 桃山町本多上野と桃山町伊賀の区画境に位置する。指月城の登口にあたり、東側敷地は輪違形をしている。その正面で1mほどの切り石を検出した。

(6) 桃山町泰長老の西部にあたり、5m幅の浅い土壙を検出した。土壙は地山を切っており、底部に灰色泥土層が堆積していた。これに金箔瓦を含む瓦類が多数含まれていた。文様は三巴文がほとんどである。

(7) 桃山町泰長老の南東部にあたる。低湿地を改良するための井桁の木材が遺存しており、長い間湿潤地であったことを物語っている。

小結 伏見城は、三代将軍家光の元和九年(1633)廃城となり、建物や石垣に至るまで各大名や寺院に配分されてしまった。そのため石垣も基底石を除き、遺存は少ない。(1)地点で検出した石列は、鍋島の東側を画する石垣の基底部分が遺存したものである。これは、大名屋敷の区画が現代の区割境と一致することを示している。(3)地点は、指月城天守閣推定地であったが、地山が露出しており、遺物包含層の他に遺構は検出していない。(6)地点は、馬出馬場の想定地で、台地になっている。そこに20cm大の石と瓦類が堆積していた。(2)地点へ入る大きな掘込は、指月城の舟入と推定している。入口と最奥との比高差が10mあるが、最奥部の(2)地点でも湿地堆積がみられ、木製品や竹などの植物遺体はよく残っている。底部は確認していないが、かなり深い堆積状態を示す。過去、金箔瓦が多く採集されていたのは、指月城の南側であった。今回、西側の(6)地点と東側の舟入(2地点南方)でも確認でき、外郭に沿って分布する状態が確認できたことになる。

(吉村正親)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、53 調査現場 79 件の調査基準点測量、8 調査現場 18 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。調査基準点測量の内訳は発掘調査 71 件、試掘・立会調査 8 件である。

考古学における写真測量の利用は、調査図面を作成することのみに用いられていた。よって調査原図を作成すれば、作業は終了し図面の山が残るだけであった。

最近では写真測量を利用した数値地図などがさまざまな分野で研究、活用され始めており、地理院ではメッシュデータによる数値情報を作成し販売もしている。当研究所でも昭和 60 年度より開始した解析図化機における写真測量数値データ化はコンピュータを利用した考古学における平面図の管理活用を目的として位置付けている。

ただし、現状では図化を任している航測会社サイドが図化作業を従来の図面作成と同様の方法で行っている。それは、図化素図を作成し、素図をトレースするものであるが、その素図には、たとえば柱穴を描く場合に始点と終点が一致しないというようなものが多い。このためにデータ自体は磁気媒体に保存されるがデータの修正が非常に多く、我々サイドでの利用を拒んでいる。そのため、すべてのデータを修正することができず、図面の出力をすることはできるが、あまり利用価値のないものが多い。

現状では CAD ソフトを用いて運用しているため、図面のみの管理になってしまっているからである。遺構あるいは遺跡を考慮した図面データの管理活用をしていくためには、どうしても台帳類のデータベースと同時に利用していく必要がある。また、調査図面だけでなく、大縮尺の地図なども同時にあつかうことも望まれる。

このためには、マッピングソフトあるいは考古学図面管理活用のための独自のソフトウェアを開発していくことが必要なのではないだろうか。写真測量を今一つ進めていくためには、航測会社における作業形態を見直し、デジタルマッピング的なデータのとりかたを徹底し、我々が修正なしに利用できるものが必要である。 (辻 純一)

2 コンピュータ

現在では、ワークステーションをメインに資料を管理・活用している。基本的には、データベースが中心であるが、文書作成および測量計算や地形図の作成・管理、マッピングなども一部行っている。

データベースでは、調査概要データ・写真データ・遺物管理データ・保存処理データ・調査図面データなどを作成している。現時点で調査カードは11,000件、写真データは20,000件を越えるものになっている。入力作業は週間を単位とし、週に1～2日で終わっている。利用頻度の多いものとしては、発掘調査を開始するにあたって事前に行う基礎資料の収集で、これは発掘調査が開始されれば、遺跡測量を行い調査測量原点を設置し、その座標値により周辺の調査例が検索され、調査カードが資料として配布される仕組みになっている。平安京の調査であれば、これに条坊の数値データが提供される。これらはすべてコンピュータを介して行われ、測量作業から計算、各種資料提供まで、1日あればすべて終了するようになっており、一貫した流れのなかでコンピュータが利用されている。また、以前から進めていた写真測量のデータ管理を前進させるため、試験的に地図情報と調査データ（写真測量データが中心）を取扱うソフトの開発を行っている。

他にデータ作成も行っているが、遺物や遺構などの膨大な資料に対しては未だに資料管理能力が乏しく、ほとんど手付かずである。これらの資料は調査地点での入力（資料に対し一番身近な人）がデータの精度からも望ましく、今年度より各基地にパソコンの導入を図った。また、個人ベースのパソコン導入も著しく、データはできてきているが、一次資料であることと、膨大な量であるため所内での一括管理は現状ではできない状況にある。

各基地のパソコンと研究所の本体は電話回線で接続されており、ファイルのやり取りやメールなどが行えるが、手順を踏んでキーボードを操作をしなければ本体と接続されないために、煩雑で使用されないことが多い。

次に、コンピュータを用いた資料運営における現状の問題点について言えば、二通に分かれるものと考えている。これは、コンピュータ自身が持つものと、組織体制のものがあるといえる。

コンピュータ側の問題としては、

1. 補助記憶容量不足
2. 操作性の悪さ

3. 通信機能の低さ

4. 処理速度の遅さ

などがあげられる。

組織体制側の問題としては、

1. 報告書の刊行などの、調査結果をまとめていく過程がほとんどないために、調査原資料（遺物や遺構データ）を整理する段階がなく、紙と鉛筆での記録を管理されていれば十分な状況にある。

2. コンピュータによる資料のデータが分散されているため、どのようなデータが存在するのかという全体像がわかりにくく、利用者を混乱させている。

3. 全体としてデータを入力する人員が乏しい。

などがあげられる。コンピュータに関しては物理的あるいは金銭的なもので解決ができるが、組織的なものは、体制的に考えていく必要がある。（辻 純一）

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発及び技術者養成事業

(1) 京都市考古資料館開館10周年記念文化財講演会の開催

日 時 平成元年11月5日(日) 午後2時～4時30分

会 場 京都会館会議場 (参加者 約450名)

講 演 「最近の埋蔵文化財発掘調査成果」

京都市埋蔵文化財研究所 調査課長 永 田 信 一

「古代と京都」 作 家 邦 光 史 郎

(2) 「最近の発掘調査成果写真展」の開催

日 時 平成2年3月27日～4月8日 (12日間)

会 場 京都市考古資料館 3階 (入場者 837名)

(3) 現地説明会の開催

ア 平成元年11月12日 「史跡天皇の杜古墳」 (参加者 約400名)

(4) 「リーフレット京都」の発行

No.1 考古アラカルト1 「資料館活動の10年」

No.2 発掘ニュース1 「飛雲の形の木製品発見」

No.3 発掘ニュース2 「二万数千年前の動物の足跡が発見された」

No.4 発掘ニュース3 「金閣寺境内出土の修羅」

No.5 生活・文化1 「市の繁栄」

No.6 都市・農村1 「乙訓の条里」

No.7 信仰・祭祀1 「京都市域の前方後円墳」

No.8 土器・瓦1 「上京中学校校庭出土の金箔瓦」

(5) 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

ア 平成元年11月14～30日

「遺跡環境課程」 調査部調査課 内 田 好 昭

イ 平成2年1月30日～2月2日

「城館遺跡調査課程」 調査部調査課 主任 平 田 泰

(6) 研究会などへの派遣

ア	平成元年4月～2年3月（毎月開催）	京都府埋蔵文化財調査研究センター		
	「長岡京連絡協議会」	調査第4係長	長宗繁一	
		調査部調査課	鈴木廣司	
		〃	吉崎伸	
イ	平成元年5月14日	京都府京都文化博物館		
	「第10回調査成果交流会」	調査部調査課 主任	平田泰	
		〃	丸川義広	
ウ	平成元年5月27・28日	バルテノン多摩		
	「第55回日本考古学協会総会」	調査部調査課	吉村正親	
エ	平成元年9月7・8日	にぎたつ会館		
	「全国埋蔵文化財法人連絡協議会平成元年度研修会調査研究部会」	資料係長	牛嶋茂	
オ	平成元年10月2・3日	国立歴史民俗博物館		
	「都市における生活空間の史的研究会」	調査部調査課	堀内明博	
カ	平成元年10月4～6日	国立西洋美術館		
	「第13回文化財保存修復に関する研究のためのシンポジウム」	調査部資料課	岡田文男	
キ	平成元年11月16・17日	奈良国立文化財研究所		
	「近世社寺建築研究集会」	研究所所長	杉山信三	
ク	平成元年12月2・3日	奈良国立文化財研究所		
	「第11回木簡学会」	調査第4係長	長宗繁一	
		調査部調査課 主任	久世康博	
		〃	百瀬正恒	
		〃	網伸也	
ケ	平成元年12月8・9日	国立歴史民俗博物館		
	「歴史系研究支援情報処理の研究会」	調査部資料課	宮原健吾	
コ	平成2年2月17・18日	斎宮歴史博物館		
	「シンポジウム・緑釉陶器の生産と消費」	調査部調査課	平尾政幸	
サ	平成2年2月27日	奈良国立文化財研究所		

「全国遺跡データベース研究会」	調査第4係長	長 宗 繁 一
	調査部資料課	辻 純 一
シ 平成2年3月16・17日	奈良国立文化財研究所	
「第6回条里制研究会」	調査部調査課 主任	久 世 康 博
ス 平成2年3月18・19日	国立歴史民俗博物館	
「都市における生活空間の史的研究会」	調査部調査課	堀 内 明 博

2 京都市考古資料館状況

(1) 開館10周年記念事業の実施

ア 展示替えの実施

期 間	平成2年3月12～26日
内 容	時代別コーナー、テーマ別コーナー、国際都市京都コーナーの各コーナーを『平安京発掘資料選Ⅰ・Ⅱ』に紹介した遺物並びに新発見の遺物を中心に展示替え。

イ 事務室、展示室の一部の改装並びに情報コーナーの充実

期 間	平成2年3月12～26日
場 所	旧姉妹都市コーナー、埋蔵文化財の調査と保護コーナー、情報コーナーおよび事務室
内 容	パソコン3台、レーザーディスクプレーヤー1台、ビデオデッキ1台を設置し、以下のソフトを作成・収録した。 ○パソコン：「最新考古情報」「平安京クイズ」「姉妹都市情報」「京都市の遺跡紹介」「遺物紹介」「発掘調査の手順」「リーフレット」 ○レーザーディスク：「平安京再現」（動画）「大枝山古墳群」（動画）「京の遺物」（写真集） ○ビデオライブラリー：「大枝山古墳群」「雁鴨池」「京都市考古資料館への誘い」「京の遺跡をさぐる」「韓国の文化遺産」「高麗磁器」「新羅古墳」「新羅の神秘 天馬塚」「新羅双墳」「発掘された船」「藤ノ木古墳」「まるたけえびす～京のわらべうた」 「特別展－山城の古瓦」

(2) 「第10回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成元年8月9～12日（小中学生とも各2日間）

ア 「小学生親子教室」

第1日目 考古資料館見学、映画鑑賞（児童のみ）

第2日目 京都市社会教育総合センターでの映画、スライドを交えた学習の後、親子で土器づくり。

参加者 親子55組

イ 「中学生サマースクール」

第1日目 移築復原された御堂ヶ池1号墳見学後、資料館見学。

第2日目 平安京左京四条三坊調査現場で発掘調査および遺物水洗い、遺物復原の実習。

参加者 75名

(3) 「土器づくり作品展並びに写真展」の開催

期 間 平成元年8月20日～31日

会 場 京都市考古資料館（夏期教室で作った土器および写真を展示）

(4) 京都市考古資料館文化財講座の開催

開館10周年を機に埋蔵文化財、考古学のテーマを系統的に習得したいという要望に答えるため連続講座を開講することとし、平成元年度は「京都の瓦」と題した講座を8回にわたり開講した。

ア 第27回 平成元年4月22日

「昭和63年度京都市内の遺跡調査概要」

調査課長 永田 信一

「京都の瓦」講座1－朝鮮の瓦－

調査部調査課 高 正 龍

（受講者 87名）

イ 第28回 平成元年5月27日

「考古資料館館蔵品解説」

考古資料館 峰 魏

「京都の瓦」講座2－飛鳥・白鳳の瓦－

調査部調査課 網 伸也

（受講者 79名）

ウ 第29回 平成元年6月24日

「岩倉幡枝2号墳の発掘」

調査部調査課 丸 川 義 広

「京都の瓦」講座3－奈良時代の瓦－

調査第3係長 鈴木 久 男

（受講者 78名）

- エ 第30回 平成元年7月29日
「伏見の商家跡で発見された水琴窟について」 平安京調査会 上村 憲章
「京都の瓦」講座4－平安時代前期の瓦－ 調査第1係長 家崎 孝治
(受講者 87名)
- オ 第31回 平成元年9月30日
現地講座「平安京左京四条三坊十三町の調査」 考古資料館 峰 巍
(受講者 101名)
- カ 第32回 平成元年10月28日
「長岡京左京一条三坊出土の木簡」 調査部調査課 百瀬 正恒
「京都の瓦」講座5－平安時代中期の瓦－ 京都市埋蔵文化財調査センター
梶川 敏夫
(受講者 82名)
- キ 第33回 平成2年1月27日
「西寺政所院跡の発掘」 調査部調査課 菅田 薫
「京都の瓦」講座6－平安時代後期の瓦－ 〃 上村 和直
(受講者 72名)
- ク 第34回 平成2年2月24日
「金閣寺北山殿跡の発掘調査」 調査部調査課 前田 義明
「京都の瓦」講座7－鎌倉時代の瓦－ 〃 吉村 正親
(受講者 90名)
- ケ 第35回 平成2年3月24日
「伏見城跡出土の金箔瓦」 平安京調査会 長戸 満男
「京都の瓦」講座8－室町時代以降の瓦－ 〃 原山 充志
「『京都の瓦』講座を終えるにあたって」 研究所 理事 木村 捷三郎
(受講者 76名)

(5) 印刷物の発行

- ア 京都市考古資料館文化財講座資料No.27～35
イ 小中学生のための見学のしおり
ウ 夏期教室テキスト
エ 図録「桃山時代の京都」

(6) 普及啓発、資料収集

ア 「情報コーナー」を設置し、考古学・日本歴史などの図書、発掘調査現地説明会資料および市内発掘調査関連新聞記事スクラップなどの閲覧と情報提供の実施

イ 京都府下の博物館、美術館などのパンフレット、リーフレットの収集、情報提供の実施

ウ 入館案内用ビデオ「考古資料館への誘い」公開の継続と市内小中学校、高校、大学への貸出しの実施

エ 「リーフレット京都」(No.1～8号)の配布

(7) 博物館実習生の受入

京都芸術短期大学 22名 京都橘女子大学 10名 立命館大学文学部 10名
大谷大学文学部 2名 花園大学文学部 20名 奈良大学文学部 40名
仏教大学通信教育部 50名

(8) 考古資料の貸出し 貸出件数 24件 貸出資料数 700点

(9) 入館者の状況

表3 平成元年度月別観覧者一覧表

(平成2年3月31日現在)

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
	日	人	人	人	人	人	人
4	26	1,565	431	132	336	2,464	94.8
5	26	1,389	372	276	270	2,307	88.7
6	26	1,318	250	317	0	1,885	72.5
7	26	1,119	315	742	20	2,196	84.5
8	27	1,184	451	359	115	2,109	78.1
9	26	1,162	247	181	0	1,590	61.2
10	26	1,468	241	132	118	1,959	75.4
11	26	1,399	228	213	0	1,840	70.8
12	23	1,310	239	132	54	1,735	75.4
1	24	1,195	171	96	0	1,462	60.9
2	24	1,175	172	115	25	1,487	62.0
3	※ 15	696	210	180	0	1,086	72.4
合計	295	14,980	3,327	2,875	938	22,120	75.0

(参考 昭和63年度観覧者数 20,470人/一日平均 66.7人)

※ 3月については10周年記念展示替えの実施に伴い、3月21日～26日までの期間、臨時休館した。

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	増田 駿	京都市文化観光局長
専務理事	西岡 信之	京都市文化観光局文化部参事
理事	上田 正昭	京都大学教授
	木村 捷三郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	斉藤 武夫	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	田辺 昭三	京都芸術短期大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会専務理事・古代学研究所所長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
	榊本 治	京都市文化観光局文化部
監事	井上 嘉久	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事
	松山 充允	京都市会計室長

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	西岡 信之	専務理事 (京都市出向)		鈴木 久男	調査第3係長
	杉山 信三	研究所長 (理事)		長宗 繁一	調査第4係長
	木村 捷三郎	嘱託 (理事)		平田 泰	主 任
	田辺 昭三	嘱託 (理事)		磯部 勝	〃
総務部 総務課	杉原 和彦	総務部長 (京都市出向)	調 査 部 調 査 課	梅川 光隆	〃
	宮崎 高	総務課長		久世 康博	〃
	菅田 悦子	事務職員		吉村 正親	研究職員
	上村 京子	〃		木下 保明	〃
	村木 節也	〃		鈴木 廣司	〃
	本田 憲三	〃		菅田 薫	〃
	金島 恵一	〃		堀内 明博	〃
	小松 佳子	〃		百瀬 正恒	〃
	夏原 美智代	〃	加納 敬二	〃	
調査部 調査課	永田 信一	調査課長		平尾 政幸	〃
	家崎 孝治	調査第1係長		辻 裕司	〃
	平方 幸雄	調査第2係長		前田 義明	〃

	氏名	職名
調 査 部 調 査 課	上村和直	研究職員
	丸川義広	〃
	吉崎伸	〃
	網伸也	〃
	内田好昭	〃
	高正龍	〃
	高橋潔	〃
	山本雅和	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝勉	〃
	能芝妙子	〃
	法邑真理子	〃
	鎌田泰知	〃
	松尾武彦	〃
	竜子正彦	〃
	本田次男	〃
	桜井みどり	〃
	清藤玲子	〃
	出口勲	〃
	藤村敏之	〃
	山口真	〃
	津々池惣一	〃
	南出俊彦	〃
	林ひろみ	〃 (7.31退職)
	上田栄治	〃
	太田吉男	〃
	堀内寛昭	〃
大立目一	〃	
角村幹雄	〃	
川村雅章	〃	

	氏名	職名
調 査 部 調 査 課	小檜山一良	調査補佐員
	近藤章子	〃
	西大條哲	〃
	布川豊治	〃
	永田宗秀	〃
	東洋一	〃
	宮下則子	〃
	吉本健吾	〃
	梅本光江	〃 (12.20退職)
	調 査 部 資 料 課	牛嶋茂
本弥八郎		主任
中村敦		研究職員
辻純一		〃
岡田文男		〃
出水みゆき		調査補佐員
児玉光世		〃
角村ひろみ		〃
田中利津子		〃
小倉万里子		〃
伊藤潔		〃
卜田健司		〃
宮原健吾		〃
村井伸也	〃	
幸明綾子	〃	
考 古 資 料 館	小川武	館長 (3.31退職)
	浪貝毅	副館長(京都市埋蔵文 化財調査センター所長兼任)
	峰巍	主任
	中島松夫	〃

(村木節也)

表4 平成元年度発掘調査一覧表

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考	
平安宮	1	63-078 図書寮跡 88HKDF	上京区下長者町通七本松 西入る鳳瑞町 240	89.05.12 ～ 89.06.05	239㎡	京都市長 今川正彦	辻裕	国庫補助
	2	1-032 中和院跡 89HKDH	上京区下立売通千本 西入る稲葉町 461	89.08.01 ～ 89.08.31	76㎡	京都市長 今川正彦	山本	国庫補助
	3	1-046 中務省跡 1 89HKDI	上京区丸太町通智恵光院 西入る中務町 486	89.08.28 ～ 89.10.07	250㎡	林マサエ	北田 鈴木久 辻裕	
	4	63-061 中務省跡 2 88HKDJ	上京区丸太町通千本 東入る中務町 491	89.10.12 ～ 89.11.21	87㎡	京都市長 今川正彦	辻裕	国庫補助
	5	63-079 中務省跡 3 88HKDE	上京区千本通丸太町 下る東入る主税町 1129	89.04.18 ～ 89.05.25	127㎡	京都市長 今川正彦	網	国庫補助
平安京	6	1-053 左京二条二坊・高陽院跡 1 89HKMX	中京区東堀川通丸太町 下る七丁目 3	89.09.25 ～ 89.11.17	195㎡	京都市長 田邊朋之	網	国庫補助
	7	1-054 左京二条二坊 89HKMY	中京区二条通堀川東入る 矢幡町 306・307、油小路 通夷川下る薬屋町 592-3	89.10.05 ～ 90.01.25	465㎡	(株)地研	山本	
	8	1-019 左京二条二坊・高陽院跡 2 89HKMW	中京区油小路通丸太町 下る大文字町 45	89.06.19 ～ 89.08.25	261㎡	(株)地研	網	
	9	1-036 左京三条三坊 89HKFU	中京区秋野々町 516・518 ・520	89.08.15 ～ 89.12.23	434㎡	(株)住友信託 銀行	平尾	
	10	1-011 左京三条四坊 89HKFR002	中京区御池通 (東洞院通～御幸町通) 東西線	89.04.10 ～ 89.06.10	708㎡	京都市公営企業 管理者 交通局長 中坊仁壽治	小森 上村 原山 長戸	平安京 調査会
	11	1-050 左京四条三坊 1 89HKFV001	中京区烏丸通六角下る 七観音町 635	89.09.16 ～ 90.03.01	705㎡	(株)大松	小森 原山	平安京 調査会
	12	1-004 左京四条三坊 2 89HKFS	中京区錦小路通烏丸 東入る元法然寺町 684 他	89.05.18 ～ 90.03.03	1755㎡	(株)長谷工ア ーバン	小森 上村 長戸	平安京 調査会
	13	1-020 左京四条四坊 89HKFT	中京区高倉通四条上る 帯屋町 582	89.07.31 ～ 89.11.13	235㎡	(株)大丸	木下	
	14	1-014 左京六条四坊 89HKPI	下京区松原通東洞院 東入る本燈籠町 11 他	89.05.22 ～ 89.07.21	237㎡	(株)地研	平尾	
	15	1-047 左京九条二坊 89HKBI	南区西九条南小路町 1 (九条中学校)	89.09.01 ～ 89.11.22	320㎡	京都市長 田邊朋之	百瀬	
	16	1-073 右京一条四坊 89HKIT001	右京区花園寺ノ内町 J R 西日本山陰本線 花園駅構内	90.03.13 ～ 90.04.02	64㎡	京都市長 田邊朋之	平田	
	17	1-042 右京二条四坊 89HKIR002	右京区太秦安井西沢町他	89.08.23 ～ 89.11.08	460㎡	京都市長 今川正彦	堀内	試掘を含 む
	18	1-068 右京三条一坊 89HKUF	中京区西ノ京梅尾町他 (J R 二条駅前)	90.03.07 ～ 90.04.26	370㎡	京都市長 田邊朋之	堀内	
	19	1-062 右京三条二坊 1 89HKRP	中京区西ノ京原町 99	90.03.15 ～ 90.05.11	381㎡	(株)宮木電機	辻裕	

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考	
平	20	1-061 右京三条二坊2 89HKCF008	中京区西ノ京下合町11	89.11.30 ～ 90.02.23	1600㎡	(株)鳥津製作所	木下	
	21	1-010 右京三条四坊 89HKRN	右京区山ノ内御堂殿町5-1	89.04.06 ～ 89.04.28	312㎡	京都市長 今川正彦	平尾	国庫補助
	22	1-012 右京四条二坊 89HKRO	中京区壬生東大竹町11-1 他	89.05.16 ～ 89.07.04	280㎡	(株)萩森不動 産商事	菅田	
	23	1-006 右京六・七条一坊 89HKXF003	下京区中堂寺粟田町1	89.03.28 ～ 89.06.07	1610㎡	(株)大阪ガス	梅川	
	24	1-040 右京六条一坊 89HKXF004	下京区中堂寺粟田町1	89.07.20 ～ 90.05.30	5670㎡	(株)京都市リサー チパーク	梅川	
	25	1-056 右京六条三坊 89HKOB003	右京区西院西中水町1・2	89.10.11 ～ 90.01.09	600㎡	(株)三協西山	菅田	
	26	1-005 右京六条四坊・西京極遺跡 89HKQI	右京区西院清水町155	89.04.24 ～ 89.06.10	475㎡	(株)中川工務店	上村	
	27	1-029 右京七条四坊 89HKOF	右京区西京極畔勝町17	89.08.07 ～ 89.09.14	420㎡	京都市長 今川正彦	菅田	国庫補助
京	28	1-018 右京八条二坊・西市跡 89HKYI	下京区西七条南中野町 45-1 他	89.06.12 ～ 89.09.02	270㎡	北尾嘉門	辻裕	
	29	1-024 尊勝寺跡・岡崎遺跡1 89KSAB	左京区岡崎最勝寺町5-2	89.07.03 ～ 89.09.30	574㎡	(株)不二建設	上村	
	30	1-059 尊勝寺跡・岡崎遺跡2 89KSAC	左京区岡崎西天王町 79-1・80-5・95-2	89.10.30 ～ 89.12.25	770㎡	杉本洋一	上村	
白 河 街 区	31	1-008 法勝寺跡・岡崎遺跡 89KSZO009	左京区岡崎法勝寺町 (京都市動物園)	89.04.24 ～ 89.06.20	252㎡	京都市長 今川正彦	内田	
	32	63-027 第134次調査 88TBTB134	伏見区竹田浄菩提院町60-1	89.05.10 ～ 89.07.01	496㎡	京都市長 今川正彦	山本 前田	国庫補助
鳥 羽 離 宮	33	1-060 第135-2次調査 89TBTB135-2	伏見区中島堀端町19	89.12.04 ～ 90.04.06	1640㎡	(株)ワコール	鈴木久 磯部	
	34	1-041 第70-2次調査 89RTNK70-2	山科区西野山中臣町他	88.09.07 ～ 89.08.21	1398㎡	京都市長 今川正彦	高橋 平方	
長	35	1-044 左京一条三坊・大藪遺跡 89NGUI	南区久世大藪町404-2	90.01.05 ～ 90.03.23	980㎡	西川政統	鈴木廣	
	36	1-043 左京南一条三坊・東土川遺跡 89NGSD009	南区久世東土川町 (西羽東師川河川敷)	89.12.25 ～ 90.02.28	450㎡	京都市長 今川正彦	吉崎	
岡	37	1-055-1 左京五条三坊 89NGDS002・003	伏見区羽東師古川町 320・321・773 他	89.10.02 ～ 89.12.15 90.04.16 ～ 90.06.05	750㎡ 580㎡	(株)大日本ス ク リーン製造	鈴木廣	
	38	1-063 右京一条四坊 89NGTS002	西京区大原野上里南ノ町 (竹の里小分校)	89.11.15 ～ 89.12.15	500㎡	京都市長 田邊朋之	長宗	

	No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	調査原因者	担当者	備考
長 岡 京	39	63-010 羽束師志水町遺跡 88NGPV008	伏見区羽束師鴨川町 (外環)	89.04.12 ～ 89.09.08	823㎡	京都市長 今川正彦	長宗 吉崎 鈴木廣	
	40	1-039 南ノ庄田瓦窯跡 89RHIK002	左京区岩倉幡枝町	89.09.04 ～ 89.11.21	250㎡	京都市長 今川正彦	高	
そ の 他 の 遺 跡	41	63-080 植物園北遺跡 1 88RHAA	北区上賀茂竹ヶ鼻町 4	89.04.20 ～ 89.07.11	316㎡	京都市長 今川正彦	高 平方	国庫補助
	42	1-069 植物園北遺跡 2 89RHKA003	左京区下鴨半木町他	90.01.08 ～ 90.01.20	132㎡	京都市公営企業 管理者交通局長 中坊仁壽治	長戸 小森	平安京 調査会
	43	1-030 特別史跡特別名 勝鹿苑寺庭園 89RHKK002	北区金閣寺町 1	89.07.04 ～ 90.03.31	722㎡	(宗) 鹿苑寺	前田	立会調査 を含む。
	44	1-001 室町殿跡 89RHHG	上京区烏丸通今出川上る 岡松町 254-2 他	89.04.24 ～ 89.07.09	265㎡	(株) 大倉建設	堀内	
	45	1-070 北野麿寺跡 89RHKG014	北区北野上白梅町 9	90.02.14 ～ 90.03.03	90㎡	京都市長 田邊朋之	菅田	国庫補助
	46	1-031 史跡天皇の杜古墳 89MKTN002	西京区御陵塚ノ越町	89.09.25 ～ 89.11.27	71㎡	京都市長 今川正彦	丸川	国庫補助
	47	1-045-1・3 南春日町遺跡 17・19 次調査 89MKHO017・019	西京区大原野灰方町	89.06.05 ～ 89.08.11 89.11.01 ～ 90.02.07	500㎡ 800㎡	京都府知事 荒巻禎一	加納	
	48	1-049 中久世遺跡 89MKAD	南区久世中久世町四丁目 10	89.09.18 ～ 89.10.24	225㎡	京都市長 田邊朋之	吉崎	国庫補助
	49	1-072 六波羅政庁跡 89RTMH	東山区馬町通妙法院 北門前妙法院前側町 424-1	90.03.05 ～ 90.04.20	318㎡	(株) 西谷工務 店	高橋	
	50	1-007 伏見城跡 89FDAK	伏見区桃山町松平筑前 10-15 他	89.05.08 ～ 89.12.28	3192㎡	(株) 近畿土地	丸川 内田 平方 高橋 高	

表5 平成元年度試掘・立会調査一覧

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	種類・面積	調査原因者	担当者	備考
平安宮	1-002-1 内裏・縫殿寮・ 長殿・率分蔵跡 89HKUW002	上京区中立売通～下立売通、 千本通～智恵光院通間	89.08.03 ～ 89.09.30	立会 1337 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	家崎	2章II-1
	1-002-2 朝堂院・太政官・ 宮内省・主水司跡 89HKUW003	上京区主税町他地内	89.08.18 ～ 89.10.24	立会 1880 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	家崎	2章II-2
	1-025 左兵衛府跡、左京一条二坊 89HKOG025	上京区下立売通 (智恵光院～堀川西入る)	89.06.29 ～ 89.08.24	立会 470 m	(株)大阪ガス	久世	
平安宮	1-011 左京三条四坊 89HKFR003	中京区御池通 (間町通～室町通) 東西線	90.01.30 ～ 90.03.26	立会 1000m ²	京都市公営企業 管理者交通局長 中坊仁壽治	小森 原山	平安京 調査会
	1-038 左京四条四坊 89HKFW	中京区東洞院通六角下る 御射山町 272	89.08.08 ～ 89.08.08	試掘 14m ²	京都市長 今井正彦	家崎	
	1-023 左京八条一坊 89HKAH002	下京区観喜寺町 3 (大内小学校)	89.06.27 ～ 89.06.28	試掘 25m ²	京都市長 今井正彦	家崎	
	1-022 左京九条二坊 89HKAH001	南区西九条南小路町 1 (九条中学校)	89.06.20 ～ 89.06.21	試掘 40m ²	京都市長 今井正彦	家崎	発掘調査 に移行。 1章II-15
	1-028 左京九条二坊 89HKBH001	南区西九条鳥居口町 1	89.08.07 ～ 89.08.26	試掘 292m ²	(株)松下興産	久世	平成2年 度に発掘 調査
	1-052 右京六・七条一坊・ 皇嘉門大路 89HKUW052	下京区中堂寺北町 ～朱雀北ノ口町	89.10.13 ～ 89.11.02	立会 750 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	梅川	
	1-075 鳥羽離宮跡 89TBSW075	伏見区竹田内畑町・田中 殿町・小屋ノ内町・浄善 提院町、中島宮ノ後町・ 宮ノ前町・北ノ口町	90.03.12 ～ 91.01.26	試掘 立会 6946m ²	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	鈴木久 百瀬 磯部	2章III-3
	1-003 第132次調査 89TBTB132	伏見区中島御所ノ内町・ 前山町	89.04.03 ～ 89.10.17	立会 152m ² 2200 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	磯部 鈴木久	2章III-4
	1-037 鳥羽離宮跡 89TBUW037	伏見区中島中道町他	89.08.17 ～ 89.10.15	立会 4700 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	磯部	
長岡京	1-017 鳥羽離宮跡 89TBSW017	伏見区竹田踞川町、 中島堀端町他	89.05.29 ～ 89.12.15	立会 1975 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	磯部	
	1-058 第135-1次調査 89TBTB135-1	伏見区中島堀端町 19	89.10.17 ～ 89.10.27	試掘 103m ²	(株)ワコール	鈴木久 磯部	発掘調査 に移行。 1章IV-33
	1-015 左京一・南一条四坊、 東土川遺跡 89NGSW015	南区久世大藪町、 伏見区久我本町他	89.05.18 ～ 90.02.13	立会 988 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	長宗	2章III-5
	1-064 左京四条二・三坊 89NGSW064	伏見区羽東師菱川町	89.11.20 ～ 90.07.30	立会 1000 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	長宗	2章III-6
1-035 右京一条四坊 89NGTS001	西京区大原野上里南ノ町 (竹ノ里小学校)	89.08.07 ～ 89.08.11	試掘 426m ²	京都市長 今井正彦	長宗	発掘調査 に移行。 1章VI-38	

No.	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	種類・面積	調査原因者	担当者	備考	
その他 の 遺 跡	18	1-051 仁和寺院家跡、 常盤東ノ町古墳群 89UZUW051	右京区常盤窪町 ～常盤東ノ町地内	89.09.26 ～ 89.11.30	立会 886 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平田	
	19	1-016 上ノ段町遺跡・ 仲野親王陵古墳 89UZSW016	右京区太秦垂箕山町・ 帷子ヶ辻町・上ノ段町・ 一町芝町、嵯峨野開町・ 神ノ木町地内	89.03.27 ～ 90.03.26	立会 943 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	平田	2章Ⅲ-7
	20	1-034 賀茂別雷神社境内 89RHSB	北区上賀茂本山 339	89.08.02 ～ 89.08.08	試掘 61㎡	京都市長 今井正彦	高	
	21	1-065 福西古墳群 89MKSW065	西京区大枝東長町・ 中山町	90.03.04 ～ 91.05.02	立会 2500 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	吉村	
	22	1-045-2 南春日町遺跡第18次調査 89MKHO018	西京区大原野灰方町	89.10.20 ～ 89.10.30	試掘 100㎡	京都府知事 荒巻禎一	加納	2章Ⅲ-8
	23	1-002-3 法住寺殿跡 89RTUW004	東山区今熊野榎ノ森町 地内	89.05.15 ～ 89.05.26	立会 873 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	家崎	
	24	1-021 深草坊町遺跡 89FDAH001	伏見区深草西伊達町1-4 (深草中学校)	89.06.13	試掘 30㎡	京都市長 今井正彦	家崎	
	25	1-048 伏見城跡 89FDAL	伏見区紙子屋町 544	89.09.26 ～ 89.09.27	試掘 91㎡	京都市長 田邊朋之	家崎	
	26	1-027 伏見城跡 89FDSW027	伏見区桃山町丹後、 深草大亀谷安信町他	89.06.01 ～ 89.10.31	立会 2000 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	吉村	
	27	1-026 伏見城跡 89FDAH002	伏見区桃山町本多上野 107 (桃山小学校)	89.07.04 ～ 89.07.04	試掘 10㎡	京都市長 今井正彦	家崎	
28	1-013 伏見城跡 89FDSW013	伏見区桃山町泰長老、 桃山町本多上野、 桃山町伊賀他	89.05.18 ～ 91.03.05	立会 3700 m	京都市上下水道 事業管理者 山西彌市	吉村	2章Ⅲ-9	
29	1-009 京都市内遺跡 89BB	京都市内一円	89.04.01 ～ 90.03.31	試掘 立会	京都市長 今川正彦	家崎 久世	国庫補助	